

薬学部 医療薬学科

専任教員の教育研究活動報告書

平成31年3月



姫路獨協大学
Himeji Dokkyo University

	(頁)
通山由美 (学部長)	1
阿部 肇	1 2
岡村恵美子	1 5
駒田富佐夫	3 2
齋藤一樹	3 8
柴田克志	4 8
白木 孝	5 1
杉本由美	5 6
高良恒史	6 9
寺岡麗子	8 3
中村隆典	9 1
長久保大輔	9 5
矢上達郎	9 8
柳澤振一郎	1 0 4
山本 直樹	1 1 2
角山圭一	1 1 4
川井眞好	1 2 4
炬口真理子	1 3 3

原野雄一	1 4 2
宮本和英	1 4 4
山本泰弘	1 6 2
山中理央	1 7 2
木下 淳	1 7 5
酒井伸也	1 8 4
田畑裕幸	1 8 6
河野 奨	1 9 0
高橋 稔	1 9 5
村重 諒	2 0 4

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	通山 由美	大学院における研究指導担当 の有無（有・無）
----	--------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
1. 「身体の科学」に関して	2006. 4～2007. 8	教養科目であり、対象が文系から理系学生まで広いため、身近な例を多く含んだパワーポイントとプリントを作成して、私達の身体に関する基本事項（身体の科学1）と生体防御機構（身体の科学2）を科学的にとらえ、理解できるように工夫した。
2. 「早期体験学習」に関して	2007. 4～2014. 7	病院、薬局、福祉施設、製薬会社の見学や救急救命訓練など、体験型、経験重視型の学習を多くおこない、薬学部、新1年生が、将来、薬剤師として医療を担うという自覚を高めるよう促した。一方で、体験の後、グループで感想を話しあい、その結果をまとめて発表する機会を設け、自覚とコミュニケーション能力を高める機会とした。また定期的に訪問先である、病院や薬局の薬剤師の意見を取り入れる勉強会を開いて次年度以降、よりよい成果が得られるようにしている。
3. 「生化学1」に関して	2008. 4 ～	生体分子の基本的な化学構造と性質、代謝について、薬学生向けに編纂された教科書の記述に基づき、パワーポイントで図解による理解を含め、参考プリントや演習課題で、知識が定着するように工夫している。
4. 「免疫学」、「臨床免疫学」に関して （医療保健学部）	2007. 10～2011. 1	医療保健学部1年生を対象にした基礎医学の講義であることより、生体防御機構とその破綻による疾患について、基本事項を理解できるよう、実際に医療現場で出会う事例を多く示したパワーポイントを作成し、さらに理解を深めるプリントによる演習をおこなって、知識が定着するように工夫している。
5. 「免疫学」に関して （薬学部）	2010. 4 ～	薬学部の4年次学生を対象に、免疫系のしくみを基礎から応用まで統合的に理解する事を目標とした。薬学生向けに編纂された教科書の記述に基づき、パワーポイントで図解による理解を含め、参考プリントおよび演習課題で、知識が定着するように工夫している。
6. 「基礎実験（生物）」に関して （薬学部）	2007. 4～	顕微鏡観察の基本的技能と心構えを身につけることを目的とし、末梢血中の白血球、および細胞分裂中の染色体の観察法を指導している。自分で顕微鏡を取り扱って標本を観察し、スケッチすることにより、顕微鏡観察の基本技能を修得するとともに、観察を通して考えを深める姿勢を養うよう工夫している。
7. 「生化学実習」に関して （薬学部）	2009. 9～	実験を通して生化学の理解を深め、生体分子の取り扱いに関する基本技能を身につけることを目的として、タンパク質の定量解析、SDS-ポリアクリルアミドゲル電気泳動、さらに抗原と抗体の特異的結合を利用したウエスタンブロッティングをおこなっている。学生が興味をもって実験に取り組み、データを解析できるよう、原理の説明に特に配慮して図を作成し、丁寧に説明するよう工夫している。

8. 「生物・衛生・生薬系統合演習 (PBL)」に関して (薬学部)	2009. 9～	る。 生物・衛生・生薬系統合演習の生化学分野を担当している。各小グループが1種類の分子標的治療薬を担当し、開発の背景や経緯、分子作用機序について情報を収集するとともに、当該治療法の問題点や改善方法を話しあい最終日に発表する。十分な議論をおこなえるよう時間配分し、治療薬の分子薬理作用機序について、自ら考えることを通して理解を深められるように工夫した。
9. 「薬学概論」に関して (薬学部)	2015. 4～2018. 5	薬剤師をめざすにあたっての基本的な知識と心構えを身につける事を目標としている。学生間での意見交換時間を設けると共に、感想文の作成やその発表を通して、参加型学習を進める工夫をしている。
10. 「生化学」に関して (看護学部)	2016. 10～	将来の看護師に必要な生化学的知識の修得を目的として、糖質、脂質、核酸、タンパク質について、わかりやすい模式図作成して、分子構造と機能に関する理解を深めるよう工夫した。
11. 共通部分 学生による授業評価の活用	2006. 4～	授業評価アンケートの結果に基づいて、授業の理解度と授業方法が適切であるか否かを確認し、次学期以降の授業内容と授業方法の改善に役立てている。とりわけ1の「身体の科学」に関しては、大講義室を使用したため、聞こえにくさや見えにくさに関する指摘もあり、その調整にも工夫をした。また2の「早期体験学習」に関しては、訪問先へのアクセス方法などを考慮して学生毎の訪問施設の選定に工夫した。また、3の「生化学1」と4の「免疫学」、「臨床免疫学」に関しては、専門的、難解な用語が多いとの指摘もあり、基本事項から、具体的な例をあげて説明するように工夫している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
パワーポイントとサブノート式演習 プリントの作成 「身体の科学1」、「身体の科学2」、「生化学1」、「免疫学」、「臨床免疫学」 「基礎実験(生物)」、「生化学実習書」、 「薬学概論」	2006. 4～	講義内容に沿った、図解式のパワーポイントと、必須事項や、重要な化学式について、学生が記入できる形式のサブノート、および講義内容の単元毎の演習プリントを作成した。
「コンパス生化学」南江堂 分担 5章 タンパク質 p77-p95	2015～	薬学教育モデル・コアカリキュラム平成25年度改訂版に沿った教科書として、「コンパス生化学」南江堂の5章、タンパク質(p77-p95)を分担執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
大学院講義 福井大学 医学研究科	2009. 11. 18 2016. 10. 12	医学研究科・大学院博士課程の学生を対象に、以下のタイトルで講義をおこなった。 「マクロファージの多彩な機能食作用と骨溶解の分子メカニズム」 「食細胞による生体防御機構：好中球の NETs 形成とマクロファージによる食作用」
立命館大学 薬学研究科	2015. 7. 10	薬学研究科・学院博士課程の学生を対象に、分子病態学特論として、

福井大学 医学部 特別講義	2009. 11. 19 2016. 10. 13	「食細胞による生体防御機構」に関する講義をおこなった。 医学部・医学科の学生を対象に、以下のタイトルで、免疫学の特別講義をおこなった。 「食細胞の多彩な機能」 「食細胞による生体防御機構」
特別授業 兵庫県立上郡高校	2011. 12～2016. 3.	上郡高校において、「生命科学探究類型」の生徒を対象とした特別授業および実験学習を、年2回、実施した。
教育講演 西播磨高等学校生物部会	2017. 5. 18	西播磨地区の高等学校の生物担当の教諭を対象に、「細胞解析技術の最近の進歩と利用：細胞レベルでのゲノム編集」というタイトルで教育講演をおこなった。
兵庫県高等学校教育研究会科学部会・生物部会	2017. 7. 5	平成 29 年度兵庫県高等学校教育研究会において、科学部会および生物部会所属の教諭を対象に、1) 共焦点レーザー顕微鏡による観察（標本作成から解析まで）と、2) SDS-PAGE 電気泳動の指導をおこなった。
薬剤師向けの卒後教育	2016. 2. 14	2015 年度 姫路獨協大学薬学部 卒後教育セミナーにおいて、「免疫は、どのように病原体を見分けているのでしょうか？」とのタイトルで、薬剤師向けの卒後教育講義を担当した。
教員免許状更新講習	2014. 8. 7	平成 26 年度の教員免許状講習において、小学校・中学校・高等学校の教諭を対象に、“からだを守る免疫と環境のいい関係”というテーマの講習を企画し、「私たちの体を守る免疫のしくみ」について講義をおこなった。
C A S T クラブ第 26 回例会	2007. 9. 20	ひょうご科学技術協会、西播磨テクノポリス圏域の研究開発型交流会、C A S T クラブ第 26 回例会において、“走る、食べる、溶かす “巧妙な白血球の七変化の追跡” とのタイトルで基調講演をおこなった。
地域薬剤師会主催の学術発表会 兵庫県病院薬剤師会西播支部学術発表会	2007. 4. 19	地域の薬剤師会主催の学術発表会において以下のタイトルで講演をおこなった。「補体依存性ファゴサイトーシスにおけるチロシンキナーゼ Syk の機能」
西播医療セミナー	2015. 4. 23	「好中球による NETosis と疾患について」
ホスピス・在宅ケア研究会 神戸フォーラムでの講演	2018. 7. 21	我々はどのように生かされているのか? 一細胞を生かす細胞死のありさまーと題して、細胞が自ら死にゆくシステムについて講演をおこなった。

Ⅱ 研究活動

(英文)

1. Tohyama Y, Takano T, Yamamura H. B cell response to oxidative stress. **Curr Pharm Des.** 2004 ; 10(8) : 835-839 *Review*
2. Miah SMS, Sada K, Tuazon PT, Ling J, Maeno K, Kyo S, Qu X, Tohyama Y, Traugh JA, Yamamura H. Activation of Syk protein-tyrosine kinase in response to osmotic stress requires the interaction with p21-activated protein kinase Pak2/g-PAK. **Mol Cell Biol** 2004 ; 24(1):71-83
3. He J, Tohyama Y, Yamamoto K, Kobayashi M, Shi Y, Takano T, Noda C, Tohyama K, Yamamura, H. Lysosome is a primary organelle in B cell receptor-mediated apoptosis: an indispensable role of Syk in lysosomal function. **Genes to Cells** 2005 ; 10: 23-35
4. Matsusaka M, Tohyama Y, He J, Shi Y, Hazama R, Kadono T, Kurihara R, Tohyama K, Yamamura H. Protein-tyrosine kinase, Syk is required for CXCL12-induced polarization of B cells. **Biochem Biophys Res Commun** 2005 ; 328(4): 1163-1169
5. Shi Y, Tohyama Y, Kadono T, He J, Shahjahan Miah SM, Hazama R, Tanaka C, Tohyama K, Yamamura H. Protein-tyrosine kinase, Syk is required for pathogen engulfment in complement-mediated phagocytosis. **Blood** 2006 ; 107(11): 4554-4562
6. Kurihara R, Tohyama Y, Matsusaka S, Naruse H, Kinoshita E, Tsujioka T, Katsumata Y, Yamamura H. Effects of peripheral cannabinoid receptor ligands on motility and polarization in neutrophil-like HL60 cells and human neutrophils. **J Biol Chem** 2006 ; 281(18): 12 908-12918 *Paper of the Week* に選出
7. Tohyama Y, Yamamura H. Complement-mediated phagocytosis—the role of Syk. **IUBMB Life.** 2006 ; 58(5-6) : 304-308 *Review*
8. Noda C, He J, Takano T, Tanaka C, Kondo T, Tohyama K, Yamamura H., Tohyama Y. Induction of apoptosis by epigallocatechin-3-gallate in human lymphoblastoid B cells. : **Biochem Biophys Res Commun** 2007; 362:951-957.
9. Kondo T, Okuno N, Naruse H, Kishimoto M, Tasaka T, Tsujioka T, Matsuoka A, Sugihara T, Tohyama Y, Tohyama K. Validation of the revised 2008 WHO diagnostic criteria in 75 suspected cases of myeloproliferative neoplasm. **Leuk Lymphoma.** 2008; 49(9): 1784-91.
10. Hazama R, Qu X, Yokoyama K, Tanaka C, Kinoshita E, He J, Takahashi S, Tohyama K, Yamamura H, Tohyama Y. ATP-induced osteoclast function; the formation of sealing-zone like structure and the secretion of lytic granules via microtubule-deacetylation under the control of Syk. **Genes to Cells** 2009; 14:871-884
11. Tohyama Y, Yamamura H. Protein-Tyrosine Kinase, Syk: A Key Player in Phagocytic Cells. **J Biochem.** 2009 ; 145(3):267-73 *Review*
12. Matsuoka A, Tochigi A, Kishimoto M, Nakahara T, Kondo T, Tsujioka T, Tasaka T, Tohyama Y, Tohyama K. Lenalidomide induces cell death in an MDS-derived cell line with deletion of chromosome 5q by inhibition of cytokinesis. **Leukemia.** 24: 748-55 2010.
13. Kajimoto T, Sawamura S, Tohyama Y, Mori Y, Newton AC. Protein kinase C {delta}-specific activity reporter reveals agonist-evoked nuclear activity controlled by Src family of kinases. **J Biol Chem.** 285 (53):41896-910 2010
14. Yokoyama K, Kaji H, He J, Tanaka C, Hazama R, Kamigaki T, Ku Y, Tohyama K, Tohyama Y. Rab27a negatively regulates phagocytosis by prolongation of the actin-coating stage around phagosomes. **J Biol Chem.** 286 (7):5375-82 2011
15. Tanaka C, Kaji H, He J, Hazama R, Yokoyama K, Kinoshita E, Tsujioka T, Tohyama K, Yamamura H, Nishio H, Tohyama Y. Rab27b regulates c-kit expression by controlling the secretion of stem cell factor. **Biochem Biophys. Res Commun.**

16. Tsujioka T, Matsuoka A, Tohyama Y, Tohyama K. Approach to New Therapeutics: Investigation by the Use of MDS-derived Cell Lines. *Curr Pharm Des.* 18(22):3204-14 2012 *Review*
17. Tsujioka T, Yokoi A, Kishimoto M, Kuyama A, Suemori S, Tohyama Y, Tohyama K. Effects of DNA methyltransferase inhibitors (DNMTIs) on MDS-derived cell lines. *Exp Hematol* 41: 189-197, 2013
18. Kuroda Y, Kato-Kogoe N, Tasaki E, Murata E, Ueda K, Abe M, Miyamoto K, Nakase I, Futaki S, Tohyama Y, Hirose M. Oligopeptides derived from autophosphorylation sites of EGF receptor suppress EGF-stimulated responses in human lung carcinoma A549 cells. *Eur J Pharmacol* 698: 87-94, 2013
19. Nurputra DK, Lai PS, Harahap NI, Morikawa S, Yamamoto T, Nishimura N, Kubo Y, Takeuchi A, Saito T, Takeshima Y, Tohyama Y, Tay SK, Low PS, Saito K, Nishio H. Spinal Muscular Atrophy: From Gene Discovery to Clinical Trials. *Ann Hum Genet* 77: 435-463, 2013
20. Ejlerskov P, Rasmussen I, Nielsen TT, Bergström AL, Tohyama Y, Jensen PH, Vilhardt F. Tubulin Polymerization Promoting Protein (TPPP/p25 α) promotes unconventional secretion of α -synuclein through exophagy by impairing autophagosome-lysosome fusion. *J Biol Chem* 288: 17313-17335, 2013
21. Kawakami T, He J, Morita H, Yokoyama K, Kaji H, Tanaka C, Suemori S, Tohyama K, Tohyama Y. Rab27a is essential for the formation of neutrophil extracellular traps (NETs) in neutrophil-like differentiated HL60 cells *PLoS One* 9(1): e84704 (doi: 10.1371/journal.pone.0084704.), 2014
22. Yamamoto T, Sato H, Lai PS, Nurputra DK, Harahap NI, Morikawa S, Nishimura N, Kurashige T, Ohshita T, Nakajima H, Yamada H, Nishida Y, Toda S, Takanashi JI, Takeuchi A, Tohyama Y, Kubo Y, Saito K, Takeshima Y, Matsuo M, Nishio H. Intragenic mutations in SMN1 may contribute more significantly to clinical severity than SMN2 copy numbers in some spinal muscular atrophy (SMA) patients. *Brain Dev* 36: 914-920, 2014
23. Tsujioka T, Yokoi A, Itano Y, Takahashi K, Ouchida M, Okamoto S, Kondo T, Suemori S, Tohyama Y, Tohyama K. Five-aza-2'-deoxycytidine-induced hypomethylation of cholesterol 25-hydroxylase gene is responsible for cell death of myelodysplasia/leukemia cells. *Sci Rep* 5: 16709 (doi: 10.1038/srep16709.), 2015
24. Kuroda Y, Kato-Kogoe N, Tasaki E, Yuasa-Sunagawa M, Yamanegi K, Nakasyo K, Nakase I, Futaki S, Tohyama Y, Hirose M. Suppressive effect of membrane-permeable peptides derived from autophosphorylation sites of the IGF-1 receptor on breast cancer cells. *Eur J Pharmacol* 765: 24-33, 2015
25. Harahap NI, Nurputra DK, Ar Rochmah M, Shima A, Morisada N, Takarada T, Takeuchi A, Tohyama Y, Yanagisawa S, Nishio H. Salbutamol inhibits ubiquitin-mediated survival motor neuron protein degradation in spinal muscular atrophy cells. *Biochem Biophys Res* 4: 351-356, 2015
26. Okamoto S, Tsujioka T, Suemori SI, Kida JI, Kondo T, Tohyama Y, Tohyama K. Withaferin A suppresses the growth of myelodysplasia and leukemia cell lines by inhibiting cell cycle progression. *Cancer Sci* 107: 1302-1314, 2016
27. Takechi-Haraya Y, Aki K, Tohyama Y, Harano Y, Kawakami T, Saito H, Okamura E. Glycosaminoglycan Binding and Non-Endocytic Membrane Translocation of Cell-Permeable Octaarginine Monitored by Real-Time In-Cell NMR Spectroscopy. *Pharmaceuticals* (Basel) 10 (2): pii: E42 (doi: 10.3390/ph10020042.), 2017
28. Kida JI, Tsujioka T, Suemori SI, Okamoto S, Sakakibara K, Takahata T, Yamauchi T, Kitanaka A, Tohyama Y, Tohyama K. An MDS-derived cell line and a series of its sublines serve as an in vitro model for the leukemic evolution of MDS. *Leukimia* 32(8):1846-1850, 2018 (doi: 10.1038/s41375-018-0189-7.)

29. Morita H, Matsuoka A, Kida JI, Tabata H, Tohyama K, Tohyama Y. KIF20A, highly expressed in immature hematopoietic cells, supports the growth of HL60 cell line. *Int J Hematol*. 108(6): 607-614, 2018(doi: 10.1007/s12185-018-2527-y.)

(和文)

1. 通山由美 補体依存性ファゴサイトーシスの分子機構-チロシンキナーゼ Syk の新たな機能 **生化学** 2006;78:878-882 みこれびゅう
2. 通山由美 骨溶解の分子作用機序 臨床検査増刊号;ホルモンの病態異常と臨床検査;医学書院 2008;52:11, 1336,
3. 通山由美 Syk の発見から臨床応用まで 炎症と免疫 特集【低分子抗炎症薬の進歩】2012;20:3, 272-277

[学会発表] 2004 ~2018

1. 野田千征子、通山由美、Jinsong He、高野智子、Yuhong Shi、山村博平 Involvement of mitochondrial dysfunction in (-)-Epigallocatechin gallate-induced apoptosis 第77回日本生化学会大会 (2004 横浜)
2. Tohyama Y, Shi Y, Tohyama K, Yamamura H Protein-tyrosine kinase, Syk is required for engulfment of pathogen in complement-mediated phagocytosis 第47回米国血液学会 (The 47th ASH Annual Meeting) (2005 Atlanta USA)
3. 通山由美 食作用における Syk の機能-補体依存性食作用における役割 21 世紀 COE「蛋白質のシグナル伝達機能」平成 17 年度第2回研究発表会 (2005 神戸)
4. 門野友美、通山由美、松阪諭、山村博平 チロシンキナーゼ Syk はケモカイン CXCL12 による細胞極性の形成に必須である 第52回日本生化学会近畿支部例会 (2005 神戸)
5. Yuhong Shi、通山由美、門野友美、陌間亮一、Jinsong He、山村博平補体依存性食食におけるチロシンキナーゼ Syk の機能解析 第78回日本生化学会大会 (2005 神戸)
6. 栗原リナ、通山由美、勝又義直、山村博平 カンナビノイド受容体2 (CB2) リガンドの好中球極性化 第78回日本生化学会大会 (2005 神戸)
7. 通山由美 マクロファージにおける食胞輸送機構の解析-補体依存性食作用における Syk の機能 第50回神戸大学バイオサイエンス研究会 (2006 神戸)
8. Tohyama Y, Qu X Yamamura H Protein-tyrosine kinase, Syk is required for bone resorbing activity by the mechanism of controlling the stability of tubulin 第20回国際生化学・分子生物学会議 (20thIUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and 11th FAOBB Congress) (2006 京都)
9. 陌間亮一、田中千都、山村博平、通山由美、リソソームの制御を介した骨吸収に必須のSyk の機能 第80回日本生化学会大会 (2007 横浜)
10. 梶本武利、通山由美、Alexandra C. Newton FRETを用いたプロテインキナーゼCδ 活性検出レポーターの開発と分子種特異的機能解析への応用 第81回日本生化学会大会 (2008 神戸)
11. 田中千都、通山由美、巨核球分化における Rab27B の機能解析 日本薬学会第129回年会 (2009 京都)
12. 陌間亮一、山村博平、通山由美 ATP/P 2X₇ シグナリングを介した破骨細胞による骨吸収機構の解析: 微小管のアセチル化を制御するチロシンキナーゼ Syk の新たな機能 第82回日本生化学会大会、(神戸, 2009. 10. 22)
13. YOKOYAMA Kuniol, TOHYAMA Yumi Rab27a acts as a regulator of phagocytosis by controlling the transfer of pathogen from actin cups to incorporated phagosomes 第39回日本免疫学会大会、(大阪, 2009. 12. 2)

14. 田中千都 通山由美 巨核球分化における Rab27b の機能解析 -c-kit の発現調節への関与- The role of Rab27B in megakaryocytic differentiation of CMK cells-effects on the expression of c-kit- **第 130 回日本薬学会大会**、(岡山, 2010. 3. 30)
15. 松岡亮仁, 通山薫, 通山由美 5 番染色体長腕に局在するモータータンパク質 Kinesin family member 20A (KIF20A) の機能解明 第 57 回日本生化学会近畿支部例会 (奈良先端科学技術大学院大学, 2010. 5. 22)
16. 陌間 亮一, 通山由美 破骨細胞において ATP/P2X₇ 受容体シグナルにより誘導される微小管のアセチル化制御を介した骨吸収の分子機構の解析 第 28 回日本骨代謝学会学術集会学術集会 (東京, 2010. 7. 21-7. 23)
17. Yumi Tohyama, Hirohei Yamamura ATP-induced bone resorption in osteoclasts: the formation of sealing-zone like structure and the secretion of lytic granules via Syk dependent deacetylation of alpha tubulin 第 14 回 国際免疫学会議 (神戸, 2010. 8. 22-8. 27)
18. Hiroaki Kaji, Yumi Tohyama Rab27a acts as a regulator of phagocytosis by controlling the transfer of pathogen from phagocytic cup to incorporated phagosome 第 14 回 国際免疫学会議 (神戸, 2010. 8. 22-8. 27)
19. 菊田香苗, 松川聡子, 通山由美, 赤桐里美, 植野洋志 ヒト単核白血球における GAD65 発現の解析 日本生物高分子学会大会 (兵庫県立大学, 2010. 9. 10-11)
20. 梶本武利, 澤村晴志朗, 通山由美, 森泰生, Alexandra C. Newton δ 分子種選択的 PKC 活性化レポーターを用いた PKC δ の細胞内局所における活性化制御機構の解析 第 118 回日本薬理学会近畿部会 (大阪, 2010. 11. 19)
21. He Jinsong, 近藤敏範, 田中千都, 通山薫, 通山由美 Cannabinoid receptor2 negatively regulates the chemokine-induced migration of immune cells by suppression of intracellular vesicular transport (カンナビノイド受容体 2 は細胞内小胞輸送の抑制により免疫細胞のケモカイン誘発遊走を陰性制御する) 第 83 回日本生化学会大会 第 33 回日本分子生物学会年会合同大会 (神戸, 2010. 12. 7-12. 10)
22. 加地 弘明, 田中千都, 何勁松, 通山由美 マクロファージによる補体レセプター (CR3) を介した Candida Albicans 貪食機構の解明 第 131 回日本薬学会学術集会 (静岡, 2011. 3. 28-3. 31 掲載のみ)
23. 田中千都, 通山由美 巨核球分化における Rab27b の機能解析 第 131 回日本薬学会学術集会 (静岡, 2011. 3. 28-3. 31 掲載のみ)
24. 黒田義弘, 村田恵理, 上田康陽, 田崎絵美, 小越菜保子, 安部峰大, 宮本和英, 中瀬生彦, 二木史朗, 通山由美, 廣瀬宗孝 細胞透過性オリゴペプチドによる A549 ヒト肺線がん細胞に対する細胞増殖抑制、細胞毒性、及びアポトーシスへの影響 第 131 回日本薬学会学術集会 (静岡, 2011. 3. 28-3. 31 掲載のみ)
25. 通山由美 「マクロファージの多彩な機能」 第 65 回兵庫県生物学会大会 記念講演 (姫路, 2011. 5. 15)
26. 田中千都, 通山由美 Rab27b による c-kit の発現調節を介した巨核球分化/成熟のメカニズムの検討 第 58 回日本生化学会近畿支部例会 (関西医大, 2011. 5. 21)
27. 菊田香苗, 松川聡子, 松田寛, 通山由美, 赤桐里美, 植野洋志 ヒト白血球系細胞におけるグルタミン酸脱炭酸酵素 GAD の発現の解析 第 58 回日本生化学会近畿支部例会 (関西医大, 2011. 5. 21)
28. 菊田香苗, 松川聡子, 通山由美, 松田寛, 赤桐里美, 植野洋志 GAD65 のスプライシングバリエント (30 kDa, 80 kDa) の発現 日本生物高分子学会大会 (金沢工業大学, 2011. 9. 15-16)
29. He Jinsong, 横山邦雄, 田中千都, 加地弘明, 通山由美 Rab27a は好中球とマクロファージの間で異なった様式で補体に仲

介される食食作用を調節する 第84回日本生化学会大会（京都，2011. 9. 21-9. 24）

30. 菊田香苗，松川聡子，通山由美，松田覚，赤桐里美，植野洋志 グルタミン酸デカルボキシラーゼ（GAD）の選択的スプライシング機構の解明 第84回日本生化学会大会（京都，2011. 9. 21-24）
31. 黒田義弘，村田恵理，上田康陽，田崎絵美，小越菜保子，安部峰大，宮本和英，中瀬生彦，二木史朗，通山由美，廣瀬宗孝 EGFR の自己リン酸化部位由来ペプチドの A549 ヒト肺腺がん細胞における効果 第 84 回日本生化学会大会（京都，2011. 9. 21-24）
32. Yumi Tohyama (通山由美)，Kunio Yokoyama (横山邦雄)，Kaoru Tohyama (通山薫) Rab27a negatively regulates phagocytosis during the actin-coating stage in HL60-derived macrophages 第 73 回日本血液学会学術集会（名古屋，2011. 10. 14-10. 16）
33. 加地弘明，通山薫，通山由美 マクロファージにより補体受容体を介して食食されたカンジダ菌の細胞内殺菌メカニズムに関する基礎検討 第58回日本臨床検査医学会学術集会（岡山，2011. 11. 17-11. 20）
34. 森田寛之，川上辰三，加地弘明，通山由美 好中球におけるRab27Aの機能の検討 “ミエロペルオキシダーゼ（MPO）の動態制御を介した補体依存性の食食とNets形成における必須の機能” 第85回日本生化学会大会（福岡，2012. 12. 14-16）
35. 加地弘明，通山薫，通山由美 マクロファージに食食されたカンジダ菌の殺菌機構におけるチロシンキナーゼSykの機能 第59回日本臨床検査医学会学術集会（京都，2012. 11. 29-12. 2）
36. 通山由美，加地弘明，通山薫 Rab27a promotes phagosome maturation and neutrophil extracellular traps (NETs) formation 第41回日本免疫学会学術集会（神戸，2012. 12. 5-12. 7）
37. 川上辰三，森田寛之，加地弘明，通山由美 好中球の NETosis における低分子量Gタンパク質Rab27Aの機能解析 第62回日本薬学会近畿支部大会（武庫川女子大学薬学部，2012. 10. 20）
38. 大口千穂，川上辰三，波多野亜紀，森田寛之，加地弘明，通山由美 補体を介した食作用におけるチロシンキナーゼSykの機能 好中球様に分化した白血病細胞株HL60による検討 第62回日本薬学会近畿支部大会（武庫川女子大学薬学部，2012. 10. 20） ポスター賞受賞！
39. 川上辰三，大口千穂，波多野亜紀，加地弘明，通山由美 好中球のNetosisにおけるSykの機能の検討 第59回日本生化学会近畿支部例会（京都大，2012. 5. 19）
40. 菊田香苗，松川聡子，通山由美，松田覚，赤桐里美，植野洋志 ヒト白血球培養細胞におけるグルタミン酸デカルボキシラーゼの発現様式の解析 第64回日本ビタミン学会大会（岐阜，2012. 6. 22-23）
41. 菊田香苗，通山由美，松川聡子，松田覚，赤桐里美，植野洋志 ヒト白血球とその培養細胞におけるグルタミン酸デカルボキシラーゼに関する研究 第85回日本生化学会大会（福岡，2012. 12. 14-16）
42. 川上辰三，森田寛之，加地弘明，通山由美 Neutrophil extracellular traps (NETs) 形成におけるRab27aの機能の検討 第60回日本生化学会近畿支部例会（大阪大学吹田キャンパス，2013. 5. 18）
43. Dian Kesumapramudya Nurputra, Hiroyuki Morita, Hisahide Nishio, Yumi Tohyama Abnormal acetylation status of α -tubulin in fibroblasts derived from SMA patients 第 60 回日本生化学会近畿支部例会（大阪大学 吹田キャンパス，2013. 5. 18）
44. 通山由美 食細胞による生体防御機構 第 1 回楠会シグナル伝達シンポジウム （神戸ポートピアホテル，2013. 8. 3）
45. 森田寛之，朝本茂友，加地弘明，通山由美 好中球の補体依存性食食と NETs 形成における PKC δ の機能の検討 第 86 回日本

生化学会大会 (パシフィコ横浜, 2013. 9. 11-13)

46. 黒田義弘, 小越菜保子, 田崎絵美, 中瀬生彦, 二木史朗, 通山由美, 廣瀬宗孝 IGF-1R の自己リン酸化部位由来ペプチドが MCF-7 ヒト乳がん細胞に及ぼす影響 第 86 回日本生化学会大会 (パシフィコ横浜, 2013. 9. 11-13)
47. 朝本茂友, 森田寛之, 加地弘明, 通山由美 補体を介した食作用における PKC δ の機能解析 好中球様に分化した白血病細胞株 HL60 による検討 第 63 回日本薬学会近畿支部大会 (同志社女子大学薬学部, 2013. 10. 12)
48. 加地 弘明, 通山 薫, 通山 由美 マクロファージによる補体介在性 *Candida Albicans* 貪食における Syk の関与とその役割 第 60 回日本臨床検査医学会学術集会 (神戸, 2013. 10. 31-11. 3)
49. 武知佑樹, 安岐健三, 通山由美, 川上徹, 斎藤博幸, 岡村恵美子 オクタアルギニンの物理的膜透過に関するリアルタイム in cell NMR 研究日本膜学会第 36 年会 (早稲田大学 2014 年 5 月 12-13 日)
50. 山口博文, 森田寛之, 綾部圭一郎, 岡本秀一郎, 通山由美 好中球様に分化したヒト白血病細胞株 HL60 におけるビメンチンの機能の検討 第 61 回日本生化学会近畿支部例会 (京都産業大学, 2014. 5. 17)
51. Dian Kesumapramudya Nurputra, Hiroyuki Morita, Hisahide Nishio, Yumi Tohyama SMN is essential for the HDAC6 mediated tubulin-deacetylation in fibroblasts 第 61 回日本生化学会近畿支部例会 (京都産業大学, 2014. 5. 17)
52. 柳原弘明, 本岡亜弥子, 山口博文, 森田寛之, 通山由美 好中球様分化プロセスにおける PKC δ の機能解析 (PKC δ ノックダウン型ヒト白血病細胞株 HL60 による検討) 第 64 回日本薬学会近畿支部大会 (京都薬科大学 2014. 10. 11)
53. 山口博文, 綾部圭一郎, 森田寛之, 通山由美 補体を介した食作用における中間径フィラメント, ビメンチンの機能解析 第 64 回日本薬学会近畿支部大会 (京都薬科大学 2014. 10. 11)
54. 森田寛之, 山口博文, 岡本秀一郎, 通山由美 補体依存性食作用における中間径フィラメント, ビメンチンの機能の解析 (好中球様に分化したヒト白血病細胞株, HL60 による検討) 第 87 回日本生化学会大会 (京都, 2014. 10. 18)
55. Tohyama Yumi, Kawakami Tatsumi, Morita Hiroyuki, Suemori Shin-ichiro, Tohyama Kaoru Essential role of Rab27a in the formation of neutrophil extracellular traps (NETs) 第 76 回日本血液学会学術集会 (大阪国際会議場, 2014. 10. 31)
56. Dian Kesumapramudya Nurputra, Hiroyuki Morita, Hisahide Nishio, Yumi Tohyama HDAC6 may be a new target of SMN downstream regulation in the microtubule dynamics of SMA fibroblasts 日本人類遺伝学会第 59 回大会 (東京(タワーホール船堀), 2014 11/20)
57. Tohyama Yumi, Tohyama Kaoru Role of Rab27a in highly-reactive oxygen species-related neutrophil extracellular traps (NETs) formation 第 43 回日本免疫学会学術集会 (国立京都国際会館 2014. 12. 11)
58. 武知(原矢)佑樹, 安岐健三, 通山由美, 原野雄一, 川上徹, 斎藤博幸, 岡村恵美子 キネティクスに基づく細胞へのオクタアルギニンの物理的膜透過メカニズム 日本膜学会第 37 年会 (早稲田大学 西早稲田キャンパス 2015. 5. 14 -15)
59. 森田寛之, 福井彩乃, 小山可奈子, 有馬太陽, 通山由美 Kinesin family member 20A (KIF20A) の多核化と細胞分裂への関与 第 62 回日本生化学会近畿支部例会 (立命館大学びわこ・くさつキャンパス, 2015. 5. 16)
60. 川井眞好, 通山由美 *Staphylococcus aureus* の好中球に対する抵抗性の変化 第 62 回日本生化学会近畿支部例会 (立命館大学びわこ・くさつキャンパス, 2015. 5. 16)
61. 福井彩乃, 森田寛之, 小山可奈子, 有馬太陽, 田畑裕幸, 通山由美 Kinesin family member 20A (KIF20A) の細胞分裂と細胞分化における機能の検討 第 65 回日本薬学会近畿支部大会 (大阪大谷大学 2015. 10. 17)

62. 森田寛之, 福井彩乃, 小山可奈子, 有馬太陽, 田畑裕幸, 通山由美 Kinesin family member 20A (KIF20A) の細胞増殖と細胞分化における機能の検討 第 88 回日本生化学会大会 (神戸, 2015. 12. 01)
63. 森田寛之, 有馬太陽, 佐々木彪曜, 松本隆太郎, 田畑裕幸, 通山由美 KIF 20A (Kinesin family member 20A) の分化と細胞分裂への影響 第 63 回日本生化学会 近畿支部例会 (神戸薬科大学, 2016. 5. 21)
64. 川井真好, 通山由美 *Staphylococcus aureus* の温度刺激による抵抗性の変化 第 63 回日本生化学会 近畿支部例会 (神戸薬科大学, 2016. 5. 21)
65. 島亜衣, 森田寛之, 西尾久英, 通山由美 脊髄性筋萎縮症 (SMA) のヒト神経細胞モデル作製と表現型の解析 第 63 回日本生化学会 近畿支部例会 (神戸薬科大学, 2016. 5. 21)
66. 島亜衣, 森田寛之, 通山由美, 西尾久英 脊髄性筋萎縮症 (SMA) モデル神経細胞では神経突起様構造の伸長が抑制される 第 2 回日本筋学会学術集会 (国立精神・神経医療研究センター, 2016. 8. 5-6)
67. 森田寛之, 有馬太陽, 佐々木彪曜, 松本隆太郎, 田畑裕幸, 通山由美 細胞分化および増殖における Kinesin family member 20A (KIF20A) の機能の検討 第 89 回日本生化学会大会 (仙台 仙台国際センター, 2016. 9. 25-27)
68. 有馬太陽, 森田寛之, 松本隆太郎, 田畑裕幸, 通山由美 白血球細胞株, HL60 における KIF 20A (Kinesin family member 20A) の機能の検討 第 66 回日本薬学会近畿支部大会 (大阪薬科大学, 2016. 10. 15)
69. 佐々木彪曜, 島亜衣, 森田寛之, 田畑裕幸, 西尾久英, 通山由美 脊髄性筋萎縮症 (SMA) 原因遺伝子, SMN のヒト神経細胞モデルにおける機能の解析 第 66 回日本薬学会近畿支部大会 (大阪薬科大学, 2016. 10. 15)
70. 森田寛之, 千崎智暁, 西尾久英, 通山由美 脊髄性筋萎縮症の原因遺伝子 *SMN1* のヒト神経芽腫細胞における機能の解析 第 64 回日本生化学会 近畿支部例会 (大阪大学 豊中キャンパス, 2017. 5. 27)
71. 川井真好, 泉谷優衣, 炭村一樹, 迫谷有希子, 通山由美 高温処理 *Staphylococcus aureus* の生存能力の獲得 第 64 回日本生化学会 近畿支部例会 (大阪大学 豊中キャンパス, 2017. 5. 27)
72. 川井 真好, 迫谷 有希子, 通山 由美 高温処理 *Staphylococcus aureus* の生存能力の獲得 環境微生物系学会合同大会 2017 (東北大学川内北キャンパス, 2017. 8. 29-31)
73. 杉谷朋美, 森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美 好中球の Neutrophil Extracellular Traps (NETs) 形成機構に関わる新規シグナル分子の解析 第 67 回日本薬学会近畿支部大会 (兵庫医療大学, 2017. 10. 14) ポスター賞受賞!
74. 千崎智暁, 森田寛之, 田畑裕幸, 西尾久英, 通山由美 SMN (Survival motor neuron protein) のヒト神経芽腫細胞における機能の解析 第 67 回日本薬学会近畿支部大会 (兵庫医療大学, 2017. 10. 14)
75. 田畑裕幸, 森田寛之, 通山由美 チロシンキナーゼ Syk によるファゴソームの酸性化と殺菌能の調節 第 90 回日本生化学会大会 (神戸ポートアイランド, 2017. 12. 6-9)
76. 森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美 好中球の Neutrophil Extracellular Traps (NETs) 形成機構における Protein S100-A8 の機能の解析 第 65 回日本生化学会 近畿支部例会 (兵庫医科大学, 2018. 5. 26)
77. 川井真好, 通山由美 高温処理による *Staphylococcus aureus* の生存能力への影響 第 65 回日本生化学会 近畿支部例会 (兵庫医科大学, 2018. 5. 26)

78.	田畑裕幸, 森田寛之, 通山由美 チロシンキナーゼ Syk によるファゴソームの酸性化の調節 第 91 回日本生化学会大会 (国立京都国際会館, 2018. 9. 24-26)
79.	森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美 食細胞 (好中球様・マクロファージ様細胞) における Protein S100-A8, Protein S100-A9 の機能解析: 好中球様・マクロファージ様に分化したヒト白血病細胞株 HL60 による検討 第 91 回日本生化学会大会 (国立京都国際会館, 2018. 9. 24-26)
80.	岸信彦, 森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美 食作用依存性のMPO活性化におけるチロシンキナーゼSykの機能解析:好中球様に分化したヒト白血病細胞株HL60による検討 第68回日本薬学会近畿支部大会 (姫路獨協大学, 2018. 10. 13)
81.	西川達也, 森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美 好中球のNeutrophil Extracellular Traps (NETs)形成におけるProtein S100-A8の機能解析 第 68 回日本薬学会近畿支部大会 (姫路獨協大学, 2018. 10. 13)
82.	大野華子, 森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美ファゴソーム形成プロセスにおけるチロシンキナーゼSykの機能解析:マクロファージ様に分化したヒト白血病細胞株HL60による検討 第68回日本薬学会近畿支部大会 (姫路獨協大学, 2018. 10. 13)

Ⅲ 研究・研究業績活動 (※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用)

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1994 年～現在	日本生化学会会員 , 評議員 (2006～), 代議員 (2013, 2014～2015 2018～2019)
1997 年～現在	日本血液学会会員
1999 年～現在	日本免疫学会会員
2006 年～現在	米国血液学会会員
2006 年～現在	米国生化学・分子生物学会会員
2007 年～現在	日本薬学会会員 代議員 (2011～2012, 2015～2016)
2007 年～2008 年	日本学術振興会科学研究費委員会 専門委員
2013 年～2014 年	日本学術振興会特別研究員等審査会 専門委員
2014 年～2015 年	独立行政法人医薬基盤研究所 医薬推進研究評価委員会 専門委員
2015 年～2016 年	国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所 開発振興部成果管理委員会専門委員
2007 年～2008 年	姫路市総合計画策定審議会 第 3 分科会委員
2010 年～現在	姫路市環境審議会委員
2009 年～現在	姫路文学館 和辻哲郎文化賞推薦会委員
2014 年～2016 年	姫路市地域夢プラン審査委員
2017 年～2018 年	姫路市大学発まちづくり研究助成事業 審査委員

Ⅴ 学内における主な活動

2007 年～20011	附属図書館運営委員
2007 年～2014 年	組換え DNA 安全管理委員会委員
2007 年～2014 年	組換え DNA 実験安全主任者
2012 年～2014 年	評議員
2015 年 4 月～2019 年 3 月	学部長 (その他、役職に伴う併任委員)

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	阿部 肇	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
事項なし		
2 作成した教科書、教材、参考書		
事項なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
事項なし		

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著・単著	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】 事項なし						
Metathesis-Based Stapling of a Pyridine-Acetylene-Phenol Oligomer Having Alkenyl Side Chains after Intermolecular Templatation by Native Saccharides	共著	2018年6月	VCH European Journal of Organic Chemistry 2018年, 24号	Hajime Abe, Chihiro Sato, Yuki Ohishi, Masahiko Inouye	3131-3138	
Spontaneous Helix Formation of "meta"-Ethynylphenol Oligomers by Sequential Intramolecular Hydrogen-Bonding Inside the Cavities	共著	2018年8月	米国化学会 The Journal of Organic Chemistry 2018年, 83巻, 15号	Tomoya Hayashi, Yuki Ohishi, So Hee-Soo, Hajime Abe, Shinya Matsumoto, Masahiko Inouye	8724-8730	
Investigation of receptor-mediated	共著	2018年8月	米国化学会 Molecular Pharmaceutics	Yuri Kinoshita, Kagayaki	3583-3594	

cyanocobalamin (vitamin B12) transport across the inner blood-retinal barrier using fluorescence-labeled cyanocobalamin			2018 年, 15 巻, 8 号	Nogami, Ryuta Jomura, Shin-ichi Akanuma, Hajime Abe, Masahiko Inouye, Yoshiyuki Kubo, Ken-ichi Hosoya		
【その他】 (国際学会発表) Tridentat Tetraarene Receptor for Hydroxy Guests Arylene Ethynylene Foldamers with Pyridine and/or Phenol Units Development of Chain-Type and Macrocyclic-Type Oligomers Consisted of “meta”-Ethynylphenol Units (その他学会発表) 内孔に 6 個のフェノール性水 酸基を持つ大環状エチニルフ ェノールオリゴマーの合成と ゲスト認識 内包での sequential な水素 結合により自発的にらせん構 造を形成するオリゴマーの創 製 “meta”-エチニルフェノール 大環状分子のサイズ選択的な ゲスト認識 かご型ピリジン-アセチレン- フェノール分子のβ-ガラクト シド選択的会合		2018 年 9 月 富山 2019 年 3 月 ソウル 2018 年 11 月 京都 2018 年 9 月 東京 2018 年 9 月 富山 2019 年 3 月 神戸 2019 年 3 月 神戸	The Third International Symposium on Toyama-Asia-Africa Pharmaceutical Network The 2nd Workshop on Aromatic Foldamers 2019 Seoul The 14th International Kyoto Conference on New Aspects of Organic Chemistry (IKCOC-14) 第 29 回基礎有機化学討論 会 平成 30 年度有機合成化学 北陸セミナー 日本化学会第 99 春季年会 日本化学会第 99 春季年会	Hajime Abe (招待) Hajime Abe (招待) Tomoya Hayashi, Yuki Ohishi, So Hee-Soo, Hajime Abe, Shinya Matsumoto, Masahiko Inouye 林友哉・大石雄 基・阿部肇・井上 将彦 林友哉・大石雄 基・蘇熙洙・阿部 肇・松本真哉・井 上将彦 林友哉・大石雄 基・阿部肇・井上 将彦 工藤和樹・増田賢 太郎・大石雄基・ 阿部肇・井上将彦		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

事項なし	
------	--

V 学内における主な活動

事項なし	

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教 授	氏名	岡村 恵美子	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	-----	----	--------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
物理化学における法則性について、 実測・演習を通して深く理解させる 指導	2005 年 4 月 2006 年 5 月	京都大学大学院理学研究科の修士課程の学生を対象にした物質化学ゼミナール IV において、実測・演習を通して物理化学の法則性を理解させる試みを行った。具体的には、水に難溶の内分泌攪乱物質、ビスフェノール A の水溶液について核磁気共鳴 (NMR) 測定を行わせ、平衡状態における微量のビスフェノール A の濃度を決定させた。さらに、物理化学的な解析手段として多用されるコンピュータを駆使した NMR 装置の操作について習熟させ、得られたスペクトルから NMR 分光の基礎的パラメータについて実際に算出させることで、実践的な応用力を身につけさせた。
生物物理化学における理論や基礎事項について、身近な例と関連させて理解させる指導	2005 年 5 月 2006 年 5 月	京都大学大学院理学研究科の修士課程の学生を対象にした物質化学ゼミナール IV において、物理化学の中でも特に薬学と関係の深い生物物理化学分野における理論や基礎事項を、身近な具体例と関連づけて理解させる試みを行った。具体的には、細胞のモデルとなる水中の種々の脂質分子集合体（膜、ミセルなど）を実際に作製させて、同じ条件で NMR 測定を行わせた。これにより、(1) 生物物理化学関連の実験操作について習熟させるとともに (2) 生物物理化学的解析手段としても有効な NMR 分光の基礎的パラメータと細胞モデルとしての脂質分子集合体の構造特性を結びつけて、得られた結果について具体的に説明させることで、実践的な応用力を身につけさせた。
基礎物理学の講義における動画の活用と自作教材の作成	2007 年 4 月～7 月 2008 年 10 月～2009 年 1 月 2009 年 10 月～現在	姫路獨協大学薬学部の 1 年次生を対象にした「基礎物理学」の講義において動画を積極的に活用し、運動の記述を行う物理学の理解を助ける手段とした。動画の活用は、学生を対象に実施されたアンケートにおいて、特に高い評価を得た。さらに、穴埋め式の自作の教材を作成し、復習などに活用させた。
物理化学の講義において、身近な現象を通して物理化学の法則性を理解させる工夫	2008 年 4 月～7 月 2009 年 4 月～7 月 2010 年 4 月～現在	姫路獨協大学薬学部の 2 年次生を対象にした「物理化学」の講義において、身近な実例を通して物理化学の法則性を理解させる工夫を行った。講義の中でパワーポイントのスライドや実験によるデモを行い、身近な実例をふんだんに取り入れながら、法則との関連を学生に体感させた。
物理化学の講義のキーワードや演習問題をまとめた自作プリントの作成	2008 年 4 月～7 月 2009 年 4 月～7 月 2010 年 4 月～現在	物理化学の講義において、講義のキーワードをまとめたプリントを毎回作成して学生に配布した。演習問題は、薬剤師国家試験も視野に入れて作成し、学生が問題を解くことで、講義の理解と同時に国家試験対策も兼ねられるように配慮した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
薬学生のための 生物物理化学入門（廣川書店） （共著）	2008 年 11 月 20 日	薬学の土台となる「生物物理化学」を初めて学ぶ薬学生のための教科書として出版された。薬剤師国家試験出題基準や薬学教育モデルコアカリキュラムにも基づくものである。第 5 章「生体内への物質移動」を執筆した。

物理化学実習の手引き	2009 年 6 月 29 日	姫路獨協大学薬学部の 3 年次生を対象にした「物理化学」の実習書である。
物理化学 CBT 対策問題と解説	2009 年 9 月 7 日	薬剤師となるための前段階である薬学共用試験 CBT (computer based testing) に向けて姫路獨協大学薬学部で開講された CBT 補講・物理化学分野の教材である。
CBT 対策と演習「物理化学」 (廣川書店) (共著)	2009 年 10 月 30 日	CBT 合格を目指して、薬学物理化学分野の知識を整理し、演習問題を通して基礎学力を養成する「参考書」兼「問題集」である。第 11 章「拡散・膜透過」、第 14 章「生物物理化学」を執筆した。
基礎実験 (物理) 実習書 (改訂版)	2011 年 9 月 16 日	姫路獨協大学薬学部 1 年次生を対象にした基礎実験 (物理分野) の手引きである。テーマ III 「分子模型」の内容を改訂した。
製剤への物理化学 (第 2 版) (廣川書店) (共著)	2012 年 2 月 25 日	薬学部学生のための物理化学入門書。第十六改正日本薬局方と薬学教育モデル・コアカリキュラムを考慮し、薬学部初級～中級レベルの物理化学教科書として編集・改訂された。改訂の主要部分に相当する第 4 章「熱力学」を執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
物理化学系科目担当教員会議 2009 における講演「六年制における物理系薬学教育の現状と課題：私立新設校の実例」	2009 年 3 月 27 日	日本薬学会第 129 年会会期中に開催された物理化学系科目担当教員会議 2009 において、標記の依頼講演を行った。会議では、薬学部 6 年制教育開始後における物理系薬学の講義と実習の現状と課題を明らかにし、議論のきっかけとすることを目的とした。6 年制における物理系教育の現状と課題について、私立新設学部の立場から実例を紹介した。
4 その他教育活動上特記すべき事項		
神戸薬科大学大学院物理化学特論における特別講義	2008 年 4 月 24 日	神戸薬科大学における大学院生対象の講義科目、物理化学特論において、「NMR の基礎と薬学への展開」と題した特別講義を行った。
富山大学大学院医学薬学研究部における特別講義	2009 年 6 月 25 日	富山大学大学院医学薬学研究部において開講されている大学院生対象の講義科目「物性物理化学特論」のなかで、「NMR による膜中薬物の挙動の解析」と題して特別講義を行った。
同志社大学大学院工学研究科における集中講義	2011 年 9 月 14～17 日	同志社大学大学院工学研究科・修士課程学生対象の「応用化学集中講義 I」において、「NMR (核磁気共鳴) 分光法—原理、基礎と応用」と題して集中講義を行った。
徳島大学大学院 (創薬人育成のための創薬実践道場教育構築事業) における特別講義	2015 年 6 月 25 日	徳島大学大学院 (創薬人育成のための創薬実践道場教育構築事業) において、大学院生を対象に、「加齢にともなうアスパラギン酸の異性化と立体配座：水晶体 α A クリスタリンペプチドの高分解能 ^1H -NMR 研究」と題した特別講義を行った。

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
【著書】 Liquid Interfaces in Chemical, Biological, and	共著	2001 年 2 月	Marcel Dekker, Inc., New York	© E. Okamura, and M. Nakahara	775-805	第 32 章「NMR Studies on

Pharmaceutical Applications						Lipid Bilayer Interfaces Coupled with Anesthetics and Endocrine Disruptors」を執筆
揺らぎ・ダイナミクスと生体機能-物理化学的視点から見た生体分子	共著	2013 年 9 月	化学同人	岡村 恵美子	212-230	第 14 章「生体膜」を執筆
Encyclopedia of Biocolloid and Biointerface Science, Volume 1	共著	2016 年 7 月	John Wiley & Sons, Inc.	E. Okamura	391-402	第 30 章「NMR of Drug Delivery Coupled with Lipid Membrane Dynamics」を執筆
【論文】						
NMR で捉えた膜のなかの分子の動き	共著	2004 年 3 月	化学, 第 59 巻, 3 号	◎岡村恵美子, 中原 勝	66-67	
NMR Study on the Binding of Neuropeptide Achatin-I to Phospholipid Bilayer: The Equilibrium, Location, and Peptide Conformation	共著	2004 年 7 月	Biophysical Journal, 第 87 巻, 1 号	◎T. Kimura, E. Okamura, N. Matubayasi, and M. Nakahara	375-385	
Limited Slowdown of Endocrine-Disruptor Diffusion in Confined Fluid Lipid Membranes	共著	2004 年 12 月	Physical Review Letters, 第 93 巻, 24 号	◎E. Okamura, C. Wakai, N. Matubayasi, Y. Sugiura, and M. Nakahara	248101	2011 Impact factor=7.37
NMR による脂質二分子膜の構造・ダイナミクスと麻酔剤の取り込み・輸送	共著	2005 年 3 月	麻酔と蘇生, 第 41 巻, 1 号	◎岡村恵美子, 中原 勝	21-22	
Real-time In-cell ¹⁹ F NMR Study on Uptake of Fluorescent and Nonfluorescent ¹⁹ F-Octaarginines into Human Jurkat Cells	共著	2005 年 7 月	Chemistry Letters, 第 34 巻, 7 号	◎E. Okamura, K. Ninomiya, S. Futaki, T. Nagai, C. Kimura, C. Wakai, N. Matubayasi, Y. Sugiura, and M. Nakahara	1064-1065	
Mobility and Location of Anesthetics in Lipid Bilayer Membranes by High-Resolution, High-Field-Gradient NMR	共著	2005 年 9 月	International Congress Series, 第 1283 巻	◎E. Okamura and M. Nakahara	203-206	
Dynamic and 2D NMR Studies on Hydrogen-bonding Aggregates of Cholesterol in Low-polarity Organic Solvents	共著	2006 年 8 月	The Journal of Physical Chemistry B, 110 巻, 31 号	◎ C. Giordani, C. Wakai, E. Okamura, N. Matubayasi, and M. Nakahara	15205-15211	2011 Impact factor=3.696
Cholesterol Location and Orientation in Aqueous Suspension of Large Unilamellar Vesicles of	共著	2008 年 3 月	The Journal of Physical Chemistry B, 112 巻, 9 号	◎ C. Giordani, C. Wakai, K. Yoshida, E. Okamura, N.	2622-2628	2011 Impact factor=3.696

Phospholipid Revealed by Intermolecular Nuclear Overhauser Effect				Matubayasi, and M. Nakahara		
Drug Binding and Mobility Relating to the Thermal Fluctuation in Fluid Lipid Membranes	共著	2008 年 12 月	The Journal of Chemical Physics, 129 巻, 21 号	©E. Okamura and N. Yoshii	215102	2011 Impact factor=3.333
Kinetics of Membrane Binding and Dissociation of 5-Fluorouracil by Pulsed Field Gradient ¹⁹ F NMR	共著	2009 年 5 月	Chemical Physics Letters, 474 巻	©N. Yoshii and E. Okamura	357-361	Impact factor=2.337
高分解能溶液 NMR で捉えた脂質膜のダイナミクスと薬物の分配・輸送	単著	2009 年 5 月	膜, 34 巻, 3 号	岡村恵美子	117-125	
高分解能溶液 NMR による薬物の膜への結合と膜のなかのダイナミクス	単著	2009 年 10 月	アンサンブル, 11 巻, 4 号	岡村恵美子	18-21	
特集「膜の揺らぎと機能への展開：研究の最前線」を企画して	単著	2011 年 1 月	膜, 36 巻, 1 号	岡村恵美子	1	
ソフトな脂質膜の揺らぎと薬物透過についての NMR 研究	共著	2011 年 1 月	膜, 36 巻, 1 号	©吉井範行、岡村恵美子	9-15	
NMR による脂質膜中の薬物の「運動」の解析	共著	2011 年 6 月	オレオサイエンス, 第 11 巻, 6 号	©吉井範行、岡村恵美子	213-220	日本油化学会 オレオサイエンス賞受賞論文
Binding of Hydrophobic Fluorinated Bisphenol A to Large Unilamellar Vesicles of Egg Phosphatidylcholine	共著	2011 年 8 月	The Journal of Physical Chemistry B, 115 巻, 38 号	©N. Yoshii and E. Okamura	11074-11080	2011 Impact factor=3.696
Kinetics of binding and diffusivity of leucine-enkephalin in large unilamellar vesicle by pulsed-field-gradient ¹ H NMR <i>in situ</i>	共著	2011 年 11 月	Biophysics, 7 巻	©N. Yoshii, T. Emoto, and E. Okamura	105-111	
Physicochemical Mechanism for the Lipid Membrane Binding of Polyarginine: the Favorable Enthalpy Change with Structural Transition from Random Coil to α -Helix	共著	2012 年 10 月	Chemistry Letters, 第 41 巻, 10 号	©Y. Takechi, C. Mizuguchi, M. Tanaka, T. Kawakami, S. Aimoto, E. Okamura, and H. Saito	1374-1376	
Slow Tumbling but Large Protrusion of Phospholipids in the Cell Sized Giant Vesicle	共著	2013 年 5 月	<i>Chem. Phys. Lett.</i> , 570 巻	©Y. Takechi, H. Saito, and E. Okamura	136-140	
Lateral Diffusion of Lipids Separated from Rotational and Translational Diffusion of a Fluid Large Unilamellar Vesicle	共著	2013 年 6 月	<i>Colloid Surf. B-Biointerfaces</i> , 106 巻	©N. Yoshii, T. Emoto, and E. Okamura	22-27	
Uptake of Sevoflurane Limited by the Presence of Cholesterol in the Lipid	共著	2014 年 10 月	<i>J. Oleo Sci.</i> , 63 巻, 11 号	©E. Okamura, Y. Takechi, and K. Aki	1149-1157	

Bilayer Membrane: A Multinuclear Nuclear Magnetic Resonance Study						
Regulation of Phospholipid Protrusion in the Cell Sized Vesicle by Hydrophobic Bisphenol A	共著	2015 年 1 月	<i>Membrane</i> , 40 巻, 1 号	©Y. Takechi, Y. Shintani, D. Kimoto, and <u>E. Okamura</u>	38-45	日本膜学会 「膜誌論文賞」受賞論文
Staggered side-chain conformers of aspartyl residues prerequisite to transformation from L- α - to D- β -aspartate 58 in human-lens α A-crystallin fragment	共著	2015 年 1 月	<i>Biophys. Chem.</i> , 196 巻	©K. Aki and <u>E. Okamura</u>	10-15	
D- β -aspartyl residue exhibiting uncommon high resistance to spontaneous peptide bond cleavage	共著	2016 年 2 月	<i>Sci. Rep.</i> , 6 巻	©K. Aki and <u>E. Okamura</u>	21594	
Kinetics of Membrane Binding and Mobility of Drugs by Multinuclear Dynamic NMR in Situ	単著	2016 年 3 月	<i>Journal of the Society of Japanese Women Scientists</i> , 16 巻	<u>E. Okamura</u>	7-14	
Kinetics of the competitive reactions of isomerization and peptide bond cleavage at L- α - and D- β -aspartyl residues in an α A-crystallin fragment	共著	2017 年 1 月	<i>J. Pept. Sci.</i> , 23 巻	©K. Aki and <u>E. Okamura</u>	28-37	
Glycosaminoglycan Binding and Non-endocytic Membrane Translocation of Cell-permeable Octaarginine Monitored by Real Time In-cell NMR Spectroscopy	共著	2017 年 4 月	<i>Pharmaceuticals</i> , 10 巻	© Y. Takechi-Haraya, K. Aki, Y. Tohyama, Y. Harano, T. Kawakami, H. Saito, and <u>E. Okamura</u>	42	
【その他、解説記事など】 柔らかな生体界面の構造と機能：膜の動きと物質輸送の NMR	単著	2014 年 8 月	<i>Colloid & Interface Communication</i> , 39 巻, 3 号	<u>岡村恵美子</u>	23-25	
細胞と界面化学	単著	2016 年 12 月	<i>化学と工業</i> 69 巻, 12 号	<u>岡村恵美子</u>	1080	
化粧品開発が知って得する, コロイド分散系微粒子ベシクル・リボソームのメカニズム 第 1 回 ベシクル・リボソームの種類と作り方	単著	2016 年 10 月	<i>COSMETIC STAGE</i> , 11 巻, 1 号	<u>岡村恵美子</u>	78-81	
化粧品開発が知って得する, コロイド分散系微粒子ベシクル・リボソームのメカニズム 第 2 回 ベシクル・リボソームの測定法	単著	2016 年 12 月	<i>COSMETIC STAGE</i> , 11 巻, 2 号	<u>岡村恵美子</u>	55-58	
化粧品開発が知って得する, コロイド分散系微粒子ベシクル・リボソームのメカニズム 第 3 回 ベシクル・リボソームの性質	単著	2017 年 2 月	<i>COSMETIC STAGE</i> , 11 巻, 3 号	<u>岡村恵美子</u>	58-61	

【受賞】 薬物の in-cell NMR : シグナル の非侵襲検出と輸送解析	単独	2009 年 6 月	第 2 回 資生堂 女性 研究者サイエンスグ ラント	岡村恵美子		
NMR による脂質膜中の薬物の 「運動」の解析	共同	2012 年 10 月	第 11 回 日本油化学 会 オレオサイエンス 賞	吉井範行、 <u>岡村 恵美子</u>		
Regulation of Phospholipid Protrusion in the Cell Sized Vesicle by Hydrophobic Bisphenol A	共同	2016 年 5 月	日本膜学会 膜誌論文 賞	Y. Takechi, Y. Shintani, D. Kimoto, and <u>E. Okamura</u>		
【招待講演】 ソフトマターとしての生体モ デル膜ナノ空間における分子 の自己拡散	共同	2005 年 4 月	電気化学会第 72 回大 会	岡村恵美子、若井千 尋、松林伸幸、中原 勝		
膜とドラッグデリバリーの高 分解能溶液 NMR 研究	単独	2006 年 12 月	分子科学研究所 第 27 回 CMS セミナー			
NMR の基礎と薬学への展開	単独	2008 年 4 月	神戸薬科大学大学院 特別講義			
微粒子分散系の化学：ベシク ル・リボソーム	単独	2008 年 5 月	日本油化学会フレッ シュマンセミナー OSAKA (2008)			
Drug Binding and Mobility in Model Cell Membranes in Situ: A Pulsed-Field-Gradient NMR Approach	単独	2008 年 6 月	Special Seminar, University of Pittsburgh, Molecular Biophysics and Structural Biology			
NMR による膜中薬物の挙動の解 析	単独	2009 年 6 月	日本薬学会北陸支部 特別講演会			
Drug Binding and Mobility in Membranes by High-Resolution Solution NMR	単独	2009 年 11 月	第 47 回日本生物物理 学会年会			
ドラッグデリバリーの動的 NMR 解析	単独	2010 年 6 月	徳島大学大学院ヘル スバイオサイエンス 研究部製剤設計薬学 分野セミナー			
水中の脂質二分子膜の構造・ダ イナミクスと薬物輸送の溶液 NMR 研究	単独	2010 年 11 月	第 33 回溶液化学シン ポジウム			
ソフトな脂質膜の揺らぎと薬 物透過についての NMR 研究	共同	2010 年 11 月	膜シンポジウム 2010	吉井範行、 <u>岡村恵美 子</u>		
脂質膜のダイナミクスと薬物 分配に関する NMR 解析	単独	2011 年 5 月	日本薬剤学会第 26 年 会			
くすりの動き・吸収に見るコロ イド・界面化学	単独	2011 年 7 月	第 29 回関西界面科学 セミナー			
微粒子分散系の化学：ベシク ル・リボソーム	単独	2012 年 5 月	日本油化学会フレッ シュマンセミナー OSAKA (2012)			
微粒子分散系の化学：ベシク ル・リボソーム	単独	2014 年 5 月	日本油化学会フレッ シュマンセミナー			

溶液 NMR によるリポソーム膜の動的構造と薬物輸送研究への展開	単独	2014 年 6 月	OSAKA (2014) 第 32 回物性物理化学研究会			
アスパラギン酸の異性化に関わる側鎖の立体配座の高分解能 ^1H -NMR 解析: αA クリスタリン模擬ペプチドを例として	共同	2014 年 12 月	第 7 回「タンパク質の異常凝集とその防御・修復機構に関する研究会」	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
加齢にともなうアスパラギン酸の異性化と立体配座: 水晶体 αA クリスタリンペプチドの高分解能 ^1H -NMR 研究	単独	2015 年 6 月	徳島大学大学院(創薬人育成のための創薬実践道場教育構築事業) 特別講演会			
水晶体タンパク質模擬ペプチド中の Asp 異性化に関わる側鎖の立体配座の NMR 研究	単独	2015 年 6 月	第 15 回日本蛋白質科学会年会 ワークショップ「蛋白質とアミノ酸のキラルサイエンス」			
NMR によるリポソーム膜の構造と薬物保持状態の解析	単独	2015 年 10 月	第 3 回コロイド実用技術講座: 分散・凝集のすべて			
L- α -および D- β -アスパラギン酸含有ペプチドの分解と異性化反応の速度論: リアルタイム NMR と HPLC による解析	共同	2015 年 11 月	第 8 回「タンパク質の異常凝集とその防御・修復機構に関する研究会」	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
Mobility, location, and kinetics of membrane binding and delivery of drugs by solution-state ^{19}F and ^1H NMR	単独	2015 年 11 月	6 th Asian Conference on Colloid and Interface Science			
微粒子分散系の化学: ベシクル・リポソーム	単独	2016 年 6 月	日本油化学会フレッシュマンセミナー OSAKA (2016)			
ベシクル・リポソームの科学—調製から物性・測定・応用まで—	単独	2016 年 7 月	第 34 回関西界面科学セミナー			
NMR によるリポソーム膜の構造と薬物保持状態の解析	単独	2016 年 12 月	第 4 回コロイド実用技術講座: 分散・凝集のすべて			
溶液 NMR によるリポソーム膜の構造と薬物保持状態の解析	単独	2017 年 8 月	日本薬剤学会 物性 FG セミナー 2017 「化学構造解析だけじゃもったいない! 医薬品開発への NMR の応用」			
溶液 NMR による膜の動的構造と膜を場とした生体反応解析	単独	2017 年 12 月	科学研究費助成事業新学術領域「生命分子システムにおける動的秩序形成と高次機能発現」第 2 回秩序化分子システムワークショップ			
リン脂質 2 重層リポソーム: その構造・ダイナミクスから機能まで	単独	2018 年 5 月	食品ハイドロコロイドセミナー 2018			

微粒子分散系の化学：ベシクル・リボソーム	単独	2018 年 6 月	日本油化学会フレッシュマンセミナー OSAKA (2018)			
高分解能溶液 NMR によるペプチド中の異性化、ペプチド鎖切断、凝集過程のリアルタイム計測： α クリスタリンとアミロイド β ペプチド	共同	2018 年 12 月	第 10 回「タンパク質の異常凝集とその防御・修復機構に関する研究会」	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
アスパラギン酸の異性化及び切断反応における複数残基同時観測と速度論解析～リアルタイム NMR を用いて～	共同	2018 年 12 月	第 10 回「タンパク質の異常凝集とその防御・修復機構に関する研究会」	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
【国際会議発表】 Location and Side-Chain Conformation of a Neuropeptide, Achatin-I in Phospholipid Bilayer Membrane: A High-Resolution NMR Study	共同	2004 年 2 月	Biophysical Society 48th Annual Meeting	Tomohiro Kimura、 <u>Emiko Okamura</u> 、Nobuyuki Matubayasi and Masaru Nakahara		
Mobility and Location of Anesthetics in Lipid Bilayer Membranes by High-Resolution, High-Field-Gradient NMR	共同	2005 年 2 月	The 7th International Conference on Basic and Systemic Mechanisms of Anesthesia	<u>Emiko Okamura</u> and Masaru Nakahara		
Molecular Dynamics Study of Size- and Temperature-dependence of Thermodynamic Stability and Structure of SDS Micelle	共同	2007 年 11 月	Joint Conference of JMLG/EMLG Meeting 2007 and 30th Symposium on Solution Chemistry of Japan “Molecular Approaches to Complex Liquids System”	Noriyuki Yoshii, <u>Emiko Okamura</u> and Ssumu Okazaki		
Pulsed-Field-Gradient NMR Method for Quantifying Drug Binding to Model Cell Membranes <i>in Situ</i>	共同	2008 年 6 月	The 82nd ACS Colloid & Surface Science Symposium	<u>Emiko Okamura</u> and Noriyuki Yoshii		
Drug Binding and Mobility Relating to the Thermal Fluctuation in Membranes: A Dynamic NMR Study	共同	2009 年 3 月	Joint International Open Symposium: Molecular Science of Fluctuations toward Biological Functions and Chemistry of Biological Processes Created by Water and Biomolecules	<u>Emiko Okamura</u> and Noriyuki Yoshii		
First observation of pure lateral diffusion of lipid molecules in a bilayer vesicle by pulsed field gradient NMR spectroscopy	共同	2009 年 12 月	The 3rd International Symposium on Molecular Science of Fluctuations toward Biological Functions	<u>Emiko Okamura</u> and Noriyuki Yoshii		

Simulation of pulsed field gradient NMR spectra of diffusive motion of lipids and drugs restricted by a spherical vesicle. A Monte Carlo study	共同	2009 年 12 月	The 3rd International Symposium on Molecular Science of Fluctuations toward Biological Functions	Noriyuki Yoshii and <u>Emiko Okamura</u>		
Kinetics of Membrane Binding, Diffusivity, and Permeability of Small-Sized Drugs and Peptides by NMR in Situ	共同	2010 年 9 月	International Conference on Nanoscopic Colloid and Surface Science	<u>Emiko Okamura</u> and Noriyuki Yoshii		
Lateral Diffusion of Phospholipid Molecules Separated from the Rotational and the Translational Diffusion of a Fluid Bilayer Vesicle	共同	2010 年 12 月	The 4th International Symposium on Molecular Science of Fluctuations toward Biological Functions	Noriyuki Yoshii and <u>Emiko Okamura</u>		
Quantifying Rapid Association and Dissociation of Hydrophobic Fluorinated Bisphenol A to Lipid Bilayer	共同	2012 年 1 月	The 5th International Symposium on Molecular Science of Fluctuations toward Biological Functions	Noriyuki Yoshii, Tomomi Emoto, and <u>Emiko Okamura</u>		
Kinetics of binding and diffusivity of leucine-enkephalin in large unilamellar vesicle by pulsed-field-gradient ¹ H NMR	共同	2012 年 1 月	The 5th International Symposium on Molecular Science of Fluctuations toward Biological Functions	Noriyuki Yoshii, Tomomi Emoto, and <u>Emiko Okamura</u>		
Kinetics of membrane binding and mobility of drugs by multinuclear dynamic NMR <i>in situ</i>	共同	2012 年 5 月	International Association of Colloid and Interface Scientists Conference	Noriyuki Yoshii, Tomomi Emoto, and <u>Emiko Okamura</u>		
Physicochemical Mechanism for the Enhanced Ability of Lipid Membrane Penetration of Polyarginine	共同	2012 年 5 月	International Association of Colloid and Interface Scientists Conference	Yuki Takechi, Haruka Yoshii, Masafumi Tanaka, Toru Kawakami, Saburo Aimoto, <u>Emiko Okamura</u> , and Hiroyuki Saito		
Static and Dynamic Behaviors of Drug Delivery to Lipid Bilayer Membrane by NMR and Molecular Dynamics Simulation	共同	2012 年 10 月	World Congress on Oleo Science & 29th ISF Congress	<u>Emiko Okamura</u> and Noriyuki Yoshii		
Molecular Fluctuation of Lipids in Cell Sized Vesicles as Studied by NMR	共同	2012 年 12 月	The 6th International Symposium on Molecular Science of Fluctuations toward Biological Functions	Yuki Takechi, Hiroyuki Saito, and <u>Emiko Okamura</u>		

Motions and Fluctuations of Phospholipid Molecules in Large and Cell Sized Vesicles by NMR	共同	2013 年 7 月	33rd International Conference on Solution Chemistry	<u>Emiko Okamura</u> , Yuki Takechi, Hiroyuki Saito, and Noriyuki Yoshii		Invited
Delivery of Sevoflurane Limited by the Presence of Cholesterol in Lipid Bilayer Membranes: Multinuclear, Dynamic NMR <i>in Situ</i>	共同	2014 年 5 月	105 th AOCs Annual Meeting & Expo	<u>Emiko Okamura</u> and Yuki Takechi		
Real Time in-Cell ¹⁹ F NMR Spectroscopy on the Cell Membrane Permeation of Octaarginine	共同	2014 年 8 月	The XXVI th International Conference on Magnetic Resonance in Biological Systems	Yuki Takechi, Kenzo Aki, Yumi Tohyama, Toru Kawakami, Hiroyuki Saito, and <u>Emiko Okamura</u>		
Mobility, location, and kinetics of membrane binding and delivery of drugs by solution-state ¹⁹ F and ¹ H NMR	単独	2015 年 11 月	6 th Asian Conference on Colloid and Interface Science	<u>Emiko Okamura</u>		
Real-Time in-Situ NMR Observation of Non-Enzymatic Peptide Bond Cleavage and Isomerization of Aspartyl Residue in Crystallin and Amyloid- β Fragments	共同	2016 年 8 月	The XXVII th International Conference on Magnetic Resonance in Biological Systems	Kenzo Aki and <u>Emiko Okamura</u>		
How Sevoflurane Uptake is Regulated: The Effect of Membrane Curvature, Cholesterol, Lipid Composition, and Ion Channel	共同	2016 年 9 月	4th International Kyushu Colloid Colloquium	Kotone Ito, Yukako Nishiguchi, Kenzo Aki, and <u>Emiko Okamura</u>		
【国内学会発表】 NMR による脂質二分子膜の構造・ダイナミクスと麻酔剤の取り込み・輸送	共同	2004 年 7 月	第 22 回麻酔メカニズム研究会	<u>岡村恵美子</u> 、中原 勝		
脂質二分子膜のダイナミクスと薬物の輸送過程の高感度高分解能 NMR 解析	共同	2005 年 3 月	日本薬学会第 125 年会	<u>岡村恵美子</u> 、若井千尋、松林伸幸、中原 勝		
NMR で捉えた脂質二分子膜のダイナミクスと”環境ホルモン”の輸送	共同	2005 年 3 月	日本化学会第 85 春季年会	<u>岡村恵美子</u> 、若井千尋、松林伸幸、中原 勝		
高感度高磁場勾配 NMR による二分子膜のダイナミクスと薬物の膜内輸送	共同	2005 年 5 月	日本膜学会第 27 年会	<u>岡村恵美子</u> 、若井千尋、松林伸幸、中原 勝		
高分解能 ¹⁹ F-NMR による蛍光標識および非標識 ¹⁹ F-オクタアルギニンの細胞への取り込み過程のリアルタイム計測	共同	2005 年 8 月	第 18 回バイオメディカル分析科学シンポジウム	<u>岡村恵美子</u> 、二宮啓子、二本史朗、永井康晴、木村智大、若井千尋、松林伸幸、杉浦幸雄、中原 勝		
ヒト生細胞とペプチドの相互作用に関する高分解能 in-situ in-cell NMR spectroscopy	共同	2005 年 11 月	膜シンポジウム 2005	<u>岡村恵美子</u> 、二宮啓子、二本史朗、永井康晴、木村智大、若井千尋、松林伸幸、杉浦幸雄、中原 勝		

アルギニンペプチドと細胞の水溶液における相互作用のNMR研究	共同	2005 年 11 月	第 28 回溶液化学シンポジウム	岡村恵美子、二宮啓子、二木史朗、永井康晴、木村智大、若井千尋、松林伸幸、杉浦幸雄、中原 勝		
リン脂質二分子膜の熱揺らぎによるナトリウムイオン透過の ^{23}Na -NMR 解析	共同	2006 年 3 月	日本化学会第 86 春季年会	木下智子、岡村恵美子、松林伸幸、中原勝		
熱揺らぎによる Na^+ イオンのリン脂質二分子膜透過機構の ^{23}Na -NMR 解析	共同	2006 年 5 月	日本膜学会第 28 年会	木下智子、岡村恵美子、松林伸幸、中原勝		
熱揺らぎによるリン脂質二分子膜の Na^+ イオン透過の in situ ^{23}Na -NMR 解析	共同	2006 年 11 月	第 29 回溶液化学シンポジウム	木下智子、岡村恵美子、松林伸幸、中原勝		
Cholesterol aggregate formation in low-polarity organic solvents mimicking the hydrophobic core of lipid bilayer studied by diffusion and 2D NMR	共同	2006 年 11 月	第 29 回溶液化学シンポジウム	Cristiano Giordani, Chihiro Wakai, <u>Emiko Okamura</u> , Nobuyuki Matubayasi, and Masaru Nakahara		
Diffusion and 2D NMR studies on cholesterol aggregates formed in low-polarity organic solvents mimicking the hydrophobic core of lipid bilayer	共同	2007 年 3 月	日本化学会第 87 春季年会	Giordani Cristiano, 若井千尋、 <u>岡村 恵美子</u> 、松林 伸幸、中原 勝		
分子動力学シミュレーションによる SDS ミセルの熱力学的安定性と構造についての研究	共同	2007 年 9 月	第 60 回コロイドおよび界面化学討論会	吉井 範行、 <u>岡村恵美子</u> 、岡崎 進		
磁場勾配 NMR 法による抗がん剤 5-フルオロウラシルの結合量のその場定量計測	共同	2008 年 3 月	日本化学会第 88 春季年会	<u>岡村 恵美子</u> 、吉井 範行		
5-フルオロウラシルと脂質膜との相互作用に関する分子動力学シミュレーションによる研究	共同	2008 年 3 月	日本化学会第 88 春季年会	吉井 範行、 <u>岡村恵美子</u>		
磁場勾配 NMR を利用した薬物の結合量のその場定量	共同	2008 年 3 月	日本薬学会第 128 年会	<u>岡村 恵美子</u> 、吉井 範行		
NMR その場観測と分子動力学シミュレーションによる 5-フルオロウラシルの脂質二分子膜への結合に関する研究	共同	2008 年 5 月	日本膜学会第 30 年会	<u>岡村 恵美子</u> 、吉井 範行		
高分解能溶液 NMR と分子動力学シミュレーションで捉えた 5-フルオロウラシルのリン脂質二分子膜への結合	共同	2008 年 8 月	第 30 回生体膜と薬物の相互作用シンポジウム	<u>岡村 恵美子</u> 、吉井 範行		
Binding of 5-fluorouracil to soft lipid bilayer membrane by multinuclear	共同	2008 年 9 月	The 61th Divisional Meeting on Colloid and	Noriyuki Yoshii and <u>Emiko Okamura</u>		

dynamic NMR and molecular dynamics simulation			Surface Chemistry, The Chemical Society of Japan			
生体膜への分子の結合に関する NMR および分子動力学計算による研究	共同	2008 年 9 月	第 2 回分子科学討論会	吉井 範行、 <u>岡村恵美子</u>		
動的多核 NMR と分子動力学計算による薬物の脂質二分子膜への結合解析	共同	2008 年 11 月	膜シンポジウム 2008	<u>岡村 恵美子</u> 、吉井 範行		
薬剤分子の脂質膜への結合に関する動的 NMR および分子動力学計算による研究	共同	2008 年 11 月	第 31 回溶液化学シンポジウム	吉井 範行、 <u>岡村恵美子</u>		
脂質膜と薬剤分子との相互作用に関する分子動力学計算	共同	2008 年 11 月	第 22 回 分子シミュレーション討論会	吉井 範行、 <u>岡村恵美子</u>		
¹⁹ F パルス磁場勾配 NMR による脂質膜に結合した薬剤分子の交換に関する研究	共同	2009 年 3 月	日本薬学会 第 129 年会	吉井 範行、 <u>岡村恵美子</u>		
薬剤分子の脂質膜への親和性および拡散についての分子動力学および Monte Carlo 法による研究	共同	2009 年 9 月	第 62 回コロイドおよび界面化学討論会	吉井 範行、 <u>岡村恵美子</u>		
リン脂質ベシクルへの抗がん剤 5-フルオロウラシルの結合・解離の速度論：パルス磁場勾配 NMR による in situ 定量解析	共同	2009 年 9 月	第 62 回コロイドおよび界面化学討論会	<u>岡村 恵美子</u> 、吉井 範行		
分子動力学および Monte Carlo 計算による薬剤分子の脂質膜への親和性および拡散についての研究	共同	2009 年 9 月	第 3 回分子科学討論会	吉井 範行、 <u>岡村恵美子</u>		
NMR、分子動力学および Monte Carlo 計算による薬物の膜への結合と拡散	共同	2009 年 11 月	膜シンポジウム 2009	<u>岡村 恵美子</u> 、吉井 範行		
薬剤分子とベシクルとの結合・解離や拡散運動についての NMR、分子動力学およびモンテカルロ計算による研究	共同	2009 年 11 月	第 32 回溶液化学シンポジウム	吉井 範行、 <u>岡村恵美子</u>		
分子動力学およびモンテカルロ法による薬剤分子とベシクルとの相互作用についての研究	共同	2009 年 11 月	第 23 回分子シミュレーション討論会	吉井 範行、 <u>岡村恵美子</u>		
Binding, Dissociation, and Diffusivity of 5-Fluorouracil to Lipid Bilayer Membranes by NMR and Computer Simulation	共同	2009 年 12 月	第 31 回生体膜と薬物の相互シンポジウム	<u>Emiko Okamura</u> 、 <u>Noriyuki Yoshii</u>		
薬物とベシクルとの結合解離に関する分子動力学およびモンテカルロ計算	共同	2010 年 3 月	文部科学省「最先端・高性能汎用スーパーコンピュータの開発	吉井 範行、 <u>岡村恵美子</u>		

			利用」プロジェクト次世代ナノ統合シミュレーションソフトウェアの研究開発第 4 回公開シンポジウム			
脂質ベシクルに運動が制限された分子の拡散挙動についてのモンテカルロ計算	共同	2010 年 5 月	日本膜学会第 32 年会	吉井 範行、 <u>岡村恵美子</u>		
磁場勾配 NMR による膜のなかの分子拡散と膜への結合・解離の速度論	単独	2010 年 8 月	文科省科研費補助金特定領域研究「分子高次系機能解明のための分子科学—先端計測法の開拓による素過程的理解」第 9 回ミニ公開シンポジウム「イオンチャネル KcsA の機能制御と構造変化の関係を解明する計測法」			
球状ベシクル上の脂質分子の側方拡散係数	共同	2010 年 11 月	第 33 回溶液化学シンポジウム	吉井 範行、 <u>岡村恵美子</u>		
ベシクル上の脂質分子の側方拡散係数	共同	2010 年 11 月	第 24 回分子シミュレーション討論会	吉井 範行、 <u>岡村恵美子</u>		
高分解能 NMR による水中のベシクルへの薬物の結合・解離と拡散過程の解析：低分子からペプチドまで	共同	2010 年 11 月	第 32 回生体膜と薬物の相互作用シンポジウム	<u>岡村 恵美子</u> 、吉井 範行		
分子動力学シミュレーションによる生体膜中の薬物の結合構造	共同	2012 年 5 月	日本膜学会第 34 年会	吉井 範行、 <u>岡村恵美子</u>		
細胞サイズリポソーム中の脂質分子の揺らぎ	共同	2012 年 9 月	新学術領域研究「揺らぎと生体機能」・「水を主役とした ATP エネルギー変換」合同公開シンポジウム「ゆらぎと水—生命のエネルギーと機能の分子機構を探る」	武知 佑樹、山崎昌一、斎藤 博幸、 <u>岡村 恵美子</u>		
溶液 NMR を用いた細胞サイズベシクルの評価	共同	2012 年 11 月	膜 シン ポ ジ ウ ム 2012	武知 佑樹、斎藤博幸、 <u>岡村 恵美子</u>		
細胞サイズベシクルの構造と動態に関する溶液 NMR 研究	共同	2012 年 11 月	第 35 回溶液化学シンポジウム	武知 佑樹、斎藤博幸、 <u>岡村 恵美子</u>		
細胞サイズベシクルの高濃度調製と溶液 NMR による物性解析	共同	2012 年 11 月	第 34 回生体膜と薬物の相互作用シンポジウム	武知 佑樹、斎藤博幸、 <u>岡村 恵美子</u>		
NMR 核オーバーハウザー効果から見た細胞サイズベシクル中におけるリン脂質分子のダイナミクス	共同	2013 年 3 月	日本化学会第 93 春季年会	武知 佑樹、斎藤博幸、 <u>岡村 恵美子</u>		
曲率の小さな細胞モデル膜中	共同	2013 年 5 月	日本膜学会第 35 年	武知 佑樹、斎藤		

のリン脂質分子のダイナミクス			会	博幸、 <u>岡村 恵美子</u>		
疎水性物質による細胞サイズベシクル膜の揺らぎの抑制	共同	2013 年 11 月	膜シンポジウム 2013	武知 佑樹、 <u>岡村 恵美子</u>		
細胞サイズベシクル膜の揺らぎに与える疎水性物質やイオンの影響	共同	2013 年 11 月	第 35 回生体膜と薬物の相互作用シンポジウム	武知 佑樹、 <u>岡村 恵美子</u>		
疎水性物質による細胞サイズベシクル膜中リン脂質の突出運動の制御	共同	2014 年 3 月	日本化学会第 94 春季年会	武知 佑樹、 <u>岡村 恵美子</u>		
オクタアルギニンの物理的膜透過に関するリアルタイム in cell NMR 研究	共同	2014 年 5 月	日本膜学会第 36 年会	武知佑樹、安岐健三、通山由美、川上徹、斎藤博幸、 <u>岡村恵美子</u>		
In cell NMR によるオクタアルギニンペプチドの細胞内輸送のリアルタイム計測と速度論	共同	2014 年 9 月	第 65 回コロイドおよび界面化学討論会	武知佑樹、安岐健三、通山由美、川上徹、斎藤博幸、 <u>岡村恵美子</u>		
α A クリスタリン模擬ペプチドにおける $\alpha \rightarrow \beta$ -Asp 異性化におよぼす Asp 側鎖の立体配座の高分解能 $^1\text{H-NMR}$ 解析	共同	2014 年 10 月	第 64 回日本薬学会近畿支部大会	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
水晶体タンパク質模擬ペプチド中の Asp 異性化におよぼす Asp 側鎖の立体配座の高分解能 $^1\text{H-NMR}$ による解析	共同	2014 年 11 月	第 37 回溶液化学シンポジウム	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
コレステロールによる麻酔剤セボフレンの取り込み制御に関する動的核 NMR 研究	共同	2014 年 11 月	膜シンポジウム 2014	<u>岡村恵美子</u> 、武知佑樹、安岐健三		
アスパラギン酸の異性化に関わる側鎖の立体配座： α A クリスタリン模擬ペプチドの高分解能 $^1\text{H-NMR}$ 解析	共同	2015 年 3 月	日本薬学会 第 135 年会	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
キネティクスに基づく細胞へのオクタアルギニンの物理的膜透過メカニズム	共同	2015 年 5 月	日本膜学会第 37 年会	武知 (原矢) 佑樹、安岐健三、通山由美、原野雄一、川上徹、斎藤博幸、 <u>岡村恵美子</u>		
リアルタイム NMR 測定による L- α -および D- β -アスパラギン酸異性体含有ペプチドの分解速度の解析	共同	2015 年 11 月	第 38 回溶液化学シンポジウム	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
アスパラギン酸異性体の異性化とペプチド鎖分解の速度論解析	共同	2016 年 3 月	日本化学会第 96 春季年会	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
膜表面におけるペプチドの反応の in situ リアルタイム計測を指向した NMR による速度論	共同	2016 年 5 月	日本膜学会第 38 年会	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
加齢にともなうアスパラギン酸の異性化と立体配座に関する高分解能 NMR 研究：水晶体タンパク質 α A クリスタリンペプチドを例として	共同	2016 年 6 月	油化学関連シンポジウム in 姫路	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		

ペプチド結合切断反応のリアルタイムNMR計測にもとづく異常型 D-アスパラギン酸蓄積のメカニズム	共同	2016 年 6 月	油化学関連シンポジウム in 姫路	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
脂質二重膜へのセボフレン吸収に関する要因の比較：溶液 NMR 研究	共同	2016 年 9 月	日本油化学会 第 55 回年会	伊藤琴音、西口友佳子、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
水晶体タンパク質 α クリスタリンにおける異常型 D- β -アスパラギン酸の蓄積メカニズム：リアルタイム NMR によるペプチド結合切断の速度論を通して	共同	2016 年 11 月	第 39 回溶液化学シンポジウム	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
溶液 NMR による麻酔剤・セボフレン取り込みの影響因子：膜の曲率、コレステロール、脂質組成、イオンチャネル	共同	2016 年 11 月	第 39 回溶液化学シンポジウム	伊藤琴音、西口友佳子、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
溶液 NMR によるリボソームへのセボフレン取り込みに影響を与えるファクターの比較	共同	2016 年 12 月	膜シンポジウム 2016	西口友佳子、伊藤琴音、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
Accumulation Mechanism of Uncommon D- β -Aspartyl Residue in Lens α -crystallin by Kinetics of Spontaneous Peptide Bond Cleavage and Isomerization	共同	2017 年 3 月	日本化学会第 97 春季年会	Kenzo Aki and <u>Emiko Okamura</u>		
D- β -Asp の安定性～リアルタイム NMR を用いたペプチド鎖切断の速度論解析～	共同	2017 年 3 月	日本薬学会 第 137 年会	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
イオン・疎水分子・チャネルが酸性・中性リン脂質膜に与える影響の比較研究	共同	2017 年 5 月	日本膜学会第 39 年会	日高明史、津倉康徳、伊藤琴音、西口友佳子、 <u>岡村恵美子</u>		
リアルタイム in-cell NMR によるオクタアルギニンペプチドの細胞膜透過機構	共同	2017 年 10 月	第 40 回溶液化学シンポジウム	武知 (原矢) 佑樹、安岐健三、通山由美、原野雄一、川上徹、斎藤博幸、 <u>岡村恵美子</u>		
温度・表面曲率・脂質組成による二分子膜の動態変化と薬物吸収の溶液 NMR	共同	2018 年 9 月	日本油化学会第 57 回年会	伊藤琴音、西口友佳子、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
リアルタイム NMR を用いたアスパラギン酸およびグルタミン酸の異性化の同時計測と速度論解析：アミロイド β フラグメントペプチドを例に	共同	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部大会	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
リアルタイム NMR によるアミロイド β 変異体の凝集初期過程の比較研究：CD スペクトルと NMR スペクトル観測	共同	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部大会	宇地原結、巨勢紀羽、西田哲朗、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
リアルタイム NMR によるアミロイド β 変異体の凝集初期過程の比較研究：NMR シグナル強	共同	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部大会	西田哲朗、巨勢紀羽、宇地原結、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		

度の変化				子		
リアルタイム NMR によるアミロイドβ変異体の凝集初期過程の比較研究: NMR 化学シフト変化	共同	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部大会	巨勢紀羽、西田哲朗、宇地原結、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
温度・表面曲率・脂質組成が与える膜の動態と薬物輸送: 多核 NMR による相関解析	共同	2018 年 11 月	膜シンポジウム 2018	伊藤琴音、西口友佳子、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
¹ H-NMR を用いたアミロイドβフラグメント中における異性化の複数残基同時測定と速度論	共同	2019 年 3 月 (予定)	日本化学会第 99 春季年会	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1980 年 7 月～現在	日本薬学会会員
1983 年 4 月～現在	日本化学会会員
1986 年 6 月～現在	日本化学会コロイドおよび界面化学部会会員
1991 年 4 月～現在	日本膜学会会員
1996 年 4 月～現在	溶液化学研究会会員
2000 年 7 月～現在	麻酔メカニズム研究会会員
2001 年 7 月～現在	麻酔メカニズム研究会 評議員
2002 年 7 月～現在	日本化学会コロイドおよび界面化学部会 関西支部委員
2004 年 1 月～現在	Biophysical Society (USA) 会員
2004 年 4 月～現在	日本生物物理学会会員
2005 年 2 月	第 7 回国際麻酔メカニズムカンファレンス (The Seventh International Conference on Basic and Systemic Mechanisms of Anesthesia)・奈良・国内組織委員会委員
2007 年 4 月～現在	日本薬学会 近畿支部 委員
2007 年 4 月～現在	日本薬学会 物理化学系教員会議 委員
2007 年 4 月～2009 年 3 月	日本学術振興会 特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員
2007 年 6 月～現在	American Chemical Society 会員
2009 年 4 月～2011 年 3 月	日本薬学会 近畿支部幹事
2009 年 5 月～現在	日本膜学会 「膜」誌編集委員
2009 年 6 月	第 2 回 資生堂 女性研究者サイエンスグラント 受賞
2010 年 2 月～2012 年 1 月	日本薬学会 代議員
2010 年 4 月～現在	京都大学化学研究所共同利用・共同研究拠点 現象解析専門小委員会委員
2010 年	日本膜学会 膜シンポジウム 2010 運営委員長
2012 年 3 月～2014 年 2 月	日本化学会コロイドおよび界面化学部会 関西支部長
2012 年 10 月	第 11 回 日本油化学会 オレオサイエンス賞 受賞
2013 年 3 月～2015 年 2 月	日本化学会 コロイドおよび界面化学部会賞選考委員会委員
2013 年 4 月～現在	日本油化学会 関西支部幹事
2013 年 5 月～2015 年 5 月	日本膜学会 評議員
2014 年 4 月～現在	日本油化学会 代議員
2015 年	The 6th The Asian Conference on Colloid and Interface Science (ACCIS 2015) :

	National Advisory Committee
2015 年 4 月～2017 年 3 月	日本学術振興会 科学研究費委員会専門委員
2015 年 5 月～現在	日本膜学会 理事
2016 年	日本膜学会第 38 年会 副組織委員長
2016 年	日本油化学会「油化学関連シンポジウム in 姫路」世話人
2016 年	第 34 回 物性物理化学研究会世話人
2016 年	日本油化学会第 55 回年会 実行委員
2016 年 3 月～2018 年 3 月	日本薬学会 物理系薬学部会 世話人
2016 年 5 月	日本膜学会 膜誌論文賞 受賞
2017 年	日本膜学会第 39 年会 組織委員長
2017 年	第 35 回 物性物理化学研究会世話人
2017 年	第 40 回溶液化学シンポジウム 実行委員長
2017 年 4 月～現在	日本学術振興会 特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員
2018 年	日本油化学会第 57 回年会 実行委員

V 学内における主な活動

2007 年 4 月～2008 年 5 月	姫路獨協大学 国際交流センター運営委員会委員
2007 年 4 月～2010 年 3 月	姫路獨協大学 入学試験教科委員会委員
2007 年 4 月～2012 年 3 月	姫路獨協大学 セクシャルハラスメント人権委員会委員
2007 年 4 月～2012 年 3 月	薬学部セクシャルハラスメント委員会委員
2012 年 4 月～現在	姫路獨協大学 教育改善実施 (FD) 委員会委員
2012 年 4 月～	薬学部国試対策卒試委員会委員
2012 年 4 月～	薬学部カリキュラム委員会委員
2012 年 4 月～	薬学部第三者評価委員
2013 年 4 月～2015 年 3 月	姫路獨協大学 入学試験教科委員会委員
2013 年 11 月	姫路獨協大学 シニアオープンカレッジ講師
2015 年 4 月～2017 年 3 月	姫路獨協大学 評議員
2017 年 4 月～現在	薬学部 FD 委員会委員
2017 年 4 月～現在	薬学部共通機器委員会委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	駒田 富佐夫	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	--------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
1. 学部講義における実践 （「医薬品情報学」ならびに「医療薬剤学」）	2009 年 4 月～現在	姫路獨協大学薬学部にて、薬学教育モデル・コアカリキュラムに準じ、「一般目標」と「到達目標」を明確にしたシラバスを作成した。 「医薬品情報学」では、薬剤師が患者や医療従事者にいかに適正かつ迅速に情報を提供するかを学ぶため、その際必要とされる情報の収集、加工、提供ならびにその方法について修得するよう解説した。さらに提供した情報の評価ならびにその際医療の場に起こりうる事象の発生予測について解説した。また、これらを基礎に医薬品が適正に使用されるための総合的な医薬品情報を創造する方法並びに学力を養成した。この際、教科書を補完するため、補完プリント並びに国試関連問題集を作成し、講義に利用した。（知識） 「医療薬剤学」では、臨床で使用されている種々の医薬品の薬剤学に関する基本的知識を習得するよう解説した。すなわち、固形製剤や液剤などの内用剤、外用剤（軟膏剤、貼付剤、坐剤）、無菌製剤、その他の製剤（持続性製剤、DDS など）の概要ならびにその製造、適応、調製法などについての基本的知識を修得するよう講義した。また、これら製剤に関する試験法、添加剤、溶剤などについても説明を加えた。さらに、注射剤・輸液の概要、製造、適応、組成、添加剤、混合、試験法、滅菌法などについて解説した。この際、教科書を補完するため、補完プリント並びに国試関連問題集を作成し、講義に利用した。（知識）
2. 学部実習における実践 （模擬薬局実習）	2009 年 4 月～現在	実務実習の「病院・薬局で学ぶ」に先立って、薬学部内模擬薬局で調剤および製剤、服薬説明などの薬剤師職務の全般について必要な基本的知識、技能、態度を修得するよう実践した。すなわち、「実務実習モデル・コアカリキュラム 実務実習事前学習方略」にしたがって、（１）事前学習を始めるにあたって、（２）処方せんと調剤、（３）疑義照会、（４）医薬品の管理と供給、（５）リスクマネジメント、（６）服薬指導と患者情報などの項目のうち、（６）を担当した。（技能・態度）
3. 学部演習における実践 （「医療薬学系統合演習（PBL）」）	2009 年 4 月～現在	姫路獨協大学薬学部にて、少人数制のPBL形式の演習を取り入れ、コミュニケーションスキル、自ら進んで研鑽する姿勢を学ぶため、学習者主体の教育を編成した。学生自らがいくつかの代表的な疾患における処方例を解析し、それぞれの薬物が何故用いられるのかを考える事で、薬物に関する理解を深める事を目的とした。この際、学習の理解を助けるために、書籍ならびにインターネットを活用した。さらに、個々に結果を発表することで確認試験を行い、演習の効果を評価した。（知識・技能・態度）
4. 新薬論	2018 年 5 月 31 日	「治験情報からみた新薬開発の動向」として、種々のデータベースから最新の治験動向を調査し、意見交換を行うことで、将来の薬物

		治療に活かす。(知識・技能)
2 作成した教科書、教材、参考書		
1. 医薬品情報学 講義補完プリント 並びに国試関連問題集	2009 年～現在	4 年次「医薬品情報学」講義のための補完資料、並びに国試関連問題集を作成し、講義時に用いた。
2. 医療薬剤学 講義補完プリント 並びに国試関連問題集	2009 年～現在	3 年次「医療薬剤学」講義のための補完資料（薬局方 15 改正版・16 改正版）、並びに国試関連問題集を作成し、講義時に用いた。
3. 総合演習（PBL）教材	2009 年～現在	「医療薬学系統合演習（PBL）」のための演習用資料を作成した。
4. 模擬薬局実習 実習書	2009 年～2017 年	模擬薬局実習実習書のうち、医薬品情報に関する部分を作成した。
5. 医療薬学第 5 版 廣川書店	2009 年	6 年制薬学教育における実務実習事前学習の講義ならびに実習などに使用するための教科書として出版された著書である。このうち、「第 9 章 服薬指導と患者情報」を担当した。
6. 医薬品情報学―基礎から臨床へ― 廣川書店	2012 年	NEW 医薬品情報学（第 2 版 廣川書店）を薬学教育モデル・コアカリキュラムに沿うように全面改訂し、6 年制薬学教育における医薬品情報学の講義に使用するための教科書として出版された著書である。このうち、「C-1 薬物治療の個別化」を担当した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
1. 第 12 回日本医薬品情報学会総会・ 学術大会（福岡）	2009 年 7 月 18 日	シンポジウム「医薬品情報学の研究のビジョンを語る」のシンポジストとして講演した。
2. 第 14 回日本医薬品情報学会総会・ 学術大会（東京）	2011 年 7 月 23 日	シンポジウム「大学における医薬品情報教育の進化」のシンポジストとして講演した。
3. 平成 24 年度 教員免許状更新講習 会	2012 年 8 月 9 日	「どのような機序で薬物耐性や薬物依存が生じるか」のタイトルで講演を行った。
4. 平成 24 年度 教員免許状更新講習 会	2018 年 8 月 10 日	「教育現場と薬物に関連する問題」のタイトルで、薬物乱用にとどまらず、新学習指導要領の改正に薬に関する教育、アレルギーショック時のアドレナリン注射の問題、アンチ・ドーピング教育とスポーツ、予防接種などについて理解を深められるよう解説した。
4 その他教育活動上特記すべき事項		
1. きらめきときめきサイエンスよう こそ大学の研究室へ KAKENHI（日本学 術振興会）」	2007 年 8 月 4 日	GFP の「スゴさ」を体験～緑に光るクラゲのたんぱく質を使って実験！を開催し、最先端の研究成果を中・高校生に発信した。（協力者）
2. 平成 24 年度「姫路獨協大学活性化 取組施策支援資金」	2012 年 7 月 25 日	薬学部 6 年生に対する国家試験合格に向けた教育支援

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】						
1. 医療薬学 第5版	共著	2009年3月	廣川書店	乾賢一、奥村勝彦 編 駒田富佐夫 ほか著	251 - 307	分担執筆 (服薬指導)
2. 医薬品情報学—基礎から臨床へ—	共著	2012年3月	廣川書店	岡野善郎、京谷庄 二郎編 駒田富 佐夫ほか著	151 - 171	分担執筆 (薬物療法の個別化に 関する情報)
3. 図解 医薬品情報学 改訂3 版	共著	2014年1月	南山堂	折井孝夫編 駒 田富佐夫ほか著	172 - 179	分担執筆 (患者の遺 伝子情報と 医薬品情報)
4. 医療薬学 第6版	共著	2014年3月	廣川書店	堀了平監修 駒 田富佐夫ほか著	253 - 311	分担執筆 (服薬指導)
【論文】						
1. Effects of anticancer agents and scavengers for CMV promoter driven exogenous gene expression in genetically modified cells	共著	2009年4月	J. Pharm. Pharmacol. 61(4)	A. Kinoshita, D. Kobayashi, Y. Saitoh, F. Komada	527 - 531	
2. 姫路獨協大学薬学部におけ る早期体験学習前後の学生ア ンケート調査	共著	2009年4月	医薬品情報学 10(4)	清原義史、大西憲 明、角山圭一、木 下淳、中村隆典、 宮本和英、矢上達 郎、通山由美、駒 田富佐夫、奥村勝 彦	273 - 279	
3. 禁煙治療における患者背景 と治療成績との関連性に関す る調査研究	共著	2010年8月	医薬品情報学 11(3)	堀江弘子、中村 隆典、黒木茂高、 小野尚文、江口 尚久、木下淳、 本多義昭、駒田 富佐夫	180 - 188	
4. マイクロ構造体を用いた高 密度3次元細胞培養法の提案	共著	2010年10月	電気学会論文誌C(電 子・情報・システム部 門誌) 130-C(10)	大向智也、木下 淳、駒田富佐夫、 内海裕一	1789 - 1794	
5. ニコチン依存症のスクリー ニングテスト(TDS スコア値) は、禁煙の行動ステージ(禁煙 への意気込み)に影響を受ける。	共著	2010年11月	日本未病システム学 会雑誌, 16(2)	堀江弘子、岡田 倫明、江口有一 郎、水田敏彦、 岩本英里、古賀 さやか、田代貴 也、富永智香子、 黒木茂高、小野 尚文、江口尚久、 中村隆典、木下 淳、本多義昭、 藤本一真、岩切 龍一、小泉俊三、 駒田富佐夫	374 - 376	
6. アンケート調査による簡易 懸濁法でのチューブ詰まりの 原因解析	共著	2012年2月	医療薬学, 38(2)	天野学、駒田富佐 夫、井上聖子、辰 巳智子、宮岡弘	137 - 145	

7. 医薬品情報学掲載論文からみた医薬品情報学に関する研究の動向.	共著	2012 年 5 月	医薬品情報学. 14(1)	明, 緑川和重, 天野亜紀, 中村隆典, 清原義史, 横山照由. <u>駒田富佐夫</u> , 中山優子, 木下淳.	26 - 33	
8. 肝炎ウイルス検査を希望しない人の生活習慣の特徴とは? - 特定健診の標準的質問票からの予測.	共著	2012 年 12 月	日本未病システム学会雑誌. 18(1)	堀江弘子, 江口有一郎, 水田敏彦, 桑代卓也, 岩本英里, 古賀さやか, 田代貴也, 富永智香子, 黒木茂高, 小野尚文, 江口尚久, 中村隆典, 木下淳, 本多義昭, 天野学, <u>駒田富佐夫</u>	98 - 101	
9. 肝炎ウイルス検査受診率向上には医療者による個別の意義の説明が有効である.	共著	2012 年 10 月	肝臓. 53(10)	堀江弘子, 江口有一郎, 中村隆典, 水田敏彦, 桑代卓也, 岩本英里, 古賀さやか, 田代貴也, 富永智香子, 黒木茂高, 小野尚文, 木下淳, 本多義昭, <u>駒田富佐夫</u> , 尾崎岩太, 安西慶三, 藤本一真, 江口尚久	591 - 601	
10. 「副作用が疑われる症例報告に関する情報」による間質性肺疾患、肝機能異常、肝障害、アナフィラキシー反応、好中球数減少および好中球減少症の解析.	共著	2013 年 11 月	医薬品相互作用研究. 37(1)	<u>駒田富佐夫</u> , 木下淳	17 - 26	
11. 内用抗がん薬適正使用のための簡易懸濁法可否情報一覧表の作成.	共著	2013 年 12 月	社会薬学. 32(2)	天野学, 比知屋寛之, 安智美, 清原義史, 座間味義人, 瀬戸衛, 井上徹雄, 田中一穂, 倉田なおみ, <u>駒田富佐夫</u>	43 - 47	
12. 「副作用が疑われる症例報告に関する情報」による有害事象の転帰、発現時期、被疑薬の解析.	共著	2013 年	医薬品相互作用研究. 37(2)	<u>駒田富佐夫</u> , 木下淳	104 - 112	
13. 酸化ストレス度評価 (d-ROMs テスト) からみた禁煙治療の有効性の検討.	共著	2015 年 6 月	日本人間ドック学会誌. 30(1)	堀江弘子, 岩切龍一, 黒木茂高, 岩本英里, 古賀さやか, 田代貴也, 小野尚文, 江口尚久, 中村隆典, 柳澤振一郎, <u>駒田富佐夫</u> , 江口有一郎	30 - 37	
14. 医薬品添付文書やインタビ	共著	2016 年 11 月	医薬品情報学. 18(3)	<u>駒田富佐夫</u> , 中	149 - 159	

ユーフォームにおけるファーマコゲノミクス情報に関する調査.				井裕士		
15. Drug-administering persons' exposure to oral anticancer drugs to be administered through a tube.	共著	2017 年	Asian J. Pharm. Clin. Res., 9(3)	<u>M. Murakami,</u> <u>S. Katsuragi,</u> <u>M. Ohno,</u> <u>M. Shigematsu,</u> <u>A. Kishi,</u> <u>Y. Zamami,</u> <u>F. Komada,</u> <u>N. Kurata,</u> <u>M. Amano.</u>	1 - 4	
16. カルバマゼピンとラモトリギンが関連した副作用の現状調査:「副作用が疑われる症例報告に関する情報」、「副作用救済給付の決定に関する情報」と「レセプト情報・特定健診等情報データベース」による解析.	共著	2017 年 11 月	医薬品情報学. 19(2)	駒田富佐夫, 栗岡恵一	72 - 81	
17. カルバマゼピンとラモトリギンにおける単剤療法時ならびに多剤療法時の副作用に関する現状調査.	単著	2017 年	医薬品相互作用研究. 41(3)	駒田富佐夫	30 - 38	
18. Analysis of time-to-onsets of interstitial lung disease after the administration of small molecule molecularly-targeted drugs.	単著	2018 年 2 月	Yakugaku Zasshi, 138(2)	<u>F. Komada</u>	229 - 235	
19. 低分子分子標的治療薬における血液に対する有害事象の発現時期に関する調査.	単著	2018 年 5 月	医薬品情報学. 20(1)	駒田富佐夫	29 - 35	
20. モノクローナル抗体医薬品による血液に対する有害事象の発現時期ならびに発現パターンに関する調査.	共著	2018 年 8 月	医薬品情報学. 20(2)	駒田富佐夫, 中山優子, 高良恒史	72 - 80	
21. Analysis of time-to-onsets and onset-patterns of interstitial lung disease after the administration of monoclonal antibody agents.	共著	2018 年	Yakugaku Zasshi, 138(12)	<u>F. Komada,</u> <u>Y. Nakayama,</u> <u>K. Takara.</u>	Accepted.	
【総説】 1. 三次元微細構造担体を用いた高密度細胞培養.	共著	2010 年	エレクトロニクス実装学会誌. 13 (3)	木下淳, 大向智也, 駒田富佐夫, 内海裕一	200 - 203	
【その他】 (競争的研究資金) 1. 平成 20 年度兵庫県 COE プログラム推進事業「マイクロ空間を用いた超高密度細胞培養リアクタの研究開発」	共同	2008 年～2009 年	プロジェクトリーダー			
2. 平成 24 年度ひょうご科学技術協会 技術高度化研究開発支援助成「簡易型糖尿病診断用装置の検出系開発」	共同	2012 年～2013 年	共同研究者			

(特許) 1. 発明の名称：マイクロ空間構造体を用いた高密度三次元細胞培養法	共同	2010 年	発明者：駒田富佐夫、内海裕一、木下淳、大向智也、米澤健、本多祐二	出願人：駒田富佐夫、内海裕一	出願番号：特願 2010-40610	
	共同	2016 年	発明者：延谷公昭、尾井政夫、中村耕一郎、木下淳、駒田富佐夫	出願人：日本毛織株式会社	出願番号：特願 2016-156593	

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2009 年 4 月～現在	(社)日本薬学会 近畿支部 代議員
2009 年 4 月～2012 年 4 月	兵庫県病院薬剤師会 理事
2009 年 4 月～2017 年 3 月	姫路市産学協同研究助成 選考委員
2012 年 11 月～2014 年 10 月	日本学術振興会 科学研究費 審査委員
2013 年 4 月～現在	兵庫県立循環器病センター 治験審査委員

Ⅴ 学内における主な活動

2009 年 4 月～2015 年 3 月	評議員
2011 年 8 月～2015 年 3 月	薬学部長
2011 年 8 月～2015 年 3 月	獨協学園評議員
2015 年 4 月～2017 年 3 月	獨協学園内部監査委員
2018 年 4 月～現在	生命倫理委員会委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	齋藤 一樹	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
課題に対する多方面からの教育指導 「分析化学Ⅱ」 「薬学基礎演習」	2016 年度後期以降	学生が最も苦手とする pH 等の計算問題の学習効果向上を図るために、まず「分析化学Ⅱ」の講義でスタンダードな知識を教授した上で、「薬学基礎演習（分析化学）」で滴定曲線との対応を学ばせることで、pH や酸・塩基平衡の概念を多方面からイメージさせて理解できるようにさせた。
講義内容の復習しやすさの追求 「分析化学Ⅱ」 「薬学基礎演習」 「分析化学実習」	2016 年度後期以降	卒業・国試受験までに数多くの科目を履修しなければならない学生にとって、講義直後・定期試験前・卒業前に講義内容を簡便に復習できるようなシステムを与えてあげることは重要である。 そこで、①なるべく指定教科書に沿った講義進行を実施し、②毎講義後には復習課題を解かせて提出させた。また、③定期試験前には、必ず模擬試験を実施することにより、知識の整理を促した。 さらに、2018 年度後期以降には、「分析化学実習」の中に、講義科目の教義内容と実習の技術内容とを明確に結びつけるような演習の時間を設けた。
社会から要請の強い研究倫理指導に対する対応 「物理・化学系統合演習（PBL）」	2018 年度後期以降	これまで、特に講義等として明確に取り上げられてこなかった「研究倫理」「情報検索」等の問題について、社会的な要請にも鑑みて、「物理・化学系統合演習（PBL）」の主担当として、グループ作業等の PBL 演習前に、それらの問題を扱う合同講義時間を設けた。
2 作成した教科書、教材、参考書		
「分析化学Ⅱ」・「機器分析」における 復習課題プリント	2016 年度後期以降	その日の講義内容の理解度促進・知識定着を目的に、毎回講義毎に「復習課題」を作成・配布し、提出させた。その解答から学生個々の理解度などを判定し、その後の講義や指導に役立てた。また、採点した答案は、定期試験の実施までには丁寧に添削して返却し、定期試験前の勉強に役立てることができるようにした。
「分析化学実習」における実習書	2016 年度以降	分析化学実習は 2017 年度に大幅に改訂し、薬学教育の新たなカリキュラム積極的に対応させるようにした。実習用プリントは、単に実験を行うためのマニュアルに止まらずにそれまで行ってきた講義の内容を想起させ、知識の定着などを容易に行えるように配慮した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
薬局実務実習 病院実務実習	2017 年度以降	薬学部実務実習の一環として、初回訪問・中盤訪問等をはじめ、適宜担当学生の実習先を訪れ、実習先の先生方と綿密な打合せを行って実習における学習効果促進・問題解決などにあたった。

平成 29 年度兵庫県高等学校教育研究会 科学部会・生物部会合同講演会 招待講演 「細胞膜上のレセプター（受容体）の 構造解析 ～新たな制がん剤の設計 に向けて～」	2017 年 7 月 5 日	兵庫県高等学校教育研究会からの招きを受けて、兵庫県高等学校教 諭の前で最新のバイオ研究の一端を紹介・解説した。
--	----------------	--

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名 称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】 Prothoracicotropic Hormone. (Chapter 55)	共 著	2016 年	Academic Press, <i>Handbook of Hormones: Comparative Endocrinology for Basic and Clinical Research</i> , eds. Yoshio Takei, Hironori Ando, Kazuyoshi Tsutsui	©Tadafumi Konogami, <u>Kazuki Saito</u> , Hiroshi Kataoka	407 頁～ 409 頁	
Design of a system for monitoring ubiquitination activities of E2 enzymes using engineered RING finger proteins. (Chapter 6)	共 著	2018 年 8 月	Humana Press, <i>Methods in Molecular Biology on "Zinc Finger Proteins: Methods and Protocols"</i> , ed. Jia Liu (1867 巻)	©Kazuhide Miyamoto*, <u>Kazuki Saito</u>	75 頁～ 87 頁	
【論文】 Molecular basis of wing coloration in a Batesian mimic butterfly, <i>Papilio polytes</i> .	共 著	2013 年 11 月	Springer Nature, <i>Scientific Reports</i> (3 巻)	©Hideki Nishikawa, Masatoshi Iga, Junichi Yamaguchi, <u>Kazuki Saito</u> , Hiroshi Kataoka, Yutaka Suzuki, Sumio Sugano, Haruhiko Fujiwara	記事番号 3184	
Application of plug-plug technique to ACE experiments for discovery of peptides binding to a larger target protein: A model study of calmodulin-binding fragments selected from a digested mixture of reduced BSA.	共 著	2014 年 3 月	John Wiley & Sons, <i>ELECTROPHORESIS</i> (35 巻, 6 号)	© <u>Kazuki Saito</u> , Mamiko Nakato, Takaaki Mizuguchi, Shinji Wada, Hiromasa Uchimura, Hiroshi Kataoka, Shigeyuki Yokoyama, Hiroshi Hirota, Yoshiaki Kiso	846 頁～ 854 頁	
Concise preparation of an active recombinant PTH dimer using the <i>Brevibacillus</i> secretion system.	共 著	2014 年 3 月	日本ペプチド学会, <i>Peptide Science</i> 2013	©Yiwen Yang, Tadafumi Konogami, Tamari Hoshikawa, Masatoshi Iga, Juri Hikiba, Mari H. Ogihara, Hiroshi Kataoka, <u>Kazuki Saito</u>	385 頁～ 386 頁	

プロテオーム時代の創薬に向けた plug-plug ACE 法の利用	単著	2014年10月	日本電気泳動学会, 生物物理化学 電気泳動 (58 巻, 2 号) 特集: 最新の電気泳動技術		71 頁～ 73 頁	
Studies on identification of active sites of an inhibitory cyclic peptide against EGF receptor dimerization.	共著	2015 年 3 月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2014	©Takaaki Mizuguchi, Yukako Yamazaki, Kazuya Kobayashi, Honami Ooe, Mika Iida, Ryunosuke Ninomiya, <u>Kazuki Saito</u> , Kenichi Akaji, Hirokazu Tamamura	163 頁～ 164 頁	
Activation of silkworm Torso, a recently-identified receptor for prothoracicotropic hormone.	共著	2015 年 3 月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2014	©Tadafumi Konogami, Yiwen Yang, Mari H. Ogihara, Juri Hikiba, Hiroshi Kataoka, <u>Kazuki Saito</u>	179 頁～ 180 頁	
Preparation of insect prothoracicotropic hormone with complicated disulfide-bond structure, by the heterologous expression in <i>Brevibacillus choshinensis</i> .	共著	2015年10月	John Wiley & Sons, Protein Science (24 巻, S1 号)	© <u>Kazuki Saito</u> , Tadafumi Konogami, Yiwen Yang, Yusuke Yamashita, Masatoshi Iga, Tamari Hoshikawa, Hiroshi Kataoka	58 頁	
Role of the disulfide bridges in the transmembrane region of the insect prothoracicotropic-hormone receptor, Torso.	共著	2015年10月	John Wiley & Sons, Protein Science (24 巻, S1 号)	©Tadafumi Konogami, Yiwen Yang, Mari H. Ogihara, Juri Hikiba, Hiroshi Kataoka, <u>Kazuki Saito</u>	59 頁	
Ligand-dependent responses of the silkworm prothoracicotropic hormone receptor, Torso, are maintained by unusual intermolecular disulfide bridges in the transmembrane region.	共著	2016 年 3 月	Springer Nature, Scientific Reports (6 巻)	©Tadafumi Konogami, Yiwen Yang, Mari H. Ogihara, Juri Hikiba, Hiroshi Kataoka*, <u>Kazuki Saito</u>	記事番号 22437	
The silkworm prothoracicotropic hormone receptor, Torso, has a unique disulfide-bond-linked structure required for its ligand-dependent functions.	共著	2016 年 3 月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2015	©Tadafumi Konogami, Yiwen Yang, Mari H. Ogihara, Juri Hikiba, Hiroshi Kataoka, <u>Kazuki Saito</u>	37 頁～ 38 頁	
Secretory expression of cabbage armyworm prothoracicotropic hormone in <i>Brevibacillus choshinensis</i> .	共著	2016 年 3 月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2015	©Yusuke Yamashita, Tadafumi Konogami, Yiwen Yang, Tamari Hoshikawa, Masatoshi Iga, Hiroshi Kataoka, <u>Kazuki Saito</u>	179 頁～ 180 頁	
Highly sensitive detection of E2 activity in ubiquitination using an artificial RING finger.	共著	2017 年 3 月	John Wiley & Sons, Journal of Peptide Science (23 巻, 3 号)	©Kazuhide Miyamoto, Miho Sumida, Mayumi Yuasa-Sunagawa, <u>Kazuki Saito</u>	222 頁～ 227 頁	

Identification of ecdysteroidogenic enzyme genes and their expression during pupal diapause in the cabbage armyworm <i>Mamestra brassicae</i> .	共著	2017 年 6 月	John Wiley & Sons, Insect Molecular Biology (26 巻, 3 号)	©Mari H. Ogiwara, Hiroaki Ikeda, Nobuto Yamada, Juri Hikiba, Takayoshi Nakaoka, Yoshinori Fujimoto, Yutaka Suzuki, Kazuki Saito, Akira Mizoguchi, Hiroshi Kataoka	286 頁～ 297 頁	
人工ユビキチンリガーゼの分子設計法の開発 ユビキチン化活性に基づくがん診断に向けて	共著	2017 年 7 月	日本分析化学会, 分析化学 (66 巻 6 号) 特集: 医療に貢献する分析化学	©宮本和英, 砂川真弓, 齋藤一樹	393 頁～ 402 頁	
The zinc finger domain of RING finger protein 141 reveals a unique RING fold.	共著	2017 年 8 月	John Wiley & Sons, Protein Science (26 巻, 8 号)	©Kazuhide Miyamoto, Airi Uechi, Kazuki Saito	1681 頁～ 1686 頁	
The unique N-terminal zinc finger of Synaptotagmin-like protein 4 reveals FVVE structure.	共著	2017 年 12 月	John Wiley & Sons, Protein Science (26 巻, 12 号)	©Kazuhide Miyamoto, Arisa Nakatani, Kazuki Saito	2451 頁～ 2457 頁	
Cellular effects of artificial ubiquitin ligases on cancer cells.	共著	2018 年 3 月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2017	©Mayumi Sunagawa, Ayumi Yamashita, Kazuki Saito, Kazuhide Miyamoto*	124 頁～ 125 頁	
Detection of E2 activities in cancer cells using an artificial E3 ligase.	共著	2018 年 3 月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2017	©Ayumi Yamashita, Kazuki Saito, Kazuhide Miyamoto*:	152 頁～ 153 頁	
Solution structure of the PHD finger from the human KIAA1045 protein.	共著	2018 年 5 月	John Wiley & Sons, Protein Science (27 巻, 5 号)	©Kazuhide Miyamoto, Ayumi Yamashita, Kazuki Saito	987 頁～ 992 頁	
Concise machinery for monitoring ubiquitination activities using novel artificial RING fingers.	共著	2018 年 8 月	John Wiley & Sons, Protein Science (27 巻, 8 号)	©Kazuhide Miyamoto, Kazuki Saito	1354 頁～ 1363 頁	筆頭総説 記事として掲載 その号の 表紙絵に 採用
Unique auto-ubiquitination activities of artificial RING fingers in cancer cells.	共著	2018 年 9 月	John Wiley & Sons, Protein Science (27 巻, 9 号)	©Kazuhide Miyamoto, Arisa Nakatani, Mayumi Sunagawa, Kazuki Saito	1704 頁～ 1709 頁	
Unique RING finger structure from the human HRD1 protein.	共著	2019 年 2 月	John Wiley & Sons, Protein Science (28 巻, 2 号)	©Kazuhide Miyamoto*, Yukari Taguchi, Kazuki Saito	448 頁～ 453 頁	
Preparation of the silkworm prothoracicotropic hormone receptor, Torso, a receptor tyrosine kinase with a novel dimer structure.	共著	2019 年 3 月 予定	日本ペプチド学会, Peptide Science 2018	©Airi Uechi, Shoko Nakamichi, Yuma Yamabana, Mayumi Sunagawa, Yuri Ishigaki, Kazuhide Miyamoto, Kazuki Saito	印刷中	
Detection of ubiquitination activities of artificial RING fingers in human breast cancer cells.	共著	2019 年 3 月 予定	日本ペプチド学会, Peptide Science 2018	©Kazuhide Miyamoto, Arisa Nakatani, Mayumi Sunagawa, Kazuki Saito	印刷中	

Exploring amino acid residues for regulating E2 specificity of artificial RING fingers.	共著	2019年3月 予定	日本ペプチド学会, Peptide Science 2018	©Ayumi Yamashita, <u>Kazuki Saito</u> , Kazuhide Miyamoto	印刷中	
【その他】 【招待講演】 Screening for inhibitory compounds against cytochrome P450 enzymes in ecdysone biosynthesis.	共同	2014年9月	12th International Symposium on Cytochrome P450	Juri Hikiba, Yoshinori Fujimoto, <u>Kazuki Saito</u> , Hiroshi Kataoka		
プロテオーム時代の創薬に向けた plug-plug ACE 法の利用	単独	2014年10月	第65回日本電気泳動学会総会 シンポジウム「最新の電気泳動技術 30 の話題」	<u>齋藤一樹</u>		
チロシンキナーゼ型レセプターの新たな活性化メカニズムの解明を目指して	単独	2019年3月 予定	日本薬学会 第139年会 一般シンポジウム「物理系薬学部会シンポジウム〜健康・医療・創薬に貢献する物理系薬学研究の最前線〜」	<u>齋藤一樹</u>		
【国際学会発表】 Concise preparation method of an active recombinant PTTH dimer using the <i>Brevibacillus</i> secretion system.	共同	2013年11月	4th Asia-Pacific International Peptide Symposium (APIPS 2013), 50th Japanese Peptide Symposium	Yiwen Yang, Tadafumi Konogami, Tamari Hoshikawa, Masatoshi Iga, Juri Hikiba, Mari H. Ogihara, Hiroshi Kataoka, <u>Kazuki Saito</u>		
Preparation of insect prothoracicotropic hormone with complicated disulfide-bond structure, by the heterologous expression in <i>Brevibacillus choshinensis</i> .	共同	2015年7月	The 29th Annual Symposium of the Protein Society	<u>Kazuki Saito</u> , Tadafumi Konogami, Yiwen Yang, Yusuke Yamashita, Masatoshi Iga, Tamari Hoshikawa, Hiroshi Kataoka		
Role of the disulfide bridges in the transmembrane region of the insect prothoracicotropic-hormone receptor, Torso.	共同	2015年7月	The 29th Annual Symposium of the Protein Society	Tadafumi Konogami, Yiwen Yang, Mari H. Ogihara, Juri Hikiba, Hiroshi Kataoka, <u>Kazuki Saito</u>		
Preparation of cabbage armyworm prothoracicotropic hormone in a soluble bioactive form, using secretory expression system of <i>Brevibacillus choshinensis</i> .	共同	2016年3月	1st Joint Symposium on Integrated Biosciences between Zhejiang University and The University of Tokyo	Yusuke Yamashita, Tadafumi Konogami, Tamari Hoshikawa, Mari H. Ogihara, <u>Kazuki Saito</u> , Hiroshi Kataoka		
Torso, an insect prothoracicotropic hormone receptor, possessing a very unique dimeric structure as a receptor tyrosine kinase.	共同	2016年5月	The 16th Akabori Conference: Japanese-German Symposium on Peptide Science	Tadafumi Konogami, Hiroshi Kataoka, <u>Kazuki Saito</u>		

Measuring E2 activities by artificial RING fingers in cancer cells.	共同	2017年12月	Consortium of Biological Sciences 2017 (ConBio2017)	Mayumi Sunagawa, Arisa Nakatani, <u>Kazuki Saito</u> , Kazuhide Miyamoto		
Molecular design of artificial RING fingers for detecting ubiquitination activities.	共同	2018年2月	62nd Annual Meeting of the Biophysical Society	Kazuhide Miyamoto, Ayumi Yamashita, <u>Kazuki Saito</u>		
Preparation of the silkworm prothoracicotropic hormone receptor, Torso, which is a receptor tyrosine kinase with novel dimer structure.	共同	2018年12月	10th International Peptide Symposium / 55th Japanese Peptide Symposium	Airi Uechi, Shoko Nakamichi, Yuma Yamabana, Mayumi Sunagawa, Yuri Ishigaki, Kazuhide Miyamoto, <u>Kazuki Saito</u>		
Detection of ubiquitination activities of artificial RING fingers in human breast cancer cells.	共同	2018年12月	10th International Peptide Symposium / 55th Japanese Peptide Symposium	Kazuhide Miyamoto, Arisa Nakatani, Mayumi Sunagawa, <u>Kazuki Saito</u>		
Exploring amino acid residues for regulating E2 specificity of artificial RING fingers.	共同	2018年12月	10th International Peptide Symposium / 55th Japanese Peptide Symposium	Ayumi Yamashita, <u>Kazuki Saito</u> , Kazuhide Miyamoto		
【国内学会発表】 脱皮不全系統のカイコを用いたエクジソン中間体の探索	共同	2013年10月	第38回日本比較内分泌学会大会・第40回日本神経内分泌学会学術集会合同大会	伊賀正年, 中村立樹, <u>齋藤一樹</u> , 引場樹里, 藤本善徳, 木内信, 片岡宏誌		
カイコ蛹期におけるエクジステロイドの変動及び生合成・代謝酵素の解析	共同	2014年3月	平成26年度蚕糸・昆虫機能利用学術講演会	荻原麻理, 引場樹里, <u>齋藤一樹</u> , 片岡宏誌		
リフォールディングによるヨトウガPTTHの作製とその活性	共同	2014年3月	日本農芸化学会 2014年度大会	星川珠莉, 伊賀正年, <u>齋藤一樹</u> , 片岡宏誌		
二量体化に着目した新規作用機序のEGFレセプター阻害薬研究	共同	2014年7月	創薬懇話会 2014	水口貴章, 二宮龍之介, 飯田美佳, 大江保奈美, 山崎由香子, 小林数也, <u>齋藤一樹</u> , 赤路健一, 玉村啓和		
大腸菌では調製しづらかった昆虫前胸腺刺激ホルモンのプレビバチルス菌を用いた発現	共同	2014年8月	第46回若手ペプチド夏の勉強会	楊易文, 此上祥史, 伊賀正年, 星川珠莉, 片岡宏誌, <u>齋藤一樹</u>		
昆虫培養細胞を用いた前胸腺刺激ホルモンレセプターTorsoの活性化実験	共同	2014年8月	第46回若手ペプチド夏の勉強会	此上祥史, 楊易文, 荻原麻理, 引場樹里, 片岡宏誌, <u>齋藤一樹</u>		
EGFレセプター二量化阻害環状ペプチドの活性部位に関する研究	共同	2014年10月	第51回ペプチド討論会	水口貴章, 山崎由香子, 小林数也, 大江保奈美, 飯田美佳, 二宮龍之介, <u>齋藤一樹</u> , 赤路健一, 玉村啓和		
昆虫前胸腺刺激ホルモンPTTHによるレセプターTorsoの活性化	共同	2014年10月	第51回ペプチド討論会	此上祥史, 楊易文, 荻原麻理, 引場樹里, 片岡宏誌, <u>齋藤一樹</u>		

カイコ雌蛹におけるエクジソン代謝と卵発育制御	共同	2015年3月	第59回日本応用動物昆虫学会大会	荻原麻里, 引場樹里, 齋藤一樹, 片岡宏誌		
変異系統のカイコに含まれるステロイド類の分析によるNm-g機能の探索	共同	2015年3月	第59回日本応用動物昆虫学会大会	伊賀正年, 中村立樹, 齋藤一樹, 木内信, 石神健, 藤本善徳, 片岡宏誌		
昆虫前胸腺刺激ホルモンのレセプターTorsoはジスルフィド結合を介して二量化している	共同	2015年3月	日本農芸化学会 2015年度大会	此上祥史, 楊易文, 荻原麻理, 引場樹里, 片岡宏誌, 齋藤一樹		
カイコガ前胸腺刺激ホルモンのレセプターTorsoは、リガンド依存的な機能に必要な特有のジスルフィド架橋構造を有する	共同	2015年11月	第52回ペプチド討論会	此上祥史, 楊易文, 荻原麻理, 引場樹里, 片岡宏誌, 齋藤一樹		
ヨトウガ前胸腺刺激ホルモンのプレバチルス菌による分泌発現	共同	2015年11月	第52回ペプチド討論会	山下雄佑, 此上祥史, 楊易文, 星川珠莉, 伊賀正年, 片岡宏誌, 齋藤一樹		
プレバチルス菌を用いたカイコガ前胸腺刺激ホルモンの大量調製法の確立	共同	2016年3月	日本農芸化学会 2016年度大会	此上祥史, 山下雄佑, 楊易文, 片岡宏誌, 齋藤一樹		
人工ユビキチンリガーゼによる急性前骨髄性白血病の抑制効果	共同	2016年11月	第33回関西地区ペプチドセミナー	中谷有沙, 砂川真弓, 齋藤一樹, 宮本和英		優秀発表賞受賞
活性型ヨトウガリコンビナントPTTHの調製	共同	2017年3月	平成29年度蚕糸・昆虫機能利用学術講演会(日本蚕糸学会第87回大会)	山下雄佑, 此上祥史, 荻原麻理, 齋藤一樹, 片岡宏誌		
ユビキチン化活性の検出に用いる人工ユビキチンリガーゼの設計法	共同	2017年5月	第77回分析化学討論会	宮本和英, 砂川真弓, 齋藤一樹		
人工ユビキチンリガーゼを用いたがん細胞のユビキチン化活性の測定	共同	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会	砂川真弓, 中谷有沙, 齋藤一樹, 宮本和英		
人工E3リガーゼを用いるがん細胞のE2活性の検出	共同	2017年11月	第54回ペプチド討論会	山下歩美, 齋藤一樹, 宮本和英		
人工ユビキチンリガーゼのがん細胞における効果	共同	2017年11月	第54回ペプチド討論会	砂川真弓, 山下歩美, 齋藤一樹, 宮本和英		
人工ユビキチンリガーゼを活用したユビキチン化活性の検出	共同	2017年12月	新アミノ酸分析研究会第7回学術講演会	山下歩美, 齋藤一樹, 宮本和英		
人工RINGフィンガーを用いた簡便なE2活性の検出法 ～E2特異性を担うアミノ酸残基の探索～	共同	2017年12月	第34回関西地区ペプチドセミナー	山下歩美, 齋藤一樹, 宮本和英		優秀ポスター賞受賞
人工ユビキチンリガーゼを用いる特異的なE2活性検出の検討	共同	2018年5月	第78回分析化学討論会	宮本和英, 山下歩美, 齋藤一樹		

膜貫通領域のジスルフィド架橋で二量化しているチロシンキナーゼ型レセプターTorsoの大量調製	共同	2018年5月	第65回日本生化学会近畿支部例会	上地愛理, 砂川真弓, 宮本和英, 齋藤一樹		
人工ユビキチンリガーゼのE2特異性を担うアミノ酸残基の探索	共同	2018年8月	第31回バイオメディカル分析科学シンポジウム (BMAS2018)	山下歩美, 齋藤一樹, 宮本和英		
複雑なジスルフィド構造を有するカイコガ前胸腺刺激ホルモンPTTHの、ブレビバチルス菌を用いた大量調製	共同	2018年9月	第91回日本生化学会大会	石垣悠里, 下田佳苗, 此上祥史, 片岡宏誌, 宮本和英, 齋藤一樹		
ブレビバチルス菌を用いたカイコガ前胸腺刺激ホルモンの大量調製法の確立 ～複雑なジスルフィド構造を有するリコンビナントタンパク質の発現・調製～	共同	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部総会・大会	石垣悠里, 下田佳苗, 此上祥史, 片岡宏誌, 宮本和英, 齋藤一樹		
人工RINGフィンガーが有するE2特異的認識能の検討	共同	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部総会・大会	山下歩美, 田口由加里, 齋藤一樹, 宮本和英		
これまでになかった二量化様式のチロシンキナーゼ型レセプター・Torsoの大量調製法の確立	共同	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部総会・大会	上地愛理, 中道祥子, 砂川真弓, 宮本和英, 齋藤一樹		
乳がん細胞のユビキチン化に関するE2活性の検出	共同	2018年12月	新アミノ酸分析研究会第8回学術講演会	宮本和英, 中谷有沙, 齋藤一樹		
細胞膜貫通領域のジスルフィド架橋を介して二量化しているチロシンキナーゼ型レセプター・Torsoの大量調製	共同	2018年12月	第35回関西ペプチドセミナー	上地愛理, 中道祥子, 山端裕真, 砂川真弓, 石垣悠里, 宮本和英, 齋藤一樹		
人工分子ARFを用いるユビキチン結合酵素活性の検出	共同	2019年3月 予定	日本薬学会 第139年会	宮本和英, 中谷有沙, 山下歩美, 齋藤一樹		
あらかじめジスルフィド架橋で二量化したチロシンキナーゼ型レセプター・Torsoの大量調製	共同	2019年3月 予定	日本薬学会 第139年会	中道祥子, 上地愛理, 山端裕真, 石垣悠里, 宮本和英, 齋藤一樹		
人工分子ARFが有するユビキチン結合酵素の特異的認識能の改変	共同	2019年3月 予定	日本薬学会 第139年会	田口由加里, 齋藤一樹, 宮本和英		
【競争的資金】 スクリーニング技術を利用したEGFレセプター阻害ペプチドの系統的構造最適化	単独	2012年4月 ～ 2015年3月	科学研究費助成事業・基盤研究 (C)	研究代表者		
昆虫前胸腺刺激ホルモンレセプターによるリガンド認識の分子基盤の構築	単独	2015年4月 ～ 2016年3月	科学研究費助成事業・挑戦的萌芽研究	研究代表者		
ジスルフィド架橋を多く数含むペプチドホルモンPTTHの効率的大量調製法の確立 ～NMRを用いた立体構造解析・相互作用解析に向けて～	単独	2018年度	姫路獨協大学・特別研究助成	研究代表者		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

IV 学会等および社会における主な活動

2011 年 8 月～2013 年 7 月	日本学術振興会 特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会・書面審査委員
2013 年 12 月～2015 年 11 月	日本学術振興会 科学研究費委員会・専門委員
2016 年 8 月～2017 年 7 月	日本学術振興会 特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会・書面審査員／ 書面評価員
2017 年 5 月～2017 年 7 月	日本学術振興会 卓越研究員候補者選考委員会・書面審査員
～現在	日本薬学会・会員（日本薬学会近畿支部・委員）
～現在	日本化学会・会員
～現在	日本生化学会・会員
～現在	日本分子生物学会・会員
～現在	日本蛋白質科学会・会員
～現在	日本ペプチド学会・会員
～現在	日本電気泳動学会・会員
～現在	赤堀コンファレンス協会・会員
～現在	American Chemical Society・Member
～現在	The Protein Society・Member

V 学内における主な活動

2017 年 4 月～現在	評議員
2018 年 2 月～現在	危険物保安監督者
2018 年 7 月～現在	広報委員会専門部会委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	柴田克志	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
1. 学生へのわかりやすい講義概要の作成と教育用DVDの使用。（身体の科学および分子生物学の授業について）	2010年4月～現在	各講義は指定教科書に沿って行うが、全てを網羅するのではなくテーマごとに要点を絞って講義内容が全学生に理解しやすいように授業を行っている。講義内容の理解と記憶の定着のため、各授業のまとめプリント（穴埋め式のワークノート）を作成し配布している。また、講義には教育用DVDを用いて、動画による学生の関心・理解度を高めるように工夫している。
2. 小テストによる学生の講義内容の理解度把握	2010年4月～現在	講義済みの内容については、復習テストとして前回の講義内容についての小テストを行っている。このように学生の学力評価を適宜おこなう事により、学習効率の向上を図るとともに学生の理解度を把握し迅速に講義内容・方法にフィードバック出来るように工夫している。
3. 「学生による授業評価」の活用	2010年4月～現在	毎学期の後半に行われる授業評価アンケートの結果に基づいて授業が適切に行われているかどうかの判断を行い、全学生が授業を理解し学習効果を向上させるべく、次学期以降の講義内容・方法の改善に役立てている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
1. 身体の科学および分子生物学の授業の補助教材作成（ワークノート、小テスト）	2010年4月～現在	講義内容の理解と記憶の定着のため、各講義では授業のまとめプリント（穴埋め式のワークノート）を作成し配布している。また、講義済みの内容の復習として小テストを適宜行っている。
2. 分子生物学実習書	2013年4月～現在	実験内容の立案、計画および予備実験による条件検討を行うとともに、実習書や配布資料などの教材を作成し配付している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特筆すべき事項なし		

II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数	備考
論文						
VEGF-C/Flt-4 axis in tumor cells contributes to the progression of oral squamous cell carcinoma via upregulating VEGF-C itself and contactin-1 in an autocrine manner.	共著	2018	Am J Cancer Res.	Shigetomi S, Imanishi Y, Shibata K, Sakai N, Sakamoto K, Fujii R, Habu N, Otsuka K, Sato Y, Watanabe Y, Shimoda M, Kameyama K, Ozawa H, Tomita T, Ogawa K.	8:2046-63.	
Lipopolysaccharide-induced inflammation or unilateral ureteral obstruction yielded multiple types of glycosylated Lipocalin 2.	共著	2016	J Inflamm (Lond).	Fujiwara Y, Tsuchiya H, Sakai N, Shibata K, Fujimura A, Koshimizu TA.	3:7.	

Identification of protein arginine N-methyltransferase 5 (PRMT5) as a novel interacting protein with the tumor suppressor protein RASSF1A.	共著	2015	Biochem Biophys Res Commun.	Sakai N, Saito Y, Fujiwara Y, Shiraki T, Imanishi Y, Koshimizu TA, Shibata K.	467:778-84.	
Subcellular localization and internalization of the vasopressin V1B receptor.	共著	2015	Eur J Pharmacol.	Kashiwazaki A, Fujiwara Y, Tsuchiya H, Sakai N, Shibata K, Koshimizu TA.	765:291-9.	
Pharmacological lineage analysis revealed the binding affinity of broad-spectrum substance P antagonists to receptors for gonadotropin-releasing peptide.	共著	2015	Eur J Pharmacol.	Arai K, Kashiwazaki A, Fujiwara Y, Tsuchiya H, Sakai N, Shibata K, Koshimizu TA.	749:98-106.	
Restoration of E-cadherin expression by selective Cox-2 inhibition and the clinical relevance of the epithelial-to-mesenchymal transition in head and neck squamous cell carcinoma.	共著	2014,	J Exp Clin Cancer Res.	Fujii R, Imanishi Y, Shibata K, Sakai N, Sakamoto K, Shigetomi S, Habu N, Otsuka K, Sato Y, Watanabe Y, Ozawa H, Tomita T, Kameyama K, Fujii M, Ogawa K.	33:e40.	
Overexpression of SIP1 and Downregulation of E-cadherin Predict Delayed Neck Metastasis in Stage I/II Oral Tongue Squamous Cell Carcinoma After Partial Glossectomy.	共著	2012	Ann Surg Oncol.	Sakamoto K, Imanishi Y, Tomita T, Shimoda M, Kameyama K, Shibata K, Sakai N, Ozawa H, Shigetomi S, Fujii R, Fujii M, Ogawa K.	19:612-9.	
Proximal tubules and podocytes are toxicity targets of bucillamine in a mouse model of drug-induced kidney injury.	共著	2011	Eur J Pharmacol.	Fujiwara Y, Tsuchiya H, Sakai N, Shibata K, Fujimura A, Koshimizu TA.	670:208-15.	
Development of a sphingosylphosphorylcholine detection system using RNA aptamers.	共著	2010	Molecules.	Horii K, Omi K, Yoshida Y, Imai Y, Sakai N, Oka A, Masuda H, Furuichi M, Tanimoto T, Waga I.	15:5742-55.	
Oxytocin stimulates expression of a noncoding RNA tumor marker in a human neuroblastoma cell line.	共著	2010	Life Sci.	Koshimizu TA, Fujiwara Y, Sakai N, Shibata K, Tsuchiya H.	86:455-60.	

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1991年4月～現在	日本循環器学会会員
1993年4月～現在	日本薬理学会会員
2007年5月～現在	日本薬学会近畿支部委員

V 学内における主な活動

2007 年 4 月～現在	組換え DNA 実験安全管理委員会委員
2008 年 4 月～現在	健康管理室運営委員会委員
2008 年 4 月～現在	生命倫理委員会委員
2017 年 4 月～現在	評議員
2017 年 4 月～現在	自己評価委員会委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	白木 孝	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
1. 学部講義における実践 （「分子生物学Ⅱ」）	2009年9月～2013年 3月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科3年次学生に対して、分子生物学の講義として核酸の代謝、遺伝子の複製、転写、翻訳、さらに遺伝子多型に関する講義を行った。核酸の代謝に関連する医薬品の作用機序や、遺伝子多型が医薬品に及ぼす影響など、臨床に関係の深い事項についての講義も行った。またビタミンに関する講義も併せて行い、各ビタミンの生理作用、欠乏症や過剰症と生理作用との関連、ビタミンの生理作用に関連した医薬品とその作用機序などに関して各論的に解説を行った。
2. 学部講義における実践 （「実用薬学英語Ⅳ」）	2009年9月～2011年 12月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科3年次学生に対して、英語論文の読解や英語での情報の入手を行うために、学術英語の読解に関する講義を行った。学生がより身近に興味を持つことができるように、医薬品や臨床での場面に関する題材を選び、臨床への関心も深まるような工夫を行った。また学術英単語の成り立ちを系統的に理解することにより、通常の辞書には載っていないような単語でも、自ら意味を考えられるよう学習を行った。
3. 学部実習における実践 （「公衆衛生学実習」）	2009年10月～2013 年3月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科3年次学生に対して、公衆衛生学の分野の中で油脂などの食品の分析、化学的酸素要求量（COD）などの水環境の分析、アスコルビン酸など特定成分の定量法などの実習を行った。
4. 学部講義における実践 （「公衆衛生学Ⅱ」）	2010年5月～2012年 9月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科3年次学生に対して、公衆衛生学の講義として化学物質の代謝、毒性学、廃棄物などに関する講義を行った。化学物質の代謝や毒性学は医薬品とも関係のあるものも多いため、臨床的な意義や応用などについても重点的に講義を行った。
5. 学部実習における実践 （「分子生物学実習」）	2010年6月～2012年 9月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科4年次学生に対して、分子生物学の分野の中で遺伝子操作に関する実習を行った。組換えDNA技術、DNA実験指針の理解、遺伝子取扱いに関する安全性と倫理などについての理解から始まり、ベクターやPCR法を用いた遺伝子のクローニング技術、DNAの塩基配列決定法など、遺伝子工学の基礎となることの実習を行った。
6. 境界分野、実践分野の講義への 取り入れ	2010年6月～2012年 9月	担当している公衆衛生学Ⅱおよび分子生物学Ⅱの講義において、薬物代謝酵素の遺伝子多型とその臨床における意義など、両方の講義に関連している事項について有機的に関連付けを行ったり、病院薬剤師として経験してきた実践的な事項を積極的に基礎科目の講義に取り入れることにより、分散しがちなそれぞれの知識を関連付ける考え方の修得を行った。
7. 学部講義における実践 （「実務実習事前学習講義」）	2010年9月～2017年 9月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科4年次学生に対して、医療現場でのコミュニケーションに関する講義を行った。コミュニケーションス

8. 学部実習における実践 （「実務実習事前学習実習」）	2010年9月～2018年 2月	キルの修得から始まり、医療現場で実際に起こりうる場面の理解、医療従事者としての基本的な考え方、他の医療従事者との関わりなど、5年次で病院、薬局での実務実習を行う際に特に重要と考えられる事項について講義を行った。 姫路獨協大学薬学部医療薬学科4年次学生に対して、医療現場でのコミュニケーションに関する実習を行った。作成した模擬実例課題を用いて、薬局、病棟での初回面談や服薬指導などが実践できるようにした。教科書などではなかなか理解しにくい部分が多いので、病院などでの実際の自分の経験を基に、学生が病院や薬局での実務実習に行った際に役に立つように実習を行った。
9. 学部講義における実践 （「医療倫理」）	2013年4月～現在	姫路獨協大学薬学部医療薬学科1年次学生（2013年度はカリキュラム変更のため2012年度入学2年次学生も同時開講）に対して、医療倫理の講義を行った。1年次学生が医療倫理について考える必要性を理解できるよう、臨床現場で自らが経験してきた具体的な事例を多く紹介し、実際に医療現場で起きていることを、できるだけ臨場感を持って考えてみるができるように講義を行った。
10. 学部講義における実践 （「機能性食品学」）	2014年4月～現在	姫路獨協大学薬学部医療薬学科6年次学生に対して、機能性食品学の講義を行った。6年次学生対象の科目で実務実習も終了しているので、実際によく使用されている機能性食品を具体的に取り上げ、また臨床現場で問題となり得る医薬品との相互作用についても解説し、より実践的な講義を行った。
11. 学部講義における実践 （「調剤学」）	2016年4月～現在	姫路獨協大学薬学部医療薬学科4年次学生に対して、調剤学の講義を行った。処方箋の見方から始まり、調剤の基本的な流れや注意すべき点等について、具体的な内容に基づいて学習を進め、模擬薬局実習を受けるために必要な基本的な知識を修得できるよう講義を行った。
12. 学部実習における実践 （「臨床準備教育」）	2018年9月～現在	姫路獨協大学薬学部医療薬学科4年次学生に対して、臨床準備教育に相当する模擬薬局実習において、医療現場でのコミュニケーションに関する実習を行った。作成した模擬実例課題を用いて、薬局、病棟での初回面談や服薬指導などが実践できるようにした。教科書などではなかなか理解しにくい部分が多いので、病院などでの実際の自分の経験を基に、学生が病院や薬局での実務実習に行った際に役に立つように実習を行った。
13. 学部講義における実践 （「先端薬物療法論」）	2018年12月～現在	姫路獨協大学薬学部医療薬学科6年次学生に対して、先端薬物療法論の講義を行った。肝移植後の薬物療法について、免疫抑制剤などの使用法や、肝炎ウイルスに対する薬物治療など、現場で実際に行われている薬物療法を、病院での実際の経験に基づいて講義を行い、学生にとっても臨場感のあるものとなるように努めた。
2 作成した教科書、教材、参考書		
1. 分子生物学Ⅱ講義プリント	2009年9月～2013年 3月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科3年次学生に対しての講義で、教科書にはあまり記載のない遺伝子多型に関してプリントを作成した。実際の医薬品に影響を及ぼす具体例を多く盛り込み、それに対する

2. 実用薬学英語Ⅳ講義のパワーポイントのスライド	2009年9月～2011年12月	対応策も解説し、学生の基礎分野と臨床分野の知識を統合するようにした。またビタミンに関する部分では、関連する医薬品の作用機序など教科書にあまり記載のない事項に関してプリントを作成し、学生がより具体的に理解できるようにした。 姫路獨協大学薬学部医療薬学科3年次学生に対する講義で、文法の正確な理解があまりできない学生に対して、主語、動詞、他動詞の目的語、補語、関係代名詞などの関係を分かりやすくするようにパワーポイントのスライドを作成し、長くなりがちな学術英語の文章において、できるだけ文章の構造を分かりやすくし、読解の手助けになるようにした。
3. 公衆衛生学Ⅱ講義プリント	2010年5月～2012年9月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科3年次学生に対しての講義で、まとまった知識として理解しにくい部分のプリントを作成した。また教科書では具体的な医薬品との関係はあまり記載がないため、具体的な例を挙げ、基礎分野と臨床分野の知識ができるだけ統合しやすいようにした。
4. 実務実習事前学習実習書	2010年9月～2017年9月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科4年次学生に対する実務実習事前学習で用いる実習書のうち、服薬指導、医薬品の管理と供給、リスクマネジメントの部分の作成を行った。
5. 実務実習事前学習講義プリント	2010年9月～2017年9月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科4年次学生に対する実務実習事前学習の中の医療現場でのコミュニケーションに関する講義で、学生がそれまであまり学習してきていないコミュニケーションスキルや、医療現場で注意すべき事項に関するプリントを作成した。
6. 実務実習事前学習での医療コミュニケーションの模擬実例課題	2010年9月～2018年2月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科4年次学生に対する実務実習事前学習において、医療コミュニケーションで用いる様々なシチュエーションでの模擬実例課題の作成を行い、学生が具体的にどのような状況の時にどのような接遇をするのかを理解しやすくした。
7. 臨床準備教育での医療コミュニケーションの模擬実例課題	2018年9月～現在	姫路獨協大学薬学部医療薬学科4年次学生に対する臨床準備教育に相当する模擬薬局実習において、医療コミュニケーションで用いる様々なシチュエーションでの模擬実例課題の作成を行い、学生が具体的にどのような状況の時にどのような接遇をするのかを理解しやすくした。
8. 先端薬物療法論講義プリント	2018年12月～現在	姫路獨協大学薬学部医療薬学科6年次学生に対しての講義で、現場で実際に行われている薬物療法を分かりやすく理解できるように、病院で実際に使用していた服薬指導時の資料なども用い、学生にとっても臨場感のあるものとなるように作成した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
1. OSCE プラクティスの運営	2010年3月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科4年次学生に対して行われる、薬学共用試験 OSCE の運営準備段階であるプラクティス試験において、患者・来局者対応のステーション責任者として運営を行った。

2. OSCE の運営	2010 年 12 月～現在	姫路獨協大学薬学部医療薬学科 4 年次学生に対して行われる、薬学共用試験 OSCE の本試験において、医療コミュニケーションのステーション責任者として運営を行った。
3. 実務実習事務局の運営	2013 年 4 月～現在	姫路獨協大学薬学部医療薬学科 5 年次学生に対して行われる、病院・薬局実務実習の学内での運営の責任者として、実習先病院及び薬局のマッチング作業、実習課と共同での実習開始までの事務作業、学生や担当教員に対しての説明、問題発生時の対応、実習終了後の事務作業、病院・薬局実務実習近畿地区調整機構委員としての活動等を行った。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】 特筆すべき事項なし						
【論文】						
低濃度域のタクロリムス血中濃度測定についての問題点とその対応策	共著	2006 年 10 月	T D M 研究 Vol. 23 No. 4	大松秀明、打保裕子、五百蔵武士、守屋友加、胡本千穂、白木孝、中村任、西口工司、岡村昇、柴田敏之、奥村勝彦	276 頁～280 頁	
筋ジストロフィー患者に対するゲンタマイシン療法時における腎機能評価	共著	2006 年 11 月	学会誌「医療薬学」Vol. 32 NO. 11	高橋悠子、中村任、守屋友加、白木孝、林伸英、熊谷俊一、岡村昇、八木麻理子、竹島泰弘、松尾雅文、柴田敏之、奥村勝彦	1111 頁 ～ 1116 頁	
Haloperidol is an inhibitor but not substrate for MDRI/P-glycoprotein.	共著	2006 年 12 月	J. Pharm. Pharmacol. Vol. 58 No. 12	Iwaki, K., Sakaeda, T., Kakumoto, M., Nakamura, T., Komoto, C., Okamura, N., Nishiguchi, K., Shiraki, T., Horinouchi M., & Okumura, K.	1617 頁 ～ 1622 頁	
Cyclosporine から sirolimus への切り替えに際し、sirolimus 血中濃度の一過性上昇を認めた症例	共著	2007 年 4 月	T D M 研究 Vol. 24 No. 2	中村任、五百蔵武士、大松秀明、山下和彦、白木孝、堀之内正則、西口工司、福本巧、具英成、岡村昇、角山圭一、奥村勝彦、柴田敏之	98 頁～103 頁	
病棟向け緊急用医薬品の標準化とトレー交換方式による供給管理	共著	2007 年 5 月	学会誌「医療薬学」Vol. 33 NO. 5	石川裕子、岩城晃一、白木孝、長谷川泰子、鶴田早苗、大石美恵、西	431 頁～437 頁	

Identification of protein arginine N-methyltransferase 5 (PRMT5) as a novel interacting protein with the tumor suppressor protein RASSF1A.	共著	2015 年 11 月	Biochem. Biophys. Res. Commun. Vol. 467 No. 4	口工司、奥村勝彦、柴田敏之 Sakai, N., Saito, Y., Fujiwara, Y., Shiraki, T., Imanishi, Y., Koshimizu, T., & Shibata, K.	778 頁～784 頁	
【その他】 FRET を活用した、B/F 分離の不要な受容体結合実験に用いる蛍光性ペプチドリガンドの有用性	共著	2017 年 12 月	マグネティックス 光・量子デバイス フィジカルセンサ マイクロマシン・センサシステム バイオ・マイクロシステム合同研究会資料	河野奨、安保明博、杉野千尋、福武眞子、白木孝	2017 年 12 月 14・15 日 9 頁～12 頁	

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1989 年 2 月～現在	日本薬学会会員
2004 年 4 月～現在	日本病院薬剤師会会員
2013 年 4 月～現在	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構委員
2014 年 4 月～現在	兵庫県薬剤師会薬学教育部委員
2016 年 6 月～2018 年 6 月	兵庫県薬剤師会理事
2017 年 6 月～現在	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構運営委員、事務局長補佐
2018 年 6 月～現在	兵庫県薬剤師会薬学教育部副委員長

Ⅴ 学内における主な活動

2017 年 8 月～2017 年 8 月	平成 29 年度姫路獨協大学教員免許状更新講習
2019 年 3 月	2018 年度姫路獨協大学薬学部第 7 回卒後教育セミナー

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	杉本由美	大学院における研究指導担当 資格の有無（ 無 ）
----	--------------	----	----	----	------	-----------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
1) レポート、研究発表会の活用	1979 年 4 月～ 現在に至る	神戸薬科大学（1994 年 4 月より、神戸女子薬科大学から名称変更）薬学部衛生薬学科の専任教員として担当の「医療薬学系実習Ⅰ（薬理学）」（専門科目、3 年次配当、半期、必修）において実施した。実習レポートを提出させることにより、学生の実習内容に対する理解度を学生自身が把握できるよう配慮した。 また、3 年次後期から 4 年次まで「特別実習・特論」において研究指導を行い、研究成果を卒業論文にまとめさせ、発表会を行うことにより、学生自身が研究内容の把握と研究方法を習得できるように指導した。 2008 年 4 月からは、横浜薬科大学薬学部臨床薬学科の専任教員として担当の「薬理学実習」（専門科目、3 年次配当、半期）等の授業、「卒業研究」においてはポスター発表会を行い、その後質疑応答を実施している。 2014 年 4 月からは、安田女子大学薬学部薬学科の専任教員として、担当の「薬理学実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」（専門科目、3 年次、4 年次配当、半期、必修）、等の授業、「卒業研究」においてはポスター発表会を行い、その後質疑応答を実施している。 2017 年 4 月からは、姫路獨協大学薬部医療薬学科の専任教員として、担当の「薬理学実習」（専門科目 4 年次配当、半期、必修）、等の授業、「卒業研究」においてはポスター発表会を行い、その後質疑応答を実施している。
2) 定期面談の実施	2007 年 4 月～ 2014 年 3 月	横浜薬科大学薬学部臨床薬学科において担任を努めているクラスの学生に対し、定期的に面談を行い、勉学面について助言を行い、学生生活のサポートを行った。 その結果、勉学へ取り組む意欲の向上、学業成績の上昇などの教育的効果があった。
3) 演習の効果的な活用	2009 年 4 月～ 現在に至る	横浜薬科大学薬学部臨床薬学科の専任教員として担当の「医療薬学演習（薬理学、薬物治療学）」（専門科目、4 年次配当、半期、必修）、「医療薬学総合演習（薬理学、薬物治療学）」（専門科目、6 年次配当、半期、必修）の講義において実施している。薬学共用試験、薬剤師国家試験に対応できるように、薬理学、薬物治療学の要点を整理するとともに、問題演習を行っている。 それにより、学生の理解度が向上し、教育的効果が見られた。 2014 年 4 月からは、安田女子大学薬学部薬学科の専任教員として担当の「総合薬学演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ（薬理学、薬物治療学）」（専門科目、5 年次、6 年次配当、半期、必修）の講義において実施している。薬剤師国家試験に対応できるように、薬理学、薬物治療学の要点を整理するとともに、問題演習を行っている。それにより、学生の理解度が向上し、教育的効果が見られた。

4) 講義用パワーポイントおよび補助プリントの作成	2014 年 4 月～ 現在に至る	2017 年 4 月からは、姫路獨協大学薬部医療薬学科の専任教員として、担当の「薬理系統合演習 (PBL)」(専門科目、4 年次配当、半期、必修)「薬学応用演習Ⅱ、Ⅲ」(専門科目、4 年次配当、半期、必修)、薬学総合演習Ⅱ、Ⅲ」(専門科目、6 年次配当、半期、必修)の講義において実施している。薬学共用試験、薬剤師国家試験に対応できるように、薬理学、薬物治療学の要点を整理するとともに、問題演習を行っている。それにより、学生の理解度が向上し、教育的効果が見られた。 2014 年 4 月からは、安田女子大学薬学部薬学科の専任教員として、「薬理学Ⅲ」「薬物治療学Ⅰ」「薬物治療学Ⅱ」「脳神経科学」「総合薬学演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ(薬理学、薬物治療学)」を担当した。2017 年 4 月からは、姫路獨協大学薬部医療薬学科の専任教員として、「疾患薬理学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」「薬理系統合演習 (PBL)」「薬学応用演習Ⅱ、Ⅲ」、薬学総合演習Ⅱ、Ⅲ」を担当している。薬理学や関連する病態の理解を深めやすいように、スライドを作成し講義を行っている。講義に関連する新しい知見などを紹介し、学生の興味を高めるとともに、講義の終わりに練習問題を行い、学生の理解度を高めるように努力している。パワーポイントの講義資料を配布し、学生が学習しやすい様に便宜を図っている。学生の質問を積極的に受け、学生の理解度の向上に努めている。
5) 安田女子大学、姫路獨協大学学生による授業評価アンケート結果における評価	2014 年 4 月～ 現在に至る	安田女子大学、姫路獨協大学の自己点検評価委員会が行う学生による授業評価アンケートの結果によると、講義のわかりやすさ、内容の理解度等、概ね高評価を得ている。学生の意見を聴き、毎年講義の充実に努めている。
6) 安田女子大学大学院における教育	2014 年 4 月～ 2017 年 3 月	安田女子大学薬学部大学院薬学研究科学生へ大学院教授として、研究指導「特別研究」を行った。学生に国際的な雑誌に発表された論文内容をまとめさせ、発表させることにより、研究に対する理解を深めるよう指導している。また学生自身の研究内容を定期的に発表させ、研究室内で質疑応答、討論を行い、学生の資質向上に努めた。大学院薬学研究科学生への特論講義(薬効評価学概論)を行った。講義ではプリント、パワーポイント資料を作成し、新しい知見を交えて講義を行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
1) 第3版薬理学テキスト	2011 年 2 月	薬理学の重要事項を学生に理解しやすく解説するとともに、新しい知見も組み込んだ薬理学の教科書である。 このテキストを使用することにより、学生に薬理学の基本的事項を理解させることができ、重要事項の理解を深めることができた。
2) 新薬剤師国家試験対策 精選問題集Ⅴ薬理	2011 年 3 月	新薬剤師国家試験対策用の練習問題を作成し、解説した。
3) 第96回 薬剤師国家試験一新国家試験形式 解答・解説集- 2011	2011 年 6 月	第96回 薬剤師国家試験の問題を解説した解説集を執筆した。
4) English for Pharmaceutical	2012 年 4 月	薬学英語の講義用テキストを作成した。横浜薬科大学薬学部臨床薬

Students IV (薬学生のための英語IV)		学科の専任教員として担当の「薬学英语IV」(専門科目、3 年次配当、半期、必修1 単位) の講義において使用した。
5) Clinical Pharmaceutical English I (臨床薬学英语 I)	2012 年 4 月	臨床薬学英语の講義用テキストを作成した。横浜薬科大学薬学部臨床薬学科の専任教員として担当の「臨床薬学英语 I」(専門科目、4 年次配当、半期、必修1 単位) の講義において使用した。
6) 第 97 回 薬剤師国家試験—新国家試験形式 解答・解説集— 2012	2012 年 6 月	第 97 回 薬剤師国家試験の問題を解説した解説集を執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特筆すべき事項なし		

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
【著書】 1. 第 3 版薬理学テキスト	共著	2011 年 2 月	廣川書店	赤木正明, 石川正明, 大森健守, 大山良治, 岡本 博, 喜多大三, 佐藤栄作, 佐藤進, 佐藤卓美, 杉本由美, 只野 武, 丹野孝一, 中畑則道, 西 廣吉, 比佐博彰, 平藤雅彦, 松岡功, 松村靖夫, 見尾光庸, 三宅正治, 村井繁夫, 山田潤, 山本隆一, 吉田 真	P. 167 ~ P. 176	
2. 新薬剤師国家試験対策精選問題集 V 薬理	共著	2011 年 3 月	評言社	三澤美和, 阿部和穂, 杉本由美, 千葉義彦, 通川広美, 櫻井正太郎, 篠原悦子		
【論文】 Involvement of leptin in hypophagia induced by the serotonin precursor 5-hydroxytryptophan (5-HTP) in mice	共著	2006 年 3 月	Biol. Pharm. Bull., 29 巻 3 号	©Yamada Jun, Sugimoto Yumi and Ujikawa Masanori	P. 557~ P. 559	
Different effects of optical isomers of the 5-HT1A receptor antagonist pyrapyridolol against	共著	2006 年 3 月	Eur. J. Pharmacol., 534 巻(1-3)号	©Huang Lei, Hotta Yoshihiro, Miyazeki	P. 165~ P. 177	

postischemic guinea pig myocardial dysfunction and apoptosis through the mitochondrial permeability transition pore				Kunihiro, Ishikawa Naohisa, Miki Yasuyoshi, <u>Sugimoto Yumi</u> , Yamada Jun, Nakano Akinobu, Nishiwaki Kimitoshi and Shimada Yasuhiro		
Strain differences of neurosteroid levels in mouse brain	共著	2006 年 9 月	Steroids, 71 巻 9 号	©Tagawa Noriko, <u>Sugimoto Yumi</u> Yamada Jun Yoshiharu Kobayashi	P. 776～ P. 784	
Effects of the serotonin and noradrenaline reuptake inhibitor (SNRI) milnacipran on marble burying behavior in mice	共著	2007 年 12 月	Biol. Pharm. Bull., 30 巻 12 号 P. 2399～P. 2401	© <u>Sugimoto Yumi</u> , Tagawa Noriko, Kobayashi Yoshiharu Hotta Yoshihiro and Yamada Jun	P. 2399～ P. 2401	
Mouse strain differences in immobility and sensitivity to fluvoxamine and desipramine in the forced swimming test: analysis of serotonin and noradrenaline transporter binding	共著	2008 年 9 月	Eur. J. Pharmacol., 592 巻 1-3 号	© <u>Sugimoto Yumi</u> , Kajiwaru Yoshinobu, Hirano Kazufumi, Yamada Shizuo, Tagawa Noriko, Kobayashi Yoshiharu Hotta Yoshihiro and Yamada Jun	P. 116～ P. 122	
Effects of extracts and neferine from the embryo of Nelumbo nucifera seeds on the central nervous system	共著	2008 年 12 月	Phytomedicine, 15 巻 12 号	© <u>Sugimoto Yumi</u> , Furutani Sachiko, Itoh Atsuko, Tanahashi Takao, Nakajima Hiroshi, Oshiro Hideo., Sun Shujan and Yamada Jun	P. 1117～ P. 1124	
抗うつ薬の薬効評価モデルにおけるマウス系統差発現機序	共著	2009 年 1 月	分子精神医学, 9 巻 1 号	© <u>杉本由美</u> , 梶原良修、古谷祥	P. 105～ P. 108	

に関する行動薬理学的研究			P. 105～P. 108	子、平野和史、山田静雄、堀田芳弘、山田潤		
Involvement of the 5-HT1A receptor in the anti-immobility effects of fluvoxamine in the forced swimming test and mouse strain differences in 5-HT1A receptor binding	共著	2010 年 3 月	Eur. J. Pharmacol., 629 巻 1-3 号	◎ <u>Sugimoto Yumi</u> , Furutani Sachiko Kajiwaru Yoshinobu, Hirano Kazufumi, Yamada Shizuo, Tagawa Noriko, Yoshiharu Kobayashi Hotta Yoshihiro and Yamada Jun	P. 53～P. 57	
Antidepressant-like effects of neferine in the forced swimming test involve the serotonin1A (5-HT1A) receptor in mice.	共著	2010 年 5 月	Eur. J. Pharmacol., 634 巻 1-3 号	◎ <u>Sugimoto Yumi</u> , Furutani Sachiko, Nishimura Katsumi, Itoh Atsuko, Tanahashi Takao, Nakajima Hiroshi, Oshiro Hideo., Sun Shujan and Yamada Jun	P. 62～P. 67	
Protective effects of cyclo(L-Leu-L-Tyr) against postischemic myocardial dysfunction in guinea-pig hearts	共著	2011 年 5 月	Biol. Pharm. Bull., 34 巻 3 号	◎Mitsui-Saitoh Kumiko, Furukawa Tadashi, Akutagawa Takashi, Hasada Keiko, Mizutani Hideki, <u>Sugimoto Yumi</u> , Yamada Jun, Niwa Masataka, Hotta Yoshihiro and Takaya, Yoshiaki.	P. 335～P. 342	
Bisbenzyliso- quinoline alkaloids from Nelumbo nucifera	共著	2011 年 8 月	Chem. Pharm. Bull., 59 巻 8 号	◎Itoh Atsuko, Saitoh Tomomi, Tani Kaori, Uchigaki Masaki,	P. 947～P. 951	

Differences between mice strains in response to paroxetine in the forced swimming test: involvement of serotonergic or noradrenergic systems	共著	2011 年 12 月	Eur. J. Pharmacol., 672 卷 1-3 号	<u>Sugimoto Yumi</u> , Yamada Jun, Nakajima Hiroshi, Oshiro Hideo, Sun Shujan and Tanahashi Takao © <u>Sugimoto Yumi</u> , Yamamoto Masami, Tagawa Noriko, Yoshiharu Kobayashi, Yoshiharu Kobayashi Hotta Yoshihiro and Yamada Jun Hotta Yoshihiro and Yamada Jun	P. 121～ P. 125	
Involvement of the signal receptor in the antidepressant-like effects of fluvoxamine in the forced swimming test in comparison with the effects elicited by paroxetine	共著	2012 年 12 月	Eur. J. Pharmacol., 696 卷 1-3 号	© <u>Sugimoto Yumi</u> , Yamamoto Masami, Tagawa Noriko, Yoshiharu Kobayashi, Yoshiharu Kobayashi Hotta Yoshihiro and Yamada Jun Hotta Yoshihiro and Yamada Jun	P. 96～ P. 100	
Synthesis and pharmacological activity of alkaloids from embryo of lotus, Nelumbo nucifera	共著	2013 年 1 月	Chem. Pharm. Bull., 61 卷 1 号	©Nishimura Katsumi, Horii Shinji, Tanahashi Takao, <u>Sugimoto Yumi</u> and Yamada Jun	P. 59～P. 68	
Protective effects of fluvoxamine against ischemia/reperfusion injury in isolated, perfused guinea-pig hearts.	共著	2014 年 7 月	Biol. Pharm. Bull., 37 卷 5 号	©Muto Tatsuya, Usuda Haruki, Yamamura Aya, Yoshida Koji, Ohashi Ai, Mitsui-Saitoh Kumiko, Sakai Junichi, <u>Sugimoto Yumi</u> , Mizutani Hideki, Nonogaki Tatsuya and	P. 731～ P. 739	

Serotonergic mechanisms are involved in antidepressant-like effects of bisbenzylisoquinolines liensinine and its analogs isolated from the embryo of <i>Nelumbo nucifera</i> Gaertner seeds in mice	共著	2015 年 12 月	J. Pharm. Pharmacol. 67 巻 12 号	Hotta Yoshihiro ◎ <u>Sugimoto Yumi</u> , Nishimura Katsumi, Ito Atsuko , Tanahashi Takao, Nakajima Hiroshi, Oshiro Hideo, Sun Shujian, Toda Takahiro and Yamada Jun	P. 1716～ P. 1722	
The interaction between histamine H1 receptor and μ -opioid receptor in scratching behavior in ICR mice	共著	2016 年 4 月	Eur. J. Pharmacol. 777 巻	◎Nakasone Tasuku, <u>Sugimoto Yumi</u> and Kamei Chiaki	P. 124～ P. 128	
Effects of ICI204, 448, naloxone methiodide and levocetirizine on the scratching behavior induced by a kappa-opioid antagonist, nor-BNI, in ICR mice	共著	2017 年 10 月	Immunopharmacol. Immunotoxicol. 39 巻 5 号	◎Nakasone Tasuku, Hirokazu Wakuda, <u>Sugimoto Yumi</u> and Kamei Chiaki	P. 292～ P. 295	
Cholinesterase inhibitor rivastigmine enhances nerve growth factor-induced neurite outgrowth in PC12 cells via sigma-1 and sigma-2 receptors.	共著	2018 年 12 月	PLoS One 13 巻 12 号	◎Terada Kazuki, Migita Keisuke, Matsushima Yukari, <u>Sugimoto Yumi</u> Kamei Chiaki Matsumoto Taichi, Mori Masayoshi Matsunaga Kazuhisa, Takata Jiro And Karube Yoshiharu	e0209250	
【その他】 【学会発表】 強制水泳試験における fluvoxamine および paroxetine の抗うつ様作用に対するシグマ受容体拮抗薬	共同	2011 年 3 月	第84回日本薬理学会年会 (横浜)	杉本由美, 斎藤久美子, 多河典子, 小林吉晴,		

の影響				堀田芳弘、山田 潤		
Paroxetine の抗うつ様作用とドパミン作動性神経との関連	共同	2011 年 3 月 連	日本薬学会 第 131 年会 (静岡)	杉本由美, 山田潤, 山本雅美, 多河典子, 小林吉晴, 斎藤久美子, 堀田芳弘)		
蓮子心に含有されるアルカロイドの研究 (第 14 報) Liensinine の鎮痛作用に関する検討	共同	2011 年 3 月	日本薬学会 第 131 年会 (静岡)	山田潤, 杉本由美, 日塔武彰, 西村克己, 伊藤篤子, 棚橋孝雄, 中島宏, 大城日出男, 孫樹健		
Fluvoxamine および Paroxetine の抗うつ様作用の比較検討: シグマ受容体との関連について	共同	2011 年 8 月	第 15 回活性アミンに関するワークショップ (徳島)	杉本由美, 多河典子, 小林吉晴, 斎藤久美子, 堀田芳弘, 山田 潤		
イソキノリンアルカロイド noscapine の抗うつ様作用について	共同	2011 年 9 月	日本生薬学会 第 58 年会 (東京)	杉本由美, 山田 潤, 西村克己, 棚橋孝雄		
強制水泳試験における抗うつ薬の不動時間短縮作用に及ぼす水深の影響	共同	2011 年 10 月	第 21 回日本臨床精神神経薬理学会 第 41 回日本神経精神薬理学会 合同年会 (東京)	杉本由美, 山田 潤		
Fluvoxamine および paroxetine の抗うつ様作用における性差について	共同	2012 年 3 月	第 85 回日本薬理学会年会 (京都)	杉本由美, 多河典子, 小林吉晴, 斎藤久美子, 堀田芳弘, 山田 潤		
中枢性鎮咳薬デキストロメトロファン [®] の抗うつ様作用について	共同	2012 年 3 月	第 85 回日本薬理学会年会 (京都)	杉本由美, 西村克己, 棚橋孝雄, 斎藤久美子, 堀田芳弘, 山田 潤		
お茶カゲキンガレート基のモルモット心機能に対する影響			日本薬学会	斎藤久美子,		

	共同	2012 年 3 月	第 132 年会 (札幌)	澄川彩音, 日比千尋, 頼実舞, 青柳裕, 酒井淳一, 福沢嘉孝, 野々垣常正, 中井由実, <u>杉本由美</u> , 山田 潤, 堀田芳弘		
L-NAME 投与マウス血液の酸化力・酸化ストレスの変化—フェルラ酸の影響—	共同	2012 年 3 月	日本薬学会 第 132 年会 (札幌)	齊藤久美子, 出口賀奈子, 大橋 愛, 川根 誉代, 永津明人, 村瀬仁章, <u>杉本由美</u> , 山田 潤, 野々垣常正, 堀田芳弘		
SSRI の抗うつ様作用における性差: Fluvoxamine および paroxetine に関する検討	共同	2012 年 8 月	第 16 回活性アミンに関するワークショップ (札幌)	<u>杉本由美</u> , 多河典子, 小林吉晴, 斎藤久美子, 堀田芳弘, 山田 潤		
蓮子心含有アルカロイドの中 枢作用に関する検討	共同	2012 年 11 月	第 19 回天然薬物の開発 と応用シンポジウム (大阪)	<u>杉本由美</u> , 山田 潤, 西村克己, 伊藤篤子, 棚橋孝雄, 中島 宏, 大城日出男, 孫樹健		
神経ステロイド Dehydroandrosterone sulfate (DHEAS) のマウスに おける抗うつ様作用について	共同	2013 年 3 月	第 86 回日本薬理学会年 会 (福岡)	<u>杉本由美</u> , 多河典子, 小林吉晴, 斎藤久美子, 堀田芳弘, 山田 潤		
狗日草(コウジツソウ) ジテル ペン類のモルモットにおける 心機能作用	共同	2013 年 3 月	日本薬学会 第 133 年会 (横浜)	頼実 舞, 澄川彩音, 川根誉代, 日比千尋, 平出瑞紀, 齊藤久美子, 青柳 裕, 一柳幸生, 竹谷孝一, <u>杉本由美</u> , 山田 潤, 福沢嘉孝, 野々垣常正, 堀田芳弘		
環状ジペプチド類(ジクトピ ペラジン類) のモルモット心		2013 年 3 月 28	日本薬学会	澄川彩音, 頼実 舞, 大橋		

臓作用と抗酸化活性	共同	日	第 133 年会 (横浜)	愛, 伊藤歌那, 齊藤久美子, 古川忠志, 高谷芳明, 丹羽正武, <u>杉本由美</u> , 山田 潤, 水谷秀樹, 野々垣常正, 堀田芳弘		
アビエタン系ジテルペン類のモルモット心臓に対する作用	共同	2013 年 3 月	日本薬学会 第 133 年会 (横浜)	川根誉代, 澄川彩音, 頼実舞, 齊藤久美子, 青柳 裕, 一柳幸生, 竹谷孝一, <u>杉本由美</u> , 山田 潤, 酒井淳一, 野々垣常正, 堀田芳弘		
MPTP/p 投与マウス血液の抗酸化力・酸化ストレスの変化—フェルラ酸の影響—	共同	2013 年 3 月	日本薬学会 第 133 年会 (横浜)	日比千尋, 川根誉代, 大橋愛, 齊藤久美子, 村瀬仁章, <u>杉本由美</u> , 山田 潤, 野々垣常正, 堀田芳弘		
大脳皮質及び海馬中の神経ステロイド含量におけるマウス系統差の検討	共同	2013 年 3 月	日本薬学会 第 133 年会 (横浜)	多河典子, <u>杉本由美</u> , 山田 潤, 小林吉晴		
神経ステロイド Dehydroandrosterone sulfate (DHEAS) のマウスにおける抗うつ様作用の解析	共同	2013 年 8 月	第 17 回活性アミンに関するワークショップ (福井)	<u>杉本由美</u> , 多河典子, 小林吉晴, 斎藤久美子, 堀田芳弘, 山田 潤		
抗うつ様作用にみられるマウス系統差と脳内ステロイド及びシグマ受容体の関わりについて	共同	2013 年 10 月	第 63 回日本薬学会近畿支部大会(京都)	畑幸織, 白井那奈, 多河典子, <u>杉本由美</u> , 戸田雄大, 山田 潤, 田中将太, 片山瑞穂, 寺尾紀実香, 藤波綾, 小林吉晴, 加藤郁夫		
Tetrahydrobiopterin (BH4) はマウスにおいて抗うつ様作用を示す	共同	2014 年 3 月	第 87 回日本薬理学会年会 (仙台)	戸田雄大, 長谷川宏幸, 大橋晶子, 多河典子, 加藤郁		

Dehydroandrosterone sulfate の抗うつ様作用とシグマ1受容体発現との関連について	共同	2014 年 3 月	日本薬学会第 134 年会 (熊本)	夫, 堀田芳弘, 山田潤, <u>杉本由美</u>		
マウスにおけるテトラヒドロビオプテリン (BH4) による抗うつ様作用の検討	共同	2015 年 3 月	日本薬学会第 135 年会 (神戸)	多河典子, <u>杉本由美</u> , 白井那奈, 戸田雄大, 山田 潤, 藤波綾, 小林吉晴, 加藤郁夫		
マウスにおけるテトラヒドロビオプテリン (BH4) による抗うつ様作用の検討	共同	2015 年 11 月	第29回日本ブテリジン研究会(東京)	戸田雄大, 長谷川宏幸, 大橋晶子, 多河典子, 加藤郁夫, 堀田芳弘, 山田潤, <u>杉本由美</u>		
ICR 系マウスの搔破行動におけるヒスタミン H1 受容体と μ オピオイド受容体の関連	共同	2016 年 3 月	日本薬学会第 135 年会 (横浜)	戸田雄大, 清水 俊一, 長谷川宏幸, 大橋晶子, 多河典子, 加藤郁夫, 堀田芳弘, 山田潤, <u>杉本由美</u>		
ヒスタミンおよびモルヒネ誘発誘発搔破行動に関する検討—ヒスタミン H1 受容体とオピオイド μ 受容体の関与について—	共同	2016 年 8 月	第20回活性アミンに関するワークショップ (つくば)	仲宗根佑, <u>杉本由美</u> , 亀井千晃		
ICR 系マウスの搔破行動におけるヒスタミン H1 受容体とオピオイド κ 受容体の関連	共同	2016 年 11 月	日本薬学会・日本薬剤師・日本病院薬剤師会中国四国支部学術大会 (岡山)	仲宗根 佑, 和久田 浩一, <u>杉本由美</u> , 亀井 千晃		
Influence of keracyanin on blood vessels.	共同	2016 年 11 月	The 3rd International Conference on Pharma and Food (静岡)	Wakuda H, Waki I, Kitagawa M, Miyauchi-Wakuda S, Maruyama K, Kagota S, <u>Sugimoto Y</u> , Kamei C, Shinozuka K.		

選択的セロトニン再取り込み阻害薬セルトラリンの PC12 細胞における NGF 誘発性神経突起伸展作用に対する影響	共同	2017 年 3 月	第90回日本薬理学会年会（長崎）	松嶋ゆかり，寺田一樹，高田二郎，加留部善晴，和久田浩一，亀井千晃， <u>杉本由美</u>		
κ 受容体拮抗薬により誘発される損傷行動における末梢神経系の関与	共同	2017 年 10 月	第 56 回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会 中国四国支部学術大会（徳島）	仲宗根佑， <u>杉本由美</u> ，亀井千晃		
セルトラリンの PC12 細胞における NGF 誘発性神経突起伸展に対する抑制作用について	共同	2017 年 10 月	第 56 回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会 中国四国支部学術大会（徳島）	松嶋ゆかり，寺田一樹，亀井千晃， <u>杉本由美</u>		
ハムスター由来膵 β 細胞株（HIT-T15）におけるオランザピンによるインスリン分泌抑制機構の解析	共同	2018 年 3 月	日本薬学会第 138 年会（金沢）	長田 麻央，中井 智恵，三浦悠美香，富田隆志，坪越 崇範，横大路 智治， <u>杉本由美</u> ，松尾 裕彰		
選択的セロトニン再取り込み阻害薬セルトラリンの作用と sigma-1 受容体との関連	共同	2018 年 6 月	第 133 回日本薬理学会近畿部会（広島）	松嶋ゆかり，寺田一樹，亀井千晃， <u>杉本由美</u>		
PC12 細胞を用いた SSRI の活性比較—Sigma-1 受容体に関わる作用について—	共同	2018 年 8 月	第20回応用薬理シンポジウム	松嶋ゆかり，亀井千晃，榊原巖， <u>杉本由美</u>		
神経突起伸展および抑制モデルに対するフルボキサミンおよびパロキセチンの影響	共同	2018 年 10 月	第68回日本薬学会近畿支部大会	松嶋ゆかり，寺田一樹，亀井千晃，榊原巖， <u>杉本由美</u>		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

IV 学会等および社会における主な活動

1982 年 1 月～現在	日本薬学会 会員
1983 年 1 月～現在	日本薬理学会 会員
1983 年 12 月～現在	日本トリプトファン研究会 会員
1994 年 1 月～現在	日本薬理学会 学術評議員
1994 年 4 月～現在	日本生薬学会 会員
2005 年 1 月～現在	日本臨床薬理学会 会員
2005 年 10 月～現在	日本神経精神薬理学会 会員
2010 年 10 月～現在	日本神経精神薬理学会 評議員
2011 年 8 月～現在	活性アミンに関するワークショップ 世話人
2016 年 11 月～現在	日本神経精神薬理学会 COI 委員会 委員

V 学内における主な活動

2017 年 9 月～現在	薬学部 FD 委員会委員
2018 年 4 月～現在	薬学部教育推進委員会委員長
2018 年 4 月～現在	動物施設運営委員会委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	高良 恒史	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
実習評価アンケート	2004年9月～12月 2005年9月～12月 2006年9月～12月 2007年9月～12月	2000年度から、3年次生を対象とした「病院薬学実習」の実習開始前及び終了後にアンケート調査を実施し、上記実習に対する学生の評価を行い、それに基づいて実習内容の更なる改善を図っている。
大学院 臨床薬学特論にてパワーポイントの使用	2007年4月～ 2010年3月	京都薬科大学大学院臨床薬学専攻の学生に対する臨床薬学特論において、講義内容の理解を深めるために、視覚的教材としてパワーポイント資料を作成し、講義を実施した。
薬学部4年次生の薬学特別演習にてパワーポイントの使用	2007年4月～ 2010年3月	京都薬科大学薬学部4年次生に対する薬学特別演習において、薬物相互作用に関する内容の理解を深めるために、視覚的教材を作成して講義を実施した。
大学院生の研究指導	2009年4月～ 2011年3月	京都薬科大学臨床薬学分野において、大学院生への研究指導を行い（10名）、修士論文の作成、学会発表の指導を実施した。
薬物動態学講義用ノートの作成	2010年4月～	薬物動態学の講義で使用される教科書は難解なものが多いため、それらの内容を平易に解説・補足した講義ノートを作成し、講義内容の理解度を高める工夫を実施した。
薬物動態学講義にてパワーポイントの使用	2010年4月～	薬物動態学の講義内容の理解度を高めるために、視覚的な印象に残るようなパワーポイントを作成し、講義の質を高める工夫を実施した。
薬物動態学講義にて講義内容理解度の確認テストを実施	2010年4月～	薬物動態学の講義内容は積み上げ式であるので、どの程度の理解度であるかを学生自身により知ることが重要である。そのため、毎回の講義ごとに確認テストを実施した。また、次回の講義までに採点し、総評を実施することで、学生自身の理解度の確認に役立てる工夫を実施した。
薬物動態学実習にてパワーポイントの使用	2010年9月～	薬物動態学実習の内容及び作業方法の理解度を高め、実習を効果的に実施するために、視覚的な印象に残るようなパワーポイントを作成し、実習の質を高める工夫を実施した。
薬物代謝学にてパワーポイントの使用	2010年9月～	薬物代謝学の講義内容の理解度を高めるために、視覚的な印象に残るようなパワーポイントを作成し、講義の質を高める工夫を実施した。
薬物代謝学講義にて講義内容理解度の確認テストを実施	2010年9月～	薬物代謝学の講義内容は積み上げ式であるので、どの程度の理解度であるかを学生自身により知ることが重要である。そのため、各単元終了ごとに確認テストを実施した。また、次回の講義までに採点し、総評を実施することで、学生自身の理解度の確認に役立てる工夫を実施した。

		た。
基礎数理解講義にてパワーポイントの使用	2017 年 4 月～	基礎数理解の講義内容の理解度を高めるために、視覚的な印象に残るようなパワーポイントを作成し、講義の質を高める工夫を実施した。また、このデータはクラウド上にアップし、講義開始前から、学生がいつでもどこでも閲覧できる環境を提供した。
基礎数理解講義にて講義内容理解度のワークシートを実施	2017 年 4 月～	基礎数理解の講義内容は高校数学の復習を兼ねているが、どの程度の理解度であるかを学生自身により知ることが重要である。そのため、講義時間中にワークシートを実施し、ポイント部分については解説を実施した。さらに、解答例はクラウド上にアップし、講義終了後から、学生がいつでもどこでも閲覧できる環境を提供した。
基礎数理解講義にてレポート課題を実施	2017 年 4 月～	基礎数理解の講義内容への関心を高めるために、身の回りに存在する「数学」に関する課題を作成し、レポート作成をしてもらうことにより、数学への興味、関心を高める工夫を実施した。
基礎数理解講義にてリフレクションシート(YWTシート)を実施	2017 年 4 月～	毎回の講義において、「分かったつもり」になることを防ぐために、リフレクションシートを作成し、毎回の講義終了後に実施した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
調剤学講義テキスト	2006 年 4 月～ 2009 年 3 月	調剤学の講義に使用
薬学特別演習テキスト	2007 年 4 月～ 2009 年 3 月	京都薬科大学 4 年次生の薬学特別演習において、薬物相互作用に関する内容を総括するために、演習テキストを作成した。
薬学特別演習補足資料	2007 年 4 月～ 2009 年 3 月	京都薬科大学 4 年次生の薬学特別演習において、薬物相互作用に関する内容を総括するために、視覚的教材としてパワーポイントを資料を作成した。
薬物動態学講義ノート	2010 年 4 月～	薬物動態学の書籍は難解なものが多いため、それらの内容を詳細に解説・補足した講義ノートを作成した。
薬物動態学講義補足資料	2010 年 4 月～	薬物動態学の講義にて、講義内容の理解を深めるために、視覚的教材としてパワーポイント資料を作成した。
薬物動態学講義確認テスト	2010 年 4 月～	薬物動態学の講義にて、講義内容の理解度を確認するために、毎回の講義終了後に実施する確認テストを作成した。
薬物動態学実習 実習書	2010 年 9 月～	薬物動態学の講義で得た知識を定着させるために、薬物動態学実習で実施する実習内容を考案し、それらを円滑に実施するための実習書を作成した。
薬物動態学実習補足資料	2010 年 9 月～	薬物動態学実習を円滑に実施するために、実習内容、注意事項等をまとめたパワーポイント資料を作成した。
薬物代謝学講義補足資料	2010 年 9 月～	薬物代謝学の講義にて、講義内容の理解を深めるために、視覚的教材としてパワーポイント資料を作成した。
薬物代謝学講義確認テスト	2010 年 9 月～	薬物代謝学の講義にて、講義内容の理解度を確認するために、各単元ごとの講義終了後に実施する確認テストを作成した。
模擬薬局実習ポスター	2010 年 9 月～	模擬薬局実習にて、調剤手順を簡潔にまとめたポスターを作成した。

薬剤系統合演習用問題	2011 年 4 月～	薬剤系統合演習にて、医薬品添付文書を利用して情報検索、課題解決を実施するための演習課題(約 100 問)を作成した。
薬学総合演習	2012 年 4 月～	薬学総合演習にて、薬剤師国家試験過去問題の整理・編集を行い、薬剤師国家試験対策向けの資料、演習問題を作成した。
薬学応用演習	2016 年 4 月～	薬学応用演習において、領域横断型資料を作成した。またジグソー法を用いたアクティブラーニング用の試料も作成した。
基礎数理補足資料	2017 年 4 月～	基礎数理の講義において、講義内容の理解を深めるために、視覚的教材としてパワーポイント資料を作成し、さらにネットにアップすることにより、学生がいつでも資料を確認できる環境を提供した。
基礎数理ワークシート	2017 年 4 月～	基礎数理の講義において、講義内容の理解を深めるために、講義内で実施するワークシートを作成した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
発表	2016 年 12 月 15 日	高良恒史、木下 淳、高橋 稔： 薬剤系、実務系教員によるアクティブラーニングの取り組み～自ら進んで考える学生を育成するために～ 第 16 回西播・姫路医療セミナー（姫路）
4 その他教育活動上特記すべき事項		
その他	2006 年 8 月 30 日	高良恒史：サポートスタッフ。京都薬科大学第 1 回共用試験 OSCE トライアル（京都）
その他	2006 年 12 月 3 日	高良恒史：委員。第 4 回京都薬科大学-京都府病院薬剤師会連携ワークショップ（京都）
その他	2007 年 2 月 11-12 日	高良恒史：参加。第 6 回薬剤師のためのワークショップ in 近畿（兵庫）
その他	2007 年 7 月 8 日	高良恒史：評価者。平成 19 年度武庫川女子大学薬学部 OSCE トライアル（兵庫）
その他	2007 年 8 月 2 日	高良恒史：ステーション責任者、評価者。京都薬科大学第 2 回共用試験 OSCE トライアル（京都）
その他	2007 年 8 月 21 日	高良恒史：参加。平成 19 年度第 2 回薬学共用試験 OSCE 評価者養成伝達講習会（名古屋）
その他	2007 年 11 月 25 日	高良恒史：評価者。神戸学院大学薬学部共用試験 OSCE トライアル（兵庫）
その他	2008 年 1 月 13-14 日	高良恒史：タスクフォース。第 13 回薬剤師のためのワークショップ in 近畿（兵庫）
その他	2008 年 3 月 2 日	高良恒史：講師。第 5 回京都薬科大学-京都府病院薬剤師会連携ワークショップ（京都）
その他	2008 年 7 月 27-28 日	高良恒史：課題責任者、評価者。京都薬科大学第 3 回共用試験 OSCE トライアル（京都）
その他	2008 年 11 月 23-24 日	高良恒史：タスクフォース。第 25 回薬剤師のためのワークショップ in 近畿（大阪）
その他	2009 年 2 月 8 日	高良恒史：世話人。第 6 回京都薬科大学-京都府病院薬剤師会連携ワークショップ（京都）
その他	2010 年 3 月 7 日	高良恒史：ステーション責任者。姫路獨協大学 薬学共用試験 OSCE プラクティス（姫路）
その他	2010 年 12 月 5 日	高良恒史：ステーション責任者。姫路獨協大学 薬学共用試験 OSCE（姫路）

その他	2010 年 12 月 19 日	<u>高良恒史</u> : 評価者. 武庫川女子大学 薬学共用試験 OSCE (西宮)
その他	2011 年 12 月 4 日	<u>高良恒史</u> : ステーション責任者. 姫路獨協大学 薬学共用試験 OSCE (姫路)
その他	2011 年 12 月 11 日	<u>高良恒史</u> : モニター. 近畿大学薬学部 薬学共用試験 OSCE (東大阪)
その他	2012 年 9 月 1 日	<u>高良恒史</u> : 参加. 平成 24 年度薬学共用試験 OSCE 評価者養成伝達講習会 (京都)
その他	2012 年 4 月～2015 年 3 月	<u>高良恒史</u> : OSCE 実施委員長. 姫路獨協大学 薬学共用試験 OSCE (姫路)
その他	2012 年 12 月 16 日	<u>高良恒史</u> : 評価者. 武庫川女子大学 薬学共用試験 OSCE (西宮)
その他	2015 年 10 月 11～12 日	<u>高良恒史</u> : 参加. 第 1 回若手薬学教育者のためのアドバンスワークショップ (大阪)
その他	2016 年 1 月 9～10 日	<u>高良恒史</u> : 参加. 第 8 回評価者研修会 (府中)
その他	2015 年～	<u>高良恒史</u> : ステーション責任者 (兼実施副委員長). 姫路獨協大学 薬学共用試験 OSCE (姫路)

II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
【著書】 Pathophysiological and Biochemical Analyses for “Life-Style Related or Intractable Diseases” - Target Validation for Drug Therapy -	共著	2006 年 8 月	Research Signpost	K. Takara, N. Kitada, N. Ohnishi, T. Yokoyama	pp. 173～189	
薬物動態学 第 2 版 「第 5 章 排泄」	共著	2014 年	廣川書店	高良恒史 栄田敏之, 山崎浩史, 灘井雅行 編集	pp. 107-133	
演習と解説 薬物動態学 「5-5 線形 2-コンパートメントモデル、5-6 非線形薬物動態、5-7 モーメント解析」	共著	2016 年	廣川書店	高良恒史 山崎浩史, 夏目秀視, 橋爪孝典 編集	pp. 78-96	
【論文】 京都薬科大学における学部生を対象とした医療薬学実習：2000～2002 年度における問題点とその対策	共著	2004 年 6 月	医療薬学 Vol. 30, No. 6	高良恒史, 大西憲明, 堀部紗世, 津島美幸, 橋詰勉, 金澤治男, 横山照由	p. 407～412	
京都薬科大学大学院におけるコミュニケーション教育：臨床薬学演習への模擬患者の参画とその有用性	共著	2004 年 8 月	医療薬学 Vol. 30, No. 8	堀部紗世, 大西憲明, <u>高良恒史</u> , 横山照由	p. 529～535	

Effect of rabeprazole on MDR1-mediated transport of Rhodamine 123 in Caco-2 and Hvr100-6 cells	共著	2004 年 10 月	Biol. Pharm. Bull. Vol. 27, No. 10	F. Itagaki, M. Homma, <u>K. Takara</u> , N. Ohnishi, T. Yokoyama, T. Sakaeda, T. Yagami, H. Kobayashi, N. Okamura, Y. Kohda	p. 1694 ~ 1696	
Studies on interactions between functional foods or dietary supplements and medicines. IV. Effects of <i>Ginkgo biloba</i> leaf extract on the pharmacokinetics and pharmacodynamics of nifedipine in healthy volunteers	共著	2004 年 12 月	Biol. Pharm. Bull. Vol. 27, No. 12	M. Yoshioka, N. Ohnishi, T. Koishi, Y. Obata, M. Nakagawa, T. Matsumoto, K. Takagi, <u>K. Takara</u> , T. Ohkuni, T. Yokoyama, K. Kuroda	p. 2006 ~ 2009	
Studies on interactions between functional foods or dietary supplements and medicines. III. Effects of <i>Ginkgo biloba</i> leaf extract on the pharmacokinetics of nifedipine in rats	共著	2004 年 12 月	Biol. Pharm. Bull. Vol. 27, No. 12	M. Yoshioka, N. Ohnishi, N. Sone, S. Egami, <u>K. Takara</u> , T. Yokoyama, K. Kuroda	p. 2042 ~ 2045	
Effects of 19 herbal extracts on the sensitivity to paclitaxel or 5-fluorouracil in HeLa cells	共著	2005 年 1 月	Biol. Pharm. Bull. Vol. 28, No. 1	<u>K. Takara</u> , S. Horibe, Y. Obata, E. Yoshikawa, N. Ohnishi, T. Yokoyama	p. 138~142	
透析患者の血中遊離型テイコプラニン濃度測定に関する基礎的検討	共著	2005 年 9 月	TDM 研究, Vol. 22, No. 4	西川 翠, 平田純生, 和泉 智, 古久保拓, 太田美由希, 藤田みのり, 山川智之, <u>高良恒史</u> , 大西憲明, 横山照由	p. 302-308	
透析患者における MRSA 感染の生命予後に影響する因子の検討	共著	2006 年 3 月	医療薬学 Vol. 31, No. 8	西川 翠, 平田純生, 川口博資, 和泉 智, 古久保拓, 太田美由希, 藤田みのり, 松永千春, 山川智之, <u>高良恒史</u> , 大西憲明, 横山照由	p. 695~700	
An update on overcoming MDR1-mediated multidrug resistance in cancer	共著	2006 年 3 月	Curr. Pharm. Des. Vol. 12, No. 3	<u>K. Takara</u> , T. Sakaeda, K. Okumura	p. 273~286	
患者の自己判断による服薬の続行が招いた Uracil/Tegafur (UFT®) カプセルによる重篤な薬物性肝障害の 1 例	共著	2006 年 5 月	臨床薬理 Vol. 37, No. 3	北田徳昭, 段 俊行, 辻 隆志, 山崎 元, <u>高良恒史</u> , 大西憲明, 横山照由, 渡 雅克	p. 135-138	
Oxaliplatin up-regulated the function and expression of P-glycoprotein/MDR1 in porcine kidney epithelial LLC-PK ₁ cells	共著	2006 年 10 月	EXCLI Journal Vol. 5	N. Kitada, <u>K. Takara</u> , H. Kishi, T. Sakaeda, N. Ohnishi, T. Yokoyama	p. 179-190	
Molecular changes to HeLa cells on continuous exposure to cisplatin or paclitaxel	共著	2006 年 12 月	Cancer Chemother. Pharmacol. Vol. 58, No. 6	<u>K. Takara</u> , Y. Obata, E. Yoshikawa, N. Kitada, T. Sakaeda, N.	p. 785-793	

				Ohnishi, T. Yokoyama		
Effects of platinum derivatives on the function and expression of P-glycoprotein/MDR1 in LLC-PK ₁ cells: In the cases of carboplatin and nedaplatin	共著	2007 年 1 月	J. Cancer Mol. Vol. 3, No. 1	N. Kitada, <u>K. Takara</u> , M. Tsujimoto, T. Sakaeda, N. Ohnishi, T. Yokoyama	p. 23-28	
Down-regulation of MDR1 by continuous exposure to cisplatin in LLC-PK ₁ cells	共著	2007 年 3 月	Cancer Ther. Vol. 5, No. 1	<u>K. Takara</u> , M. Tsujimoto, M. Kokufu, N. Kitada, T. Sakaeda, N. Ohnishi, T. Yokoyama	p. 89-96	
Expression profiles of a drug metabolizing enzyme CYP3A62 mRNA in the intestine of rats	共著	2007 年 5 月	EXCLI Journal Vol. 6	<u>K. Takara</u> , S. Horibe, E. Yoshikawa, H. Kishi, N. Kitada, N. Ohnishi, T. Yokoyama	p. 138-144	
マレイン酸イルソグラジン口腔内崩壊錠(ガスロン [®] ・OD 錠)の全自動錠剤分包機による調剤と簡易懸濁法への適応性	共著	2007 年 7 月	医療と薬学 Vol. 58, No. 1	高良恒史, 松原美佳, 横山照由	p. 75-84	
Effects of propolis extract on sensitivity to chemotherapeutic agents in HeLa and its resistant sublines	共著	2007 年 9 月	Phytother. Res. Vol. 21, No. 9	<u>K. Takara</u> , M. Fujita, M. Matsubara, T. Minegaki, N. Kitada, N. Ohnishi, T. Yokoyama	p. 841-846	
Reversal effects of Ca ²⁺ antagonists on multidrug resistance <i>via</i> down-regulation of MDR1 mRNA	共著	2007 年 9 月	Kobe J. Med. Sci. Vol. 53, No. 6	C. Komoto, T. Nakamura, M. Yamamori, N. Ohmoto, H. Kobayashi, A. Kuwahara, K. Nishiguchi, <u>K. Takara</u> , Y. Tanigawara, N. Okamura, K. Okumura, T. Sakaeda	p. 355-363	
血液腫瘍患者に対するがん化学療法における薬学的ケアの臨床的有用性	共著	2007 年 11 月	医療薬学 Vol. 33, No. 11	北澤文章, 安部敏生, 上田久美, 村頭 智, <u>高良恒史</u> , 横山照由, 杉井彦文	p. 932-936	
Oxaliplatin-induced hypersensitivity reaction displaying marked elevation of immunoglobulin E.	共著	2007 年 12 月	J. Oncol. Pharm. Pract. Vol. 13, No. 4	N. Kitada, T. Dan, <u>K. Takara</u> , T. Tsuji, H. Yamasaki, T. Yokoyama, M. Watari	p. 233-235	
Effects of Sairei-to on the pharmacokinetics of nifedipine in rats	共著	2008 年 1 月	Phytother. Res. Vol. 22, No. 1	M. Ikehata, N. Ohnishi, T. Matsumoto, Y. Kiyohara, A. Maeda, T. Kawakita, <u>K. Takara</u> , T. Yokoyama	p. 12-17	

一般病院における乳がん化学療法の均てん化を目指して－ECおよびFEC療法の実態調査－	共著	2008年2月	癌と化学療法 Vol. 35, No. 2	北田徳昭, 中山貴寛, 森田聡子, 笹岡英明, 山崎元, 阿南節子, 龍田眞行, 古河洋, 森本茂文, 宮部貴識, 長谷川健次, 田伏克惇, 高良恒史, 横山照由, 渡 雅克	p. 267-271	
血液透析患者においてフェキシソフェナジンの服用によりジゴキシンの血清中濃度が低下した症例	共著	2008年3月	医療薬学 Vol. 34, No. 3	西田愛子, 三宅健文, 辻本雅之, 今田直樹, 青木正, 高良恒史, 横山照由	p. 252-255	
Comparative analysis of cell injury after exposure to antitumor platinum derivatives in kidney tubular epithelial cells	共著	2008年6月	Chemotherapy Vol. 54, No. 3	N. Kitada, K. Takara, C. Itoh, T. Minegaki, M. Tsujimoto, T. Sakaeda, T. Yokoyama	p. 217-223	
一般病院における大腸がん化学療法 mFOLFOX6 による治療の現状および施設間格差の検討	共著	2008年7月	癌と化学療法 Vol. 35, No. 7	北田徳昭, 森田聡子, 森本茂文, 山崎元, 藤井千賀, 阿南節子, 福永睦, 古河洋, 高良恒史, 横山照由, 渡 雅克	p. 1175-1180	
Factors affecting sensitivity to antitumor platinum derivatives of human colorectal tumor cell lines	共著	2008年9月	Cancer Chemother. Pharmacol. Vol. 62, No. 4	N. Kitada, K. Takara, T. Minegaki, C. Itoh, M. Tsujimoto, T. Sakaeda, T. Yokoyama	p. 577-584	
Effects of <i>Agaricus blazei</i> Murill extract on sensitivity to chemotherapeutic agents in HeLa cells and its resistant sublines	共著	2008年9月	J. Dietary Suppl. Vol. 5, No. 3	K. Takara, Y. Shin, Y. Obata, N. Kitada, N. Ohnishi, T. Yokoyama	p. 283-292	
Effects of concentrated turmeric extract on the pharmacokinetics of nifedipine in healthy volunteers	共著	2008年12月	J. Dietary Suppl. Vol. 5, No. 4	M. Ikehata, N. Ohnishi, S. Egami, H. Kishi, Y. Shin, K. Takara, T. Yokoyama, Y. Tsuchishita, N. Tokuda, S. Hori, Y. Yatani, Y. Fujimura, M. Kusumoto, R. Tatami, M. Yoshioka, K. Kuroda, S. Yamada	p. 401-410	
造血器腫瘍患者に対するがん化学療法において薬学的ケアがもたらす医療経済学的効果	共著	2008年12月	医療薬学 Vol. 34, No. 12	北澤文章, 安部敏生, 上田久美, 村頭智, 高良恒史, 横山照由, 杉井彦文	p. 1091-1096	
Expression profiles of Abcg2 (Bcrp) and Abcc2 (Mrp2) in the intestinal tract of rats	共著	2009年1月	EXCLI Journal Vol. 8	S. Horibe, K. Takara, T. Minegaki, N. Ohnishi, T. Yokoyama	p. 12-29	

Molecular changes to HeLa cells on continuous exposure to SN-38, an active metabolite of irinotecan hydrochloride	共著	2009年2月	Cancer Lett. Vol. 278, No. 1	K. Takara, N. Kitada, E. Yoshikawa, K. Yamamoto, S. Horibe, T. Sakaeda, N. Ohnishi, T. Yokoyama	p. 88-96	
Relation with ageing and myelosuppression induced by CHOP regimen in patients with non-Hodgkin's lymphoma	共著	2009年3月	Cancer Ther. Vol. 7, No. 1	F. Kitazawa, T. Abe, K. Ueda, S. Murakami, K. Nishiguchi, K. Takara, T. Yokoyama, H. Sugii	p. 133-140	
The structure-activity correlation on the inhibitory effects of flavonoids on cytochrome P450 3A activity	共著	2009年4月	Biol. Pharm. Bull. Vol. 32, No. 4	M. Tsujimoto, M. Horie, H. Honda, K. Takara, K. Nishiguchi	p. 671-676	
一般病院における乳がん化学療法の均てん化を目指して(第2報)－FEC および TC 療法における安全性の検討－	共著	2009年10月	癌と化学療法 Vol. 36, No. 10	北田徳昭, 西野雅行, 安田 潤, 森田聡子, 近藤万友美, 峯垣哲也, 藤井千賀, 阿南節子, 高良恒史, 渡 雅克	p. 1671-1675	
Effects of α -adrenoceptor antagonist doxazosin on MDRI-mediated multidrug resistance and transcellular transport	共著	2009年11月	Oncol. Res. Vol. 17, No. 11-12	K. Takara, T. Sakaeda, M. Kakumoto, Y. Tanigawara, K. Okumura, H. Kobayashi, N. Ohnishi, T. Yokoyama	p. 527-533	
Inhibitory effects of 3-indoxyl sulfate and p-cresol on losartan metabolism	共著	2010年1月	J. Pharm. Pharmacol. Vol. 62, No. 1	M. Tsujimoto, K. Higuchi, D. Shima, H. Yokota, T. Furukubo, S. Izumi, T. Yamakawa, M. Otagiri, S. Hirata, T. Minegaki, K. Takara, K. Nishiguchi	p. 133-138	
がん化学療法施行患者の精神面に及ぼす薬学的ケアの影響	共著	2010年1月	医療薬学 Vol. 36, No. 1	北澤文章, 安部敏生, 上田久美, 村頭 智, 高良恒史, 横山照由, 杉井彦文	p. 37-43	
Characterization, in vitro cytotoxicity and cellular accumulation of paclitaxel-loaded lipid nano-emulsions	共著	2010年8月	J. Microencapsul. Vol. 27, No. 5	S. Takegami, K. Takara, S. Tanaka, K. Yamamoto, M. Hori, T. Yokoyama, T. Kitade	p. 453-459	
ボルテゾミブ投与により惹起される自律神経障害の臨床像およびそのリスク要因	共著	2010年11月	医療薬学 Vol. 36, No. 11	北澤文章, 安部敏生, 上田久美, 島崎千尋, 高良恒史, 横山照由, 杉井彦文	p. 786-791	
フェンタニルパッチ使用の適正化を目指して～本剤に対する鎮痛耐性が疑われた症例とオピオイド使用量調査～	共著	2010年12月	日本緩和医療薬学雑誌 Vol. 3, No. 3	北澤文章, 安部敏生, 上田久美, 弓場達也, 高良恒史, 横山照由, 杉井彦文	p. 93-96	

Quantitative proteomic and interaction network analysis of cisplatin resistance in HeLa cells	共著	2011 年 5 月	PLoS One Vol. 6, No. 5	JD. Chavez, MR. Hoopmann, CR. Weisbrod, <u>K. Takara</u> , JE. Bruce	p. e19892	
レナリドミドの薬剤配布プログラムの評価とその課題	共著	2011 年 7 月	日本病院薬剤師会雑誌 Vol. 47, No. 7	北澤文章, 角 陽子, 新居沙代子, 安澤紫織, 伊勢文孝, 上田久美, 島崎千尋, <u>高良恒史</u> , 横山照由, 杉井彦文	p. 857-861	
Differential effects of calcium antagonists on ABCG2/BCRP-mediated drug resistance and transport in SN-38-resistant HeLa cells	共著	2011 年 12 月	Mol Med Report. Vol. 5, No. 3	<u>K. Takara</u> , M. Matsubara, K. Yamamoto, T. Minegaki, S. Takegami, M. Takahashi, T. Yokoyama, K. Okumura	p. 603-609	
Treatment schedule-dependent effect of 5-fluorouracil and platinum derivatives in colorectal cancer cells	共著	2011 年 12 月	Eur J Pharm Sci. Vol. 45, No. 3	<u>K. Takara</u> , M. Fujita, T. Minegaki, K. Yamamoto, M. Takahashi, T. Yokoyama, K. Okumura	p. 272-281	
Effects of α -adrenoceptor antagonists on ABCG2/BCRP-mediated resistance and transport	共著	2012 年 2 月	PLoS One Vol. 7, No. 2	<u>K. Takara</u> , K. Yamamoto, M. Matsubara, T. Minegaki, M. Takahashi, T. Yokoyama, K. Okumura	p. e30697	
Effect of dexamethasone on extracellular secretion of cystatin C in cancer cell lines	共著	2013 年 1 月	Biomed. Report.	C. Yamawaki, M. Takahashi, <u>K. Takara</u> , M. Kume, M. Hirai, H. Yasui, T. Nakamura	p. 115-118	
Factors affecting the sensitivity of human-derived esophageal carcinoma cell lines to 5-fluorouracil and cisplatin	共著	2013 年 2 月	Oncol. Lett.	T. Minegaki, <u>K. Takara</u> , R. Hamaguchi, M. Tsujimoto, K. Nishiguchi	p. 427-434	
Quantitative interactome analysis reveals a chemoresistant edgotype	共著	2015 年	Nat. Commun.	Chavez JD, Schweppe DK, Eng JK, Zheng C, Taipale A, Zhang Y, Takara K, Bruce JE	p. 7928	
The interaction between oral melphalan and gastric antisecretory drugs: impact on clinical efficacy and toxicity	共著	2016 年	Mol. Clin. Oncol.	F. Kitazawa, Y. Kado, K. Ueda, T. Kokufu, S. Fuchida, A. Okano, M. Hatsuse, S. Murakami, Y. Nakayama, <u>K. Takara</u> *, C. Shimazaki	p. 293-297	
Induction of epithelial-mesenchymal transition via activation of epidermal	共著	2015 年	J. Pharm. Exp. Ther.	A. Mizumoto, K. Yamamoto*, Y. Nakayama, <u>K. Takara</u> , T.	p. 152-158	

growth factor receptor constitutes to sunitinib resistance in human renal cell carcinoma cell lines				Nakagawa, T. Hirano, M. Hirai		
Combination of lenalidomide and low-dose dexamethasone therapy promotes the anticoagulant activity of warfarin in patients with immunoglobulin light-chain amyloidosis	共著	2017 年	Oncol. Lett.	F. Kitazawa, Y. Kado, K. Ueda, T. Kokufu, S. Fuchida, A. Okano, M. Hatsuse, S. Murakami, Y. Nakayama, <u>K.</u> <u>Takara*</u> , C. Shimazaki	p. 475-479	
Pharmacokinetic Interaction between Tacrolimus and Fentanyl in Patients Receiving Allogeneic Hematopoietic Stem Cell Transplantation	共著	2017 年	Ann. Transplant.	F. Kitazawa, S. Fuchida, Y. Kado, K. Ueda, T. Kokufu, A. Okano, M. Hatsuse, S. Murakami, Y. Nakayama, <u>K.</u> <u>Takara*</u> , C. Shimazaki	p. 575-580	
同種造血幹細胞移植時に発現する口腔粘膜炎の重症度に影響を与えるリスク因子	共著	2018 年	日本病院薬剤師会雑誌 Vol. 54, No. 9	北澤文章, 片山実佳, 村山和子, 森本拓也, 上田久美, 中山優子, <u>高良恒史</u> , 佐原敏之, 淵田真一, 島崎千尋	p. 1126-1130	
モノクローナル抗体医薬品による血液に対する有害事象の発症時期ならびに発症パターンに関する調査.	共著	2018 年	医薬品情報学 Vol. 20	駒田富佐夫, 中山優子, <u>高良恒史</u>	p. 72-80	
Analysis of Time-to-onset and Onset-pattern of Interstitial Lung Disease after the Administration of Monoclonal Antibody Agents	共著	2018 年	YAKUGAKU ZASSHI Vol. 138, No. 12	Fusao Komada, Yuko Nakayama, <u>Kohji Takara</u>	p. 1587-1594	
【その他】 学部生を対象とした接遇・医療コミュニケーション実習の充実と学外実務実習への有用性	共同	2004 年 10 月	第 14 回日本医療薬学会年会(幕張)	國府美里, 橋詰勉, 津島美幸, 金澤治男, <u>高良恒史</u> , 大西憲明, 横山照由		学会発表
「実務実習の事前学習をどのように実施しているか」-薬学部・薬科大学のカリキュラム紹介-	共同	2004 年 10 月	第 14 回日本医療薬学会年会 (幕張)	病院薬学教室, 臨床薬学教育研究センター		特別展示
薬学教育 6 年制において京都薬科大学が目指すものは?	単独	2006 年 11 月	ナノライフサイエンス・オープンセミナー2006 (静岡)	<u>高良恒史</u> :		招待講演
地域連携における薬薬学合同症例検討会開催の効果と今後の課題	共同	2007 年 1 月	第 28 回日本病院薬剤師会近畿学術大会 (兵庫)	三宅健文, 駿田麻衣, 林野弥生, 松尾郁美, 間下祐次, 塚本理恵, 田中佑佳, 岡本早織, 中野葉子, 赤堀加奈, 近藤優樹, 高岡静香, 辻本雅之, <u>高良恒</u>		学会発表

				史, 横山照由		
ヒト大腸癌細胞におけるオキサリプラチン感受性規定因子の探索	共同	2007 年 3 月	日本薬学会第 127 年会 (富山)	峯垣哲也, <u>高良恒史</u> , 高原悠子, 布施直美, 北田徳昭, 栄田敏之, 辻本雅之, 横山照由		学会発表
BCRP 高発現細胞の抗癌剤感受性に及ぼす α 遮断薬の影響	共同	2008 年 2 月	第 29 回日本病院薬剤師会近畿学術大会 (奈良)	山本和宏, <u>高良恒史</u> , 松原三佳, 吉川依里, 佐藤晃司, 辻紗矢香, 濱口良平, 辻本雅之, 北田徳昭, 栄田敏之, 横山照由		学会発表
京都府病院薬剤師会・京都薬科大学の薬学連携ワークショップの現状と今後の課題	共同	2008 年 9 月	第 18 回日本医療薬学会年会 (札幌)	藤原洋一, <u>高良恒史</u> , 橋詰 勉, 津島美幸, 安田江里, 石川誠司, 高山 明, 杉井彦文		学会発表
ラパマイシン標的タンパク質 (mTOR) シグナル伝達系の栄養感知システムとしての役割とその分子メカニズム	共同	2009 年 3 月	日本薬学会第 129 年会 (京都)	山本和宏, 原 賢太, 永田正男, <u>高良恒史</u> , 西口工司, 平井みどり, 横野浩一		学会発表
網羅的遺伝子発現解析に基づいた抗腫瘍性白金錯体感受性因子の探索	共同	2009 年 10 月	第 19 回日本医療薬学会年会 (長崎)	藪田直希, <u>高良恒史</u> , 峯垣哲也, 北田徳昭, 辻本雅之, 西口工司, 横山照由		学会発表
5-FU 並びに抗腫瘍性白金錯体に対する感受性規定因子の探索	共同	2010 年 3 月	日本薬学会第 130 年会 (岡山)	濱口良平, <u>高良恒史</u> , 峯垣哲也, 辻本雅之, 栄田敏之, 西口工司		学会発表
大腸癌細胞での抗腫瘍性白金錯体及び 5-FU の感受性を規定する要因の探索	共同	2010 年 3 月	日本薬学会第 130 年会 (岡山)	峯垣哲也, <u>高良恒史</u> , 濱口良平, 藪田直希, 辻本雅之, 西口工司		学会発表
BRCA 発現量に基づいた抗癌剤感受性の癌種依存性並びに抗癌剤依存性	共同	2011 年 3 月	日本薬学会第 131 年会 (静岡)	藪田直希, 峯垣哲也, 伯井理恵子, 藤井尚子, 湯月翔太, 辻本雅之, <u>高良恒史</u> , 西口工司		学会発表
75 歳以上の高齢非ホジキンリンパ腫患者における化学療法中止に及ぼすリスク因子の探索	共同	2011 年 10 月	第 21 回日本医療薬学会年会 (神戸)	北澤文章, 伊勢文孝, 角 陽子, 上田久美, 村頭智, <u>高良恒史</u> , 横山照由, 杉井彦文		学会発表
ヒト腎癌由来 Caki-2 細胞株に対するエベロリムス長期曝露の影響	共同	2012 年 1 月	第 33 回日本病院薬剤師会近畿学術大会 (大阪)	中山優子, 高橋稔, 中村 任, 奥村勝彦, <u>高良恒史</u>		学会発表
エベロリムスで長期曝露したヒト腎臓癌由来 Caki-2 の細胞特性	共同	2012 年 3 月	日本薬学会第 132 年会 (札幌)	中山優子, <u>高良恒史</u> , 高橋 稔, 奥村勝彦		学会発表
ヒト由来癌細胞株の DNA メチル化と抗癌剤感受性の関連性	共同	2012 年 3 月	日本薬学会第 132 年会 (札幌)	高橋 稔, <u>高良恒史</u> , 中山優子, 奥村勝彦		学会発表
培養細胞におけるシスタチン C 分泌に及ぼすデキサメタゾンの影響	共同	2012 年 5 月	日本薬剤学会第 27 年会 (神戸)	山脇知佳, 高橋稔, 高良恒史, 久米学, 安井裕之, 中村任		学会発表

レナリドミド水和物 25 mg で治療開始後に投与量変更を必要とされる患者側要因について	共同	2012 年 10 月	第 22 回日本医療薬学会年会（新潟）	角 陽子、北澤文章、伊勢文孝、上田久美、島崎千尋、 <u>高良恒史</u> 、杉井彦文		学会発表
エベロリムスの長期曝露がヒト腎癌細胞株に及ぼす影響	共同	2012 年 10 月	第 62 回日本薬学会近畿支部総会・大会（西宮）	中山優子、高橋稔、奥村勝彦、 <u>高良恒史</u>		学会発表
ヒト食道癌細胞株における抗癌剤感受性規定因子の探索	共同	2012 年 12 月	生物分子システムに基づく創薬化学フロンティア研究成果発表会（京都）	峯垣哲也、 <u>高良恒史</u> 、濱口良平、辻本雅之、西口工司		学会発表
mTOR 阻害薬暴露下におけるヒト腎癌細胞での分子プロファイリング解析—より有効性の高いシークエンシャル治療の構築に向けて—	共同	2013 年 10 月	第 63 回日本薬学会近畿支部総会・大会（京都）	水本篤志、山本和宏、宇田篤史、 <u>高良恒史</u> 、中山優子、平野剛、平井みどり		学会発表
MAPK-STAT3 シグナル変動解析によるマルチキナーゼ阻害薬治療アルゴリズムの確立	共同	2014 年 3 月	日本薬学会第 134 年会（熊本）	水本篤志、山本和宏、宇田篤史、中山優子、 <u>高良恒史</u> 、中川勉、平野 剛、平井みどり		学会発表
マウス胚由来腫瘍細胞から拍動心筋細胞への分化に及ぼす分化誘導剤の併用効果の検討	共同	2014 年 3 月	日本薬学会第 134 年会（熊本）	岩切悦子、植村尚久、橋本夏実、菊地晴久、大島吉輝、瀬谷和彦、古川賢一、中山優子、 <u>高良恒史</u> 、木下淳、駒田富佐夫		学会発表
分子標的治療薬エベロリムスの長期曝露が抗癌剤感受性に及ぼす影響	共同	2014 年 3 月	日本薬学会第 134 年会（熊本）	中山優子、宮本優治、高橋 稔、 <u>高良恒史</u>		学会発表
腎細胞癌におけるアキシチニブとスニチニブの EMT に及ぼす効果の比較 —戦略的な RCC 治療を目指して—	共同	2014 年 10 月	64 回日本薬学会近畿支部総会・大会（京都）	水本篤志、山本和宏、 <u>高良恒史</u> 、中山優子、中川勉、平野剛、平井みどり		学会発表
アキシチニブで長期曝露したヒト腎臓癌由来 Caki-2 の細胞特性	共同	2015 年 3 月	日本薬学会第 135 年会（神戸）	中山優子、山本和宏、峯垣哲也、木下淳、 <u>高良恒史</u>		学会発表
腎細胞癌におけるスニチニブ不応性および耐性メカニズムの探索	共同	2015 年 3 月	日本薬学会第 135 年会（神戸）	水本篤志、山本和宏、 <u>高良恒史</u> 、中山優子、中川勉、平野剛、平井みどり		学会発表
Poly(ADP-ribose)polymerase 阻害剤 Veliparib 耐性ヒト乳癌細胞株の樹立とその特性	共同	2015 年 3 月	日本薬学会第 135 年会（神戸）	山本彩佳、峯垣哲也、棚橋真実、宮本恵輔、荒木 悠、稲垣恵未、林 絵里、伊藤 恵、吉本咲貴、中山優子、 <u>高良恒史</u> 、辻本雅之、西口工司		学会発表
アミノ酸トランスポーターを標的としたシスプラチン耐性の克服	共同	2015 年 11 月	第 25 回日本医療薬学会年会（横浜）	中山優子、深澤郁也、木下淳、峯垣哲也、山本和宏、 <u>高良恒史</u>		学会発表
アミノ酸トランスポーターの発現と抗癌剤耐性との関連性	共同	2016 年 3 月	日本薬学会第 136 年会（横浜）	中山優子、木下淳、峯垣哲也、山本和宏、 <u>高良恒史</u>		学会発表

ABCB5 発現抑制によるシスプラチン耐性の誘導	共同	2016 年 3 月	日本薬学会第 136 年会（横浜）	中山優子、木下淳、峯垣哲也、山本和宏、高良恒史		学会発表
Poly (ADP-ribose) polymerase 阻害剤耐性乳がん細胞株の樹立とその耐性メカニズムの解明	共同	2016 年 3 月	日本薬学会第 136 年会（横浜）	峯垣哲也、荒木悠、稲垣恵未、林絵里、山本彩佳、松本彩夏、森山由美、和田明莉、伊藤 恵、吉本咲貴、棚橋真実、宮本恵輔、中山優子、辻本雅之、高良恒史、西口工司		学会発表
Poly (ADP-ribose) polymerase 阻害剤オラパリブ耐性細胞株の樹立とその耐性メカニズムの解明	共同	2016 年 6 月	医療薬学フォーラム 2016 第 24 回クリニカルファーマシーシンポジウム（滋賀）	絵里、峯垣哲也、荒木 悠、稲垣恵未、棚橋真実、宮本恵輔、山本彩佳、松本彩夏、森山由美、和田明莉、高良恒史、辻本雅之、西口工司		学会発表
抗癌剤耐性細胞におけるアミノ酸トランスポーターの発現解析	共同	2018 年 3 月	日本薬学会第 137 年会（金沢）	中山優子、大西晃、山本成人、峯垣哲也、山本和宏、高良恒史		学会発表
同種造血幹細胞移植時の口腔粘膜炎の発現および重症度に及ぼす前処置の影響	共同	2018 年 11 月	第 28 回日本医療薬学会年会（神戸）	吉越静香、北澤文章、村山和子、森本拓也、上田久美、中山優子、高良恒史、佐原敏之、淵田真一、島崎千尋		学会発表
Molecular characteristics of human leukemia cell line after the long-term exposure to the Bcl-2 inhibitor ABT-199	共同	2019 年 2 月	第 2 回国際がん研究シンポジウム（大阪）	Yuko Nakayama, Kohji Takara, Tetsuya Minegaki, Kazuhiro Yamamoto, Ikuko Yano		学会発表

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2004 年 5 月～現在	TDM 学会 評議員
2009 年 4 月～2011 年 3 月	日本薬学会ファルマシアトピックス専門小委員
2012 年 4 月～2014 年 3 月	兵庫県薬剤師会 薬大支部支部長
2012 年 4 月～2014 年 3 月	兵庫県薬剤師会 薬学教育部委員
2016 年 4 月～2018 年 3 月	日本薬学会近畿支部 幹事
2016 年 10 月	日本薬学会近畿支部奨励賞 審査委員
2018 年 4 月～現在	日本薬学会近畿支部 庶務幹事
2018 年 4 月～現在	第 68 回日本薬学会近畿支部総会・大会 実施委員長
2018 年 4 月～現在	日本医療薬学会第 2 回フレッシュャーズ・カンファランス 実行委員

V 学内における主な活動

2011年4月～2016年3月	薬学部 実務実習委員
2012年4月～2016年3月	国際交流センター運営委員
2010年～現在	薬学部 OSCE 実施委員
2012年4月～2015年3月	薬学部 OSCE 実施委員長
2012年4月～2014年3月	薬学部 実習部長
2015年4月～2017年3月	薬学部 自己点検・評価委員会委員
2016年4月～現在	労働安全衛生委員会 委員
2016年4月～2017年3月	薬学部 国試対策委員会 委員長
2017年4月～2018年3月	薬学部 薬学教育推進委員会 委員長
2018年4月～現在	薬学部 薬学教育推進委員会 委員
2017年4月～現在	薬学部 FD委員会 委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	寺岡 麗子	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
【神戸薬科大学】 ①大学院における教育 神戸薬科大学大学院薬学研究科の 研究指導及び講義	1995 年-2018 年	研究室で行う論文抄読会において各自の研究分野又はその周辺の学術論文の内容について報告・紹介させ、自分の研究での活用、プレゼンテーション能力の向上及び客観的な論文評価能力を培った。また、定期的に研究テーマについて報告させ、現在の自分の研究内容について進展状況や問題点を多面的に把握できるよう指導を行った。学会にも積極的に参加し、プレゼンテーション及びディスカッションの能力が向上に努めた。講義では研究成果やトピックス的な内容を紹介した。
②学部における教育 情報リテラシー	2006 年 4 月-2018 年 3 月	神戸薬科大学薬学部の 1 年次の学生に情報リテラシーの講義・演習を行った。ネットワーク使用上のマナーやソフトウェア使用上のルールやマナーを守ることに重点を置き、インターネットを利用した情報の収集、開示、データベースの使用法、プレゼンテーションやレポート作成に必要な word, excel, powerpoint の使用法などに関する基礎的知識や技能について講義し、演習を行った。
薬剤学・製剤学実習	2014 年 9 月～2018 年 3 月	神戸薬科大学薬学部 3 年次の薬剤学・製剤学実習の製剤関連実習の指導を後期に行った。顆粒、錠剤の製造や粉体の物性測定及び製剤試験法について、実際の製剤機械や製剤試験機を用いて行っている。
薬剤設計学	2008 年 9 月～2018 年 3 月	神戸薬科大学薬学部の 3 年次に薬剤設計学の講義を行った。実際に市販されている製剤の写真を多く用いた powerpoint 資料を用いて講義を行い、剤形についての理解を高めるようにしていた。この講義資料は、印刷物として講義前に配付している。また、講義内容の小テストを数回行い、講義内容が把握できるようにした。
医薬品開発 I	2011 年 4 月～2017 年 3 月	神戸薬科大学薬学部の 6 年次に医薬品開発 I の講義を分担して行った。薬価、ジェネリック医薬品、オーファンドラッグについて powerpoint 資料を用いて講義を行った。
卒業研究 I, II	2009 年 12 月～2018 年 3 月	神戸薬科大学薬学部 4～6 年次の学生に卒業研究 I, II の指導を行った。製剤学研究室に所属された 4～6 年次の学生に一つのテーマに関して卒業実験又は文献調査を指導した。また、英語論文を読み、まとめて発表させている。終了時には各自の成果をまとめて報告書として提出させ、製本し、学生にも配布しており、研究室及び学内報告会で成果を口述発表させた。
【姫路獨協大学】 薬剤学 I	2018 年 4 月～	薬剤学 I（物理薬剤学）の講義を分担した。講義で使用する資料を学生にすべて配布し、講義を行った。また、小テストを利用し、講義の内容の理解が進むようにした。

薬剤学Ⅱ	2018 年 9 月～	薬剤学Ⅱの講義を分担した。最新の局方通則や製剤総則など講義に必要な部分を冊子にして配布した。また、講義で使用する資料を学生にすべて配布し、講義を行った。更に、復習を促すために小テストを行ったり、講義に関連している国家試験問題などを配付したりして講義の内容の理解が進むようにした。
薬剤系総合演習	2018 年 9 月～	薬剤系総合演習において、薬剤学Ⅰに関連する分野について TBL 形式の演習を行った。この形式の演習では予習が必要となり、また、t-RAT 形式の学習ではグループとして問題に取り組むため、出題した問題の理解度の向上に繋がった。
模擬薬局実習	2018 年 9 月～	模擬薬局実習において主に無菌操作の実践を担当した。手技操作の意味を理解するよう心がけた。その他、抗悪性腫瘍剤の調製時の注意事項や、注射剤の配合変化、高カロリー輸液で起こるメイラード反応についても実習を行い、理解が深まるようにした。
総合薬学演習Ⅲ	2018 年 9 月～	担当分野に関連する国家試験や模擬試験の問題を授業時間の前半で解いてもらって、その後それらの問題に解説を行った。
2 作成した教科書、教材、参考書		
① 薬剤学・製剤学実習テキスト	2008 年 9 月～2018 年 3 月	薬剤学・製剤学実習テキスト
② 薬剤学Ⅰの講義資料	2018 年 4 月～	薬剤学Ⅰの講義資料、演習問題
③ 薬剤学Ⅱの講義資料	2018 年 9 月～	薬剤学Ⅱの講義資料、演習問題
④ 総合薬学演習Ⅲの講義資料	2018 年 9 月～	総合薬学演習Ⅲの演習問題
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み	2017/9/2-3	第2回日本薬学教育学会大会 八巻耕也、池田宏二、上田久美子、土生康司、中山喜明、武田紀彦、森脇健介、和田昭盛、小山淳子、児玉典子、北河修治
チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築	2018/9/1-2	第3回日本薬学教育学会大会 上田久美子、八巻耕也、土生康司、寺岡麗子、宮田 興子、中山尋量、北河修治
4 その他教育活動上特記すべき事項		
その他	2007 年 7 月～現在に至る	認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ in 近畿にタスクフォースとして年3回程度参加し、認定実務実習指導薬剤師養成に関わっている。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著/編	発行または発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】						
【論文】 Effects of mixing procedure itself on the structure, viscosity, and spreadability of white petrolatum and salicylic acid ointment and the skin permeation of salicylic acid	共著	2015	Chem. Pharm. Bull. Vol. 63	Kitagawa S., Fujiwara M., Okinaka Y., Yutani R., <u>Teraoka R.</u>	43-48	
Microemulsion using polyoxyethylene sorbitan trioleate and its usage for skin delivery of resveratrol	共著	2015	Chem. Pharm. Bull. Vol. 63	Yutani R., <u>Teraoka R.</u> , Kitagawa S.	741-745	

to protect skin against UV-induced damage						
Efficient skin delivery of resveratrol by microemulsion using pentaglycerol monolaurate as a surfactant component	共著	2015	Int. J. Adv. Nanoma. Vol. 1	Kitagawa S., Azuma K., Yutani R., <u>Teraoka R.</u>	5-12	
Differences in the rheological properties and mixing compatibility with heparinoid cream of brand name and generic steroidal ointments: The effects of their surfactants	共著	2016	Results Pharma. Sci. Vol. 6	Kitagawa S., Yutani R., Kodani R., <u>Teraoka R.</u>	7-14	
Prominent efficiency in skin delivery of resveratrol by novel sucrose oleate microemulsion	共著	2016	J. Pharm. Pharmacol. Vol. 68	Yutani R., Komori Y., Tekeuchi A., <u>Teraoka R.</u> , Kitagawa S.	46-55	
Differences in the rheological properties and mixing compatibility with heparinoid cream of brand name and generic steroidal ointments: The effects of their surfactants	共著	2016	Results Pharma Sci. Vol. 6	Kitagawa S., Yutani R., Kodani R., <u>Teraoka R</u>	7-14	
1日1回貼り替え型フェンタニルクエン酸塩貼付剤（フェントステープ）の薬物残存量に影響を与える要因	共著	2016	日本緩和医療薬学雑誌 Vol. 9	寺岡 麗子, 中山みずえ, 堅 ゆりか, 上田 華世, 湯谷 玲子, 沼田千賀子, 岡本 禎晃, 平野 剛, 富田 猛, 平井 みどり, 北河 修治	25-32	
フィルムドレッシング材による1日1回型フェンタニルクエン酸塩経皮吸収型製剤の半量投与	共著	2017	医療薬学 Vol. 43	寺岡麗子, 三宅真衣, 伊藤真依, 塩野朋香, 沼田千賀子, 中山みずえ, 岡本禎晃, 平井みどり, 湯谷玲子, 北河修治, 坂根稔康	671-679	
Photostability of risperidone in tablets	共著	2018	KONA Vol. 35	Fujisawa Y., Takahashi Y., <u>Teraoka R.</u> , Kitagawa S.	209-215	
実践報告「チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み」	共著	2018	薬学教育 Vol. 1	上田久美子, 寺岡麗子, 八巻耕也, 土生康司, 宮田興子, 北河修治	2017-012	
Novel strategy for improving the bioavailability of curcumin based on a new membrane transport mechanism that directly involves solid particles	共著	2018	Eur J. Pharm. Biopharm. Vol. 122	Kimura S., Kiriya A., Araki K., Yoshizumi M., Enomura M., Inoue D., Furubayashi T., Yutani R., <u>Teraoka R.</u> , Tanaka A., Kusamori K., Katsumi H., Yamamoto A., Iga K., Sakane T.	1-5	
Utility of solid-state UV/Vis	共著	2018	Chem. Pharm. Bull.	Kiguchiya A.,	892-895	

spectra on the evaluation of photostability of indomethacin crystals			Vol. 66	Teraoka R., Sakane T.		
【資料】 薬学教育早期体験学習におけるピア評価の試み	共著	2018	神戸薬科大学研究論集 Libra	上田久美子, 寺岡麗子, 竹内敦子, 安岡由美, 内田吉昭, 八巻耕也, 土生康司, 宮田興子, 中山尋量, 北河修治	1-11	学会発表
【その他】 レボフロキサシン-サッカリン Cocrystal の光安定性	共同	2015 年 3 月	日本薬学会第 135 年会 (神戸)	馬淵はな, 長瀬弘昌, 都出千里, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
平衡相対湿度がアムロジピン口腔内崩壊錠の製剤特性に及ぼす影響	共同	2015 年 3 月	日本薬学会第 135 年会 (神戸)	岡田 和也, 東城守夫, 湯谷 玲子, 寺岡 麗子, 北河修治		学会発表
ステロイド軟膏剤の先発品, 後発品のレオロジー特性及びクリーム剤との混合性の違い - 界面活性剤の影響 -	共同	2015 年 3 月	日本薬学会第 135 年会 (神戸)	小谷隆一, 内田 梓, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
ステロイド軟膏剤のレオロジー特性に及ぼす添加物の影響	共同	2015 年 3 月	日本薬学会第 135 年会 (神戸)	内田 梓, 小谷隆一, 山下優太, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
ショ糖オレイン酸エステルマイクロエマルジョンを利用したレスベラトロールの効率的皮膚デリバリー	共同	2015 年 5 月	日本膜学会第 37 年会 (東京)	湯谷玲子, 小守佑果, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
先発, 後発ステロイド軟膏剤のレオロジー特性と油性クリーム剤との混合性	共同	2015 年 5 月	日本薬剤学会第 30 年会 (長崎)	西垣彰人, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
フロセミド/ニコチンアミド Cocrystal の結晶多形の光安定性	共同	2015 年 5 月	日本薬剤学会第 30 年会 (長崎)	野田有貴子, 寺岡麗子, 湯谷玲子, 北河修治		学会発表
マイクロエマルジョンの構成成分の違いによるレスベラトロールの皮膚デリバリーへの影響	共同	2015 年 5 月	日本薬剤学会第 30 年会 (長崎)	俵 周平, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
各種白色ワセリンのレオロジー特性の違いと混合操作の影響	共同	2015 年 8 月	第 18 回近畿薬剤師学会 (神戸)	三宅真唯, 猪原振一, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
ヘパリン類似物質含有油性クリーム剤の先発品, 後発品のレオロジー特性とステロイド軟膏剤との混合性	共同	2015 年 8 月	第 18 回近畿薬剤師学会 (神戸)	近野詩乃, 大石真央, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
ポリフェノールの皮膚デリバリー改善に有用なマイクロエマルジョン成分の検討 - 補助界面活性剤が皮膚デリバリーに与える影響 -	共同	2015 年 9 月	日本油化学会第 54 回年会 (名古屋)	信野亜由美, 片岡悠, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
ポリグリセリンオレイン酸エステルを用いたマイクロエマルジョンによるレスベラトロールの皮膚デリバリー	共同	2015 年 9 月	日本油化学会第 54 回年会 (名古屋)	小池和彦, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
被覆材を用いたフェントス®テープ 1 mg 貼付剤の用量調節 I	共同	2015 年 10 月	第 9 回日本緩和医療薬学会年会 (横浜)	三宅真衣, 寺岡麗子, 湯谷玲子, 沼田千賀子, 岡本禎晃, 平野 剛, 富田 猛, 平井みどり, 北河修治		学会発表
被覆材を用いたフェントス®	共同	2015 年 10 月	第 9 回日本緩和医療薬学会	伊藤真依, 寺岡麗子		学会発表

テープ 1 mg 貼付剤の用量調節 II			年会 (横浜)	子, 湯谷玲子, 沼田千賀子, 岡本禎晃, 平野 剛, 富田 猛, 平井みどり, 北河修治		
シクロデキストリン包接化によるエピガロカテキンガラートの経皮吸収性改善	共同	2015年10月	第65回日本薬学会近畿支部総会・大会 (大阪)	宮成明歩, 寺岡麗子, 湯谷玲子, 北河修治		学会発表
ロビナビル・リトナビル配合内用液または配合錠とアバカビル硫酸塩・ラミブジン配合錠の同時簡易懸濁法適用について	共同	2015年11月	第25回日本医療薬学会年会 (横浜)	坪田有加, 松尾理世, 寺岡麗子, 矢倉裕輝, 湯谷玲子, 北河修治		学会発表
シクロデキストリン包接化によるケルセチンの皮膚移行性の改善	共同	2016年3月	日本薬学会第136年会 (横浜)	中部由香莉, 寺岡麗子, 湯谷玲子, 北河修治		学会発表
フィルムコーティング剤の吸湿特性が錠剤の外観変化に及ぼす影響	共同	2016年3月	日本薬学会第136年会 (横浜)	濱端綾太, 松島由貴, 寺岡麗子, 湯谷玲子, 北河修治		学会発表
ジメチルイソプロピルアズレンを含有する軟膏剤の先発品, 後発品のレオロジー特性と混合操作によるその特性の違い	共同	2016年3月	日本薬学会第136年会 (横浜)	近野詩乃, 大石真央, 山本有紀, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
ステロイド軟膏剤の先発品と後発品とヒルドイドソフト軟膏との混合性—ステロイド軟膏剤に含有される界面活性剤の影響—	共同	2016年3月	日本薬学会第136年会 (横浜)	大石真央, 近野詩乃, 西垣彰人, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
白色ワセリンの製品間でのレオロジー特性の違いと混合操作の影響	共同	2016年5月	日本薬剤学会第31年会 (岐阜)	三真唯, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
ジフルブレドナート含有軟膏剤の先発品と後発品のレオロジー特性と混合操作の影響	共同	2016年5月	日本薬剤学会第31年会 (岐阜)	猪原振一, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
種々の補助界面活性剤を用いたマイクロエマルジョンによるポリフェノールの皮膚デリバリー改善効果の比較	共同	2016年5月	日本薬剤学会第31年会 (岐阜)	堤 夕実, 信野 亜由美, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
種々の界面活性剤を用いたマイクロエマルジョンによるレスベラトロールの皮膚デリバリー改善	共同	2016年5月	日本薬剤学会第31年会 (岐阜)	浅田めぐみ, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
シプロフロキサシンとそのサッカリン塩の光安定性比較	共同	2016年5月	日本薬剤学会第31年会 (岐阜)	宮崎智子, 安藤未裕, 寺岡麗子, 都出千里, 長瀬弘昌, 湯谷玲子, 北河修治		学会発表
Half Dose Administration Using Once-a-Day Fentanyl Patch 12.5 μ g/h with Film Dressings	共同	2016年6月	9th World Research Congress of the European Association for Palliative Care (Dublin)	Teraoka R., Miyake M., Okamoto Y., Nakayama M., Numata C., Hirai M., Yutani R., Kitagawa S		学会発表
2-ヒドロキシプロピル- γ -シクロデキストリンとエトキシジグリコールによるケルセチンの経皮吸収性改善	共同	2016年9月	第33回シクロデキストリンシンポジウム (香川)	清水和香, 寺岡麗子, 湯谷玲子, 北河修治, 坂根稔康		学会発表
亜鉛華単軟膏のレオロジー特性とアズノール軟膏との混合性	共同	2016年9月	第26回日本医療薬学会年会 (京都)	佐藤麻衣子, 田路隆了, 田原花奈子, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治, 坂根稔康		学会発表
ドルテグラビルナトリウム錠の簡易懸濁時の錠剤崩壊性, チューブ通過性および安定性に	共同	2016年9月	第26回日本医療薬学会年会 (京都)	松尾理世, 出口千裕, 寺岡麗子, 倉裕輝, 湯谷 玲		学会発表

について				子, 北河修治, 坂根稔康		
フェンタニル3日用テープ剤の 先発品と後発品の溶出性, 皮膚 透過性及び貼付済みテープ剤 中のフェンタニル残存率の比 較	共同	2016年9月	第26回日本医療薬学会年 会(京都)	武田真伊子, 中山 加菜恵, 寺岡麗 子, 湯谷玲子, 沼 田千賀子, 岡本 禎晃, 大槻裕朗, 高子優子, 平井 みどり, 北河修 治, 坂根稔康		学会発表
Transnasal delivery of the peptide to the brain	共同	2017年3月	International Symposium on Drug Delivery and Pharmaceutical Sciences (Kyoto)	Sakane T., Yutani R., Teraoka R., Tanaka A., Takemura Y., Taketa K., Takayama K., Hayashi Y., Kusamori K., Katsumi H.,		学会発表
攪拌操作に伴う白色ワセリン のレオロジー特性の経時的変 化	共同	2017年3月	日本薬学会第137年会(仙 台)	田路隆了, 湯谷玲 子, 寺岡麗子, 坂 根稔康		学会発表
鼻腔内投与によるCPN-116の脳 内送達	共同	2017年3月	日本薬学会第137年会(仙 台)	坂根稔康, 田中晶 子, 竹村有希, 湯 谷玲子, 寺岡麗 子, 武田康嗣, 高 山健太郎, 草森浩 輔, 勝見英正, 林 良雄, 山本 昌		学会発表
シプロフロキサシンサッカリ ン塩結晶多形の新規調製方法 とその物理化学的特性および 光安定性	共同	2017年3月	日本薬学会第137年会(仙 台)	松川美佐子, 宮崎 智子, 寺岡麗子, 湯谷玲子, 都出千 里, 坂根稔康		学会発表
ププリフロキサシンとサッカ リン塩及び種々の有機酸塩の 光安定性及び熱安定性	共同	2017年3月	日本薬学会第137年会(仙 台)	土居千沙, 寺岡麗 子, 湯谷玲子, 出 千里, 坂根稔康		学会発表
市販リマプロストアルファデ クス錠の分解速度の湿度依存 性	共同	2017年5月	日本薬剤学会第32年会(さ いたま)	松本祐樹, 寺岡麗 子, 湯谷玲子, 坂 根稔康		学会発表
Microemulsions using sucrose laurate with various cosurfactants and their application to intradermal delivery of (-)-epicatechin	共同	2017年5月	6th FIP Pharmaceutical Sciences World Congress 2017 Stockholm (Sweden)	Yutani R., Tsutsumi Y., Teraoka R., Sakane T.		学会発表
New preparation method for two crystal forms of ciprofloxacin saccharinate and their photostability and hygroscopic property	共同	2017年5月	6th FIP Pharmaceutical Sciences World Congress 2017 Stockholm (Sweden)	Teraoka R., Matsukawa M., Miyazaki T., Yutani R., Tode C., Sakane T.		学会発表
在宅中心静脈栄養法を適用す るための注射剤混合高カロリ ー輸液の安定性評価 -エルネ オバ輸液にリンデロン注を混 合した場合-	共同	2017年7月	医療薬学フォーラム2017 第25回クリニカルファ ーマシーシンポジウム(鹿児 島)	中山加菜恵, 寺岡 麗子, 黒田英津 子, 青木菜摘, 入 江穂花, 湯谷玲 子, 坂根 稔康		学会発表
他剤との混合に伴うワセリン 軟膏からのサリチル酸の経皮 吸収性の変化	共同	2017年7月	医療薬学フォーラム2017 第25回クリニカルファ ーマシーシンポジウム(鹿児 島)	田原花奈子, 宍戸 康剛, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修 治, 坂根稔康		学会発表
経鼻ルートを介した薬物の頸 部リンパ節ターゲティング と速度論解析	共同	2017年7月	医療薬学フォーラム2017 第25回クリニカルファ ーマシーシンポジウム(鹿児 島)	古林呂之, 井上大 輔, 田中晶子, 勝 見英正, 山本 昌, 湯谷玲子, 寺岡麗 子, 坂根稔康		学会発表
Direct Nose to Brain Delivery of CNS Drugs: The Effect of	共同	2017年10月	第11回次世代を担う若手 医療薬科学シンポジウム	Inoue D., Tanaka A., Katsumi H.,		学会発表

Glymphatic System on Drug Distribution in Brain Parenchyma			(京都)	Yamamoto A., Yutani R., <u>Teraoka R.</u> , Sakane T., Furubayashi T.		
Effects of mixing with other ointments and creams on rheological properties of salicylic acid ointment and skin permeation of salicylic acid	共同	2017年10月	第11回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム (京都)	Yutani R., Tawara K., Shishido Y., <u>Teraoka R.</u> , Kitagawa S., Sakane T.		学会発表
テノホビルのプロドラッグを含有する2種類の抗HIV薬の簡易懸濁法適用の可否	共同	2017年11月	第27回日本医療薬学会年会 (千葉)	出口千裕, 寺岡麗子, 矢倉裕輝, 湯谷玲子, 坂根稔康		学会発表
ワセリンを基剤とする軟膏剤の特性に及ぼす攪拌操作及び温度の影響	共同	2017年11月	第27回日本医療薬学会年会 (千葉)	三木奏人, 田路隆了, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 坂根稔康		学会発表
Direct Nose to Brain Delivery of CNS Drugs: The effect of Glymphatic System on Pharmacokinetics and Brain Distribution of Sulpiride after Nasal Application	共同	2017年11月	2017 AAPS Annual Meeting and Exposition (SanDiego)	Inoue D., Tanaka A., Katsumi H., Yamamoto A., Yutani R., <u>Teraoka R.</u> , Sakane T., Furubayashi T.		学会発表
Measurement of dissolution profiles of powdery drugs by Raman spectroscopy and its application to prediction of nasal drug absorption	共同	2017年11月	AAPS Annual Meeting and Exposition (SanDiego)	Furubayashi T., Izumi N., Inoue D., Moriyama K., Tanaka A., Katsumi H., Yamamoto A., Yutani R., <u>Teraoka R.</u> , Sakane T.		学会発表
Direct delivery of CNS drugs to the brain by nasal application III: Pharmacokinetic analysis of the effect of glymphatic system on drug delivery to brain parenchyma	共同	2017年11月	日本薬物動態学会第32回年会 (東京)	Inoue D., Tanaka A., Katsumi H., Yamamoto A., Yutani R., <u>Teraoka R.</u> , Sakane T., Furubayashi T.		学会発表
他剤との混合に伴うサリチル酸ワセリン軟膏のレオロジー特性と経皮吸収性の変化	共同	2017年11月	第27回日本医療薬学会年会 (千葉)	湯谷玲子, 田原花奈子, 宍戸康剛, 寺岡麗子, 北河修治, 坂根稔康		学会発表
α -Galactosylceramide の鼻粘膜透過性改善を目指した製剤最適化に関する検討	共同	2018年3月	日本薬学会第138年会 (金沢)	古林 呂之, 小林正樹, 松原 嘉子, 井上 大輔, 田中 晶子, 勝見英正, 山本 昌, 湯谷 玲子, 寺岡麗子, 坂根 稔康		学会発表
種々のカルバマゼピン-ジカルボン酸共結晶の光安定性比較	共同	2018年3月	日本薬学会第138年会 (金沢)	羽澤知穂, 寺岡麗子, 都出千里, 湯谷玲子, 坂根稔康		学会発表
薬物の口腔粘膜を介した吸収: 鼻腔内投与後の薬物吸収との比較	共同	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部大会 (姫路)	松田芳明, 遠山裕太, 田中晶子, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 坂根稔康 1		学会発表
酸化チタン含有フィルムコーティング膜中の可塑剤が錠剤の製剤特性に及ぼす影響	共同	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部大会 (姫路)	瀬分修平, 寺岡麗子, 松島由貴, 田中晶子, 湯谷玲子, 坂根稔康		学会発表
混合調剤がサリチル酸ワセリン軟膏の特性および主薬の皮膚透過性に及ぼす影響	共同	2018年11月	第28回日本医療薬学会年会 (神戸)	宍戸康剛, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 坂根稔康		学会発表

亜鉛華単軟膏のレオロジー特性と混合性に及ぼす保存温度の影響	共同	2018年11月	第28回日本医療薬学会年会（神戸）	加藤 薫, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 坂根稔康		学会発表
テノホビルアラフェナミドフマル酸塩を含有するデシコビ配合錠の簡易懸濁法適用時の安定性	共同	2018年11月	第28回日本医療薬学会年会（神戸）	寺岡麗子, 矢倉裕輝, 出口千裕, 湯谷玲子, 坂根稔康		学会発表
医薬品原薬及び製剤の安定性		2018年7月	第208回北摂地域薬剤師交流研修会（2018/7/14）	寺岡麗子		講演
経皮吸収型持続性疼痛治療剤の適正使用 ―フェントステープを中心に―		2017年3月	第4回薬科大学と臨床現場を繋ぐセミナー（薬剤師向け）（2017/3/4）	寺岡麗子		講演

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

平成13年1月－現在に至る	日本医療薬学会認定薬剤師（認定薬剤師第01－0040号）
平成13年1月－現在に至る	日本医療薬学会の指導薬剤師として委嘱された（指導薬剤師第01－0040号）
平成13年4月－現在に至る	シクロデキストリン学会評議員
平成16年4月－現在に至る	独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員
平成16年4月－現在に至る	日本薬局方原案審議委員会委員

Ⅴ 学内における主な活動

平成30年4月－現在に至る	OSCE 実施委員会 委員
平成30年4月－現在に至る	指導薬剤師のためのワークショップ 委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	中村隆典	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
① 学生の理解度向上のための取り組み	2013 年～現在	生薬学、天然物化学、漢方処方学は、薬学における基礎から臨床までの総合的な学問である。生薬学では、薬の元となった薬用植物の現物を検証することで、植物学的観点より薬学を学ぶ。また、天然物化学は、薬学的な薬理成分の構造、性質を生薬学実習で実験を通して学ぶ。漢方処方学では、生薬学と天然物化学の総合的な知識を応用し、臨床における薬学を考察出来るように系統立てて学ぶ。この3つの科目を連動させることで、より薬学を理解し臨床現場での薬学的知識の理解度を深める。
② 理解度確認のための取り組み		次回の合議には小テストを実施し、理解度と復習を兼ねて、詳細な解説を加えている。また、薬用植物においては現物の写真を交え、限りなく植物を想定できる問題としている。
③ 授業評価アンケートの活用		次年度には、アンケートによる授業評価を反映した講義を行うようにしている。また、自由文における学生の評価も大切に扱うようにしている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
特筆すべき事項なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
「企業・大学・学生マッチング in HIMEJI 2013」参加	2013 年 7 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介）
第 28 回「ひめじぐるめらんど」参加	2014 年 4 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介）
「企業・大学・学生マッチング in HIMEJI 2014」参加	2014 年 5 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
「国際フロンティア産業メッセ 2014」参加	2014 年 9 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
第 29 回「ひめじぐるめらんど」参加	2015 年 4 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
「企業・大学・学生マッチング in HIMEJI 2015」参加	2015 年 5 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
「国際フロンティア産業メッセ 2015」参加	2015 年 9 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
第 30 回「ひめじぐるめらんど」参加	2016 年 4 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
「国際フロンティア産業メッセ 2016」参加	2016 年 9 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
「豊穡の国・はりま」大物産展	2016 年 10 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
「企業・大学・学生マッチング in HIMEJI 2016」参加	2016 年 11 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
第 31 回「ひめじぐるめらんど」参加	2017 年 4 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介）

「企業・大学・学生マッチング in HIMEJI 2017」参加	2017 年 9 月	介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発) 大学発地産地消商品開発発表 (ハーブティー、新種の食用菊の紹 介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発)
「国際フロンティア産業メッセ 2017」参加	2017 年 9 月	大学発地産地消商品開発発表 (ハーブティー、新種の食用菊の紹 介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発)
第 32 回「ひめじぐるめらんど」参加	2018 年 4 月	大学発地産地消商品開発発表 (ハーブティー、新種の食用菊の紹 介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発)
「国際フロンティア産業メッセ 2018」参加	2018 年 9 月	大学発地産地消商品開発発表 (ハーブティー、新種の食用菊の紹 介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発)
第 1 回「ひめじ花と緑のガーデンフ ェア」参加	2018 年 11 月	大学発地産地消商品開発発表 (ハーブティー、新種の食用菊の紹 介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発)
「企業・大学・学生マッチング in HIMEJI 2018」参加	2018 年 11 月	大学発地産地消商品開発発表 (ハーブティー、新種の食用菊の紹 介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発)
4 その他教育活動上特記すべき事項		
中学生トライやる・ウィーク	2013 年 6 月	薬用植物園管理体験 (広嶺中学校)
高校生インターンシップ	2013 年 8 月	薬用植物園管理体験 (飾磨高等学校)
高校生インターンシップ	2013 年 10 月	薬用植物園管理体験 (上郡高等学校)
高校生インターンシップ	2013 年 11 月	薬用植物園管理体験 (飾磨工業高等学校多部制)
中学生トライやる・ウィーク	2014 年 6 月	薬用植物園管理体験 (広嶺中学校)
中学生トライやる・ウィーク	2014 年 6 月	薬用植物園管理体験 (安室中学校)
高校生インターンシップ	2014 年 8 月	薬用植物園管理体験 (飾磨高等学校)
高校生インターンシップ	2014 年 11 月	薬用植物園管理体験 (飾磨工業高等学校多部制)
高校生インターンシップ	2014 年 12 月	薬用植物園管理体験 (相生産業高等学校)
高校生インターンシップ	2015 年 3 月	薬用植物園管理体験 (飾磨工業高等学校全日制)
中学生トライやる・ウィーク	2015 年 6 月	薬用植物園管理体験 (安室中学校)
高校生インターンシップ	2015 年 8 月	薬用植物園管理体験 (飾磨高等学校)
中学生トライやる・ウィーク	2015 年 9 月	薬用植物園管理体験 (広嶺中学校)
高校生インターンシップ	2015 年 10 月	薬用植物園管理体験 (相生産業高等学校)
高校生インターンシップ	2015 年 11 月	薬用植物園管理体験 (飾磨工業高等学校多部制)
高校生インターンシップ	2016 年 2 月	薬用植物園管理体験 (飾磨工業高等学校全日制)
中学生トライやる・ウィーク	2016 年 6 月	薬用植物園管理体験 (広嶺中学校)
中学生トライやる・ウィーク	2016 年 6 月	薬用植物園管理体験 (安室中学校)
中学生トライやる・ウィーク	2016 年 6 月	薬用植物園管理体験 (白鷺学校)
高校生インターンシップ	2016 年 10 月	薬用植物園管理体験 (相生産業高等学校)
高校生インターンシップ	2016 年 11 月	薬用植物園管理体験 (飾磨工業高等学校多部制)
高校生インターンシップ	2017 年 3 月	薬用植物園管理体験 (飾磨工業高等学校全日制)
中学生トライやる・ウィーク	2017 年 6 月	薬用植物園管理体験 (広嶺中学校)
中学生トライやる・ウィーク	2017 年 6 月	薬用植物園管理体験 (安室中学校)
中学生トライやる・ウィーク	2017 年 6 月	薬用植物園管理体験 (白鷺学校)
高校生インターンシップ	2017 年 10 月	薬用植物園管理体験 (相生産業高等学校)
高校生インターンシップ	2017 年 11 月	薬用植物園管理体験 (飾磨工業高等学校多部制)
中学生トライやる・ウィーク	2018 年 6 月	薬用植物園管理体験 (広嶺中学校)
中学生トライやる・ウィーク	2018 年 6 月	薬用植物園管理体験 (安室中学校)

高校生インターンシップ	2018 年 7 月	薬用植物園管理体験（夢前高等学校）
高校生インターンシップ	2018 年 7 月	薬用植物園管理体験（飾磨高等学校）
姫路市理工チャレンジ事業	2018 年 8 月	薬学部体験学習（市内女子中学生対象）
高校生インターンシップ	2018 年 10 月	薬用植物園管理体験（相生産業高等学校）
高校生インターンシップ	2018 年 11 月	薬用植物園管理体験（飾磨工業高等学校多部制）

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著/別	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】 特筆すべき事項なし						
【論文】 Can an Inhibitor of DNA Polymerase β Enhance the Formation of Comet Tail ?	共著	2013	Genes and Environment, 35 (2)	C. Odajima, ©T. Nakamura, M. Miura, K. Yamazaki, G. Honda, Y. Kikuchi, A. Yamamoto, Y. F. Sasaki	46-52	
Role of Nucleotide Excision Repair or Base Excision Repair in Movement of Various n-Alkylated Bases, Investigated by the Comet Assay.	共著	2014	Genes and Environment, 36 (1)	C. Odajima, © T. Nakamura , M. Nakamura, M. Miura, K. Yamasaki, G. Honda, Y. Kikuchi, A. Yamamoto, Y. F. Sasaki	10-16	
酸化ストレス度評価 (d-ROMs テスト) からみた禁煙治療の有 効性の検討.	共著	2015	人間ドック, 30 (1)	堀江弘子, 岩切 龍一, 黒木茂高, 岩本英里, 古賀 さやか, 田代貴 也, 小野尚文, 江口尚久, ©中 村隆典, 柳澤振 一郎, 駒田富佐 夫, 江口有一郎	30-37	
Chemical Constituents and their DPPH Radical Scavenging Activity of Nepalese Crude Drug Begonia picta	共著	2015	Rec. Nat. Prod. Vol. 9 :3	K. R. Joshi, H. P. Devkota, ©T. Nakamura, T. Watanabe, S. Yahara	446-450	
世界文化遺産姫路城の桜花由 来の天然酵母による地酒の開 発	共著	2016	兵庫自治学, Vol. 22	朴杓汝, ©中村 隆典, 更家信, 川井真好	109-114	
Acylated triterpene saponins from the stem bark of Acer nikoense (Aceraceae).	共著	2016	Chem. Pharm. Bull., 64	S. Kurimoto, Y. Suyama, N. Tanaka, Y. Kashiwada, ©T. Nakamura	924-929	
The Power of the Comet Assay to Detect Low Level Genotoxicity and DNA Repair Factors Affecting its Power.	共著	2017	MOJ Toxicology, 3 (2)	Kawaguchi, S. ; Sasaki, Y. F. ; ©Nakamura, T.	00049. DOI:10. 15406/	

					mojt. 2017. 03. 00049.	
--	--	--	--	--	------------------------------	--

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2007 年 4 月～現在	日本薬学会会員
2007 年 5 月～現在	日本生薬学会会員
2011 年 4 月～現在	生薬・天然物化学教科担当教員
2014 年 4 月～現在	日本生薬学会代議員
2014 年 4 月～現在	日本生薬学会関西支部委員

Ⅴ 学内における主な活動

2007 年 4 月～現在	就職委員会委員
2007 年 4 月～現在	薬草植物園管理
2007 年 4 月～現在	共用試験対策委員（OSCE）
2007 年 4 月～現在	実務実習委員
2015 年 4 月～現在	広報委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	長久保 大輔	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	--------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
① 講義における資料の工夫	2018 年 4 月～現在	薬学部 2 年生担当の「食品栄養学」、薬学部 3 年生担当の「公衆衛生学 II」では、教科書の要点を学生が理解しやすいように抜粋・再構成したパワーポイントのスライドを準備し、学生たちにはレジメとして配布した。また、演習問題を準備し、授業内容の復習や理解の定着化を目的として、適宜授業中に実施、もしくは自習用資料とした。
② 学生実習における学生の集中度を高めるための工夫	2018 年 10 月～現在	薬学部 3 年生担当の「公衆衛生学実習」においては、教員による実演や、動画も用いて学生がイメージしながら実習のポイントを整理できるようにすると共に、事故防止などの安全に対する意識の徹底に努めた。
③ 学習した知識に基づき、学生の自由な発想力を高めるための工夫	2018 年 11 月～現在	薬学部 3 年生担当の「衛生領域 PBL」においては、2018 年におきた衛生薬学に関連する新聞記事をテーマとし、衛生領域の学習の中で学んだ内容に関連させて 3～4 人のグループによる発表の形式で行った。発表に際しては、これまでの学習の復習に留まるだけではなく、実際に身近で起きている事例を扱うことで、学生が興味を高め、学生ごとの自由な発想に基づく視点と、オリジナリティのあるプレゼンテーションが生まれるように努めた。
2 作成した教科書、教材、参考書		
① 公衆衛生学実習の実習書の作成	2018 年 10 月	薬学部 3 年生担当の実習科目「公衆衛生学実習」におけるテキスト兼手順書として、『公衆衛生学実習書』を薬学部 衛生・微生物学研究室の 川井眞好 准教授と分担・協力して作成した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
【FD・SD 研修会への参加履歴】		
① FD・SD 研修会への参加 (於：滋賀医科大学)	2016 年 1 月 19 日	タイトル：「教育方法改善に関する FD・SD 研修会：アクティブ・ラーニングを促す 30 の教育技法」
② FD・SD 研修会への参加 (於：滋賀医科大学)	2017 年 3 月 1 日	タイトル：「講義・実習中のスマートフォン等の使用に関する FD・SD 研修会」

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著/別	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数等の名称)	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
-----------	--------	------------------------	--------------------------	-----------------------	------	-----

【著書】 特筆すべき事項なし						
【論文】 Upregulated CCL28 expression in the nasal mucosa in experimental allergic rhinitis: Implication for CD4 ⁺ memory T cell recruitment.	共著	2016, Apr	Cellular Immunology, Vol. 302	©Nagakubo D, Yoshie O, Hirata T.	58 - 62	
Autoimmunity associated with chemically induced thymic dysplasia.	共著	2017, Aug	International Immunology, Vol. 29 (No. 8)	©Nagakubo D, Swann J, Birmelin S, Boehm T	385 - 390	
Genetic and non-genetic determinants of thymic epithelial cell number and function.	共著	2017, Sep	Scientific Reports, Vol. 7 (No. 1)	©Nagakubo D, Krauth B, Boehm T.	Article number: 10314	
The ERM Protein Moesin Regulates CD8 ⁺ Regulatory T Cell Homeostasis and Self-Tolerance.	共著	2017, Nov	Journal of Immunology, Vol. 199 (No. 10)	©Satooka H, Nagakubo D, Sato T, Hirata T.	3418 - 3426	
CCL28-Deficient Mice Have Reduced IgA Antibody-Secreting Cells and an Altered Microbiota in the Colon.	共著	2018, Jan	Journal of Immunology, Vol. 200 (No. 2)	©Matsuo K, Nagakubo D, Yamamoto S, Shigeta A, Tomida S, Fujita M, Hirata T, Tsunoda I, Nakayama T, Yoshie O.	800 - 809	
A CCR4 antagonist enhances DC activation and homing to the regional lymph node and shows potent vaccine adjuvant activity through the inhibition of regulatory T-cell recruitment.	共著	2018, Mar	Journal of Pharmacological Sciences, Vol. 136 (No. 3)	©Yamamoto S, Matsuo K, Nagakubo D, Higashiyama S, Nishiwaki K, Oiso N, Kawada A, Yoshie O, Nakayama T.	165 - 171	
Fundamental parameters of the developing thymic epithelium in the mouse.	共著	2018, Jul	Scientific Reports, Vol. 8 (No. 1)	©Hirakawa M, Nagakubo D, Kanzler B, Avilov S, Krauth B, Happe C, Swann JB, Nusser A, Boehm T.	Article number: 11095	
CCR4 Is Critically Involved in Skin Allergic Inflammation of BALB/c Mice.	共著	2018, Aug	Journal of Investigative Dermatology, Vol. 138 (No. 8)	©Matsuo K, Nagakubo D, Komori Y, Fujisato S, Takeda N, Kitamatsu M, Nishiwaki K, Quan YS, Kamiyama F, Oiso N, Kawada A,	1764 - 1773	

				Yoshie O, Nakayama T.		
【その他：①総説】 アレルギー性鼻炎におけるCD4 ⁺ T 細胞の動態制御機構	単著	2017年11月	アレルギーの臨床 12月号 Vol. 37 (No. 507)		60 - 62	
【その他：②科研費】 アレルギー性鼻炎の病態形成 に関わる免疫細胞浸潤機構の 解明とその制御	研究 代表 者	2017年4月 ～ 2020年3月 (予定)	科研費・基盤研究 (C)		-	3,700 千円 (直接経費)

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
該当せず			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1996年4月～現在	日本分子生物学会会員
1998年4月～現在	日本生化学会会員
1998年11月～現在	日本免疫学会会員
1999年3月～現在	日本癌学会会員
2017年2月～現在	日本薬学会会員
2018年5月～現在	日本薬学会近畿支部委員

Ⅴ 学内における主な活動

2019年2月～	動物実験施設管理運営委員（予定）

所 属	薬 学 部 医療薬学科	職 名	教授	氏名	矢上 達郎	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
--------	----------------	--------	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)		
①理解度向上への工夫		
基礎生物学	2006 年 4 月以降	基礎生物学と生理学の関連が分るように、両者の内容を交差させながら講義した。さらに、ノート提出させ、すぐれたノートを講義において取り上げ長所を顕彰することにより、学生のノート作製技術および意欲を高めることができた。1 年前期補講から予習・講義・復習の習慣付けを継続し、繰り返し学習で知識の定着を図った。オフィスアワー以外でも質問を受け付けることにより、学習意欲を高めることができた。実習では、基礎生物学・生理学の講義内容に対応した課題を与え、実験器具・装置の知識を付加した。顕微鏡観察・解剖・ピペット操作等で全員に実技をさせた。考察のための講義およびレポート提出を義務付けたので、実習体験を通して実感させることができた。
生理学	2006 年 4 月以降	
基礎生物学実習	2006 年 9 月以降	
実用薬学英語 I	2007 年 4 月以降	2 年前期の薬学英語 I では、基礎生物学・生理学の講義プリント英語版を作製し、英語で説明した。さらに、ノート提出させ、すぐれたノートを講義において取り上げ長所を顕彰することにより、学生のノート作製技術および意欲を高めることができた。1 年前期補講から予習・講義・復習の習慣付けを継続し、繰り返し学習で知識の定着を図った。オフィスアワー以外でも質問を受け付けることにより、学習意欲を高めることができた。
生理学実習	2007 年 9 月以降	実習では、基礎生物学・生理学の講義内容に対応した課題を与え、実験器具・装置の知識を付加した。顕微鏡観察・解剖・ピペット操作等で全員に実技をさせた。考察のための講義およびレポート提出を義務付けたので、実習体験を通して実感させることができた。最後に試験を行い、講義に関する知識の定着を図った。
生物系 PBL	2008 年 9 月以降	基礎生物学と生理学での講義内容の範囲内で一人一課題を与え、所定の時間でプレゼン・質疑応答させ、講義に関する知識の定着を図った。
薬学応用演習	2015 年 4 月以降	3・4 年生を対象に生理学・機能形態学に関する復習を行い、知識の定着を図った。
薬学総合演習	2014 年 4 月以降	5・6 年生を対象に生理学・機能形態学に関する復習を行い、知識の定着を図った。
②学生による授業評価の活用	2006 年 4 月以降	授業評価の結果は講義後に返されるため、翌年の受講生にしか反映できないという問題があった。大学のアンケートとは別に全講義アンケートをとり、見直し講義を 3 回行い当該学生に対し反映した。理解度の低い箇所を前回よりも噛み砕いて説明し、それでもわかりにくい場合には動画をを用いて説明した。学生からの要望により、国家試験の過去問題を見直し講義で行い、講義内容との関連付けを行うことにより、受講意欲を高めることができた。
2 作成した教科書、教材、参考書		

基礎生物学 生理学 基礎生物学実習 薬学英语Ⅰ 生理学実習 薬学応用演習 薬学総合演習 薬理学	2006年4月以降 2006年4月以降 2006年4月以降 2007年4月以降 2007年4月以降 2015年4月以降 2014年4月以降 2018年4月以降	教科書の補完も兼ねて、講義用プリントを毎回作製した。薬学国家試験の見地から重要度に応じて印を入れたので、学生にとって学習すべき優先順位が判断できるようになった。プリントは前週の講義時に配布しているので、予習および講義ノート作製を促すことができ、出席率向上にも繋がった。小テストはプリント中の重用ポイントから翌週に出題するので、学生に復習を促すことができた。実習用プリントは、課題の説明ばかりでなく、レポートの書き方も含めた。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
該当なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
病院・薬局訪問	2011年4月～	薬学部実務実習の一環として、学生の実習先の病院・薬局に訪問し、進捗状況を確認し、問題が起きていないかチェックした。
卒業研究発表会	2013年4月～	発表会にて座長を務め、学生に発表および討議の場を設けた。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
【英文原著論文】 1. L-type voltage-dependent calcium channel is involved in the snake venom group IA secretory phospholipase A ₂ -induced neuronal apoptosis.	共著	2013年3月	Neurotoxicology 35C	© Yagami T, Yamamoto Y, Kohma H, Nakamura T, Takasu N, Okamura N.	146-153.	
2. Leukotriene receptor antagonists, LY293111 and ONO-1078, protect neurons from the sPLA ₂ -IB-induced neuronal cell death independently of blocking their receptors.	共著	2013年9月	Neurochem Int. 63	© Yagami T, Yamamoto Y, Kohma H	163-171.	
3. The combination treatment of etoposide and 15-deoxy- Δ^{12} , 14 -prostaglandin J ₂ induced synergistic anti-tumor effect against renal cell carcinoma via PPAR γ independent pathways.	共著	2014年3月	Mol. Clin. Oncol. 2	©Yamamoto Y, Koma H, Hiramatsu H, Abe M, Murakami K, Ohya A, Yagami T.	292-296	
4. Hydrogen peroxide mediated the neurotoxicity of an antibody against plasmalemmal neuron-specific enolase in primary cortical neurons.	共著	2015年7月	Neurotoxicology 49	©Yamamoto Y, Koma H, Yagami T.	86-93	
5. Localization of 14-3-3 δ/ξ on the neuronal cell surface.	共著	2015年11月	Exp Cell Res. 338	©Yamamoto Y, Koma H, Yagami T.	149-161	

6. Synergistic effects of 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ on the anti-tumor activity of doxorubicin in renal cell carcinoma.	共著	2016 年 11 月	Biochem Biophys Rep. 9	©Yamamoto Y, Koma H, Yamamoto Y, Nishii A, <u>Yagami T.</u>	61-66	
7. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ induced neurotoxicity via suppressing phosphoinositide 3-kinase.	共著	2017 年 2 月	Neuropharmacology. 113	©Koma H, Yamamoto Y, Nishii A, <u>Yagami T.</u>	416-425.	
8. Anti-heat shock 70 kDa protein antibody induced neuronal cell death.	共著	2017 年 4 月	Biol Pharm Bull. 40	©Yamamoto Y, Koma H, Yamamoto Y, Nishii A, <u>Yagami T.</u>	402-412	
【英文総説】 1. The Role of Secretory Phospholipase A2 in the Central Nervous System and Neurological Diseases	共著	2014 年 4 月	Mol Neurobiol. 49	© <u>Yagami T.</u> , Yamamoto Y, Koma H.	863-876	
2. Pathophysiological roles of cyclooxygenases and prostaglandins in the central nervous system	共著	2016 年 9 月	Mol Neurobiol. 53	© <u>Yagami T.</u> , Yamamoto Y, Koma H.	4754-4771	
3. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ in neurodegenerative diseases and cancers	共著	2017 年 2 月	Oncotarget	© <u>Yagami T.</u> , Yamamoto Y, Koma H.	9007-9008	
4. Physiological and pathological roles of 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ in the central nervous system and neurological diseases.	共著	2018 年 3 月	Mol Neurobiol. 53	© <u>Yagami T.</u> , Yamamoto Y, Koma H.	2227-2248	
【国際学会】 1. A plausible involvement of plasmalemmal voltage-dependent anion channel in the neurotoxicity of 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂	共同発表	2018 年 7 月	WPC2018	©Yamamoto Y, Koma H, * <u>Yagami T.</u>	P02-1-86	
2. Synergistic effects of 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ and anticancer agents on renal cell carcinomas	共同発表	2018 年 7 月	WPC2018	© Fujita T, Asanoma Y, Shirai W, Hashimoto E, Echigo T, <u>Yoneda Y.</u> , <u>Kumagai H.</u> , <u>Yamamoto Y.</u> , <u>Koma H.</u> , <u>Yagami T.</u> * <u>Yagami T.</u>	P01-3-33	
【国内学会】 1. Effects of anti-14-3-3 antibodies on the 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ -induced neuronal cell death	共同発表	2013 年 3 月	The 86 th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	©Yamamoto Y, Koma H, Hiramatsu H, Abe M, Nakamura T, * <u>Yagami T.</u>	P1-10	

2. 内因性抗腫瘍物質による腎臓癌細胞死誘導作用の解析	共同発表	2013 年 3 月	日本薬学会第 133 年会	◎山本泰弘、高馬宏美、平松大樹、阿部光佐、中村任、*矢上達郎	30pmD-223	
3. ヒト腎がん由来細胞を用いた VHL 遺伝子非依存的な低酸素応答関連因子の探索	共同発表	2013 年 3 月	日本薬学会第 133 年会	高橋稔, 山脇知佳, 山本泰弘, 高馬宏美, 矢上達郎, 中村任	29amF-261	
4. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ -induced neuronal cell death was suppressed by an antibody against its membrane target	共同発表	2013 年 6 月	Neuro2013	◎ Yagami T, Yamamoto Y, Kohma H.	P1-1-227	
5. Hypoxia-induced upregulation of RNA-binding protein in VHL-deficient renal cell carcinoma cell line	共同発表	2014 年 3 月	The 134 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society	Takahashi M, Yamawaki C, Yamamoto Y, Koma H, Yagami T, Nakamura T.	30pmL-134. e	
6. An antibody against plasmalemmal neurone-specific enolase, a plasmalemmal target for 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -PGJ ₂ , induced neuronal cell death via hydrogen peroxide.	共同発表	2014 年 3 月	The 134 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society	◎ Yamamoto Y, Kohma H, Ohya A, Murakami K, Hisamatsu S, Kobayashi Y, Nakamura T, *Yagami T.	28amM-169	
7. L-type voltage-dependent calcium channel is involved in secretory phospholipase A ₂ s-induced neuronal apoptosis	共同発表	2014 年 3 月	J Pharmacol Sci. 124 (Sup 1)	◎ Yagami T, Yamamoto Y, Kohma H, Murakami K, Ohya A, Hisamatsu S, Kobayashi Y.	119P	
8. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ enhanced anti-tumor effects of topoisomerase II inhibitors against renal cell carcinoma	共同発表	2014 年 3 月	J Pharmacol Sci. 124 (Sup 1)	◎ Yamamoto T, Kubo M, Tamura K, Shimada E, Hyuga Y, Tanaka S, Sato S, Murakami K, Oya A, Hisamura S, Kobayashi Y, Yamamoto Y, Koma H, *Yagami T.	278P (学会特別賞受賞)	
9. An anti-HSP70 antibody, a marker of brain ischemia, induced neuronal cell death via H ₂ O ₂	共同発表	2014 年 9 月	Neuro2014	◎ Yagami T, Yamamoto Y, Kohma H, Ohta E.	01-I-6-4	
10. A plausible involvement of 15-deoxy-D ^{12,14} -prostaglandin J ₂ and thromboxane A ₂ in the amyloid β -enhanced circling behavior	共同発表	2015 年 3 月	The 88 th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	◎ Yagami T, Yamamoto Y, Koma H, Ohta E.	P2-44	

11. Hypoxia-induced upregulation of hnRNP A2/B1 in 786-O renal cell carcinoma cells	共同発表	2015 年 3 月	The 135 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society	Maruchi S, Takahashi M, Yamawaki C, Yamamoto Y, Koma H, <u>Yagami T</u> , Nakamura T.	26PB-pm229	
12. Enolase was expressed on the cell surface of renal cell carcinoma.	共同発表	2015 年 3 月	The 135 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society	©Ohta E, Yamamoto Y, Koma H, Takahashi M, Yamada C, Nakamura T, *Yagami T.	26PB-pm228	
13. c-Jun N-terminal kinase contributed to the neurotoxicity of anti-neuron specific enolase antibody	共同発表	2016 年 3 月	The 89 th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	© Yamamoto Y, * <u>Yagami T</u> , Koma H, Nishi A.	2-P-9	
14. 14-3-3 δ/ξ was identified as a membrane target for 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂	共同発表	2016 年 3 月	The 89 th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	© <u>Yagami T</u> , Yamamoto Y, Koma H, Nishi A.	3-0-25	
15. Involvement of VHL-HIF in hypoxia-induced upregulation of hnRNP A2/B1 in human renal cell carcinoma	共同発表	2016 年 3 月	The 136 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society	Izawa M, Takahashi M, Uematsu T, Yamamoto Y, Koma H, <u>Yagami T</u> , Nakamura T.	27AB-pm263	
16. The anti-metastatic effect of 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ on the renal cell carcinoma	共同発表	2016 年 3 月	The 136 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	©Yamamoto Y, Koma H, Nishi A, Takahashi M, Nakamura T, *Yagami T.	27AB-pm262	
17. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ exhibited neurotoxicity via suppressing phosphoinositide 3-kinase	共同発表	2017 年 3 月	The 90 th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	© <u>Yagami T</u> , Yamamoto Y, Koma H, Nishii S.	1-0-41	
18. 15-Deoxy- Δ -12, 14-prostaglandin J ₂ impaired memory retrieval via suppressing PI3 kinase in hippocampus	共同発表	2017 年 3 月	The 137 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	©Koma H, Yamamoto Y, Nishii S, <u>Yagami T</u> .	25PB-am090	
19. The mechanism of 15-Deoxy- Δ -12, 14-prostaglandin J ₂ of the cell migration on renal cell carcinoma	共同発表	2017 年 3 月	The 137 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	©Yamamoto Y, Koma H, Nishii S, <u>Yagami T</u> .	25PB-am184	

20. Heat shock protein 70 抗体の神経細胞死誘導メカニズムの解析	共同発表	2018年10月	第 67 回 日本薬学会近畿支部総会・大会	◎山本泰弘、高馬宏美、矢上達郎	I-10-2	
21. 15-deoxy- Δ 12, 14-prostaglandin J2 inhibits cell migration on renal cell carcinoma via down-regulation of focal adhesion kinase signaling	共同発表	2018 年 3 月	The 138 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	◎Yamamoto Y, Koma H, Yagami T.	28PA-pm360	
22. Anti-14-3-3 δ/ξ antibody inhibits caspase 3, down-regulates accumulation of ubiquitinated proteins and induces neuronal cell death	共同発表	2018 年 3 月	The 138th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	◎ Yagami T, Yamamoto Y, Koma H.	26PA-pm223	

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1992 年 4 月～現在	日本薬理学会 評議員
2016 年 1 月～現在	日本薬学会 会員
1995 年 4 月～2016 年 3 月	日本神経科学会 会員
2012 年 4 月～現在	兵庫県立神戸高校 サイエンス・アドバイザー
2016 年 4 月	兵庫県薬剤師会/第 17 回 西播・姫路医療セミナー 座長
2016 年 11 月	卒後教育セミナー 講師 および座長
2017 年 7 月	兵庫県高等学校教育研究会科学部会・生物部会 2017 年 講師

Ⅴ 学内における主な活動

2007 年～現在	動物実験委員会委員（学内）
2013～2016 年	評議員（学内）
2014 年～現在	第三者評価担当委員（学部）
2017 年～現在	教務委員（学部）
2013 年～現在	ハラスメント委員（学部）
2018 年～現在	動物実験施設管理運営委員会委員長（学部）

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	柳澤振一郎	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ベイズ統計学入門用ソフトを用いた 医学検査理解に関する工夫	2004 年 6 月	公衆衛生学実習での感度、特異度、偽陽性、偽陰性の理解のための教材として活用。ベイズの公式を用いた陽性予測値、陰性予測値の理論的理解を促す。感度の高い検査は、陰性のとき除外診断に有用であるとする、いわゆる SnNout の理解と、特異度の高い検査は、陽性のとき確定診断への可能性を高めることに有用であるとする、いわゆる SpPin の理解に貢献した。
教育・実践用 EBM 支援文献検索データベースシステムを用いた PICO 理解に関する工夫	2005 年 1 2 月	情報科学の実習で文献検索のための、データベースとして活用。EBM では、直面している臨床上の問題において、患者固有の問題を明確にし、検索可能な形式に翻訳する為の定式化が必要となり、最適な検索を行う為に PICO 思考が推奨されている。（P：患者の問題、I：介入、C：対照、O：アウトカム）本システムは、PICO 思考に基づくキーワードを具体化し、検索式を作成する一連の手順を学習するのに利用した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
ベイズ統計学入門用ソフトの開発	2004 年 6 月	現状ではさまざまな疫学的研究手法が導入されているが、その中でベイズ統計学は、今までにも薬物副作用の因果関係評価、薬物血中濃度モニタリングやメタアナリシスなどに活用されており、教育による同概念の理解や研究による応用発展が望まれている。今回、ベイズの公式を用いて、有病率と陽性予測値、陰性予測値のグラフを表示し、感度・特異度と有病率の取る値を変動させることによりグラフがどのような形を取るかを視覚的に理解することができるソフトの開発を行った。（日本社会薬学会第 23 年会で発表）
教育・実践用 EBM 支援文献検索データベースシステムの開発	2005 年 1 2 月	本研究では、EBM（根拠に基づく医療）の実践を支援することを目的とした EBM 支援情報システムの試験的開発を行った。これは、文部科学省による COE プログラム「糖尿病をモデルとしたシグナル伝達病拠点」の下で実施された研究「糖尿病の EBM 科学確立を目指すエビデンス・アウトカム情報組織化に関する教育研究」の成果の一部である。本システムは、糖尿病に特化した形ではあるが、EBM 実践の最初のフレームとなる PICO 思考の普及をはかる教育的意義を持つ。また、日本語での操作により海外論文の検索を可能にし、日本人にとって実践的な有用性を持つと考えられる。（第 25 回医療情報学連合大会で発表）
薬学生のための薬剤経済学， 廣川書店，2009	2009 年 8 月 初版	講義科目「医療経済学」（専門科目，3 年次配当，半期，必修 2 単位）において 2009 年から 2010 年まで使用。薬剤経済学の分析手法を解説した網羅的な教科書がなかったため、共同で教科書として使用できる書籍の作成を行った。 担当部分：4 章 薬剤経済分析の方法と実施（P153～P171. 内担当ページ：P153～P166）B5 版全 171 頁

詳説 薬剤経済学, 京都廣川書店, 2011	2011 年 8 月 初版 2013 年 8 月 第2版 2017 年 3 月 第3版	「医療経済学」において 2011 年より使用。社会保障制度等のデータ更新が必要となり、新たに作成した。学生により深い理解を促すために、経済学の理論を新たに含め、経済評価分析のより詳細な解説を行った。また、書籍の構成として、社会保障制度に加え療養担当規則の項目を充実させた。初版作成以降、解説等をわかりやすくするための修正を加えながら版を重ねている。 初版担当部分：第4章 薬剤経済分析の方法と実施, 1 節経済学的な基礎知識～2 節薬剤経済評価の方法論(P133～P165). 第5章 演習編 (P183～P193) B5 版 全193 頁 (初版)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
医療薬学大学院教育としてのディベート演習を用いた医薬情報評価学教育の試み—アンケート調査による医薬情報発信能力育成度の評価—	2005 年 2 月	医療薬学大学院教育としての医薬情報評価学教育に対し、グループ間ディベートによる討論形式の採用により、科学的根拠に基づく医薬情報の発信・発信能力の強化育成を試みてきた。その成果としての医薬情報収集・発信能力育成の程度を、第三者評価と自己評価によりアンケート調査を実施し、教育方法の利点と問題点を具体的に検討した。 論文発表：大塚誠、多河典子、加藤史恵、松山賢治、大塚邦子、柳澤振一郎、鎌江伊三夫. 医療薬学 31 (2), pp. 136-145, 2005.
4 その他教育活動上特記すべき事項		
「神戸大学 阪神・淡路大震災 10 周年 事業メモリアル医学系学術シンポジウム」で講演し、シンポジストとして議論に参加	2004 年 11 月	「震災後 10 年：何が変わったか？これから目指すべきものは何か？」をテーマとしたシンポジウムにて「都市生活と健康リスク」と題する講演をすると共に、シンポジストとしてシンポジウムに参加。
「SYMPOSIUM DISASTER MANAGEMENT SYSTEM RELATED TO HEALTH AND ENVIRONMENT ASPECT IN INDONESIA」で講演し、シンポジストとして議論に参加	2005 年 3 月	インドネシア Gadjah Mada 大学で開催された学生を対象とした教育シンポジウムで、「The Need for Health Risk Communication -Lessons learnt from the Great Hanshin-Awaji Earthquake.」と題する講演をとおして、これから目指すべきものは、住民自身によるリスク管理と合理的意思決定のためのリスクコミュニケーションであることを伝えた。また、シンポジストとしてシンポジウムに参加し議論を行った。
「The Third International Seminar. Management of Health Problems Caused by Disaster」で講演し、シンポジストとして議論に参加	2006 年 2 月	前年に引き続き開催されたインドネシア Gadjah Mada 大学での学生を対象とした教育シンポジウムで、「Priority Setting for Life Saving in Health Care Interventions and Disaster Preparedness.」と題する講演をとおして、救命にも費用効果分析の手法が必要となることを伝えた。また、シンポジストとしてシンポジウムに参加し議論を行った。
「第2回 西播・姫路医療セミナー」で講演	2008 年 12 月	「市民生活と健康リスク」と題する講演をとおして、市民自身の危機管理はこれから、不可欠になっていくことを示すとともに、このような難しい問題に対し、一般の市民の方の身近で相談相手になれるのは薬剤師ではないかと提案を行った。これからの薬剤師は、市民との関わりにおいて、健康リスクに対する危機管理がキーワードになり得ることを示した。

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著・監	発行または 発表の年 月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合の み記入)	該当頁数	備 考
【著書】 薬学生のための薬剤経済学	共著	2009 年 8 月	廣川書店	奥村勝彦, 黒田 和夫, 恩田光子, 亀井美和子.他	pp. 153-166	再掲
公衆衛生学Ⅰ	共著	2010 年 4 月	近大姫路大学教育学部通信 教育課程	西郷勝康, 柳澤 振一郎, 川井眞 子, 炬口真理子	pp. 6-55, pp. 109-116	
公衆衛生学Ⅱ	共著	2010 年 4 月	近大姫路大学教育学部通信 教育課程	西郷勝康, 柳澤 振一郎, 川井眞 子, 炬口真理子	pp. 1-33, pp. 117-127	
スタンダード薬学シリーズ 9 薬学と社会 第3版	共著	2010 年 9 月	東京化学同人	日本薬学会編 (領域担当編集 責任者: 白神 誠)	pp. 166-192	
ヘルスサイエンスのための 医薬経済学用語集	共著	2011 年 4 月	医薬出版センター	監訳: 鎌江伊三 夫	用語翻訳の分担 と校閲編集を担 当	翻訳本
詳説 薬剤経済学	共著	2011 年 8 月 初版 2013 年 8 月 第2版 2017 年 3 月 第3版	京都廣川書店	恩田光子, 砂川 雅之, 森脇健介, 柳澤振一郎	第1章と第4章 を分担 (第3版は第1 章と第5章を分 担)	再掲
薬学用語辞典	共著	2012 年 3 月	東京化学同人	日本薬学会編 (編集委員長: 原 博)	医療経済学に関 する9単語担当	
医療技術の経済評価と公共 政策	共著	2013 年 4 月	じほう	鎌江伊三夫, 林良 造, 城山英明, 森田 朗, 土井修, 福田 敬, 柳澤振一郎, 他	pp. 315-325	
【論文】 Reply to Concerning The number needed to treat needs an Associated odds estimation.	共著	2004年4月	Journal of Public Health 26(4).	Aino H, Yanagisawa S, Kamae I.	pp. 400-401	
糖尿病治療の医療経済	共著	2004年5月	Geriatric Medicine 42(5)	鎌江伊三夫、 西村邦宏、 柳澤振一郎	pp. 624-628	
医療薬学大学院教育として のディベート演習を用いた 医薬情報評価学教育の試み ーアンケート調査による医 薬情報発信能力育成度の評 価ー	共著	2005年2月	医療薬学 31(2)	大塚誠、多河典 子、加藤史恵、 松山賢治、 大塚邦子、 柳澤振一郎、 鎌江伊三夫	pp. 136-145	
患者 QOL を考慮した抗うつ 薬パロキセチンの費用対効 果の分析	共著	2005年11月	新薬と臨床 54(11).	鎌江伊三夫、 柳澤振一郎	pp. 46-63	
Computer-Simulated Assessment of Methods for Transporting Severely Injured Individuals in Disaster- Case Study of Airport Accident.	共著	2006年3月	Computer Methods and Programs in Biomedicine.81,	Inoue H, Yanagisawa S, Kamae I.	pp. 256-265.	
Clinical Epidemiologic Evaluation of BSE Screening Tests in Japan.	共著	2006年5月	Kobe Journal of Medical Sciences 52(3):	Yanagisawa S, Kamae I.	pp. 49-59.	
Cost-effectiveness Analysis of Influenzaand Pneumococcal Vaccinations	共著	2006年6月	Kobe Journal of Medical Sciences 52(4):	Cai L, Uchiyama H, Yanagisawa S,	pp. 97-109.	

among Elderly People in Japan.				Kamae I.		
The logistic regression and ROC analysis of group-based screening for predicting diabetes incidence in four years,	共著	2006年9月	Kobe Journal of Medical Sciences 52(6)	Takahashi K, Uchiyama H, Yanagisawa S, Kamae I.	pp. 171-180.	
A Comparison of the Technical Quality of American and Japanese Ranitidine Tablets.	共著	2007年8月	Dissolution Technologies, Vol. 14(3),	M Otsuka, Y Akizuki, K Otsuka, S Yanagisawa, I Kamae, James A Jorgenson.	pp. 22-28	
The efficacy of reboxetine as an antidepressant: a meta-analysis of both continuous (mean HAM-D score) and dichotomous (response rate) outcomes	共著	2008年6月	Kobe Journal of Medical Sciences 54(2)	G Chuluunkhuu, N Nakahara, S Yanagisawa, I Kamae.	pp. 149-158.	
Cost-Effectiveness Analysis of Oseltamivir for Influenza Treatment Considering the Virus Emerging Resistant to the Drug in Japan	共著	2009, 12	Value in Health, 12(Supplement 3),	Hiroko Nagase, Kensuke Moriwaki, Maki Kamae, Shinichiro Yanagisawa, Isao Kamae.	pp. S62-S65	
Cost-effectiveness of alendronate for the treatment of osteopenic postmenopausal women in Japan.	共著	2013, 2	Journal of Bone and Mineral Research, Volume 28, Issue 2,	K. Moriwaki, H. Komaba, S. Noto, S. Yanagisawa, T. Takiguchi, H. Inoue, T. Toujou, M. Fukagawa, H.E. Takahashi.	pp. 395-403	
酸化ストレス度評価(d-ROMsテスト)からみた禁煙治療の有効性の検討	共著	2015, 6	人間ドッグ Volume 30, Number 1,	堀江弘子, 岩切龍一, 黒木茂高, 岩本英里, 古賀さやか, 田代貴也, 小野尚文, 江口尚久, 中村隆典, 柳澤振一郎, 駒田富佐夫, 江口有一郎.	pp. 30-37	
Salbutamol inhibits ubiquitin-mediated survival motor neuron protein degradation in spinal muscular atrophy cells.	共著	2015, 10	Biochemistry and Biophysics Reports, 4	Nur Imma Fatimah Harahap, Dian Kesumapramudya Nurputra, Mawaddah Ar Rochmah, Ai Shima, Naoya Morisada, Toru Takarada, Atsuko Takeuchi, Yumi Tohyama, Shinichiro Yanagisawa, Hisahide Nishio.	pp. 351-356	
Telomeric Region of the Spinal Muscular Atrophy Locus Is Susceptible to Structural Variations.	共著	2016, 6	Pediatric Neurology, 58	Yoriko Noguchi, Akira Onishi, Yuji Nakamachi, Nobuhide Hayashi, Nur Imma Fatimah Harahap, Mawaddah Ar Rochmah, Ai Shima, Shinichiro Yanagisawa, Naoya Morisada, Taku	pp. 83-89	

				Nakagawa, Kazumoto Iijima, Shimpei Kasagi, Jun Saegusa, Seiji Kawano, Masakazu Shinohara, Shinya Tairaku, Toshio Saito, Yuji Kubo, Kayoko Saito, Hisahide Nishio.		
Gender Effects on the Clinical Phenotype in Japanese Patients with Spinal Muscular Atrophy.	共著	2017, 10	Kobe Journal of Medical Sciences 63(2),	Ar Rochmah M, Shima A, Harahap NIF, Niba ETE, Morisada N, Yanagisawa S, Saito T, Kaneko K, Saito K, Morioka I, Iijima K, Lai PS, Bouike Y, Nishio H, Shinohara M.	pp. E41-E44	
【その他】 Monte-Carlo Validation of Delta-K Method for Sample-Size Calculation in a Cost-Effectiveness Trial.	共著	2004年5月	Value in Health 7(3),	Nakajyo K, Cai L Kamae I, Nakahara N, Aino H, Washio K, Yanagisawa S.	p. 301	
Economic Evaluation of the Stepped Versus Ordinary Care for Prevention of Type-2 Diabetes in The JDPP.	共著	2004年10月	Value in Health 7(6),	Yanagisawa S, Shimaya M, Nakahara N, Kamae I, Kuzuya H.	pp. 738-739	
スマトラ沖大地震・津波災害 に対する医学系分野からの 復興支援活動 —環境保健に関する災害マ ネジメントシステムのシン ポジウム:インドネシア現地 報告—	共著	2005年3月	神戸大学都市安全研究セン ター研究報告 9,	柳澤振一郎、 鎌江伊三夫	pp. 171-177.	
米国における救急救命医療 を担うヘリコプターによる 患者搬送に関する現状と課 題	共著	2005年3月	神戸大学都市安全研究セン ター研究報告 9,	大塚邦子、 柳澤振一郎、 鎌江伊三夫	pp. 165-169.	
疫学教育のための二項分布 のベイズ推論視覚化ツール の開発	共著	2005年9月	第 64 回日本公衆衛生学会総 会	井上弘樹、 柳澤振一郎、 鎌江伊三夫		
教育・実践用 EBM 支援文献検 索データベースシステムの 開発	共著	2005年11月	第 25 回医療情報学連合大会	鎌江伊三夫、 柳澤振一郎、 井上弘樹、 島屋真希、 白石直樹、 高宮 健仁		
第 I 相臨床試験におけるコ ンピュータ支援による動的 安全性評価の新手法	共著	2005年11月	第 25 回医療情報学連合大会	伊東秀崇、 井上弘樹、 柳澤振一郎、 鎌江伊三夫		
Outcomes and Costs of Generic and Trade Ranitidine Use in the United States and Japan	共著	2006年3月	ISPOR 2nd Asia-Pacific Congress.	Yanagisawa S, Kamae I , Oederda GM, Otsuka M, Jorgenson J, Otsuka K, Brixner D.		
疫学教育のための、正規分布 のベイズ推測視覚化ツール.	共著	2007年10月	第 66 回日本公衆衛生学会総 会抄録集(1347-8060)	Inoue H, Yanagisawa S, Nishimura K.	Page 235	

疫学教育のための、二つの正規分布の比較のベイズ推測視覚化ツール開発.	共著	2007年10月	薬剤疫学(1342-0445)12 巻 Suppl.	Inoue H, Uchiyama H, Yanagisawa S, Nishimura K.	Page S56-S57	
A BAYESIAN ADAPTIVE DESIGN FOR EVALUATION OF THE GAP BETWEEN EFFICACY AND ERROR-ADJUSTED EFFECTIVENESS	共著	2007年11月	Value in Health 10(6)	K Moriwaki, I Kamae, S Yanagisawa, H Nagase	Page 451	
THE OPERATIVE INTERVAL OF AN INCREMENTAL COST-EFFECTIVENESS RATIO:A NEW BENCHMARK FOR ASSESSING THE BOUNDARIES ON THE EFFICIENT FRONTIER CURVE	共著	2007年11月	Value in Health 10(6)	I Kamae, K Moriwaki, S Yanagisawa, M Kamae	Page 452	
医学判断のための、三つの正規分布のベイズ推測視覚化ツール開発.	共著	2008年1月	J Epidemiol Vol.18, No.1 Supplement,	Inoue H, Yanagisawa S, Nishimura K, Maeda E.	Page 75	
医学判断のための、Dirichlet 分布と多項モデルのベイズ推測視覚化システム.	共著	2008年9月	Health Sciences (ISSN: 0911-7024) Vol. 24, No. 3	Inoue H, Uchiyama H, Yanagisawa S, Nishimura K.	Page 317	
局所一様事前分布を用いた、複数のベルヌイ試行のベイズ推測視覚化ツールの開発.	共著	2008年10月	第67回 日本公衆衛生学会総会抄録集(1347-8060)	Inoue H, Yanagisawa S, Kamae I.	Page 232	
疫学教育のための、対数 t 分布を用いた対数正規分布のベイズ推測動的視覚化ツール.	共著	2009年1月	J Epidemiol Vol.19, No.1 Supplement,	Inoue H, Uchiyama H, Yanagisawa S, Nishimura K, Maeda E.	Page 83	
疫学学習のための、二変量正規分布における相関と回帰のベイズ推測動的視覚化ツール.	共著	2009年1月	J Epidemiol Vol.19, No.1 Supplement,	Inoue H, Uchiyama H, Yanagisawa S, Nishimura K, Maeda E.	Page 84	
薬剤疫学のための、二変量正規分布のベイズ推測動的視覚化ツール.	共著	2009年2月	社会薬学 Vol.27, No.2,	Yanagisawa S, Inoue H, Uchiyama H, Nishimura K.	Page 81-83	
疫学教育のための、対数正規分布のベイズ推測動的視覚化ツール開発.	共著	2009年2月	社会薬学 Vol.27, No.2,	Inoue H, Uchiyama H, Yanagisawa S, Nishimura K.	Page 79-80	
超幾何分布のベイズ推測視覚化ツールの開発と精度管理への応用に対する検討(会議録)	共著	2009. 07	臨床病理(0047-1860)57 巻補冊	井上弘樹, 内山八郎, 西村邦宏, 柳澤振一郎	Page 299	
医学判断における、二つの割合の評価のためのベイズ推測視覚化システム	共著	2009. 8	Health Sciences(0911-7024)Vol. 25, No. 3	Inoue H, Uchiyama H, Yanagisawa S, Nishimura K	Page 216	
疫学学習のための、二変量正規分布の差のベイズ推測動的視覚化ツールの開発	共著	2009. 10	日本公衆衛生雑誌 56 巻 10 号 特別付録 第 68 回 日本公衆衛生学会総会抄録集	Inoue H, Yanagisawa S, Nishimura K	Page 343	
生存モデルのための、Weibull 分布のベイズ推測視覚化ツールの開発	共著	2010. 03	社会薬学 Vol.28, No.3,	井上弘樹, 内山八郎, 柳澤振一郎	Page 65-66	
教職員健診、血液疾患症例での酸化ストレス度計測の意義について.	共著	2010. 03	CAMPUS HEALTH 47	西郷勝康、炬口真理子、柳澤振一郎、富士原やよい、池田卓代.	Page 228-230	
A Development of Visualization Software for a Bayesian Signal	共著	2010. 10	The 16th Annual Meeting of JSPE and the 5th ACPE Joint Meeting Abstracts	Inoue H, Uchiyama H, Moriwaki K,	Page 62	

Detection Method.				Yanagisawa S,		
薬剤経済学のための、NNT (治療必要数) のベイズ推測視覚化ツール	共著	2011. 03	社会薬学 Vol. 29, No. 2,	井上弘樹, 森脇健介, 内山八郎, 柳澤振一郎	Page 118-119	
生存モデルのハザード関数に関するベイズ推測視覚化ツールの開発	共著	2012. 01	社会薬学 Vol. 30, No. 2,	井上弘樹, 森脇健介, 内山八郎, 柳澤振一郎	Page 103-104	
Cost-Effectiveness of Alendronate Therapy for Postmenopausal Women in Japan	共著	2012. 06	Value in Health 15(4)	K. Moriwaki H. Komaba, S. Noto, S. Yanagisawa, H. Inoue, T. Takeshi, M. Fukagawa, H.E. Takahashi	Page 46-47	
Cost-Effectiveness of Alendronate Therapy For Corticosteroid-Induced Osteoporosis in Postmenopausal Women With Rheumatoid Arthritis in Japan	共著	2012. 11	Value in Health 15(7)	K. Moriwaki S. Noto, H. Inoue, S. Yanagisawa,	Page 447	
Development and Validation of a Health Economic Model for Corticosteroid-Induced Osteoporosis in Postmenopausal Women With Rheumatoid Arthritis in Japan	共著	2012. 11	Value in Health 15(7)	K. Moriwaki S. Noto, S. Yanagisawa, S. Ito, T. Toujou.	Page 645	
Predicting EQ-5D Utility Values from SF-36 Scores in Patients with Rheumatoid Arthritis in Japan.	共著	2013. 11	Value in Health, Vol. 16, Issue 7,	Moriwaki K, Ito S, Kobayashi D, Noto S, Yanagisawa S, Murasawa A, Toujo T.	Page 568	
Cost-Effectiveness Analysis of Alendronate Therapy for Secondary Prevention of Osteoporotic Fractures.	共著	2013. 11	Value in Health, Vol. 16, Issue 7,	K. Moriwaki, H. Komaba, S. Noto, S. Yanagisawa, T. Takiguchi, T. Toujo, H. Inoue, M. Fukagawa, H.E. Takahashi	Page 571	
職域成人歯科健診の継続受診による効果	共著	2016. 5	口腔衛生会誌 J Dent Hlth 66(2)	時岡早苗, 山本三千子, 柳澤振一郎, 古森孝英	Page 98	
兵庫県における妊婦の歯科口腔保険行動と歯科健診に関する意識調査	共著	2017. 4	口腔衛生会誌 J Dent Hlth 67(特別号)	時岡早苗, 西尾久英, 柳澤振一郎, 山本三千子, 古森孝英	Page 153	
皮膚感染症を予測するパラメーター検討 Part 2 (各論)	単著	2017. 4	日本臨床皮膚科医会雑誌, 34 (2)	柳澤振一郎	Page 186	
職域歯科健診の継続受信による歯周疾患の予防効果について	共著	2018. 4	口腔衛生会誌 J Dent Hlth 68(特別号)	時岡早苗, 西尾久英, 山本三千子, 柳澤振一郎, 古森孝英	Page 157	
5 番染色体関連連脊髄性筋萎縮症で認められた臨床症状の性差	共著	2018. 9	BIO Clinica, Vol.33 (11)	柳澤振一郎, 西尾久英, 齊藤利雄, 篠原正和	Page 99-103	

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
-----------------	-----	------	------------

特筆すべき事項なし			
-----------	--	--	--

IV 学会等および社会における主な活動

1996 年 2 月～現在	日本疫学会 正員
1996 年 5 月～現在	日本化学療法学 正員
2002 年 9 月～現在	ISPOR (International Society of Pharmacoeconomics and Outcomes Research) 正員
2002 年 9 月～2003 年 9 月	ISPOR 第 1 回アジア太平洋会議 プログラム委員
2002 年 11 月～現在	日本社会薬学会 正員
2002 年 11 月～2003 年 11 月	第 22 回 日本社会薬学会 実行委員
2005 年 9 月～現在	日本公衆衛生学会 正員
2005 年 7 月～現在	国際医薬経済・アウトカム研究学会 (ISPOR) 日本部会 役員

V 学内における主な活動

2009 年 4 月～2012 年 3 月	薬学部 広報委員 自己点検・評価委員
2009 年 4 月～2011 年 3 月	薬学部 入学試験委員 入試教科委員・学部選出委員
2012 年 4 月～2016 年 3 月	教育改善実施 (FD) 委員
2012 年 4 月～現在	薬学部 就職キャリア委員
2012 年 4 月～現在	全学自己評価委員長
2016 年 4 月～現在	教務部長

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	山本 直樹	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
姫路獨協大学薬学部での教育学部生・講義	2018 年 9-2 月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科の教授として担当の「病態生理学Ⅱ」（必修科目，3 年次配当，半期，2 単位）において実践した。 姫路獨協大学薬学部の 3 年生に開講している病態生理学Ⅱの授業において、中枢系疾患、感覚器系疾患、感染症、悪性腫瘍の様々な治療法について薬理学、病理学を基礎として最新の情報を取り入れて講義を行った。また、テストを作成し学生の理解度を評価しました。
	2018 年 9-2 月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科の教授として担当の「診断学」（必修科目，4 年次配当，半期，1 単位）において実践した。 姫路獨協大学薬学部の 4 年生に開講している診断学の授業において、内分泌系疾患、代謝系疾患、尿路・泌尿器系疾患の様々な治療法について薬理学、病理学、薬物治療学を基礎として最新の情報を取り入れて講義を行った。また、テストを作成し学生の理解度を評価しました。
2 作成した教科書、教材、参考書		
姫路獨協大学で作成した資料	2018 年 9-2 月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科の教授として担当の「病態生理学Ⅱ」（必修科目，3 年次配当，半期，2 単位）において実践した。 姫路獨協大学薬学部の 3 年生に開講している病態生理学Ⅱの授業において使用するスライド、レジュメ、宿題、確認試験及び定期テストの問題を作成した。また、授業の参考となる参考書の選別を行いました。
	2018 年 9-2 月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科の教授として担当の「診断学」（必修科目，4 年次配当，半期，1 単位）において実践した。 姫路獨協大学薬学部の 4 年生に開講している病態生理学Ⅱの授業において使用するスライド、レジュメ、宿題、確認試験及び定期テストの問題を作成した。また、授業の参考となる参考書の選別を行いました。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特になし		

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著/別	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】 特になし						
【論文】 特になし						

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
第 61 回日本神経化学学会大会 合同 年会	神戸	平成 30 年 9 月 6-8 日	山本直樹、谷田守、鈴木健二、祖父江和哉 レプチンは初代培養アストロサイトのネプリライシン とインスリン分解酵素発現を調節する
第 37 回日本認知症学会学術 集会	札幌	平成 30 年 10 月 12-14 日	山本直樹、祖父江和哉 PKAおよびPKC経路とアストロサイトのネプリライシン とインスリン分解酵素発現検討

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

Ⅴ 学内における主な活動

所属	薬学部 医療薬学科	職名	准教授	氏名	角山 圭一	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	-----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生の講義内容の理解度把握	2008 年 10 月～現在	毎回、講義内容から小テストを作成して、試験を実施し、直ちに解答および解説している。その際、学んだことを着実に理解させる目的で、学生自らに採点させ、自分の間違った問題、分からなかった問題を意識させている。また、教員も学生の理解度を把握し、講義内容が全学生に理解できるよう努力している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
学生へのわかりやすい講義概要・資料の作成（配布資料）	2007 年 10 月～現在	1 冊の教科書や参考書だけで講義を進めるのではなく、教官が様々な教科書や参考図書を参考に、学生にとってわかりやすい資料を作成し、毎回の講義で配布している。資料では、教科書に記載された文章を、イラストや図、また、表に作り直し、学生の理解を促すように努力している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
「第 15 回薬剤師のためのワークショップ in 近畿」および「厚生労働省による認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ」 タスクフォース	2008 年 4 月 26-27 日	兵庫医療大学薬学部にて開催された「第 15 回薬剤師のためのワークショップ in 近畿」および「厚生労働省による認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ」にタスクフォースとして参加した。本ワークショップでは、病院（薬局や薬剤部）や保険薬局で働く現場の薬剤師に対して、学生への教育の方法や評価、などグループで話し合いをし、タスクフォースのサポートの下で、その方法を考え出してもらった。
独立行政法人 科学技術振興機構 「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト事業」（講初大 84003） 「薬理学講座」	2008 年 8 月 29 日	高校生にサイエンスの面白さ、興味を持ってもらうことを目的に、連携先の高校生を対象に、高校生のための「薬理学講座」を開催した。本講座では、まず、はじめに「薬理学とは何か」ということを簡単に説明し、次いで、実験動物を用いて実際に薬学部の薬理学実習で行う実験を行った。本講座の受講をきっかけに、科学、薬学に興味を持ち、本学に入学した高校生がいる。本講座は独立行政法人科学技術振興機構のサポートにより開講した。
出張講義 「高校生のための薬理学講座」	2008 年 12 月 16 日	兵庫県立川西北陵高等学校にて、「高校生のための薬理学講座」の講義を行った。講義では、「薬学部とはどんな学部か」、「薬学部で学ぶことは何か」を説明した後、私が担当している専門科目「薬理学」について説明した。薬理学が薬学部の専門科目であり、高校生には理解しにくい可能性があったため、「身の回りの薬（家庭の薬箱に入っている薬）が体に入って、どの様にして効くか」との内容で、具体的に薬品名を挙げて、理解しやすい工夫をした講義をした。

「第 43 回薬剤師のためのワークショップ in 近畿」および「厚生労働省による認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ」 タスクフォース	2009 年 11 月 22-23 日	兵庫医療大学薬学部にて開催された「第 43 回薬剤師のためのワークショップ in 近畿」および「厚生労働省による認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ」にタスクフォースとして参加した。本ワークショップでは、病院（薬局や薬剤部）や保険薬局で働く現場の薬剤師に対して、学生への教育の方法や評価、などグループで話し合いをし、タスクフォースのサポートの下で、その方法を考え出してもらった。
独立行政法人 科学技術振興機構 「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト（講座型学習活動）」 (AD092032) 「薬の効果を実感してみよう」	2010 年 1 月 6 日	本講座は独立行政法人科学技術振興機構のサポートにより開講し、本講座は、2008 年 8 月 29 日に次いで、2 回目である。 本講座では、高校生にサイエンスの面白さ、興味を持ってもらうことを目的に、連携先の高校生を対象に、高校生のための「薬の効果を実感してみよう」を開催した。本講座では、まず、薬の効果を研究する学問であり、私が担当している専門科目「薬理学」について、高校生でもわかるように説明し、次いで、実験動物を用いて実際に薬学部の薬理学実習で行う実験を行った。本講座の受講をきっかけに、科学、薬学に興味を持ち、本学に入学した高校生がいる。
出張講義 「薬剤師という職業について」	2010 年 10 月 21 日	姫路市立姫路高等学校にて、「薬剤師という職業について」の講義を行った。講義では、「薬学部とはどのような学部か」、「薬学部で何を学ぶか」、「薬剤師免許の取得について」を説明した。その後、製薬企業、研究所、公務員など多方面で活躍している薬剤師を紹介し、薬剤師の職域を説明した。また、講義の最後に、私が担当している専門科目「薬理学」について、「身の回りの薬（家庭の薬箱に入っている薬）が体に入って、どの様にして吸収され、効果を示すのか」との内容で、具体的に薬品名を挙げて、高校生にも理解しやすい内容で講義をした。
出張講義 「薬剤師という職業について」	2013 年 11 月 18 日	姫路市立姫路高等学校にて、「薬剤師という職業について」の講義を行った。本講義は、2010 年 10 月 21 日に次いで、2 回目である。講義では、「薬学部とはどのような学部か」、「薬学部で何を学ぶか」、「薬剤師免許の取得について」を説明した。その後、製薬企業、研究所、公務員など多方面で活躍している薬剤師を紹介し、薬剤師の職域を説明した。

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の 名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】						
ALS：研究と診療の進歩、ALS と神経栄養因子－新規神経栄 養因子・神経再生因子として のHGF－	共著	2007 年	BRAIN and NERVE－神 経研究の進歩－、51 巻 10 号	◎ 船越洋、大谷若菜、 <u>角山圭一</u> 、中村敏一	1195-1202	
ALS に対する新しい治療薬と しての肝細胞増殖因子 (HGF) の研究	共著	2007 年	難病と在宅ケア 13 巻 7 号	◎ 船越洋、大谷若菜、 <u>角山圭一</u> 、中村敏一	54-55	
－臨床に必要な神経薬理・化 学－HGF の神経保護作用機序	共著	2007 年	Clinical Neuroscience 25 巻 6 号	◎ 船越洋、 <u>角山圭一</u> 、 大谷若菜、中村敏一	620-621	
－臨床に必要な神経薬理・化 学－HGF の神経疾患治療効果	共著	2007 年	Clinical Neuroscience 25 巻 5 号	◎ 船越洋、 <u>角山圭一</u> 、 大谷若菜、中村敏一	500-501	
GABA _A 受容体アンタゴニスト による LTP 様疎通の誘発	共著	2009 年	生体の科学 60 巻 5 号	◎ 松山正剛、 <u>角山圭 二</u> 、谷口泰造	392-393	
再生因子 (HGF) の神経系にお ける機能と神経再生医療への 展開の可能性	共著	2012 年	人工血液 20 巻 1 号	◎ 船越洋、島田 (大谷) 若菜、 <u>角山圭一</u> 、加藤貴 史、中村敏一、北村和也、 中村雅也、戸山芳昭、岡 野栄之、青木正志	12	
細胞表面受容体 － EphA3 受 容体とシナプス可塑性 －	共著	2013 年	生体の科学 64 巻 5 号	◎ 松山正剛、 <u>角山圭一</u> 、 松浦健二	474-475	
【論文】						
Protein kinase C activates human lipocalin-type prostaglandin D synthase gene expression through de-repression of Notch-Hes signaling and enhancement of AP-2 β function in brain-derived TE671 cells.	共著	2005 年	Journal of Biological Chemistry 280 (18)	◎ Ko Fujimori <u>Keiichi Kadoyama</u> Yoshihiro Urade	18452-18461	
Non-mammal shows conserved features of mammal lipocalin-type prostaglandin D synthase gene structure and ligand binding, but reveals different expression pattern and enzymatic property.	共著	2006 年	Gene 375	◎ Ko Fujimori Takashi Inui Nobuko Uodome <u>Keiichi Kadoyama</u> Kosuke Aritake Yoshihiro Urade	14-25	
Serum cystatin C levels to predict serum concentration of digoxin in Japanese patients.	共著	2006 年	International Journal of Medical Science 3 (3)	◎ Tsutomu Nakamura Takeshi Ioroi Toshiyuki Sakaeda Masanori Horinouchi Nobuhide Hayashi Kensuke Saito Mitsuro Kosaka Noboru Okamura <u>Keiichi Kadoyama</u> Shunichi Kumagai	92-96	

MMP-9 antisense oligodeoxynucleotide exerts an inhibitory effect on osteoclastic bone resorption by suppressing cell migration.	共著	2006 年	Life Science 79 (17)	Katsuhiko Okumura © Osamu Ishibashi Satoru Niwa <u>Keiichi Kadoyama</u> Takashi Inui	1657-1660	
MDR1 T-129C polymorphism can be predictive of differentiation, and thereby prognosis of colorectal adenocarcinomas in Japanese.	共著	2006 年	Biological & Pharmaceutical Bulletin 29 (7)	© Tatsuya Koyama Tsutomu Nakamura Chiho Komoto Toshiyuki Sakaeda Mayuko Taniguchi Noboru Okamura Takao Tamura Nobuo Aoyama Takashi Kamigaki Yoshikazu Kuroda Masato Kasuga <u>Keiichi Kadoyama</u> Katsuhiko Okumura	1449-1453	
Hepatocyte growth factor (HGF) attenuates gliosis and motoneuronal degeneration in the brainstem motor nuclei of a transgenic mouse model of ALS.	共著	2007 年	Neuroscience Research 59 (4)	© <u>Keiichi Kadoyama</u> Hiroshi Funakoshi Wakana Ohya Toshikazu Nakamura	446-456	
Expression of prostaglandin D ₂ synthase in activated eosinophils in nasal polyps.	共著	2007 年	Archives of Otolaryngology - Head & Neck Surgery 133 (7)	© Sawako Hyo Ryo Kawata <u>Keiichi Kadoyama</u> Naomi Eguchi Takahiro Kubota Hiroshi Takenaka Yoshihiro Urade	693-700	
Hematopoietic prostaglandin D synthase and DP1 receptor are selectively upregulated in microglia and astrocytes within senile plaques from human patients and in a mouse model of Alzheimer disease.	共著	2007 年	Journal of Neuropathology and Experimental Neurology 66	© Ikuko Mohri © <u>Keiichi Kadoyama</u> © Takahisa Kanekiyo Yo Sato Kuriko Shimono Yuko Saito Kinuko Suzuki Takashi Kudo Masatoshi Takeda Yoshihiro Urade Shigeo Murayama Masako Taniike	469-480	
Cyclosporine から sirolimus への切り替えに際し、sirolimus 血中濃度の一過性上昇を認めた症例	共著	2007 年	TDM 研究 24 巻 2 号	© 中村任、五百蔵武士、 大松秀明、山下和彦、白 木孝、堀之内正則、西口 工司、福本巧、具英成、 岡村昇、 <u>角山圭一</u> 、奥村 勝彦、柴田敏之	98-103	
LTP-like facilitation via GABA _A receptor blockade in the mouse dentate gyrus <i>in vivo</i> .	共著	2008 年	NeuroReport 19 (18)	© Shogo Matsuyama Taizo Taniguchi <u>Keiichi Kadoyama</u> Akira Matsumoto	1809-1813	
姫路獨協大学における早期体験学習前後の学生アンケート						

調査						
Quantitative analysis of β -amyloid peptides expressed in human cerebrospinal fluid by an improved method of antibody-assisted time-of-flight mass spectrometry.	共著	2009 年	医薬品情報学 10 卷 4 号	◎ 清原義史、大西憲明、角山圭一、木下淳、中村隆典、宮本和英、矢上達郎、通山由美、駒田富佐夫、奥村勝彦	273-279	
Disease-dependent reciprocal phosphorylation of serine and tyrosine residues of c-Met/HGF receptor contributes disease retardation of a transgenic mouse model of ALS.	共著	2009 年	International Journal of Peptide Research and Therapeutics 15 (3)	◎ Akira Matsumoto Reiko Matsumoto <u>Keiichi Kadoyama</u> Takaaki Nishimoto Shogo Matsuyama Osamu Midorikawa	205-210	
Use of a phosphosensor dye in proteomic analysis of human mutant tau transgenic mice.	共著	2009 年	Neuroscience Research	◎ <u>Keiichi Kadoyama</u> Hiroshi Funakoshi Wakana Ohya Takahiro Nakamura Kunio Matsumoto Shogo Matsuyama Toshikazu Nakamura	194-200	
SJLB mice develop tauopathy-induced parkinsonism.	共著	2009 年	NeuroReport 20 (18)	◎ Masaaki Takano Mieko Otani Akiko Sakai <u>Keiichi Kadoyama</u> Shogo Matsuyama Akira Matsumoto Mariko Takenokuchi Miho Sumida Taizo Taniguchi	1648-1653	
Synaptotagmin1 synthesis induced by synaptic plasticity in mouse hippocampus through activation of nicotinic acetylcholine receptors.	共著	2010 年	Neuroscience Letters 473 (3)	◎ Mariko Takenokuchi <u>Keiichi Kadoyama</u> Shunmei Chiba Miho Sumida Shogo Matsuyama Katsuyasu Saigo Taizo Taniguchi	182-185	
Phosphoproteome profiling using a fluorescent phosphosensor dye in two-dimensional polyacrylamide gel electrophoresis.	共著	2011 年	Neuroscience Letters 489 (1)	◎ Takaaki Nishimoto ◎ <u>Keiichi Kadoyama</u> Taizo Taniguchi Masaaki Takano Mieko Otani Tooru Nakamura-Hirota Yabin Lu Akira Matsumoto Shogo Matsuyama	25-29	
Therapeutic potential of hepatocyte growth factor for treating neurological diseases.	共著	2011 年	Applied Biochemistry and Biotechnology 164 (4)	◎ Mieko Otani Taizo Taniguchi Akiko Sakai Jouji Seta <u>Keiichi Kadoyama</u> Tooru Nakamura-Hirota Shogo Matsuyama Keiji Sano Masaaki Takano	804-818	
	共著	2011 年	Current Drug Therapy 6 (3)	◎ <u>Keiichi Kadoyama</u> Kaori Kadoyama Hiroshi Funakoshi Toshikazu Nakamura	197-206	

The expression changes of EphA3 receptor during synaptic plasticity in mouse hippocampus through activation of nicotinic acetylcholine receptors.	共著	2012 年	NeuroReport 23 (13)	Toshiyuki Sakaeda ◎ Tooru Nakamura-Hirota ◎ <u>Keiichi Kadoyama</u> Masaaki Takano Mieko Otani Shogo Matsuyama	746-749	
Loss of dopaminoreceptive neuron causes L-dopa resistant Parkinsonism in tauopathy.	共著	2012 年	Neurobiology of Aging 33 (10)	◎ Shunmei Chiba Erika Takada Mamoru Tadokoro Taizo Taniguchi <u>Keiichi Kadoyama</u> Mariko Takenokuchi Seiya Kato Noboru Suzuki	2491-2505	
Hepatocyte growth factor overexpression in the nervous system enhances learning and memory performance in mice.	共著	2012 年	Journal of Neuroscience Research 90 (9)	◎ Takashi Kato Hiroshi Funakoshi <u>Keiichi Kadoyama</u> Satsuki Noma Masaaki Kanai Wakana Ohya- Shimada Shinya Mizuno Nobutaka Doe Taizo Taniguchi Toshikazu Nakamura	1743-1755	
The expression changes of EphA3 receptor during synaptic plasticity in mouse hippocampus through activation of nicotinic acetylcholine receptors.	共著	2012 年	NeuroReport 23 (13)	◎ Tooru Hirota ◎ <u>Keiichi Kadoyama</u> Masaaki Takano Mieko Otani Shogo Matsuyama		
Proteomic analysis of time-dependent changes in proteins expressed in mouse hippocampus during synaptic plasticity induced by GABAA receptor blockade.	共著	2013 年	Neuroscience Letters 555	◎ Kenji Matsuura Tooru Nakamura-Hirota Masaaki Takano Mieko Otani <u>Keiichi Kadoyama</u> Shogo Matsuyama	18-23	
アレルギー性皮膚炎の治療薬ーシコニンの効果ー						
神経特異的 HGF 遺伝子発現は ALS モデル Tg マウスの運動神経変性とグリオーシスを抑制し寿命を延長する	共著	2013 年	SMALL ANIMAL DERMATOLOGY 9 (1)	◎ 渡邊愛未、七里博章、 炬口真理子、宮本和英、 角山圭一、谷口泰造	60-65	
The influence of chronic ibuprofen treatment on proteins expressed in the mouse hippocampus.	共著	2014 年	日本実験動物技術者協会北海道支部会誌 38	◎ 清水範彦、島田（大谷）若菜、角山圭一、早川寿行、千葉博信、Sun Woong、中村敏一、船越洋	10-16	
Lipid A-activated inducible nitric oxide synthase expression via nuclear factor- κ B in mouse choroid plexus cells.	共著	2015 年	European Journal of Pharmacology 752	◎ Kenji Matsuura Mieko Otani Masaaki Takano <u>Keiichi Kadoyama</u> Shogo Matsuyama	61-68	
	共著	2015 年	Immunology Letters 167 (2)	◎ Masaaki Takano Mami Ohkusa Mieko Otani Kyong-Son Min <u>Keiichi Kadoyama</u> Katori Minami	57-62	

Changes in the expression of collapsin response mediator protein-2 during synaptic plasticity in the mouse hippocampus.	共著	2015 年	Journal of Neuroscience Research 93(11)	Keiji Sano Shogo Matsuyama © Keiichi Kadoyama Kenji Matsuura Tooru Nakamura-Hirota Masaaki Takano Mieko Otani Shogo Matsuyama.	1684 -1692	
The influence of chronic nicotine treatment on proteins expressed in the mouse hippocampus and cortex.			European Journal of Pharmacology 780	© Kenji Matsuura Mieko Otani Masaaki Takano <u>Keiichi Kadoyama</u> Shogo Matsuyama	16-25	
Proteomic analysis of hippocampus and cortex in streptozotocin-induced diabetic model mice showing dementia.	共著	2016 年	Journal of Diabetes Research	© Kenji Matsuura Mieko Otani Masaaki Takano <u>Keiichi Kadoyama</u> Shogo Matsuyama	Article ID 8953015 1-11	
Evaluation of Absorbability of Macromolecular Substances in the Oral Mucosa and Skin using a Three-Dimensional Tissue Culture Model	共著	2018 年	Biology and Medicine 10 (5)	© Mariko Takenokuchi <u>Keiichi Kadoyama</u> Daisuke Yoshida Shigeki Takaki Ryoma Yamamoto Katsuyasu Saigo Taizo Taniguchi	1000448	
【その他（報告書）】						
HGF は広範囲（脊髄に加え脳幹）ALS 運動ニューロンに効率よくシグナル伝達し、神経細胞死およびグリオシスを抑制する	共著	2006 年	厚生労働科学研究費補助金・こころの健康科学研究事業「筋萎縮性側索硬化症に対する肝細胞増殖因子（HGF）を用いた挑戦的治療法の開発とその基盤研究」平成 17 年度総括研究報告書	© 船越洋、 <u>角山圭一</u> 、中村敏一、青木正志、糸山泰人、加藤信介、立野勝彦、竹尾聰	14-16	厚生労働省
HGF の ALS 治療薬としての可能性、－HGF の広範囲運動ニューロンに対する機能・作用分子機構解析－	共著	2006 年	厚生労働科学研究費補助金・こころの健康科学研究事業「筋萎縮性側索硬化症に対する肝細胞増殖因子（HGF）を用いた挑戦的治療法の開発とその基盤研究」平成 15-17 年度 総合研究報告書	© 船越洋、 <u>角山圭一</u> 、宮澤大介、中村敏一、青木正志、糸山泰人、加藤信介、水上浩明、小澤敬也、宮武伸一、立野勝彦	22-25	厚生労働省
肝細胞増殖因子の筋萎縮性側索硬化症に対する機能解析と疾患治療への適用	単著	2006 年	平成 17 年度 厚生労働科学研究費補助金・こころの健康科学研究推進事業・研究報告集	© <u>角山圭一</u>	119-124	財団法人長寿科学振興財団
肝細胞増殖因子の筋萎縮性側	単著	2007 年	平成 18 年度 厚生労働	© <u>角山圭一</u>	171-175	財団法人

索硬化症に対する機能解析と疾患治療への適用			働科学研究費補助金・こころの健康科学研究推進事業・研究報告集			精神・神経科学振興財団
筋萎縮性側索硬化症 (ALS) トランスジェニックマウスの肝臓・腎臓・心臓における一過性組織変性からの回復と HGF/活性型リン酸化 cMet (pcMet) システムの調整機構:変性運動ニューロンに対する HGF 治療の戦略的拠点	共著	2007 年	厚生労働科学研究費補助金・難治性疾患克服研究事業「筋萎縮性側索硬化症の画期的診断・治療法に関する研究」平成 18 年度総括研究報告書	◎ 加藤信介、加藤雅子、青木正志、糸山泰人、船越洋、大谷若菜、<u>角山圭一</u>、中村敏一、西野武士、阿部靖子、平野朝雄	40-44	厚生労働省
ALS ストレスに対する自己生存機構:レドックス・HGF/活性型リン酸化 cMet (pcMet) システムの解明と ALS 治療薬の開発までの過程	共著	2008 年	厚生労働科学研究費補助金・難治性疾患克服研究事業「筋萎縮性側索硬化症の画期的診断・治療法に関する研究」平成 17-19 年度総合研究報告書	◎ 加藤信介、加藤雅子、青木正志、糸山泰人、船越洋、大谷若菜、<u>角山圭一</u>、中村敏一、西野武士、阿部靖子、平野朝雄	44-56	厚生労働省
HGF-c-Met system のミクログリアへの機能解析-HGF の発症後 ALS 治療適用の至適化をめざしてー	共著	2009 年	厚生労働科学研究費補助金・こころの健康科学研究事業「筋萎縮性側索硬化症の病態に基づく画期的治療法の開発」平成 20 年度総括研究報告書	◎ 船越洋、大谷若菜、<u>角山圭一</u>、中村敏一	30-32	厚生労働省
アルツハイマー病の学習記憶障害に対する肝細胞増殖因子の機能解析と疾患治療への適用	単著	2011 年	科学研究費補助金・基盤研究 (C) 平成 20-22 年度研究成果報告書	◎ <u>角山圭一</u>		文部科学省
ALS 治療に向けた HGF 供給法の検討-遺伝子治療法の可能性について	共著	2011 年	厚生労働科学研究費補助金・こころの健康科学研究事業「筋萎縮性側索硬化症の病態に基づく画期的治療法の開発」平成 22 年度総括研究報告書	◎ 船越洋、<u>角山圭一</u>、島田 (大谷) 若菜、中村敏一、青木正志、糸山泰人、宮武伸一、COFFIN R.S.、水上浩明、小澤敬也	35-39	厚生労働省
ALS の病態修飾の分子機序解析と再生因子 HGF の治療適用の可能性	共著	2011 年	厚生労働科学研究費補助金・こころの健康科学研究事業「筋萎縮性側索硬化症の病態に基づく画期的治療法の開発」平成 20-22 年度総合研究報告書	◎ 船越洋、<u>角山圭一</u>、島田 (大谷) 若菜、中村敏一、加藤信介、藤原範子、谷口直之、青木正志、糸山泰人、宮武伸一、COFFIN RS、水上浩明、小澤敬也	50-56	厚生労働省
HGF は生理学的学習能を向上させる	共著	2012 年	厚生労働科学研究費補助金・難治性疾患克服研究事業・神経変性疾患に関する調査研究班 (分科班「病態に根ざした ALS の新規治療法開発」) 平成 23 年度研究報告書	◎ 船越洋、島田 (大谷) 若菜、野間さつき、加藤貴史、<u>角山圭一</u>	32-35	厚生労働省

ニコチンによるマウス海馬シナプス可塑性発現下でのプロテオーム解析とCRMP-2受容体の発現変化	共著	2012 年	平成 23 年度喫煙科学研究財団研究年報	◎ 松山正剛、 <u>角山圭一</u> 、廣田徹、谷口泰造、鷹野正興	795-799	喫煙科学研究財団
ニコチンによるマウス海馬シナプス可塑性発現下での EphA3 受容体の発現変化	共著	2013 年	平成 24 年度喫煙科学研究財団研究年報	◎ 松山正剛、 <u>角山圭一</u> 、松浦健二、谷口泰造、鷹野正興	715-719	喫煙科学研究財団
変異 APP 発現マウス海馬におけるニコチンによるシナプス可塑性発現に関与するプロテオーム解析	共著	2014 年	平成 25 年度喫煙科学研究財団研究年報	◎ 松山正剛、 <u>角山圭一</u> 、松浦健二、谷口泰造、鷹野正興	655-659	喫煙科学研究財団
シナプス可塑性発現下で Prefoldin subunit 5 の発現変化	共著	2015 年	平成 26 年度喫煙科学研究財団研究年報	◎ 松山正剛、 <u>角山圭一</u> 、松浦健二、鷹野正興	621-625	喫煙科学研究財団
モデル動物を用いたタウオパチーの病態解明と肝細胞増殖因子による治療効果の検討	単著	2016 年	科学研究費補助金・基盤研究(C) 平成 24-27 年度研究成果報告書	◎ <u>角山圭一</u>		文部科学省
変異タウ発現マウスにおけるニコチンによるシナプス可塑性発現に関与するプロテオーム解析	共著	2016 年	平成 27 年度喫煙科学研究財団研究年報	◎ 松山正剛、 <u>角山圭一</u> 、松浦健二、谷口泰造、鷹野正興	593-599	喫煙科学研究財団
アルツハイマー病モデルマウスの学習記憶障害に対するニコチンの効果に関与する蛋白質の探索同定	共著	2016 年	平成 27 年度喫煙科学研究財団研究年報	◎ 松山正剛、 <u>角山圭一</u> 、松浦健二、谷口泰造、鷹野正興	13-24	喫煙科学研究財団
【その他（特許）】						
脳損傷の予後改善薬のスクリーニング方法		特許第 4944173 号	登録日 2012 年 3 月 9 日	裏出良博、江口直美、有竹浩介、佐藤陽、 <u>角山圭一</u> 、谷池雅子		
非ヒトモデル動物を用いたパーキンソン症候群の検査方法		特許第 5558049 号	登録日 2014 年 6 月 13 日	谷口泰造、 <u>角山圭一</u> 、炬口真理子、千葉俊明、澄田美保		
アレルギー性疾患の治療剤および／または予防剤		特許第 5922857 号	登録日 2016 年 4 月 22 日	大室弘美、吉田ルシア幸子、谷口泰造、 <u>角山圭一</u>		
【その他（特許出願中）】						
疎水性物質包接剤およびそれを用いた疎水性物質の可溶化方法		特開 2016 - 113381	出願日 2014 年 12 月 11 日	谷口泰造、宮本和英、炬口真理子、 <u>角山圭一</u> 、坂井和夫、福田勝、鈴木利雄、甲元一也、山本和宏、渡邊愛未		
シコニンまたはシコニン誘導体を有効成分として含有する育毛剤およびそれらの製造方法		特開 2017-222627	出願日 2016 年 6 月 20 日	谷口泰造、炬口真理子、 <u>角山圭一</u> 、山本和宏、渡邊愛未、伊中浩治、有竹浩介、裏出良博、田仲広明		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

IV 学会等および社会における主な活動

1995 年 7 月 ～ 2008 年 3 月	日本薬理学会 一般会員
2000 年 4 月 ～ 現在	日本生化学会 正会員
2004 年 7 月 ～ 現在	日本神経科学学会 正会員
2007 年 4 月 ～ 2012 年 3 月	大阪大学大学院医学系研究科 特任研究員
2008 年 4 月 ～ 現在	日本薬理学会 学術評議員
2009 年 11 月 ～ 現在	日本再生医療学会 正会員
2010 年 4 月 ～ 現在	近大姫路大学 (現・姫路大学) 非常勤講師
2011 年 4 月 ～ 2014 年 3 月	宝塚大学 非常勤講師
2011 年 11 月 ～ 現在	研修認定薬剤師

V 学内における主な活動

2007 年 6 月 ～ 現在	組換えDNA実験安全管理委員会委員
2007 年 10 月 ～ 2009 年 3 月	駅前サテライト運営委員会委員
2013 年 5 月 ～ 2017 年 3 月	学生委員
2013 年 5 月 ～ 2017 年 3 月	奨学生選考委員
2014 年 12 月 ～ 2016 年 11 月	学友会特別会員代表
2014 年 4 月 ～ 2017 年 3 月	動物実験委員会委員
2014 年 4 月 ～ 現在	入試教科委員 (生物)
2015 年 4 月 ～ 現在	DNA実験安全主任者
2017 年 4 月 ～ 2018 年 3 月	動物実験施設管理運営委員
2018 年 4 月 ～ 現在	動物実験委員会委員
2018 年 4 月 ～ 現在	毒物及び劇物管理委員会委員
2018 年 4 月 ～ 現在	附属図書館運営委員

Mo Goannnai 所属	薬学部 医療薬学科	職名	准教授	氏名	川井眞好	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----------------------	--------------	----	-----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
① 公衆衛生学Ⅰの理解度向上への工夫	2008年10月～現在	講義内容に関連した練習問題により学生の理解を深めるようにするとともに、写真や図など視覚での理解を深めるためのパワーポイントや講義資料の作成に工夫している。
② 公衆衛生学Ⅱの理解度向上への工夫	2009年4月～現在	環境衛生学を中心とした内容について講義資料を書き込み型にすることによりして、効率的に学習できるように工夫している。
③ 公衆衛生学実習における理解度向上への工夫	2009年10月～現在	講義で勉強したことを実験で確認し、実測値を用いて計算することにより理解の向上を図っている。実習書やデータシートなどの作成に工夫している。
④ 微生物学の理解度向上への工夫	2010年4月～現在	微生物の基礎的内容について、写真などを用いて視覚からわかりやすく理解できるように工夫している。
⑤ 病原微生物学の理解度向上への工夫	2012年4月～現在	現在話題となっている感染症の話を中心に、基礎微生物学を復習しながら、実践的な内容まで理解できるように工夫している。
⑥ 食品栄養学の理解度向上への工夫	2013年4月～2017年	栄養素、食品衛生などについて、身近な事例を用いながら理解できるように工夫している。
⑦ 病原微生物学の理解向上への工夫	2016年4月～現在	看護師国家試験あるいは看護師として必要と考えられる病原微生物に関する知識を効率よく得られるように工夫している。
⑧ 学生による授業評価の活用	2009年3月～現在	学生からの授業評価アンケートを活用し、板書の文字の大きさ、色などを改良して、より分かりやすい講義になるように工夫している。
⑨ 生物・衛生・生薬系統合演習において理解力向上への工夫	2009年10月～現在	衛生学における社会的現状と問題点を把握するため、本分野に関わる新聞記事を題材として、学生が自発的に調べ、まとめて、伝えることができるように工夫している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
① 「新しい手法による培養困難な細菌の検出と医薬品の微生物管理への応用」に関するスライドを作成し、教材とした。	2005年6月	遺伝子を用いた手法に代表される迅速・高精度な最新の手法の原理、利点、欠点などをまとめたスライドを作成し、これらの手法を医薬品の微生物管理に応用する意義についての教材とした。
② 工場従事者に対する衛生管理に関する教育用のスライドを作成し、教材とした。	2008年2月	①微生物の分類、細菌の形態、性状、生理などの微生物に関する基礎的な事項、②滅菌・消毒など微生物制御法、③現行の微生物管理手法、④微生物汚染の事例などをまとめたスライドを作成し、微生物管理に関する教育の教材とした。

③ 「環境中の微生物と化学物質」に関する教育用スライドを作成し、教材とした。	2009 年 6 月	環境中に存在する微生物、我々の生活と微生物の関わり、また、化学物質への微生物の関わりについてまとめ、基礎的で分かりやすいスライドを作成し、教材とした。
④ 「製薬企業における製品の微生物管理」についてのスライドを作成し、教材とした。	2010 年 1 月	微生物の性状を踏まえた医薬品製品品質確保のための微生物管理の性状と将来像をわかり易くまとめて教材とし、教育講演のスライドとした。
⑤ 近大姫路大学 公衆衛生学Ⅰ 文部科学省通信教育教材を作成した。	2010 年 4 月	近大姫路大学教育学部の通信教育講座に使用するため、公衆衛生における感染症、栄養と健康に関する教材を作成した。
⑥ 近大姫路大学 公衆衛生学Ⅱ 文部科学省通信教育教材を作成した。	2010 年 4 月	近大姫路大学教育学部の通信教育講座に使用するため、公衆衛生における水や大気汚染など環境衛生に関する教材を作成した。
⑦ 「製薬企業における製品の微生物管理の現状と課題」についてのスライドを作成し教材とした。	2010 年 5 月	製薬企業における製品の微生物学的な品質管理の現状について説明し、将来像についてまとめた教材を作成した。
⑧ 「製薬企業における製品の微生物管理の現状と課題」についてのスライドを作成し教材とした。	2011 年 5 月	製薬企業における製品の微生物学的な品質管理の現状について実例を用いて説明し、今後の方向性と課題についてまとめた教材を作成した。
⑨ 「製薬企業における製品の微生物管理の現状と課題」についてのスライドを作成し教材とした。	2012 年 5 月	製薬企業における製品の微生物学的な品質管理の現状について実例を用いて説明し、今後の方向性と課題についてまとめた昨年の教材を改良し、さらに理解しやすいものにした。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
① 「新しい手法による培養困難な細菌の検出と医薬品の微生物管理への応用」についての教育講演	2005 年 6 月	新適塾「21 世紀の薬箱」第 65 回会合における講演。
② 工場従事者に対する衛生管理に関する教育	2008 年 2 月	医薬品製造工場の工場従事者に対する教育。
③ 「環境中の微生物と化学物質」についての教育講演	2009 年 6 月	近畿職業能力開発大学校における講演。
④ 「製薬企業における製品微生物管理」についての教育講演	2010 年 1 月	大阪大谷大学 5 年生に対する教育講演。
⑤ 「製薬企業における製品の微生物管理と現状」に関する教育講演	2010 年 5 月	大阪大学大学院薬学研究科における 5 年生および大学院生への教育講演。
⑥ 「製薬企業における製品の微生物管理と現状」に関する教育講演	2011 年 5 月	大阪大学大学院薬学研究科における 5 年生および大学院生への教育講演。
⑦ 「製薬企業における製品の微生物管理と現状」に関する教育講演	2012 年 5 月	大阪大学大学院薬学研究科における 5 年生および大学院生への教育講演。

⑧ 「製薬企業における製品の微生物管理と現状」に関する教育講演	2013 年 5 月	大阪大学大学院薬学研究科における 5 年生および大学院生への教育講演。
⑨ 「からだを守る免疫と環境のいい関係」の中で「身近な微生物と感染症」に関する教育講演	2014 年	教員免許の更新のための講演
⑩ 「製薬企業における製品の微生物管理と現状」に関する教育講演	2015 年 5 月	大阪大学大学院薬学研究科における 5 年生および大学院生への教育講演。
⑪ 「病原体としての微生物」	2018 年 7 月	日本薬科大学における 2 年生への教育講演
4 その他教育活動上特記すべき事項		
大阪大学大学院薬学研究科 招へい准教授	2014 年 4 月～	

II 研究活動

著書・論文等の名称	著者・共著の別	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】						
① 公衆衛生学Ⅰ	共著	2010 年 4 月	近大姫路大学 教育学部通信教育課程	西郷勝康、柳澤振一郎、◎川井真好、炬口真理子		
② 公衆衛生学Ⅱ	共著	2010 年 4 月	近大姫路大学 教育学部通信教育課程	西郷勝康、柳澤振一郎、◎川井真好、炬口真理子		
③ 製薬用水の品質管理と設備/設計・バリデーションノウハウ集	共著	2011 年 5 月	技術情報協会	◎川井真好、小高秀正、小林一三、高木肇、高橋淳吉、布目温、人見英明、村上大吉郎		
④ 第 16 改正 図説 日本薬局方微生物試験法の手引き	共著	2012 年 3 月	文教出版	◎川井真好、小田容三、片山博仁、加藤はる、見理剛、近田俊文、鈴木里和、小橋せい子、清水信夫、城野久美子、関口道子、竹田智子、高岡文、中川恭好、鳴瀧荘次		
⑤ 第 17 改正 図説 日本薬局方微生物試験法の手引き	共著	2016 年 3 月	文教出版	◎川井真好、太田垣寛、越智充佐、河合充生、見理剛、坂上吉一、清水信夫、鈴木里和、高岡文、竹田智子、田中暁典、近田俊文、鳴瀧荘次、原田敏和、村松由貴、山崎健一		

⑥ ベーシック薬学教科書シリーズ 微生物学・感染症学(第2版)	共著	2016年3月	化学同人	◎川井真好、石野敬子、大槻純男、小川和加野、黒田照夫、小林秀丈、塩田澄子、白石奈緒子、玉井栄治、土屋友房、西村基弘、平田隆弘、山中浩泰、山田陽一		
【論文】						
① Bacterial population dynamics and community structure in a pharmaceutical manufacturing water supply system determined by real-time PCR and PCR-denaturing gradient gel electrophoresis.	共著	2004年12月	J. Appl. Microbiol. 97(2); 1123-1131	Kawai M, Yamagishi J, Yamaguchi N, Tani K, and Nasu M	6 頁	
② Cell-wall thickness: possible mechanism of acriflavine resistance in methicillin-resistant <i>Staphylococcus aureus</i>	共著	2009年3月	J. Med. Microbiol. 58;331-336.	Kawai M., Yamada S., Ishidosiro A., Oyamada Y., Ito H., and Yamagishi J.	6 頁	
③ Mechanisms of action of acriflavine: electron microscopic study of cell wall changes induced in <i>Staphylococcus aureus</i> . by acriflavine	共著	2009年6月	Microbiol. Immunol. 53, 481-486	Kawai M., and Yamagishi J.	6 頁	
④ 自然環境中のストレスで強くなる細菌	単著	2010年11月	ファルマシア, 46(11), 9-10	川井真好	2 頁	
⑤ 世界文化遺産 姫路城の桜花由来の天然酵母による地酒の開発	共著	2016年	兵庫自治学, 22, 109-114	朴 杓汝、中村隆典、更家信、川井真好	6 頁	
⑥ 産学共同研究事業の新たな展開によってさらなる地域活性化をめざす ～「姫路城さくら酵母のお酒」を開発商品化したその後の取り組み～	共著	2018年3月	兵庫自治学, 24, 81-85	朴 杓汝、中村隆典、更家信、川井真好	5 頁	
⑦ 極限環境で生育する古細菌がヒトに常在する	単著	2018年7月	ファルマシア, 54(7), 716	川井真好	1 頁	
(依頼総説) ① 蛍光染色法を用いた微生物迅速測定法による医薬品の微生物管理	単著	2011年3月	医薬品医療機器 レギュラトリーサイエンス 42(3), 191-197	川井真好	7 頁	

【その他】						
(国際学会発表)						
①	Bacterial population dynamics and community structure in a pharmaceutical manufacturing water supply system.	2004 年 5 月	104 th General Meeting of the American Society for Microbiology	Mako Kawai, Jun-ichi Yamagishi, Nobuyasu Yamaguchi, Katsuji Tani, and Masao Nasu		
②	Electron microscopic analysis of the antiseptic-resistance mechanism of methicillin-Resistant <i>Staphylococcus aureus</i> strain KT24.	2006 年 9 月	The 16 th International Microscopy Congress	Sakuo Yamada, Mako Kawai, Ai Ishidoshiro, Sachiyo Ohmori, Masanobu Ohuchi and Jun-ichi Yamagishi		
③	Novel mechanism of antiseptic resistance in methicillin-resistant <i>Staphylococcus aureus</i> .	2006 年 12 月	10 th Western Pacific Congress on Chemotherapy and Infectious Diseases	Mako Kawai, Sakuo Yamada, and Jun-ichi Yamagishi		
④	Possible Mechanisms of Cell Wall Thickness induced in <i>Staphylococcus aureus</i> by Quaternary Ammonium Compounds of Antiseptic Agents	2011 年 5 月	111 th General Meeting of the American Society for Microbiology	Mako Kawai, Sakuo Yamada, Kazuya Morikawa and Jun-ichi Yamagishi		
⑤	Antiseptic Susceptibility and Morphological Changes for Metallo-Beta-Lactamase NDM-1 Producing Multidrug-Resistant <i>Escherichia coli</i>	2011 年 9 月	International Union of Microbiological Societies 2011 Congress	Mako Kawai, Katsuko Okuzumi, Akira Hishiyama, Sakuo Yamada, Kenji Fukutsuji, and Jun-ichi Yamagishi		
⑥	Resistance Mechanism of Triclosan in <i>Staphylococci</i>	2014 年 5 月	114 th General Meeting of the American Society for Microbiology	Mako Kawai and Jun-ichi Yamagishi		
⑦	Bioburden and environmental microbiome in a pharmaceutical manufacturing facility	2018 年 7 月	Microbiology of the Built environment Gordon Research Conference	Mako Kawai, Tomoaki Ichijo, Takashi Sugita, Masao Nasu		
(講演など)						
①	黄色ブドウ球菌 KT24 株の消毒薬耐性機構の解析	2005 年 9 月	第 17 回微生物シンポジウム	川井眞好、石徹白愛、山田作夫、山岸純一		
②	製品の微生物管理と迅速測定法	2006 年 2 月	第 21 回 GMP とバリデーションをめぐる諸問題に関するシンポジウム	川井眞好、納田浩司		
③	微生物迅速測定法と医薬品の微生物管理	2008 年 12 月	第 2 回西播・姫路医療セミナー	川井眞好		
④	水の衛生微生物管理	2009 年 5 月	第 3 回姫路食品技術研究会	川井眞好		

⑤	蛍光染色による細菌数の迅速測定法－微生物管理への応用と関連事項－	2010 年 7 月	第 81 回薬事エキスパート研修会	川井真好		
⑥	環境でたくましく生きる微生物	2013 年 10 月	サイエンスカフェはりま	川井真好		
⑦	花由来の野生酵母を用いた地酒の開発	2016 年 5 月	平成 28 年度「油化学関連シンポジウム in 姫路～「大学発研究成果を商品へ」	川井真好		
⑧	宇宙居住モデル環境として医薬品製造施設における衛生微生物学的検討	2017 年 2 月	第 10 回大気バイオエアロゾルシンポジウム	川井真好、高橋佑治、松田昭、水野真人、野口美也子、片山博仁、那須正夫、一條知昭		
⑨	宇宙居住モデル環境として医薬品製造施設における衛生微生物学的評価	2018 年 3 月	日本薬学会第 134 年会 シンポジウム	川井真好		
(国内学会発表)						
①	臨床分離 MRSA に対する消毒薬耐性メカニズム	2004 年 6 月	第 52 回日本化学療法学会総会	石徹白愛、川井真好、小山田義博、伊藤秀明、山岸純一		
②	臨床分離 MRSA の消毒薬耐性メカニズム	2004 年 12 月	第 52 回日本化学療法学会西日本支部総会	石徹白愛、川井真好、山田作夫、山岸純一		
③	臨床分離 MRSA の消毒薬耐性メカニズムの検討	2005 年 4 月	第 78 回日本細菌学会総会	石徹白愛、川井真好、山田作夫、山岸純一		
④	黄色ブドウ球菌 KT24 株の消毒薬耐性機構の解析	2005 年 5 月	第 53 回日本化学療法学会総会	川井真好、石徹白愛、山田作夫、山岸純一		
⑤	黄色ブドウ球菌 KT24 株の消毒薬耐性機構に関する顕微科学的解析	2005 年 9 月	第 50 回日本ブドウ球菌研究会	山田作夫、川井真好、石徹白愛、大森幸代、大内正信、山岸純一		
⑥	黄色ブドウ球菌 KT24 株の消毒薬耐性機構の解析	2006 年 3 月	第 79 回日本細菌学会総会	川井真好、石徹白愛、山田作夫、山岸純一		
⑦	黄色ブドウ球菌の消毒薬耐性メカニズム	2006 年 5 月	第 54 回日本化学療法学会総会	川井真好、山田作夫、山岸純一		
⑧	黄色ブドウ球菌 KT24 株の消毒薬耐性メカニズム	2006 年 5 月	日本防菌防黴学会第 33 回年次大会	川井真好、山田作夫、山岸純一		
⑨	マクロライド耐性ブドウ球菌の特徴ある超微形態	2007 年 3 月	第 80 回日本細菌学会総会	兵行義、山田作夫、川井真好、山岸純一、大内正信、原田保		
⑩	黄色ブドウ球菌に対する消毒薬の殺菌作用と形態変化	2008 年 12 月	第 56 回 化学療法学会西日本支部総会	川井真好、山岸純一		

⑪	アクリフラビンによる黄色ブドウ球菌の細胞壁肥厚化	2009年3月	第82回日本細菌学会総会	川井真好、山岸純一		
⑫	黄色ブドウ球菌に対する消毒薬の抗菌作用と形態変化	2009年3月	第82回日本細菌学会総会	山岸純一、川井真好		
⑬	黄色ブドウ球菌の細胞壁肥厚化メカニズム	2010年3月	第83回日本細菌学会総会	川井真好、山岸純一		
⑭	環境中に生息するブドウ球菌属の消毒薬抵抗性	2010年11月	第58回日本化学療法学会西日本支部総会	川井真好、山岸純一		
⑮	環境中に存在するブドウ球菌属の消毒薬抵抗性	2011年3月	日本薬学会第131年会	山岸純一、川井真好		
⑯	本邦初 NDM-1 産生多剤耐性大腸菌の消毒薬感受性	2011年3月	日本薬学会第131年会	川井真好、奥住捷子、菱沼昭、山田作夫、山岸純一		
⑰	NDM-1 産生多剤耐性大腸菌の消毒薬感受性	2011年6月	第59回日本化学療法学会総会	川井真好、奥住捷子、菱沼昭、山田作夫、山岸純一		
⑱	健康人の鼻腔より分離した細菌の薬剤感受性	2012年3月	日本薬学会第132年会	細野昌弘、小島和久、渥美元樹、裏丸直人、斉藤博、霜島正浩、川井真好、賀来満夫、山岸純一		
⑲	臨床分離アシネトバクターのキノロン感受性とプラスミド性キノロン耐性遺伝子の検出	2012年3月	日本薬学会第132年会	賀来奈那子、松崎利恵子、細野昌弘、及川雄太、霜島正浩、川井真好、賀来満夫、山岸純一		
⑳	ブドウ球菌属のトリクロサン抵抗性メカニズム	2013年3月	第86回日本細菌学会総会	駒津和葵、山岸純一、川井真好		
21	蛍光染色を用いた細菌数測定法の多様な医薬品への適用	2013年3月	日本薬学会第133年会	佐野彩香、山口進康、川井真好		
22	ブドウ球菌属のトリクロサン抵抗性メカニズム	2013年6月	第61回日本化学療法学会総会	川井真好、山岸純一		
23	蛍光染色法による細菌数測定法の医薬品原料への適用	2013年10月	第63回日本薬学会近畿支部例会	佐野彩香、藤尾実穂、更家信、山口進康、川井真好		
24	ブドウ球菌属のトリクロサン抵抗性	2014年2月	第29回日本環境感染症学会総会	川井真好、山岸純一		
25	蛍光染色を用いた細菌数迅速測定法の固形医薬品原料への適用	2014年3月	日本薬学会第134年会	藤尾実穂、佐野彩香、更家信、山口進康、川井真好		
25	ブドウ球菌属のトリクロサン抵抗性メカニズム	2014年6月	第62回日本化学療法学会総会	川井真好、更家信、山岸純一		

26 蛍光染色による油状基剤からの生菌の迅速検出	2014 年 10 月	第 64 回日本薬学会近畿支部例会	更家信、川井真好		
27 コアグラゼ陰性ブドウ球菌属のトリクロサン抵抗性メカニズム	2015 年 2 月	第 30 回日本環境感染症学会総会	川井真好、更家信、山岸純一		
26 コアグラゼ陰性ブドウ球菌属のトリクロサン抵抗性メカニズム	2015 年 3 月	日本薬学会 135 年会	小林宥吾、更家信、山岸純一、川井真好		
27 <i>Staphylococcus aureus</i> の好中球に対する抵抗性の変化	2015 年 5 月	第 62 回生化学会近畿支部例会	川井真好、通山由美		
28 コアグラゼ陰性ブドウ球菌属のトリクロサン抵抗性メカニズム	2015 年 10 月	第 65 回日本薬学会近畿支部例会	小林宥吾、清水愛、更家信、山岸純一、川井真好		
29 臨床分離キノロン耐性 <i>Acinetobacter baumannii</i> の消毒薬感受性	2016 年 3 月	日本薬学会 136 年会	川井真好、清水愛、寺尾涼、山岸純一		
30 <i>Staphylococcus aureus</i> の温度刺激による抵抗性の変化	2016 年 5 月	第 63 回生化学会近畿支部例会	川井真好、通山由美		
31 消毒薬グルコン酸クロルヘキシジンが <i>Bacillus</i> 属に与える影響	2016 年 10 月	第 66 回日本薬学会近畿支部例会	寺尾涼、迫谷有希子、川井真好		
32 <i>Staphylococcus warneri</i> のトリクロサン抵抗性メカニズム	2016 年 10 月	第 66 回日本薬学会近畿支部例会	清水愛、迫谷有希子、川井真好		
33 医薬品製造施設の高精度微生物モニタリング	2017 年 3 月	日本薬学会 137 年会	高橋佑治、川井真好、那須正夫、一條知昭		
34 高温処理 <i>Staphylococcus aureus</i> の生存能力の獲得	2017 年 5 月	第 64 回日本生化学会近畿支部例会	川井真好、泉谷優衣、炭村一樹、迫谷有希子、通山由美		
35 高温処理 <i>Staphylococcus aureus</i> の生存能力の獲得	2017 年 8 月	微生物生態学会	川井真好 迫谷有希子 通山由美		
36 <i>Staphylococcus aureus</i> のバイオフィーム形成能に影響する環境刺激	2017 年 10 月	第 67 回日本薬学会近畿支部例会	泉谷優衣 迫谷有希子 川井真好		
37 温度刺激による <i>Staphylococcus aureus</i> の薬剤	2017 年 10 月	第 67 回日本薬学会近	炭村一樹 迫谷有希子 川井真		

感受性の変化			畿支部例会	好		
38 紫外線が <i>Bacillus subtilis</i> 芽胞に及ぼす影響		2017 年 10 月	第 67 回日本薬学会近畿支部例会	池上啓泰 迫谷有希子 川井真好		
39 高温処理による <i>Staphylococcus aureus</i> の生存能力への影響		2018 年 5 月	第 65 回日本生化学会近畿支部例会	川井真好 通山由美		
40 飲料水および水源中に存在する古細菌の現存量解析		2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部例会	坂本智史、大野悠子、川井真好		
41 温度刺激を受けた <i>Staphylococcus aureus</i> のバイオフィーム形成		2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部例会	藤浦翔矢、大野悠子、川井真好		
42 清酒醸造工程のバイオバーデン		2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部例会	黍原正安、大野悠子、川井真好		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1990 年 2 月～現在	日本薬学会会員
1991 年 2 月～現在	日本細菌学会会員
1999 年 11 月～現在	American Society for Microbiology 会員
2004 年 3 月～現在	日本化学療法学会会員
2015 年 4 月～現在	日本環境感染学会会員
2014 年 4 月～2016 年 3 月	ファルマシアトピックス編集委員
2018 年 4 月～現在	日本薬学会環境衛生部会 衛生試験法 生物試験法委員会 委員

Ⅴ 学内における主な活動

2008 年 10 月～現在	労働安全衛生委員会委員
2010 年 4 月～2016 年 3 月	全学自己評価委員会委員
2012 年 4 月～2018 年 3 月	毒物及び劇物管理委員会委員
2017 年 4 月～2019 年 3 月	ハラスメント人権委員会委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	准教授	氏名	炬口 真理子	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	-----	----	--------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
公衆衛生学講義	2007 年 9 月～ 2009 年 3 月	非常勤講師として医療保健学部臨床工学科 2 年次生に対して公衆衛生学の講義を行った。母子保健の分野では母子手帳を、精神保健では施設の写真などを示し、学生が興味を持てるように工夫した。
臨床生化学講義	2009 年 4 月～現在	薬学部医療薬学科の 3 年次生に対して、臨床生化学の講義を行っている。自身で作成した授業内容を要約したプリントを配布、スライドを用いて説明している。また、セッション毎に神戸大学病院検査部監修のビデオを鑑賞させ、実際に検査がどのように行われているかを示し、講義内容と現場がひとつになるようにしている。
生物・衛生・生薬系統合演習（PBL）	2009 年 4 月～ 2012 年 3 月	薬学部医療薬学科の 3 年次生を対象に、生物・衛生・生薬系統合演習（PBL）を行っている。学生に新聞を読むという行為を習慣づけることをひとつの目標に、学生自身が興味をもった医療・公衆衛生に関する記事を選び、その記事について深く調査し、発表を行なう。そして発表に関してディスカッションするという全員参加型の PBL を行っている。
薬理系統合演習（PBL）講義	2010 年 4 月～現在	薬学部医療薬学科 4 年次生の薬理系統合演習（PBL）を担当している。薬学ゼミナール提供による e-learning システムを使用して、毎回学生に薬理学の課題を与え、授業時間には学生と問題についてディスカッションし、理解度の向上を目指している。
安全管理講義	2012 年 4 月～現在	病院での実務経験を活かし、学外実習を終えた 6 年次生に対して、医療現場で発生するリスクマネジメント、院内感染、薬物副作用などについて、実例を示すことにより大学の勉強と医療現場が一つになるよう工夫している。
症例検討統合演習（PBL）	2012 年 4 月～現在	薬学部医療薬学科の 6 年次生に対し、代表的疾患について患者症例を提示し、班ごとにディスカッションして、各々の意見を一つにまとめた後、発表する形式をとることにより理解度を深める全員参加型の PBL を行っている。
病態解析学実習	2015 年 4 月～現在	3 年次生の病態解析学実習を担当している。病院検査部での実務経験を活かし、血清蛋白分画検査、血液像観察、尿沈渣検査、心電図・肺機能検査の他、これからの薬剤師に必要なフィジカルアセスメントを含む診断補助の技術を取得できるよう指導している。
病態生理学 I、II	2018 年 4 月～現在	薬学部医療薬学科 3 年次生の病態生理学 I（前期）と II（後期）を担当している。主要疾患の症状や病態を理解し、疾患に対する検査・治療（薬物療法）の基礎的知識が習得できるよう、教科書と自己制作のプリント（パワーポイント）を用いて講義を行っている。

2 作成した教科書、教材、参考書		
公衆衛生学Ⅰ (近大姫路大学教育学部通信教育課程)	2010 年 4 月	公衆衛生の歴史、社会と健康から予防医学までを網羅した教科書を作成した。その中で自身は、精神保健、老人保健についての解説を担当した。近大姫路大学看護学部 4 年の公衆衛生学の講義で使用されている。
公衆衛生学Ⅱ (近大姫路大学教育学部通信教育課程)	2010 年 4 月	疫学、環境、産業、母子、国際保健などのしくみ、制度についてわかりやすく解説した教科書を作成した。その中で自身は、産業保健、母子保健についての解説を担当した。近大姫路大学看護学部 4 年の公衆衛生学の講義で使用されている。
学校保健 (近大姫路大学教育学部通信教育課程)	2011 年 4 月	学校という教育の場における保健活動について解説した教科書を作成した。生徒児童及び教職員を対象とする。その中で自身は、学校環境衛生、学校安全の解説を担当している。近大姫路大学看護学部 4 年の学校保健の講義で使用されている。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
西播姫路医療セミナーでの講演	2007 年 12 月 20 日	姫路市薬剤師会主催の医療セミナーにおいて「白血病キメラ遺伝子の測定」についての講演をおこなった。
	2017 年 4 月 6 日	病院・薬局薬剤師に対して、自身の研究「プロテアソーム阻害剤の効果予測および予後を反映する新規バイオマーカーの探索」について、臨床に関係する部分を中心に講演した。
オープンキャンパスでの実技指導	2008 年 4 月～ 2011 年 3 月	年に 1～2 度、姫路獨協大学オープンキャンパスにおいて、訪れた学生に対して、軟膏の練り方、散剤の分包、水剤の作り方など薬剤師業務を体験させ、薬学部及び薬剤師の魅力を紹介している。
第 3 回認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップに指導員として参加	2008 年 11 月 2 日 ～11 月 3 日	指導員(タスクフォース)としてワークショップの運営と参加者(薬剤師)に対する指導をおこなった。
姫路市医師会看護専門学校での講義	2009 年 4 月～現在	姫路市医師会看護専門学校看護学科において、病態学、病理学、生体機能学の講義を週 1 回(90 分 2 コマ) おこなっている。
宝塚大学での講義	2011 年 4 月～ 2014 年 9 月	宝塚大学看護学部 2 年生に前期薬理学の講義をおこなった。
独立行政法人科学振興機構 サイエンスパートナーシッププロジェクト(SPP)の開催	2011 年 8 月 27 日 2011 年 11 月 20 日	姫路獨協大学薬学部 実験室において、「遺伝子を知ろう」をタイトルに、高校 1～3 年生約 40 名を対象に鶏の雌雄を PCR 法を用いて判定する実験を企画した。このプロジェクトは、身近な食品を材料として生物の神秘さを高校生に実感してもらうと共に、生命の本質を垣間見る機会を提供することを目的とした。
西播姫路医療セミナー実行委員	2012 年 4 月～現在	姫路薬剤師会、姫路病院薬剤師会との共同開催による年 2 回のセミナーの実行委員として、計画・運営に携わっている。演題を募集、選択し、特別講演の依頼等を行い、セミナーでは座長、司会進行を務めている。

神戸市医師会看護専門学校での講義	2013 年 4 月～現在	第 1 看護学科 1 年次生の生体機能学Ⅲ（細胞と組織、皮膚、血液）を担当している。入学すぐの学生ということもあり、まず医学に興味を持ってもらうことを目的に、教科書、プリントに加え DVD などの映像による教材を用いて分かり易く講義している。
	2015 年 4 月～現在	第 1 看護学科 1 年次生に対して、病態学Ⅰ（生体防御）を担当している。アレルギー、膠原病、血液・造血器疾患について、看護において必要とされる知識を、要点を絞って、図・表、自作プリントを用いて講義を行っている。
姫路獨協大学薬学部卒後教育セミナーの開催	2013 年 8 月 25 日 2013 年 9 月 23 日	「病態にせまろう！-検査とフィジカルアセス-」をテーマに 8 月 25 日（第 1 回）と 9 月 29 日（第 2 回）に姫路獨協大学薬学部で初めての卒後教育セミナーを主催した。両日 30 余名の現役薬剤師が参加して、聴診・血圧測定・心臓マッサージ・インフルエンザ検査等の実習を行なった。これからの薬剤師業務（在宅医療・服薬指導）のニーズに応えるセミナーであり、好評価を得て次回開催が予定されている。日本薬剤師会研修センターの認定を受けて、認定単位 2 単位を取得している。
	2013 年 9 月 14 日	第 3 回卒後教育セミナーを主催した。「薬局から始める地域医療イノベーション」として、日本在宅薬学会理事長の狭間研至先生にご講演いただいた。
播磨血液疾患・輸血療法研究会での講演	2016 年 6 月 29 日	兵庫県播磨地区の臨床血液分野の専門家に対して「ボルテゾミブの効果予測・治療予後因子としての疾患特異的ユビキチン化酵素測定の有用性の検討」について講演した。
姫路獨協大学看護学部での講義	2018 年 4 月～現在	看護学部看護学科 2 年次生に対して、疾病治療学Ⅰにおいて、呼吸器・腎疾患を担当している。看護において必要とされる知識を、要点を絞って、図・表、自作プリントを用いて講義を行っている。
	2018 年 4 月～現在	看護学部看護学科 3 年次生に対して、チーム医療論の中の” 薬剤師からみたチーム医療”を担当し、これから実習に向かう学生に他職種連携の重要性を教授している。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数	備考
【著書】 特筆すべき事項なし						
【論文】 新しい蛍光色素を用いたフローサイトメトリーによる好中球活性酸素種の測定	共著	2005	日本検査血液学会会誌, 6	浄慶幸江、西郷勝康、橋本誠、岸本麻奈美、炬口真理子、向井正彦、荒木延夫、井本しおん、河野誠司、熊谷俊一	341-347	
Presence of somatic hypermutation and activation-induced cytidine deaminase in acute	共著	2005	Eur J Haematol, 74	Hardianti MS, Tatsumi E, Syampurnawati M, Saigo K, Kawano	11-19	

lymphoblastic leukemia L2 with t(14:18) (q32q21)				S, <u>Takenokuchi M</u> , Kumagai S, Matsumoto Y, Koizumi T, Takeuchi M		
Albumin attenuates neutrophil activation induced by stimulators including antibodies against neutrophil-specific antigens.	共著	2005	Transfusion and Apheresis Science, 33	Hashimoto M, Saigo K, Jyokei Y, Kishimoto M, <u>Takenokuchi M</u> , Takenokuchi M, Araki N, Imoto S, Taniguchi K, Kumagai S.	289-298	
顆粒発達の強い細胞を含むDR陰性AML(M2) : 2例におけるFlt3ITD検出と3例の塗抹標本形態	共著	2006	日本検査血液学会会誌, 7	松永恭子、矢野美由紀、淨慶幸江、増田由佳子、迫田裕之、 <u>炬口真理子</u> 、河野誠司、熊谷俊一、西郷勝康、杉本直志、永井謙一、高橋隆幸、矢部博樹、近藤信一、稲葉亨、岡本茂高、古田香穂、メイラニシアンプルナワチ、巽英二	264-269	
無侵襲ヘモグロビン測定装置の自己血貯血可否判断への応用と問題点	共著	2006	臨床病理, 54	松永恭子、西郷勝康、橋本誠、岸本麻奈美、 <u>炬口真理子</u> 、成田浩子、小澤利行、熊谷俊一	1106-1109	
Magnetic Resonance Imaging (MRI)検査の好中球機能への影響について	共著	2006	臨床病理, 54	西郷勝康、淨慶幸江、橋本誠、岸本麻奈美、松永恭子、 <u>炬口真理子</u> 、櫻井孝介、川光秀昭、藤井正彦、熊谷俊一	458-462	
Excellent results obtained with rituximab combined with a small dose of L-PAM for a refractory follicular lymphoma patient.	共著	2006	Leukemia and Lymphoma, 47	Saigo K, Okumachi Y, Kondo S, Chinzei T, Okamura A, <u>Takenokuchi M</u> , Takenokuchi M, Kawano S, Kumagai S.	353-356	
Troglitazone inhibits cell growth and induces apoptosis of B-cell acute leukemia cells with t(14:18)	共著	2006	Acta Haematologica, 116	<u>Takenokuchi M</u> , Takenokuchi M, Saigo K, Nakamachi Y, Kawano S, Hashimoto M, Fujioka T, Koizumi T, Tatsumi E, Kumagai S.	30-40	
HLA-DR-Negative AML (M1 and M2): FLT3 mutations (ITD and D835) and cell-surface	共著	2007	Leukemia Research, 31	Syampurnawati M, Tatsumi E, Furuta K,	921-929	

antigen expression.				<u>Takenokuchi M</u> , Takenokuchi M, Nakamachi Y, Kawano S, Kumagai S, Saigo K, Matsui T, Takahashi T, Nagai K, Yabe H, Kondo S, Hayashi Y.		
ヘミンによるヒト好中球の活性化	共著	2008	臨床病理, 56	西郷勝康、橋本 誠、浄慶 幸江、 <u>炬口真理子</u> 、杉本 健、數村 公子、 土屋 広司、井本 しおん、熊谷俊一	967-972	
DR negativity is a dinstinctive feature of M1/M2 AML cases with NPM1 mutation.	共著	2008	Leukemia Research, 32	Syampurnawati M, Tatsumi E, Ardianto B, <u>Takenokuchi M</u> , Nakamachi Y, Kawano S, Saigo K, Matsui T, Takahashi T, Nagai K, Nishio H, Yabe H, Kondo S, Hayashi Y. Kumagai S,	1141-1143	
Automatic detection of immature platelets for decision making regarding platelet transfusion indication for pediatric patients.	共著	2008	Transfusion and Apheresis Scinece, 38	Saigo K, Sakota Y, Masuda Y, Matsunaga K, <u>Takenokuchi M</u> , Nishimura K, Sugimoto T, Sakurai K, Hashimoto M, Yanai T, Hayakawa A, Takeshima Y, Nomura T, Kubota Y, Kumagai S.	127-132	
miR-124a is a key regulator of proliferation and MCP1 secretion in fibroblast like synoviocytes from patients with rheumatoid arthritis	共著	2009	Arthritis Rheum, 60	Nakamachi Y, Kawano S, <u>Takenokuchi M</u> , Nishimura K, Sakai Y, Chin T, Saura R, Kurosaka M, Kumagai S	1294-1304	
Usefulness of immature platelet fraction (IPF) for clinical evaluation of myelodysplastic syndromes	共著	2009	Laboratory Hematology, 15	Saigo K, <u>Takenokuchi M</u> , Imai J, Numata K, Isono S, Zenibayashi M, Tanioka H, Yoshioka T, Nishizawa A, Takada M, No-mura T, Kubota Y.	13-16	
Quantitative Detection of	共著	2009	J Clin Lab Anal,	<u>Takenokuchi M</u> ,	223-230	

PML-RAR α Fusion Transcript by Real-time PCR with A Single Primer Pair			23(4)	Nakamachi Y, Yoneda K, Joho K, Kawano S, Saigo K, Tatsumi E, Kumagai S		
Use of a phosphosensor dye in proteomic analysis of human mutant tau transgenic mice	共著	2009	NeuroReport, 20(18)	Takano M, Otani M, Sakai A, Kadoyama K, Matsuyama S, Matsumoto A, <u>Takenokuchi M</u> , Sumida M, Taniguchi T	1648-1653	
SJLB mice develop tauopathy-induced parkinsonism	共著	2010	Neuroscience, letters, 473	<u>Takenokuchi M</u> , Kadoyama K, Chiba S, Sumida M, Matsuyama S, Saigo K, Taniguchi T	182-185	
Oxidative stress levels of MDS patients: their relationship to serum ferritin or hemoglobin values	共著	2011	The Journal of international medical research, 3	Saigo K, <u>Takenokuchi M</u> , Hiramatsu Y, Tada H, Hishita T, Takada M, Misawa M, Imoto S, Imashuku S	1941-1945	
Loss of Dopaminoreceptive Neuron Causes L-dopa Resistant Parkinsonism in Tauopathy	共著	2011	Neurobiology of Aging, 33(10)	Chiba S, Takada E, Tadokoro M, Taniguchi T, Kadoyama K, <u>Takenokuchi M</u> , Suzuki N, Kato S	2491-2505	
Significance of platelet most frequent volume for platelet size evaluation(letter)	共著	2011	Clinical Laboratory, 58	Isono S, Tatsuta M, Nagata K, Numata K, Nishigaki M, Okamura A, Tataka M, Okano M, Hatano H, Uemura H, Morishima T, <u>Takenokuchi M</u> , Saigo K.	857-860	
FLT3/ITD associated with an immature immunophenotype in PML-RAR α leukemia	共著	2012	Hematology Reports, 4(22)	<u>Takenokuchi M</u> , Kawano S, Nakamachi Y, Sakota Y, Syampurnawati M, Saigo K, Tatsumi E, Kumagai S	80-85 1-8	
アレルギー性皮膚炎の治療薬-シコニンの効果-	共著	2013	SMALL ANIMAL DERMATOLOGY, 9(1)	渡邊愛未、七里博章、 <u>炬口真理子</u> 、宮本和英、角山圭一、谷口泰造	60-65	
Morphological and flow-cytometric analysis of hemin-induced human neutrophil activation: Implications for TRALI	共著	2013	Blood Transfusion, 28	Kono M, Saigo K, Takagi Y, Kawauchi S, Wada A, Hashimoto M, Sugimoto T, <u>Takenokuchi M</u> ,	53-60	

A case of acute promyelocytic leukemia with morphologic multilineage dysplastic changes	共著	2013	Hematology Reports, 54(11)	Morikawa T, Funakoshi K Kono M, Saigo K, Takagi Y, Takahashi T, Kawauchi S, Wada A, Hashimoto M, Minami Y, Imoto S, <u>Takenokuchi M</u> , Morikawa T, Funakoshi K.	18-20	
Deferasirox reduces oxidative stress in patients with transfusion dependency	共著	2013	Journal of Clinical Medicine Research	<u>Saigo K</u> , Kono M, Takagi Y, <u>Takenokuchi M</u>	57-60	
血小板減少時の血小板サイズ指標としての血小板容積最頻値 (P-MFV) の有用性	共著	2013	Sysmex Journal, (35)2	磯野雪妃、瀧田めぐみ、長田恵子、沼田圭子、糀谷利昭、岡村明治、高田政文、岡野真理子、波多野史子、上村裕保、森沢猛、 <u>炬口真理子</u> 、西郷勝康	16-22	
Heme-related molecules induce rapid production of neutrophil extracellular traps	共著	2014	Transfusion, 54(11)	Kono M, Saigo K, Takagi Y, Takahashi T, Kawauchi S, Wada A, Hashimoto M, Minami Y, Imoto S, <u>Takenokuchi M</u> , Morikawa T, Funakoshi K	2811-2819	
Recombinant thrombomodulin does not impair neutrophil functions (letter)	共著	2015	Journal of Thrombosis and Thrombolysis, 39(4)	Saigo K, Mori C, Iwamoto S, Shirai K, Uematsu T, <u>Takenokuchi M</u> , Kono M, Imoto S	536-538	
Bortezomib Causes ER Stress-related Death of Acute Promyelocytic Leukemia Cells Through Excessive Accumulation of PML-RARA	共著	2015	Anticancer Research, 35(6)	<u>Takenokuchi M</u> , Miyamoto K, Saigo K, Taniguchi T	3307-3316	
Genotoxicity-Suppressing Effect of a Connarus Ruber Cortex Aqueous Extract on DNA Damage in Smoker's White Blood Cells	共著	2015	Journal of Clinical and Laboratory Investigation Updates, 4	Nakamura T, Kurimoto S, Saigo K, <u>Takenokuchi M</u> , Taniguchi T, Honda G, Mitani K, Ishida Y, Ainai K, Kawaguchi S, Miura M, Nakamura S, Yamamoto A, Tsuda S, Sasaki YuF	11-19	

Iron-chelating agent, deferasirox, inhibits neutrophil activation and extracellular trap formation	共著	2016	Clinical and Experimental Pharmacology and Physiology, 43(10)	Kono M, Saigo K, Yamamoto S, Shirai K, Iwamoto S, Uematsu T, Takahashi T, Imoto S, Hashimoto M, Minami Y, Wada A, <u>Takenokuchi M</u> , Kawano S	915-920	
Quantitative analysis of hemin-induced neutrophil extracellular trap formation and effects of hydrogen peroxide on this phenomenon	共著	2017	Biochemistry and Biophysics Reports, 11	Ohbuchi A, Kono M, Kitagawa K, <u>Takenokuchi M</u> , Imoto S, Saigo K	147-53	
Acetate moderately attenuates the generation of neutrophil extracellular traps	共著	2018	Blood Research, 53(2)	Ohbuchi A, Kono M, <u>Takenokuchi M</u> , Imoto S, Saigo K	177-180	
Evaluation of Absorbability of Macromolecular Substances in the Oral Mucosa and Skin using a Three-Dimensional Tissue Culture Model	共著	2018	Biology and Medicine 10(5):448 DOI:10.4172/0974-8369.1000448	<u>Takenokuchi M</u> , Kadoyama K, Yoshida D, Takaki S, Yamamoto R, Saigo K, Taniguchi T		
【その他】 (解説論文) 分光画像計測法による無侵襲ヘモグロビン濃度測定法とその臨床応用	共著	2006	医科器械学, 76	西郷勝康、橋本誠、松永恭子、岸本麻奈美、 <u>炬口真理子</u> 、井本しおん、熊谷俊一	895-902	
網血小板計測の意義と幼若血小板自動計数法の臨床的有用性	共著	2007	兵庫県医師会医学雑誌, 50	西郷勝康、 <u>炬口真理子</u>	68-73	
Clinical Utility of New Parameters provided by XE-2100 RET Channel	共著	2007	Sysmex Journal, 17(2)	Saigo K, Sakota Y, Masuda Y, Matsunaga K, Narita H, Hashimoto M, <u>Takenokuchi M</u> , Kubota Y, Nomura T, Nobuhara Y, Sugimoto T, Imoto S, Kumagai S	81-94	
輸血・移植医療と臨床検査	共著	2008	臨床病理, 56	西郷勝康、橋本誠、杉本健、 <u>炬口真理子</u> 、井本しおん、熊谷俊一	203-210	
臨床検査としての好中球機能と酸化ストレス	共著	2008	臨床病理, 56	西郷勝康、 <u>炬口真理子</u> 、井本しおん	791-801	
輸血後 GVHD 対策におけるプロテアーゼインヒビターの意義	共著	2010	Surgery Frontier, 17(2)	西郷勝康、 <u>炬口真理子</u>	189-193	
骨髄異形成症候群の予後因子	共著	2011	Sysmex Journal,	西郷勝康、磯野雪	22-28	

としての血小板関連指標の意義			34(2)	妃、 <u>炬口真理子</u>		
MDS の血液生化学検査	共著	2012	臨床検査, 56(12)	西郷勝康、 <u>炬口真理子</u> 、田窪孝行	1337-1342	
鉄キレート療法の多彩な効果	共著	2018	兵庫県医師会医学雑誌, 60(2)	大淵絢子、河野麻理、 <u>炬口真理子</u> 、井本しおん、西郷勝康	30-35	

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1984 年 4 月～2008 年 3 月	日本臨床検査医学会会員
1984 年 4 月～2008 年 3 月	日本臨床検査自動化学会会員
2000 年 4 月～現在	日本臨床検査医学会会員
2002 年 4 月～現在	日本血液学会会員
2006 年 4 月～現在	日本検査血液学会会員
2008 年 4 月～2012 年 3 月	日本薬剤師会会員

Ⅴ 学内における主な活動

2009 年 4 月～2010 年 3 月	生命倫理委員会委員
2010 年 4 月～現在	附属図書館運営委員
2012 年 4 月～2013 年 3 月	創立 25 周年記念委員会委員
2012 年 4 月～2013 年 3 月	学習支援センター委員会委員
2012 年 4 月～現在	西播姫路医療セミナー実行委員
2013 年 9 月～2015 年 3 月	薬学共用試験 (OSCE) 実施委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	准教授	氏名	原野 雄一	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	-----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
①数学を基礎とした薬学的課題への対応法	2018年9月～12月	中学・高校数学を用いて薬学の課題を理解する方法を解説した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
基礎数理 薬学を学ぶための数学補講	2016年3月1日 2014年4月1日	リメディアル教育としての数学基礎 薬学で用いる数学のまとめ
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・者の別	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
【著書】						
【論文】 “Glycosaminoglycan Binding and Non-endocytic Membrane Translocation of Cell-permeable Octaarginine Monitored by Real Time In-cell NMR Spectroscopy” .		(2017)	Pharmaceuticals, 10, 42 .	Y. Takechi-Haraya, K. Aki, Y. Tohyama, Y. Harano, T. Kawakami, H. Saito, E. Okamura		
“Water based on a molecular model behaves like a hard-sphere solvent for a nonpolar solute when the reference interaction site model and related theories are employed” .		(2016)	J. Phys.: Condens. Matter, 28, # 344003 .	T. Hayashi, H. Oshima, Y. Harano, M. Kinoshita		
“An Accurate and Efficient Computation Method of the Hydration Free Energy of a Large, Complex Molecule” .		(2015)	J. Chem. Phys., 142, # 175101 .	T. Yoshidome, T. Ekimoto, N. Matubayasi, Y. Harano, M. Kinoshita, M. Ikeguchi		

“Does water drive protein folding?” .		(2013)	Chem. Phys. Lett., 581, 85-90 .	Y. Maruyama, Y. Harano		
“A morphometric approach for the accurate solvation thermodynamics of proteins and ligands” .		(2013)	J. Comput. Chem., 34, 1969-1974 .	Y. Harano, R. Roth, S. Chiba,		
【その他】						

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

--	--

Ⅴ 学内における主な活動

--	--

所属	薬学部 医療薬学科	職名	准教授	氏名	宮本和英	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	-----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
①教育方法の実践例	2008 年 11 月～現在	蛋白質構造機能学、ゲノム創薬学、分析化学、物理・化学系統合演習(PBL)、分析化学実習、基礎実験（物理）の講義・実習を担当した。薬のメカニズムや創薬との関連性を深く理解できるように講義・実習を行っている。講義では、パワーポイントを使用し、分子のビジュアル化を通して、視覚的に内容を容易に捉えられるようにするなど、工夫している。また、演習を実施し、学生の理解度をチェックしながら、講義を進めている。授業評価アンケートでは、分かりやすい講義であると好評である。
②薬学分析化学実習	2008 年 11 月～現在	試料中に存在する化学物質の種類及び濃度を正確に知るための定量法・分離法、また、化学物質の構造決定を行うための滴定法、クロマトグラフィー、核磁気共鳴法、IR スペクトル、質量分析法の基本的知識・技能を身につける学習内容である。講義の理解を一層高めながら、実験を各自で実施し、また、実験を通して分析機器を安全に取り扱うことができるような内容となっている。結果についてのデータの取りまとめ方や報告書の作成方法も実践する。実験内容は、全て独自のオリジナルである。最新の薬学研究、国家試験に対応できるように毎年更新している。
③物理・化学系統合演習	2008 年 11 月～現在	核磁気共鳴法、質量分析法、クロマトグラフィーなどから構成されており、特に重要である項目を重点的に演習する内容となっている。講義の理解を一層高めながら、さらに、その知識の活用の仕方までを本演習を通して学習できる。絵・図を多く取り入れており、分子をビジュアル化するなどして内容を容易に理解できるように作成している。最新の薬学研究、国家試験に対応できるように毎年更新している。
④学生を主体にした授業の工夫	2008 年 9 月～現在	物理・化学系の統合演習(PBL)において、学生に課題を与えて、学生自身で調査を行い、学生同士で討論させた。その結果を他の学生の前で発表させ、プレゼンテーションの実践を行う。当該講義を通して、学生の勉学に対する意欲を向上させることも目的である。
⑤授業以外の補講	2008 年 4 月～2013 年	高校化学の未履修、入試で化学を専攻しなかった学生などを対象に、授業以外に補講を行った。
⑥コンピュータシステムの導入実績とその活用	2014 年 4 月～現在	H25 教育研究装置及び教育基盤・研究施設（文部科学省）の教育ファンドを獲得し、薬学共用試験 CBT のためのコンピュータシステム・e-learning 演習システムを整備した。これを薬学共用試験 CBT 対策や講義に活用している。 物理化学、分析化学、蛋白質科学の基本原則を講義で習得させた後、その知識の活用の仕方を学ばせる為に、e-learning 演習システムを利用する演習を行っている。この演習システムでは、インターネットを利用している為、自宅からでもアクセスできる。講義時間にとらわれず、演習時間を確保できる点は良い。このシステムの利用状況の記録から、全ての学生の習得の度合いを容易に把握できる。講義の改善にも積極的に利用している。
⑦学生の受賞 研究指導した学生が学会で連続受賞	2016 年 11 月	研究指導した学部 5 年生が第 33 回関西地区ペプチドセミナーにお

した	2017 年 12 月	ける研究発表で、「優秀発表賞」を受賞した。 研究指導した学部 5 年生が第 34 回関西地区ペプチドセミナーにおける研究発表で、「優秀ポスター賞」を受賞した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
①薬学分析化学実習書	2008 年 11 月～毎年作成	学部生を対象とした分析化学実習で使用する実習書を作成した。注意事項、基本操作法など大切な項目については、容易に理解できるように絵・図を多く取り入れて作成した。分析化学の基本が容易に身に着くように、実験手順を詳細かつ明瞭に作成した。薬剤師国家試験への合格が近付くようなレベルまで上げるための構成にした。
②補講で使用する教材 リメディアル教育	2009 年 4 月～2013 年	1 年次の学生に高校レベルの学習内容を、より理解させるための教材。絵を多く用いて、分かり易くした。
③統合演習 (PBL) 教材	2009 年 9 月～毎年作成	学部 2 年次を対象とした物理・化学系統合演習 (PBL) で使用するテキストを作成した。クロマトグラフィー、核磁気共鳴法、質量分析法を中心に作成した。多く絵を使い、薬剤師国家試験に必須となるポイントに絞ることで、短期間での習得を可能にした。
④講義資料 分析化学、蛋白質構造機能学、ゲノム創薬学	2008 年 11 月～毎年作成	講義ごとにオリジナルプリントを作成した。分析化学では、原理などの基礎基本を理解できるように絵を多く取り入れて、視覚的に分かりやすく工夫した。また、蛋白質構造機能学、ゲノム創薬学では、6 年次向けに、アドバンストの内容となっている。研究・医療現場で用いられる実践的な生体分子の分析法、分離法を例に挙げて解説した。
⑤日本薬学会編 物理系薬学を執筆し講義に活用 書名 (日本薬学会編「スタンダード薬学シリーズ II」 物理系薬学 I. 物質の物理的性質 (東京化学同人); 2015. p78-93.)	2013 年 3 月	日本薬学会 薬学教育モデル・コアカリキュラム改訂に伴い、日本薬学会編「スタンダード薬学シリーズ II」物理系薬学を執筆し講義に生かしている。この書物は、全国の多くの薬学生や薬学関係者に利用されている。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
第 18 回薬剤師のためのワークショップ in 近畿および厚生労働省による認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ	2008 年 8 月 2～3 日	タスクフォースを担当
第 54 回薬剤師のためのワークショップ in 近畿および厚生労働省による認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ	2011 年 7 月 17-18 日	タスクフォースを担当
地域連携の教育プロジェクト	2012 年	大学と地元の高等学校との連携で、科学技術振興機構 (JST) の支援の下で、サイエンス・パートナーシッププロジェクトを立ち上げた。地域と強力に連携して薬学系人材の育成を実践している。
国立科学博物館との連携で体験実習を開催	2012 年	国立科学博物館との連携で、体験実習を開催している (実験内容: 医薬品および生体物質の構造や物理的性質の解析)。大学内での実験を通して、理科の面白さを体験してもらっている。

4 その他教育活動上特記すべき事項		
高校訪問	2007年7月～2010年	本大学での教育内容・教育施設等を普及させるために、高校に出向いて丁寧に説明を行った。
日本薬学会 薬学教育モデル・コアカリキュラム改訂の調査研究チーム	2018年 2012年6月～2013年3月	兵庫県北中部の高等学校に訪問し、薬学教育について説明した。 日本薬学会 薬学教育モデル・コアカリキュラム改訂のために、調査研究チームの委員として改訂作業を務めた。物理系薬学分野
病院・薬局の訪問指導	2011年～現在	病院・薬局実務実習において、薬局・病院を訪問し、指導薬剤師と連携をとり学生指導を行っている。
オフィスアワーの実施	2011年～現在	担任学生の科目登録など、学生からの問い合わせに対応しており、講義・実習時間に関わらず、学生から広く質問や相談を受けている。専門書およびコンピュータを学生向けに設置・整えており、講義・実習の空き時間を、勉学推進のため十分活用できるようにサポートしている。
FD活動	2011年～現在	講義・実習の各科目ごとに授業評価アンケートを実施、また、オフィスアワーの自己点検を実施しており、講義・実習内容等の教育環境のよりよい改善に努めている。授業評価アンケートでは、講義・実習が、分かりやすいと好評である。オフィスアワーでは、入学後すぐの新入生が質問や相談ができるような環境・場所を提供したことは、好評であった。

II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
【著書】 Circular Dichroism: Theory and Spectroscopy (Chapter: Application of circular dichroism for short peptides as HIV-1 inhibitors)	単著	2011年	Nova Science Publishers Inc., NY, (	K. Miyamoto	345-349 頁	
物理系薬学 I. 物質の物理的性質	単著	2015年	日本薬学会編 東京化学同人	宮本和英	78-93 頁	
【論文】 Oligopeptide-mediated acceleration of amyloid fibril formation of amyloid beta(Abeta) and alpha-synuclein fragment peptide (NAC).	共著	2004年	J. Peptide Sci Vol. 10	©Y. Kuroda, Y. Maeda, H. Hanaoka, <u>K. Miyamoto</u> , T. Nakagawa.	8-17 頁	
Application of tri- and tetrasubstituted alkene dipeptide mimetics to conformational studies of cyclic RGD peptides	共著	2006年	Tetrahedron., Vol. 62 No. 7	©S. Oishi, <u>K. Miyamoto</u> , A. Niida, M. Yamamoto, K. Ajito, H. Tamamura, A. Otaka, Y. Kuroda, A. Asai, N. Fujia	1416-1424 頁	
姫路獨協大学薬学部における早期体験実習前後の学生アン	共著	2009年	医薬品情報学 Vol. 10 No. 4	©清原義史, 大西憲明, 角山圭一,	273-279 頁	

ケート調査				木下淳, 中村隆典, 宮本和英, 矢上達郎, 通山由美, 駒田富佐夫		
Solution structure of LC5, the CCR5-derived peptide for HIV-1 inhibition	共著	2010 年	J. Peptide Sci. 16(4)	© <u>K. Miyamoto</u> , K. Togiya, R. Kitahara, K. Akasaka, Y. Kuroda.	165-170 頁	
The creation of the artificial RING finger from the cross-brace zinc finger by alpha-helical region substitution	共著	2010 年	Biochem. Biophys. Res. Commun. 394(4)	© <u>K. Miyamoto</u> , K. Togiya.	972-975 頁	
The creation of the artificial ubiquitin-ligating (E3) enzyme by using the alpha-helical region substitution.	共著	2010 年	Peptide Science	© <u>K. Miyamoto</u> , K. Togiya	218 頁	
Solution structure of LC4 transmembrane segment of CCR5	共著	2011 年	PLoS One 6(5)	© <u>K. Miyamoto</u> , K. Togiya	e20452 頁	
Creation of an artificial RING finger without a substrate and a tag, (2011).	単著	2011 年	Peptide Science	K. Miyamoto	381-382 頁	
Ubiquitination of an artificial RING finger without a substrate and a tag	単著	2012 年	J. Peptide Sci. 18(2)	K. Miyamoto	135-139 頁	
アレルギー性皮膚炎の治療薬—シコニンの効果—	共著	2013 年	Small Animal Dermatology, 9(1)	© A. Watanabe, H. Hichiri, M. Takenokuchi, <u>K. Miyamoto</u> , K. Kadoyama, T. Taniguchi	60-65 頁	
Oligopeptides derived from autophosphorylation sites of EGF receptor suppress EGF-stimulated responses in human lung carcinoma A549 cells	共著	2013 年	European Journal of Pharmacology, 698	©Y. Kuroda, N. Kato-Kogoe, E. Tasaki, E. Murata, K. Ueda, M. Abe, <u>K. Miyamoto</u> , I. Nakase, S. Futaki, Y. Tohyama, M. Hirose	87-94 頁	
Ubiquitination on an artificial RING finger as an E3 ligase	単著	2014 年	Peptide Science	K. Miyamoto	331-332 頁	
Structural model of ubiquitin transfer onto an artificial RING finger as an E3 ligase.	単著	2014 年	Scientific Reports, 4	K. Miyamoto	6574 頁	
Bortezomib Causes ER Stress-related Death of Acute Promyelocytic Leukemia Cells Through Excessive Accumulation of PML-RARA.	共著	2015 年	Anticancer Res., 35	© M. Takenokuchi, <u>K. Miyamoto</u> , K. Saigo, T. Taniguchi	3307-3316 頁	

Improved isolation procedure for shikonin from the root of the Chinese medicinal plant <i>Lithospermum erythrorhizon</i> and its solubilization with cyclodextrins	共著	2016 年	Journal of Applied Research on Medicinal and Aromatic Plants, 3(2)	© H. Azuma, J. Li, R. Youda, T. Suzuki, <u>K. Miyamoto</u> , T. Taniguchi, T. Nagasaki	58-63 頁	
Rapid and accurate monitoring of E2 activities using an artificial E3 ligase on a signal accumulation ISFET biosensor	共著	2016 年	Peptide Science	© <u>K. Miyamoto</u> , M. Sumida, M. Sunagawa,	171-172 頁	
The Artificial Ubiquitin Ligase E3 Inhibits Cellular Proliferation in Cancer Cells	共著	2016 年	Peptide Science	© M. Sunagawa, A. Nakatani, <u>K. Miyamoto</u>	125-126 頁	
The unique N-terminal zinc finger of Synaptotagmin-like protein 4 reveals FYVE structure	共著	2017 年	Protein Science, 26(12)	© <u>K. Miyamoto</u> , A. Nakatani, K. Saito	2451-2457 頁	
The zinc finger domain of RING finger protein 141 reveals a unique RING fold	共著	2017 年	Protein Science, 26(8)	© <u>K. Miyamoto</u> , A. Uechi, K. Saito	1681-1686 頁	
Highly sensitive detection of E2 activity in ubiquitination using an artificial RING finger	共著	2017 年	J. Peptide Sci., 23(3)	© <u>K. Miyamoto</u> , M. Sumida, M. Yuasa-Sunagawa, K. Saito	222-227 頁	
Detection of E2 Activities in Cancer Cells using an Artificial E3 Ligase	共著	2017 年	Peptide Science	© A. Yamashita, K. Saito, <u>K. Miyamoto</u>	152-153 頁	
Cellular Effects of Artificial Ubiquitin Ligases on Cancer Cells	共著	2017 年	Peptide Science	© M. Sunagawa, A. Yamashina, K. Saito, <u>K. Miyamoto</u>	124-125 頁	
Solution structure of the PHD finger from the human KIAA1045 protein	共著	2018 年	Protein Science 27(5)	© <u>K. Miyamoto</u> , A. Yamashita, K. Saito	987-992 頁	
Unique auto-ubiquitination activities of artificial RING fingers in cancer cells	共著	2018 年	Protein Science 27(9)	© <u>K. Miyamoto</u> , A. Nakatani, M. Sunagawa, K. Saito	1704-1709 頁	
Design of a system for monitoring ubiquitination activities of E2 enzymes using engineered RING finger proteins	共著	2018 年	Methods in Molecular Biology 1867	© <u>K. Miyamoto</u> , K. Saito	75-87 頁	
Unique RING finger structure from the human HRD1 protein	共著	2019 年	Protein Science 28(2)	© <u>K. Miyamoto</u> , Y. Taguchi, K. Saito	448-453 頁	
Preparation of the silkworm prothoracicotropic hormone receptor, Torso, which is a receptor tyrosine kinase with novel dimer structure.	共著	2019 年	Peptide Science	© A. Uechi, S. Nakamichi, Y. Yamabana, M. Sunagawa, Y. Ishigaki, K. Miyamoto, K. Saito	掲載予定	

Exploring amino acid residues for regulating E2 specificity of artificial RING fingers	共著	2019 年	Peptide Science	◎A. Yamashita, K. Miyamoto, K. Saito	掲載予定	
Detection of ubiquitination activities of artificial RING fingers in human breast cancer cells.	共著	2019 年	Peptide Science	◎ K. Miyamoto, A. Nakatani, M. Sunagawa, K. Saito	掲載予定	
【解説・総説】						
Artificial RING finger as ubiquitin-ligating enzyme (E3)	単著	2010 年	SciTopics, Elsevier Publishing Group, Elsevier	K. Miyamoto		
揺れ動くタンパク質構造の本質を明らかにする高圧NMR	単著	2010 年	ファルマシア, 46(2)	宮本和英	170-171 頁	
人工ユビキチンリガーゼの分子設計法の開発 ～ユビキチン化活性に基づくがん診断に向けて～	共著	2017 年	分析化学 特集「医療に貢献する分析化学」に筆頭論文として掲載された	◎宮本和英, 砂川真弓, 齋藤一樹	393-402 頁	
Concise machinery for monitoring ubiquitination activities using novel artificial RING fingers	共著	2018 年	Protein Science 27(8) Protein Science から招待を受けて執筆した総説で、表紙絵に選ばれた。	◎ K. Miyamoto, K. Saito	1354-1363 頁	
【プロシーディング】						
薬剤師のためのワークショップ 報告書	単著	2006 年	第 8 回薬剤師のためのワークショップ in 近畿	宮本和英	154-155 頁	
【その他】						
(招待講演) NMR 法を用いるタンパク質の構造解析の現状技術と今後の期待	単著	2009 年 11 月	エレクトロニクス実装学会「第3回ナノバイオデバイス実装技術研究会」	宮本和英	イーグレ姫路	
ユビキチンプロテアソームと疾患診断法	単著	2015 年 2 月	メディカルジャパン 2015	宮本和英	インテックス大阪	
重篤疾患の診断を迅速・簡易化できる試作品キットの実用試験	単著	2016 年 1 月	兵庫県科学技術振興財団40周年	宮本和英	神戸	
人工ユビキチンリガーゼの分子設計法の構築	単著	2016 年 11 月	第33回関西ペプチドセミナー	宮本和英	近畿大学	
ユビキチン化反応における E2 活性のリアルタイム検出法	単著	2017 年 3 月	超異分野学会 大阪フォーラム2017	宮本和英	立命館大	
(国内学会) Solution structure of the RING-H2 finger domain of mouse Deltex protein 2	共著	2004 年 12 月	第27回日本分子生物学会年会	◎K. Miyamoto, Y. Muto, N. Tochio, S. Koshiba, M. Inoue, T. Yabuki, M. Aoki, Y. Tomo, E. Seki, T. Terada, M. Shirouzu, A. Tanaka, Y.	神戸ポートピア	

human tripartite motif タンパク質ファミリーの RING ドメインの溶液構造	共著	2006 年 11 月	第45回NMR討論会	Hayashizaki, T. Kigawa, S. Yokoyama ◎K. Miyamoto, T Kigawa, K Saito, S. Koshiba, M. Inoue, S. Yokoyama	京都大学	
CCR5 由来のフラグメントペプチドである HIV-1 阻害剤のモデル膜中の構造	共著	2008 年 12 月	BMB2008	◎K. Miyamoto, K. Togiya, R. Kitahara, K. Akasaka, Y. Kuroda	神戸ポート アイランド	
HIV-1感染を阻害するCCR5由来ペプチドLC5のユニークなコンフォーメーション	共著	2009 年 3 月	第129年会日本薬学会	◎K. Miyamoto, K. Togiya, R. Kitahara, K. Akasaka, Y. Kuroda	京都国際会 館	
NMR structure of LC4, the binding partner of HIV-1 inhibitory peptide LC5	共著	2009 年 12 月	第32回日本分子生物学会年会	◎K. Miyamoto, K. Togiya	パシフ ィ コ横浜	
Creation of an artificial RING finger without a substrate and a tag	単著	2011 年 9 月	第48回ペプチド討論会	K. Miyamoto	札幌コンベン ションセン ター	
An artificial ubiquitin-ligating (E3) enzyme by the method of alpha helical region substitution	単著	2012 年 12 月	第35回日本分子生物学会	K. Miyamoto	福岡国際会 議場	
Ubiquitination of an artificial E3 RING finger created by alpha helical region substitution	単著	2013 年 12 月	第36回日本分子生物学会	K. Miyamoto	神戸ポート アイランド	
ユビキチン化を用いた新しい診断法	単著	2014 年 5 月	企業・大学・学生マツチング	K. Miyamoto	兵庫県立大	
ユビキチン化を用いた新しい診断法	単著	2014 年 9 月	国際フロンティア産業メッセ2014	K. Miyamoto	神戸国際会 議場	
Ubiquitination on an artificial RING finger as an E3 ligase	単著	2014 年 12 月	第51回ペプチド討論会	K. Miyamoto	徳島大学	
ユビキチンプロテアソームを活用する治療前診断法	単著	2014 年 12 月	姫路医療セミナー	K. Miyamoto	姫路商工会 議所	
癌などの重篤疾患の治療前診断法	単著	2015 年 9 月	国際フロンティア産業メッセ2015	K. Miyamoto	神戸国際展 示場	
Structural analysis of ubiquitin transfer onto an artificial E3 ligase	単著	2015 年 12 月	第38回日本分子生物学会	K. Miyamoto	神戸国際展 示場	
人工ユビキチンリガーゼのがん細胞増殖抑制効果	共著	2016 年 9 月	バイオメディカル分析科学シンポジウム	◎ A. Nakatani, M. Sunagawa, K. Miyamoto, K. Saito	京都大	

人工ユビキチンリガーゼを用いた血清中のユビキチン化反応の検出法	共著	2016 年 9 月	バイオメディカル分析科学シンポジウム	◎ <u>K. Miyamoto</u> , M. Sunagawa, K. Saito	京都大	
人工ユビキチンリガーゼを用いるユビキチン結合酵素 (E2) 活性の検出法	共著	2016 年 9 月	第65回日本分析化学会	◎ <u>K. Miyamoto</u> , M. Sunagawa, K. Saito	北海道大	
ユビキチン結合酵素 (E2) 活性の検出に基づく腫瘍サイズの決定	共著	2016 年 10 月	第75回日本癌学会学術総会	◎ <u>K. Miyamoto</u> , M. Sunagawa, K. Saito	パシフィコ横浜	
新規抗がん剤としての人工ユビキチンリガーゼの設計とその作用機序	共著	2016 年 10 月	第66回日本薬学会近畿支部	◎ M. Sunagawa, <u>K. Miyamoto</u> , K. Saito	大阪薬科大	
The artificial ubiquitin ligase E3 inhibits cellular proliferation in cancer cells	共著	2016 年 10 月	第53回ペプチド討論会	◎M. Sunagawa, A. Nakatani, <u>K. Miyamoto.</u>	京都テルサ	
Rapid and accurate monitoring of E2 activities using an artificial E3 ligase on a signal accumulation ISFET biosensor	共著	2016 年 10 月	第53回ペプチド討論会	◎ <u>K. Miyamoto</u> , M. M. Sumida, M. Sunagawa	京都テルサ	
癌などの重篤疾患の治療前診断法	単著	2016 年 11 月	企業・大学・学生マッチング	K. Miyamoto	兵庫県立大	
人工ユビキチンリガーゼによる急性前骨髄性白血病の抑制効果	共著	2016 年 11 月	第33回関西ペプチドセミナー	◎A Nakatani, M. Sunagawa, <u>K. Miyamoto.</u>	近畿大	
Creation of an artificial E3 ligase and its anticancer effects	共著	2016 年 11 月	第39回日本分子生物学会	◎M. Sunagawa, A. Nakatani, <u>K. Miyamoto.</u>	パシフィコ横浜	
Real-time detection of E2 activities in the ubiquitination reaction using an artificial E3 ligase	共著	2016 年 11 月	第39回日本分子生物学会	◎ <u>K. Miyamoto</u> , M. M. Sumida, M. Sunagawa	パシフィコ横浜	
ユビキチン化活性の検出に用いる人工ユビキチンリガーゼの設計法	共著	2017 年 5 月	第77回分析化学討論会	◎ <u>K. Miyamoto</u> , M. Sunagawa, K. Saito	龍谷大	
Cancer screening based on the ubiquitination reaction of the artificial E3 ligase	共著	2017 年 9 月	第76回日本癌学会学術総会	◎ <u>K. Miyamoto</u> , A. Yamashita, K. Saito	パシフィコ横浜	
人工ユビキチンリガーゼを用いたがん細胞のユビキチン化活性の測定	共著	2017 年 10 月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会	◎ M. Sunagawa, A. Nakatani, K. Saito, <u>K. Miyamoto.</u>	兵庫医療大	
癌などの重篤疾患の治療前診断法	単著	2017 年 11 月	企業・大学・学生マッチング	K. Miyamoto	兵庫県立大	
Cellular Effects of artificial ubiquitin ligases on cancer cells	共著	2017 年 11 月	第 54 回ペプチド討論会	◎ M. Sunagawa, A. Yamashita, K. Saito, <u>K. Miyamoto.</u>	大阪府立大	
Detection of E2 activities in cancer cells using an	共著	2017 年 11 月	第 54 回ペプチド討論会	◎A. Yamashita, K. Saito, <u>K.</u>	大阪府立大	

artificial E3 ligase				<u>Miyamoto.</u>		
人工ユビキチンリガーゼを活用したユビキチン化活性の検出	共著	2017 年 12 月	第7回新アミノ酸分析研究会	◎A. Yamashita, K. Saito, <u>K. Miyamoto.</u>	大田区産業プラザPio	
人工 RING フィンガーを用いた簡便な E2 活性の検出法	共著	2017 年 12 月	第34回関西ペプチドセミナー	◎A. Yamashita, K. Saito, <u>K. Miyamoto.</u>	甲南大	
人工ユビキチンリガーゼを活用するがん診断への挑戦	単著	2018 年 3 月	日本薬学会第108年会シンポジウム	◎K. Miyamoto	金沢	
人工ユビキチンリガーゼを用いる特異的な E2 活性検出の検討	共著	2018 年 5 月	第78回分析化学討論会	◎ <u>K. Miyamoto,</u> A. Yamashita, K. Saito	山口大	
膜貫通領域のジスルフィド架橋で二量化しているチロシンキナーゼ型レセプターTorsoの大量調製	共著	2018 年 5 月	日本生化学会大会近畿支部	◎ A. Uechi, M. Sunagawa, <u>K. Miyamoto,</u> K. Saito	兵庫医大	
人工ユビキチンリガーゼの E2 特異性を担うアミノ酸残基の探索	共著	2018 年 8 月	バイオメディカル分析科学シンポジウム	◎A. Yamashita, K. Saito, <u>K. Miyamoto.</u>	九州大学	
複雑なジスルフィド構造を有するカイコガ前胸腺刺激ホルモン PTH の、プレバチルス菌を用いた大量調製	共著	2018 年 9 月	第91回日本生化学会大会	◎ Y. Ishigaki, K. Shimoda, T. Konogami, H. Kataoka, <u>K. Miyamoto,</u> K. Saito	京都国際会館	
Unique ubiquitination reaction of artificial E3 ligases in cancer cells	共著	2018 年 9 月	第77回日本癌学会学術総会	◎ <u>K. Miyamoto,</u> A. Yamashita, K. Saito	大阪国際会議場	
プレバチルス菌を用いたカイコガ前胸腺刺激ホルモンの大量調製法の確立～複雑なジスルフィド構造を有するリコンビナントタンパク質の発現・調製～	共著	2018 年 10 月	第68回日本薬学会近畿支部総会	◎ Y. Ishigaki, K. Shimoda, T. Konogami, H. Kataoka, <u>K. Miyamoto,</u> K. Saito	姫路獨協大学	
人工 RING フィンガーが有する E2 特異的認識能の検討	共著	2018 年 10 月	第68回日本薬学会近畿支部総会	◎A. Yamashita, Y. Taguchi, K. Saito, <u>K. Miyamoto.</u>	姫路獨協大学	
これまでになかった二量化様式のチロシンキナーゼ型レセプター・Torso の大量調製法の確立	共著	2018 年 10 月	第68回日本薬学会近畿支部総会	◎ A. Uechi, S. Nakamichi, M. Sunagawa, <u>K. Miyamoto,</u> K. Saito	姫路獨協大学	
細胞膜貫通領域のジスルフィド架橋を介して二量化しているチロシンキナーゼ型レセプター・Torso の大量調製	共著	2018 年 12 月	第35回関西ペプチドセミナー	◎ A. Uechi, S. Nakamichi, Y. Yamabana, M. Sunagawa, Y. Ishigaki, <u>K. Miyamoto,</u> K. Saito	龍谷大学	
乳がん細胞のユビキチン化に関与する E2 活性の検出	共著	2018 年 12 月	第8回新アミノ酸分析研究会	◎ <u>K. Miyamoto,</u> A. Nakatani, K. Saito	大田区産業プラザPio	
(国際学会)						

Solution structure of the N-terminal RING domain on the TRIAD motif from Ubc-M4-interacting protein family	共著	2006 年 6 月	20 th IUBMB international congress of biochemistry and molecular biology and 11 th FAOBMB congress	©K. Miyamoto, T. Kigawa, K. Saito, S. Koshiba, M. Inoue, S. Yokoyama	京都国際会館	
The creation of the artificial ubiquitin-ligating (E3) enzyme by using α -helical region substitution	共著	2010 年 12 月	5th International Peptide Symposium	©K. Miyamoto, K. Togiya	京都国際会館	
Detection of E2 activity as a tumor marker using an artificial RING finger	共著	2016 年 2 月	60TH Annual Meeting of Biophysical Society	©K. Miyamoto, M. Sumida	Los Angeles	
Measuring E2 activities by artificial RING fingers in cancer cells	共著	2017 年 12 月	Consortium of Biological Sciences 2017	© M. Sunagawa, A. Nakatani, K. Saito, K. Miyamoto	神戸国際会議場	
Molecular design of artificial RING fingers for detecting ubiquitination activities	共著	2018 年 2 月	62TH Annual Meeting of Biophysical Society	©K. Miyamoto, K. Saito	San Francisc	
Preparation of the silkworm prothoracicotropic hormone receptor, Torso, which is a receptor tyrosine kinase with novel dimer structure.	共著	2018 年 12 月	10th International Peptide Symposium	© A. Uechi, S. Nakamichi, Y. Yamabana, M. Sunagawa, Y. Ishigaki, K. Miyamoto, K. Saito	ROHM Theatre Kyoto	
Exploring amino acid residues for regulating E2 specificity of artificial RING fingers	共著	2018 年 12 月	10th International Peptide Symposium	©A. Yamashita, K. Saito, K. Miyamoto.	ROHM Theatre Kyoto	
Detection of ubiquitination activities of artificial RING fingers in human breast cancer cells.	共著	2018 年 12 月	10th International Peptide Symposium	© K. Miyamoto, A. Nakatani, M. Sunagawa, K. Saito	ROHM Theatre Kyoto	
【その他】						
(NMR を用いて解析に成功したタンパク質の溶液構造を発表)						
Solution Structure of DC1 Domain of Pdi-Like Hypothetical Protein from Arabidopsis Thaliana	共著	2004 年 5 月	Protein Data Bank	© K. Miyamoto, T. Tomizawa, S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 1V5N	
Solution Structure of the Lim Domain of the Human Actin Binding Lim Protein 2	共著	2004 年 6 月	Protein Data Bank	© K. Miyamoto, T. Tomizawa, S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 1V6G	

Solution Structure of the Ring-H2 Finger Domain of Mouse Deltex Protein	共著	2004 年 6 月	Protein Data Bank	© K. Miyamoto, Y. Muto, N. Tochio, S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 1V87	
Solution Structure Of The Picot Homology 2 Domain Of The Mouse Pkc-Interacting Cousin Of Thioredoxin Protein	共著	2004 年 11 月	Protein Data Bank	©K. Miyamoto, T. Tomizawa, S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 1WIK	
Solution Structure Of The Ring Finger Domain Of The Human Kiaa1045 Protein	共著	2004 年 11 月	Protein Data Bank	©K. Miyamoto, N. Tochio, S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 1WIL	
Solution Structure Of The Ring Finger Domain Of The Human UbcM4-Interacting Protein 4	共著	2004 年 11 月	Protein Data Bank	©K. Miyamoto, K. Saito, S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 1WIM	
Solution Structure Of The Band 7 Domain Of The Mouse Flotillin 2 Protein	共著	2004 年 11 月	Protein Data Bank	©K. Miyamoto, S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 1WIN	
Solution Structure Of The C2H2 Zinc Finger Domain Of The Protein Arginine N-Methyltransferase 3 From Mus Musculus	共著	2004 年 11 月	Protein Data Bank	©K. Miyamoto, T. Tomizawa, S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 1WIR	
Solution Structure Of The Homeobox Domain Of Human Homeodomain Leucine Zipper-Encoding Gene (Homez)	共著	2004 年 11 月	Protein Data Bank	©Y.O. Kamatari, N. Tochio, N. Nameki, K. Miyamoto, H. Li, N. Kobayashi, S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 1WJH	
Solution Structure Of The Uba Domain Of Human Tudor Domain Containing Protein 3	共著	2004 年 11 月	Protein Data Bank	©Y.O. Kamatari, N. Tochio, T. Nakanishi, K. Miyamoto, H. Li, N. Kobayashi, T. Tomizawa, S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 1WJI	
Solution Structure Of The Sh3 Domain-Binding Glutamic Acid-Rich-Like Protein	共著	2005 年 4 月	Protein Data Bank	©K. Inoue, K. Miyamoto, T. Nagashima, F. Hayashi, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 1WRY	
Solution Structure Of The Ring Domain Of The Zinc Finger Protein 183-Like 1	共著	2005 年 11 月	Protein Data Bank	©K. Miyamoto, M. Sato, T. Tomizawa, K.	PDB ID: 2CSY	

Solution Structure Of The Ring Domain Of The Synaptotagmin-Like Protein 4	共著	2005 年 11 月	Protein Data Bank	Saito 、 S. Koshiba 、 M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama ◎K. Miyamoto、 M. Sato 、 S. Koshiba 、 M. Inoue 、 T. Kigawa 、 S. Yokoyama	PDB ID: 2CSZ	
Solution Structure Of The Ring Domain Of The Non-Smc Element 1 Protein	共著	2005 年 11 月	Protein Data Bank	◎K. Miyamoto、 M. Sato 、 S. Koshiba 、 M. Inoue 、 T. Kigawa 、 S. Yokoyama	PDB ID: 2CT0	
Solution Structure Of The Zinc Finger Domain Of Transcriptional Repressor Ctf Protein	共著	2005 年 11 月	Protein Data Bank	◎K. Miyamoto、 S. Koshiba、 M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2CT1	
Solution Structure Of The Ring Domain Of The Tripartite Motif Protein 32	共著	2005 年 11 月	Protein Data Bank	◎K. Miyamoto、 N. Tochio 、 M. Sato, S. Koshiba, M. Inoue 、 T. Kigawa 、 S. Yokoyama	PDB ID: 2CT2	
Solution Structure Of The Sh3 Domain Of The Vinexin Protein	共著	2005 年 11 月	Protein Data Bank	◎K. Miyamoto、 T. Tomizawa、 S. Koshiba 、 M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2CT3	
Solution Strutcure Of The Sh3 Domain Of The Cdc42-Interacting Protein 4	共著	2005 年 11 月	Protein Data Bank	◎K. Miyamoto、 T. Tomizawa、 S. Koshiba 、 M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2CT4	
Solution Structure Of The Zinc Finger Bed Domain Of The Zinc Finger Bed Domain Containing Protein 1	共著	2005 年 11 月	Protein Data Bank	◎K. Miyamoto、 T. Tomizawa、 S. Koshiba 、 M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2CT5	
Solution Structure Of The Sh3 Domain-Binding Glutamic Acid- Rich-Like Protein 2	共著	2005 年 11 月	Protein Data Bank	◎K. Miyamoto、 S. Koshiba、 M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2CT6	
Solution Structure Of The Ibr Domain Of The Ring Finger Protein 31 Protein	共著	2005 年 11 月	Protein Data Bank	◎K. Miyamoto、 S. Koshiba、 T. Tomizawa 、 M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2CT7	
Solution structure of the MYND domain of the human zinc finger MYND domain-containing protein 10	共著	2006 年 6 月	Protein Data Bank	◎K. Miyamoto, T Kigawa, T. Tomizawa, N. Tochio, A. Sasagawa, S. Koshiba, M. Inoue, S.	PDB ID: 2D8Q	

Solution structure of the thap domain of the human thap domain-containing protein 2	共著	2006 年 6 月	Protein Data Bank	Yokoyama <u>© K. Miyamoto,</u> T. Kigawa, T. Tomizawa, S. Koshiba, M. Inoue, S. Yokoyama	PDB ID: 2D8R	
Solution structure of the RING domain of the human cellular modulator of immune recognition protein	共著	2006 年 6 月	Protein Data Bank	<u>© K. Miyamoto,</u> T. Kigawa, T. Tomizawa, S. Koshiba, M. Inoue, S. Yokoyama	PDB ID: 2D8S	
Solution structure of the RING domain of the human RING finger protein 146	共著	2006 年 6 月	Protein Data Bank	<u>©K. Miyamoto,</u> T. Kigawa, M. Sato, S. Koshiba, M. Inoue, S. Yokoyama	PDB ID: 2D8T	
Solution structure of the B-box domain of the human tripartite motif-containing 63 protein	共著	2006 年 6 月	Protein Data Bank	<u>© K. Miyamoto,</u> T. Kigawa, T. Tomizawa, S. Koshiba, M. Inoue, S. Yokoyama	PDB ID: 2D8U	
Solution structure of the B-box domain of the zinc finger FYVE domain-containing protein 19 from Mus musculus	共著	2006 年 6 月	Protein Data Bank	<u>© K. Miyamoto,</u> T. Kigawa, M. Sato, S. Koshiba, M. Inoue, S. Yokoyama	PDB ID: 2D8V	
The solution structure of the MYND domain (LEU384-CYS430) of human Zinc finger MYND domain containing protein 10	共著	2006 年 6 月	Protein Data Bank	<u>© A. Sasagawa,</u> <u>K. Miyamoto,</u> N. Tochio, S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2DAN	
Solution structure of the B-box domain of the human Midline-2 protein	共著	2006 年 10 月	Protein Data Bank	<u>©K. Miyamoto,</u> T. Kigawa, T . Tomizawa, S . Koshiba, M . Inoue, S . Yokoyama.	PDB ID: 2DJA	
Solution structure of the CHY zinc finger domain of the RING finger and CHY zinc finger domain-containing protein 1 from Mus musculus	共著	2006 年 10 月	Protein Data Bank	<u>©K. Miyamoto,</u> T. Kigawa, S . Koshiba, M . Inoue, S . Yokoyama	PDB ID: 2DKT	
Solution Structure of the second Homeobox Domain of Human Homeodomain Leucine Zipper-Encoding Gene (Homez)	共著	2007 年 2 月	Protein Data Bank	© S. Ohnishi, Y.O. Kamatari, N. Tochio, N. Nameki, <u>K.</u> <u>Miyamoto,</u> H. Li, N. Kobayashi, S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2ECC	

Solution structure of the RING domain of the human Polycomb group RING finger protein 6	共著	2007 年 3 月	Protein Data Bank	© K. Miyamoto, T. Kigawa, M. Sato, S. Koshiba, M. Inoue, S. Yokoyama	PDB ID: 2DJB	
Solution Structure of the RING domain of the human Cell growth regulator with RING finger domain 1 protein	共著	2007 年 7 月	Protein Data Bank	© K. Miyamoto, T. Tomizawa, S. Koshiba, S. Watanabe, T. Harada, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2EA5	
Solution Structure of the RING domain of the human ring finger protein 4 Protein Data Bank ID 2EA6	共著	2007 年 7 月	Protein Data Bank	© K. Miyamoto, M. Yoneyama, T. Tomizawa, S. Koshiba, S. Watanabe, T. Harada, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2EA6	
Solution structure of the RING domain of the human tripartite motif-containing protein 39	共著	2007 年 8 月	Protein Data Bank	© K. Miyamoto, M. Sato, S. Koshiba, S. Watanabe, T. Harada, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2ECJ	
Solution Structure of the RING domain of the human RING-box protein 2	共著	2007 年 8 月	Protein Data Bank	© K. Miyamoto, T. Tomizawa, S. Koshiba, S. Watanabe, T. Harada, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2ECL	
Solution structure of the RING domain of the RING finger and CHY zinc finger domain-containing protein 1 from Mus musculus	共著	2007 年 8 月	Protein Data Bank	© K. Miyamoto, M. Yoneyama, S. Watanabe, T. Harada, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2ECM	
Solution structure of the RING domain of the human RING finger protein 141	共著	2007 年 8 月	Protein Data Bank	© K. Miyamoto, N. Tochio, S. Koshiba, S. Watanabe, T. Harada, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2ECN	
Solution structure of the human STAP2 SH2 domain	共著	2007 年 10 月	Protein Data Bank	© T. Kasai, K. Miyamoto, N. Tochio, T. Tomizawa, S. Koshiba, S. Watanabe, T. Harada, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2EL8	
Solution structure of the	共著	2007 年 10 月	Protein Data Bank	© H. Abe, N.	PDB ID:	

Myb-like DNA-binding domain of human ZZZ3 protein				Tochio, <u>K.</u> <u>Miyamoto</u> , K. Saito, S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	2YUM	
Solution structure of the SH3 domain of human Nostrin	共著	2007 年 10 月	Protein Data Bank	© H. Abe, N. Tochio, <u>K.</u> <u>Miyamoto</u> , S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2YUN	
Solution structure of the SH3 domain of mouse RUN and TBC1 domain containing 3	共著	2007 年 10 月	Protein Data Bank	© H. Abe, N. Tochio, <u>K.</u> <u>Miyamoto</u> , K. Saito, A. Sasagawa, S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2YUO	
Solution structure of the second SH3 domain of human Vinexin	共著	2007 年 10 月	Protein Data Bank	© H. Abe, N. Tochio, <u>K.</u> <u>Miyamoto</u> , K. Saito, A. Sasagawa, S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2YUP	
Solution structure of the SH3 domain of human Tyrosine-protein kinase ITK/TSK	共著	2007 年 10 月	Protein Data Bank	© H. Abe, <u>K.</u> <u>Miyamoto</u> , N. Tochio, M. Sato, S. Koshiba, T. Harada, S. Watanabe, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2YUQ	
Solution structure of the Zinc finger, C3HC4 type (RING finger) domain of RING finger protein 126	共著	2008 年 2 月	Protein Data Bank	© H. Abe, <u>K.</u> <u>Miyamoto</u> , N. Tochio, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2ECT	
Solution structure of the Zinc finger, C3HC4 type (RING finger) domain of Tripartite motif-containing protein 5	共著	2008 年 2 月	Protein Data Bank	© H. Abe, <u>K.</u> <u>Miyamoto</u> , N. Tochio, K. Saito, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2ECV	
Solution structure of the Zinc finger, C3HC4 type (RING finger) domain Tripartite motif protein 30	共著	2008 年 2 月	Protein Data Bank	© H. Abe, <u>K.</u> <u>Miyamoto</u> , N. Tochio, M. Yoneyama, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2ECW	
Solution structure of the Zinc finger, C3HC4 type (RING	共著	2008 年 2 月	Protein Data Bank	© H. Abe, <u>K.</u> <u>Miyamoto</u> , N.	PDB ID: 2ECY	

finger) domain of TNF receptor-associated factor 3				Tochio, M. Yoneyama, T. Kigawa, S. Yokoyama		
Solution structure of the SH3 domain of Sorbin and SH3 domain-containing protein 1	共著	2008 年 2 月	Protein Data Bank	© H. Abe, <u>K. Miyamoto</u> , N. Tochio, K. Saito, T. Kigawa, S. Yokoyama.	PDB ID: 2ECZ	
Solution structure of the SH3 domain of Abl interactor 2 (Abelson interactor 2)	共著	2008 年 2 月	Protein Data Bank	© H. Abe, N. Tochio, <u>K. Miyamoto</u> , K. Saito, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2ED0	
Solution structure of the SH3 domain of 130 kDa phosphatidylinositol 4,5-bisphosphate-dependent ARF1 GTPase-activating protein	共著	2008 年 2 月	Protein Data Bank	© H. Abe, N. Tochio, <u>K. Miyamoto</u> , K. Saito, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2ED1	
Solution structure of the ring domain of the Baculoviral IAP repeat-containing protein 4 from Homo sapiens	共著	2008 年 3 月	Protein Data Bank	© <u>K. Miyamoto</u> , M. Sato, S. Koshiba, S. Watanabe, T. Harada, T. Kigawa, S. Yokoyama.	PDB ID: 2ECG	
Solution structure of the RING domain of the human TNF receptor-associated factor 6 protein	共著	2008 年 3 月	Protein Data Bank	© <u>K. Miyamoto</u> , M. Sato, S. Koshiba, S. Watanabe, T. Harada, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2ECI	
Solution structure of the HMG box of human Myeloid/lymphoid or mixed-lineage leukemia protein 3 homolog	共著	2008 年 4 月	Protein Data Bank	© H. Abe, N. Tochio, <u>K. Miyamoto</u> , S. Koshiba, T. Harada, S. Watanabe, T. Kigawa, S. Yokoyama.	PDB ID: 2YUK	
Solution structure of the HMG box of human Transcription factor SOX-17	共著	2008 年 4 月	Protein Data Bank	© H. Abe, N. Tochio, <u>K. Miyamoto</u> , S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2YUL	
Solution structure of the Ring finger of human Retinoblastoma-binding protein 6	共著	2008 年 4 月	Protein Data Bank	© H. Abe, <u>K. Miyamoto</u> , N. Tochio, T. Tomizawa, S. Koshiba, T. Harada, S.	PDB ID: 2YUR	

Solution structure of the first Phorbol esters/diacylglycerol binding domain of human Protein kinase C, delta	共著	2008 年 4 月	Protein Data Bank	Watanabe, T. Kigawa, S. Yokoyama. © H. Abe, K. Miyamoto, N. Tochio, K. Saito, A. Sasagawa, S. Koshiba, M. Inoue, T. Kigawa, S. Yokoyama	PDB ID: 2YUU	
NMR structure of LC4 transmembrane segment of CCR5	単著	2011 年 4 月	Protein Data Bank	K. Miyamoto	PDB ID: 2RRS	
N-terminal Zinc Finger of Synaptotagmin-like Protein 4	単著	2017 年 2 月	Protein Data Bank	K. Miyamoto	PDB ID: 5X6T	
C-terminal zinc finger of RING finger protein 141	単著	2017 年 4 月	Protein Data Bank	K. Miyamoto	PDB ID: 5XEK	
The PHD finger of human Kiaa1045 protein	単著	2017 年 4 月	Protein Data Bank	K. Miyamoto	PDB ID: 5XHT	
Zinc finger domain from the HRD1 Protein	単著	2018 年 6 月	Protein Data Bank	K. Miyamoto	PDB ID: 6A3Z	
Zinc finger domain of the human DTX protein	単著	2018 年 11 月	Protein Data Bank	K. Miyamoto	PDB ID: 6IRO	

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2006 年 7 月 15～2006 年 7 月 16 日	厚生労働省薬剤師養成事業の認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップを修了
2008 年 8 月 2～2008 年 8 月 3 日	第 18 回薬剤師のためのワークショップ（近畿）および厚生労働省による認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ タスクフォースを担当
2010 年 4 月～現在	薬学教育協議会分析化学系教科担当教員
2011 年 4 月～2013 年 3 月	日本薬学会誌ファルマシア 専門小委員
2012 年 6 月～2013 年 3 月	日本薬学会 薬学教育モデル・コアカリキュラム改訂に関する調査研究チーム 委員
2014 年 4 月～2016 年 3 月	科学研究費がん研究ネットワーク 腫瘍学分野メンバー
2015 年 3 月～現在	学術誌 Scientific Reports(ネイチャー・パブリッシング・グループ)、Editorial Board Member
2017 年 3 月	超異分野学会 関西大会 実行委員
2018 年 3 月 26 日	日本薬学会第 138 年会 シンポジウムを主催 「がん診断・治療に貢献する次世代分析法開発への挑戦」
2018 年 8 月 29 日	日本薬学会 バイオメディカル分析科学シンポジウム 座長
2018 年 10 月 13 日	日本薬学会近畿支部総会・大会 座長
2018 年 12 月～現在	日本薬学会 バイオメディカル分析科学シンポジウム 世話人
2018 年 12 月～現在	新アミノ酸分析研究会 幹事

V 学内における主な活動

2007 年 4 月～2009 年 3 月	薬学教育者・薬剤師のためのワークショップ委員会
2007 年 4 月～2009 年 3 月	早期体験実習委員会
2007 年 4 月～2009 年 3 月	共通機器管理委員会
2007 年 4 月～2017 年 3 月	国際交流センター運営委員会
2007 年 4 月～2016 年 3 月	薬学共用試験 CBT 委員
2012 年 4 月～2016 年 3 月	情報システム整備・運営委員会専門小委員会委員
2012 年 4 月～2016 年 3 月	附属図書館運営委員
2016 年 4 月～現在	入試教科委員
2017 年 4 月～現在	駅前サテライト運営委員

VI ニュース・報道

2018 年 3 月 19 日	薬事日報 第 11995 号 主催した日本薬学会第 138 年会（金沢）シンポジウム「がん診断・治療に貢献する次世代分析法開発への挑戦」が講演ハイライトとして掲載された
-----------------	---

所属	薬学部 医療薬学科	職名	准教授	氏名	山本 泰弘	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	-----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
(1) 学部実習における実践 ①薬理学実習における学生自身が被験者となった二重盲検法の学習	2008 年 9 月	東京女子医科大学 医学部 医学科において、薬理学実習（全 6 回）を担当した。主担当として臨床試験における二重盲検法を担当した。実習内容として、カフェインの摂取による学習能率の影響を、学生自身が被験者としてカフェイン入りあるいは無しのコーヒを摂取した後に計算問題を解答し、その正答数を比較する形式で行った。得られたデータを用いて統計解析を行い、医薬品の薬効評価法を学ばせた。
②生化学実習における蛋白質解析実習	2009 年 9 月	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、生化学実習（全 8 回）を担当した。蛋白質の定量法として Bradford 法、蛋白質の分離・精製法として SDS-PAGE およびウエスタンブロッティングの技術的な指導を行った。得られたデータの解釈について、学生が自ら考えて考察できるための問題提起をし、考えながら実験を行うことの重要性を学ばせた。
③基礎生物学実習における基礎的生物学実験手法の指導	2009 年 11 月～現在	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、基礎生物学実習（全 4 回）を担当した。生物学実験を行うために必要な技術であるピペット操作、各種測定機器の原理ならびに実験動物の取り扱いについて指導を行った。また、生命科学における実際の生物を材料として扱うことの意義と重要性を、実習全般を通して学生に認識させた。
④生理学実習におけるヒトおよびラットの生理学実験の指導	2009 年 11 月～現在	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、生理学実習（全 8 回）を担当した。自らが被験者となって行う腎機能、感覚機能実習と、実験動物を用いた各臓器の機能形態、血液学実習の指導を行った。教科書で学ぶ知識について、実際の実習を通して五感で体験することにより、深く理解できることを目的とした。
⑤薬理学実習における平滑筋作用薬物を用いた薬理学実験の指導	2010 年 5 月 ～2011 年 5 月	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、薬理学実習（全 8 回）を担当した。平滑筋に作用する薬物の種類と作用様式について、実験動物から得た腸管に作動薬および拮抗薬を適用し、収縮反応を観察することによって学ばせた。実験の合間には関連する薬物についての口頭試問を課し、なるべく多くの薬物の理解を促した。
⑥模擬薬局実習における散剤実習	2010 年 9 月～11 月	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、模擬薬局実習（全 35 回）を担当した。主担当として散剤の計量調剤実習を担当した。実際の医療現場で汎用される器具や機器を用いて、調剤の概念と方法について体験させた。また、基本的な手法であるが、実際の医療現場では少なくなりつつある薬包紙の手分包についても体験させ、どのような状況にでも対応できる薬剤師を目指す

(2) 学部講義における実践 ①生理学 II における講義内容の工夫	2012 年 4 月～現在	ことの重要性を認識させた。 姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、生理学 II 講義（全 10 回）を担当した。講義においては従来の教科書輪読、板書に加えて、Microsoft Power Point を用いたアニメーションを多用したスライドショーによる講義を行い、学生の視覚に訴えた講義を展開した。また、スライド中のいくつかの重要語句を空欄にした、穴埋め形式による講義を行い、学生の積極的な聴講を促した。また CBT・国家試験に対する意識を高めるために過去問の演習を行った。
②新薬論における講義内容の工夫	2012 年 4 月～2014 年 8 月	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、新薬論講義（全 15 回）を担当した。近年の新薬の紹介に先だて、関連領域の従来医薬品の薬理作用の復習を行い、新薬との相違点が明確に理解できるような講義とした。講義スタイルは Microsoft Power Point を用いたアニメーションを多用したスライドショーによる講義を行い、学生の視覚に訴えた講義を展開した。また国家試験対策として、問題演習を毎回到わり行った。
③実用薬学英語 IV における講義内容の工夫	2012 年 9 月～現在	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、実用薬学英語 IV 講義（全 8 回）を担当した。専門英語の読解にはある程度の専門英単語の知識が不可欠であるため、授業内での専門英単語の暗記の時間を設けた。また英単語の小テストを毎講義にわたり行った。
④機能形態学における講義内容の工夫	2013 年 9 月～現在	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、機能形態学講義（全 15 回）を担当した。講義においては従来の教科書輪読、板書に加えて、Microsoft Power Point を用いたアニメーションを多用したスライドショーによる講義を行い、学生の視覚に訴えた講義を展開した。また、スライド中のいくつかの重要語句を空欄にした、穴埋め形式による講義を行い、学生の積極的な聴講を促した。各講義時間の冒頭に前回までの講義内容に関する記述式の小テストを行い、知識を定着させることを促した。また CBT・国家試験に対する意識を高めるために過去問の演習を行った。
⑤薬理学における講義内容の工夫	2018 年 9 月～現在	姫路獨協大学 医療保健学部において、薬理学講義（全 15 回のうち 7 回）を担当した。毎回の講義では、薬理学の内容に入る前に関連する生理学領域の復習を行い、薬理学の内容が理解しやすくなるように努めた。また、医療保健学部の学生向けに、作用機序など専門的な内容の薬理学知識よりも、医療現場における薬物治療に焦点を当てた講義内容とした。講義スタイルは Microsoft Power Point を用いたアニメーションを多用したスライドショーによる講義を行い、学生の視覚に訴えた講義を展開した。また講義の冒頭では、前回の講義内容の小テストを実施し、復習に役立てるような工夫を行った。

2 作成した教科書、教材、参考書		
(1) 生理学 II 講義資料	2012 年 4 月～現在	生理学 II の講義資料 (PowerPoint 配布資料、演習問題)
(2) 新薬論講義資料	2012 年 4 月～2014 年 8 月	新薬論の講義資料 (PowerPoint 配布資料、演習問題)
(3) 実用薬学英語 IV 講義資料	2012 年 9 月～現在	実用薬学英語 IV の講義資料 (PowerPoint 配布資料)
(4) 機能形態学講義資料	2013 年 9 月～現在	機能形態学の講義資料 (PowerPoint 配布資料、演習問題)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特筆すべき事項なし		

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	著・ 者別	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記 入)	該当頁数	備 考
【著書】 特筆すべき事項なし						
【論文】 1. Connective tissue growth factor induces cardiac hypertrophy through Akt signaling.	共著	2008年3月	Biochem Biophys Res Commun. 2008 May 30;370(2). Epub 2008 Mar 28.	Nozomi Hayata, Yasushi Fujio, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Tomohiko Iwakura, Masanori Obana, Mika Takai, Tomomi Mohri, Sinpei Nonen, Makiko Maeda, Junichi Azuma	274-278	
2. Atrogin-1 ubiquitin ligase is upregulated by doxorubicin via p38-MAP kinase in cardiac myocytes.	共著	2008年3月	Cardiovasc Res. 2008 Jul 1;79(1). Epub 2008 Mar 17.	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Yuki Hoshino, Takashi Ito, Tetsuro Nariai, Tomomi Mohri, Masanori Obana, Nozomi Hayata, Yoriko Uozumi, Makiko Maeda, Yasushi Fujio, Junichi Azuma	89-96	
3. Fibroblast growth factor 2 induces apoptosis in the early primary culture of rat cortical neurons.	共著	2010年8月	Exp Cell Res. 2010 Aug 15;316(14).	Tatsurou Yagami, Kenkichi Takase, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Keiichi Ueda, Nobuo Takasu, Noboru Okamura, Toshiyuki Sakaeda, Masafumi Fujimoto	2278-2290	

4. Proteomic identification of protein targets for 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ in neuronal plasma membrane.	共著	2011 年 3 月	PLoS One. 2011 Mar 18;6(3).	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Kenkichi Takase, Junji Kishino, Megumi Fujita, Noboru Okamura, Toshiyuki Sakaeda, Masafumi Fujimoto, Tatsuro Yagami	e17552	
5. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ enhanced the anti-tumor activity of camptothecin against renal cell carcinoma independently of topoisomerase-II and PPAR γ pathways.	共著	2011 年 7 月	Biochem Biophys Res Commun. 2011 July 8; 410(3).	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Megumi Fujita, Hiromi Koma, Motohiro Yamamori, Noboru Okamura, Tatsuro Yagami	563-567	
6. Cytotoxicity of troglitazone through PPAR γ -independent pathway and p38 MAPK pathway in renal cell carcinoma.	共著	2011 年 12 月	Cancer Lett. 2011 Dec 22; 312(2).	Megumi Fujita, Tatsuro Yagami, Miki Fujio, Chiaki Tohji, Kenkichi Takase, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Kyoko Sawada, Motohiro Yamamori, Noboru Okamura	219-227	

7. Involvement of the mevalonate pathway in anti-proliferative effect of zoledronate on renal cell carcinoma, ACHN.	共著	2012 年 5 月	Oncol Rep. 2012 May;27(5)	Megumi Fujita, Chiaki Tohji, Kyoko Sawada, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Tsutomu Nakamura, Tatsuro Yagami, Motohiro Yamamori, Noboru Okamura.	1371-1376	
8. Maternal deprivation in the middle of a stress hyporesponsive period decreases hippocampal calcineurin expression and causes abnormal social and cognitive behaviours in adult male Wistar rats: relevance to negative symptoms of schizophrenia.	共著	2012 年 6 月	Behav. Brain Res. 2012 Jun 15;232(1)	Kenkichi Takase, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Tatsuro Yagami	306-315	
9. Cytotoxicity of 15-Deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ through PPAR γ -independent Pathway and the Involvement of the JNK and Akt Pathway in Renal Cell Carcinoma.	共著	2012 年 9 月	Int. J. Med. Sci. 2012; Sep 9(7)	Megumi Fujita, Chiaki Tohji, Yoko Honda, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Tsutomu Nakamura, Tatsuro Yagami, Motohiro Yamamori, Noboru Okamura	555-566	
10. L-type voltage-dependent calcium channels as therapeutic targets for neurodegenerative diseases.	共著	2012 年 10 月	Curr Med Chem. 2012; Oct 19(28)	Tatsuro Yagami, Hiromi Kohma, <u>Yasuhiro Yamamoto</u>	4816-4827	

11. L-type voltage-dependent calcium channel is involved in the snake venom group IA secretory phospholipase A2-induced neuronal apoptosis.	共著	2013 年 3 月	Neurotoxicolgy. 2013 35C	Tatsurou Yagami, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiromi Kohma, Tsutomu Nakamura, Nobuo Takasu, Noboru Okamura	146-153	
12. Leukotriene receptor antagonists, LY293111 and ONO-1078, protect neurons from the sPLA2-IB-induced neuronal cell death independently of blocking their receptors.	共著	2013 年 9 月	Neurochem. Int. 2013 63(3)	Tatsurou Yagami, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiromi Kohma	163-171	
13. Treatment of etoposide combined with 15-deoxy- Δ 12,14-prostaglandin J2 exerted synergistic antitumor effects against renal cell carcinoma via peroxisome proliferator-activated receptor- γ -independent pathways.	共著	2014 年 3 月	Mol. Clin. Oncol. 2014 Mar;2(2)	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiromi Koma, Hiroki Hiramatsu, Misa Abe, Kazunori Murakami, Asako Ohya, Tatsurou Yagami	292-296	
14. Hydrogen peroxide mediated the neurotoxicity of an antibody against plasmalemmal neuron-specific enolase in primary cortical neurons.	共著	2015 年 7 月	Neurotoxicolgy. 2015 Jul;49	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiromi Koma, Tatsurou Yagami	86-93	
15. Localization of 14-3-3 ζ on the neuronal cell surface.	共著	2015 年 11 月	Exp. Cell Res. 2015 Nov 1;338(2)	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiromi Koma, Tatsurou Yagami	149-61	
16. 15-Deoxy- Δ 12,14-prostaglandin J2 induced neurotoxicity via	共著	2016 年 10 月	Neuropharmacology. 2016 Oct 19;113(Pt A)	Hiromi Koma, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> ,	416-425	

suppressing phosphoinositide 3-kinase.				Ayaka Nisii, Tatsurou Yagami		
17. Synergistic effects of 15-deoxy Δ 12,14-prostaglandin J2 on the anti-tumor activity of doxorubicin in renal cell carcinoma.	共著	2017年3月	Biochem. Biophys. Rep. 2017; 9	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Takehiro Yamamoto, Hiromi Koma, Ayaka Nishii, Tatsurou Yagami	61-66	
18. Anti-heat shock 70 kDa protein antibody induced neuronal cell death.	共著	2017年6月	Biol. Pharm. Bull. 2017; 40	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiromi Koma, Sayaka Nisii, Tatsurou Yagami	402-412	
19. 15-deoxy- Δ 12, 14-prostaglandin J2 enhances anticancer activities independently of VHL status in renal cell carcinomas.	共著	2019年 (予定)	Biochem. Biophys. Rep.	Hiromi Koma, Yasuhiro Yamamoto, Tomonari Fujita, Tatsurou Yagami		
【総説】						
1. Arachidonate Cascade in the Intensive Insulin Therapy for Critically Ill Patients with Sepsis: Roles of Prostaglandins on Hyperglycemia-Impaired Immunity	共著	2012年7月	Letters in Drug Design & Discovery, 2012; 9 (6)	Tatsurou Yagami, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> Hiromi Koma, Kenichi Takase	557-567	
2. L-type voltage-dependent calcium channels as therapeutic targets for neurodegenerative diseases	共著	2012年10月	Curr Med Chem. 2012 Oct 19(28)	Tatsurou Yagami, Hiromi Koma, <u>Yasuhiro Yamamoto</u>	4816-4827	
3. The Role of Secretory Phospholipase A2 in the Central Nervous System and Neurological Diseases	共著	2014年4月	Mol Neurobiol. 2014 Apr;49(2)	Tatsurou Yagami, <u>Yasuhiro Yamamoto</u>	863-76	

				Hiromi Koma		
4. Pathophysiological Roles of Cyclooxygenases and Prostaglandins in the Central Nervous System	共著	2016 年 9 月	Mol Neurobiol. 2016 Sep;53(7)	Tatsurou Yagami, Hiromi Koma, <u>Yasuhiro Yamamoto</u>	4754-71	
5. 15-deoxy- Δ 12,14-prostaglandin J2 in neurodegenerative diseases and cancers	共著	2017 年 1 月	Oncotarget 2017; 8(6)	Tatsurou Yagami, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> Hiromi Koma	9007-9008	
6. Physiological and pathological roles of 15-deoxy- Δ 12,14-prostaglandin J2 in the central nervous system and neurological diseases	共著	2018 年 3 月	Mol Neurobiol. 2018 Mar;55(3)	Tatsurou Yagami, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> Hiromi Koma	2227-2248	
【翻訳】						
1. ラットの行動解析ハンドブック	共著	2015 年 10 月	西村書店	高瀬堅吉, 柳井修一, 山口哲生 監訳	79-87	

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2002 年 10 月～現在	日本薬理学会会員
2012 年 2 月～現在	日本薬学会会員
2012 年 7 月 15、16 日	第 61 回 認定実務実習指導薬剤師のためのワークショップ（薬学教育者ワークショップ）in 近畿においてタスクフォースを務める
2013 年 7 月 14、15 日	第 67 回 認定実務実習指導薬剤師のためのワークショップ（薬学教育者ワークショップ）in 近畿においてタスクフォースを務める
2016 年 4 月 21 日	西播姫路医療セミナーにおいて講師を務める
2016 年 11 月 23 日	第 5 回姫路獨協大学薬学部卒後教育セミナーにおいて講師を務める
2017 年 8 月 27 日	兵庫県薬剤師会・病院薬剤師会連携 1 周年記念大会において講師を務める

V 学内における主な活動

2011 年 9 月～現在	薬学共用試験 CBT 委員
---------------	---------------

所属	薬学部 医療薬学科	職名	准教授	氏名	山中 理央	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	-----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
1. 学生へのわかりやすい講義概要の作成とパワーポイントの援用	2007 年 9 月～現在	指定教科書の内容を凝縮し、さらに教科書にはない内容を細くした講義用資料をパワーポイントによって作成し、レジメとして学生に配布して授業を進行している。整理されたパワーポイントとレジメにより授業の内容を明確に提示することができ、学生が授業の流れをフォローしやすいように工夫している。
2. 学生の理解度のチェック	2007 年 9 月～現在	学生の理解度を高める目的で、適宜小テストを行ったり、レポート課題を課している。レポートに関しては、課題についてだけでなく、講義全体の内容で理解できなかった点を質問として記させ、学生の理解度の把握に努め、授業の進行速度や方法の改善に役立てている。また、質問にはできるだけ丁寧な解説をつけて答え、インターラクティブになるようにしている。
3. グループ制による学習の意欲向上と効率化	2009 年 4 月～現在	効果的な授業スタイルは、科目によって多少異なると思われる。薬学英語の講義においては、実用面を考え、知識を与えるだけの授業にならないように、学生に積極的に発表や作業をさせるように仕向けている。そのために、学生同士のグループワークを取り入れ、ある課題に対してディスカッションをさせ、答えを導かせるようにしている。学生の講義への参加意欲を高める意味でも効果的な方法であると思われる。
4. 「学生による授業評価アンケート」の活用	2008 年 4 月～現在	学生の講義に関する意見を参考に、次年度以降の授業内容、方法の改善に役立てている。
5. 中間テストの実施	2010 年 11 月～現在	全講義日程の中間で、一度まとめを行うことにより理解度を高めることを目的として実施している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
1. 基礎化学講義プリント	2008 年 4 月～現在	専門職の養成学部であることを意識し、薬学コアカリキュラムに合わせるために、指定教科書の内容を凝縮し、さらに教科書にはない内容を細くした講義用資料をパワーポイントによって作成し、レジメとして学生に配布している。
2. 有機合成化学（有機化学Ⅲ）講義プリント	2009 年 9 月～現在	専門職の養成学部であることを意識し、薬学コアカリキュラムに合わせるために、指定教科書の内容を凝縮し、さらに教科書にはない内容を細くした講義用資料をパワーポイントによって作成し、レジメとして学生に配布している。
3. PBL 用有機化合物の構造決定(MS 及び IR)プリント	2009 年 10 月～現在	問題解決型授業(Problem-based learning)用として、その課題を解くのに必要となる基礎知識について解説したプリントを作成し、事前講義の資料として用いている。
4. 有機化学実習書	2009 年 4 月	有機化学実習の際に用いる手引として、実験の操作手順の詳細を記した実習書を作成した。
5. 応用演習Ⅰ（有機化学）講義プリント	2015 年 9 月～現在	三年生に対して行っている応用演習Ⅰの問題演習用プリントを作成し、講義のレジメとして配布している。
6. 総合演習Ⅱ（有機化学）講義プリント	2015 年 4 月～現在	六年生に対して行っている総合演習Ⅱのプリントを作成し、講義のレジメとして配布している。
7. 有機化学Ⅲ練習問題プリント①	2015 年 9 月	有機化学Ⅲの講義の問題演習用に作成し、配布している。（講義の

		前半用)
8. 有機化学Ⅲ練習問題プリント②	2015 年 11 月	有機化学Ⅲの講義の問題演習用に作成し、配布している。(講義の後半用)
9. 有機化学Ⅲ補充問題プリント①	2015 年 9 月	有機化学Ⅲの講義の自習用に問題演習プリントを作成し、配布している。(講義の前半用)
10. 有機化学Ⅲ補充問題プリント②	2015 年 11 月	有機化学Ⅲの講義の自習用に問題演習プリントを作成し、配布している。(講義の後半用)
11. 総合演習Ⅱ (有機化学) 基礎有機化学補充問題プリント	2016 年 4 月	六年生に対して行っている総合演習Ⅱにおいて、有機化学の基礎事項(共鳴、混成軌道、反応機構)の復習用の問題演習プリントを作成し、配布している。
12. 応用演習Ⅲ (有機化学) 講義プリント	2018 年 9 月	4 年生に対して行っている応用演習Ⅲの問題演習用プリントを作成し、講義のレジメとして配布している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特筆すべき事項なし		

Ⅱ 研究活動

論文 (共著)
Nucleotide sequence context influences HIV replication fidelity by modulating reverse transcriptase binding and product release <u>Rio Yamanaka</u> and John Termini, <i>Bioscience Trends</i> , 1, 52-61(2007)
Asymmetric Reduction of Ketones with a Germinated Plant Matsuo, K.; Kawabe, S.; Tokuda, Y.; Eguchi, T.; <u>Yamanaka, R.</u> ; Nakamura, K. <i>Tetrahedron: Asymm.</i> 19, 157-159(2008)
Recent progress in biocatalysis for asymmetric oxidation and reduction Tomoko Matsuda, <u>Rio Yamanaka</u> , and Kaoru Nakamura, <i>Tetrahedron: Asymm.</i> 20 (5), p.513-557 (2009)
Mutagenic potential of DNA glycation: miscoding by (<i>R</i>)- and (<i>S</i>)-N ² -(1-carboxyethyl)-2'-deoxyguanosine., Wuensche GE, Tamae D, Cercillieux A, <u>Yamanaka R</u> , Yu C, Termini J. <i>Biochemistry</i> , 49(9):1814-21 (2010)
Reduction of exogenous ketones depends upon NADPH generated photosynthetically in cells of the cyanobacterium <i>Synechococcus</i> PCC 7942. <u>Yamanaka R</u> , Nakamura K and Murakami A <i>AMB Express</i> , 1:24(8 pages) (2011)
Photobiocatalyzed asymmetric reduction of ketones using <i>Chlorella</i> sp. MK201. Itoh K, Nakamura K, Aoyama T, Matuba R, Kakimoto T, Murakami M, <u>Yamanaka R</u> , Muranaka T, Sakamaki H, Takido T. <i>Biotechnol Lett.</i> 34:2083-2086 (2012)
Selective synthesis of cinnamyl alcohol by cyanobacterial photobiocatalysts, <u>Yamanaka R</u> , Nakamura K, Murakami M, Murakami A, <i>Tetrahedron Lett.</i> 56, 1089-1091 (2015)
著書 (共著)
Stereoselective Synthesis of Drugs and Natural Products

Andrushko, V, Andrushko, N (eds) Wiley-Blackwell

Biocatalytic Asymmetric Reduction of C=O and Activated C=C Bonds in Stereoselective Synthesis

Matsuda T, Yamanaka R, Nakamura K

(2013)

Chapter 11. Enzymatic Asymmetric Reduction of Carbonyl Compounds

Tomoko Matsuda, Rio Yamanaka, Kaoru Nakamura

In Green Biocatalysis, Ed. R. N. Patel, Wiley & Sons, p 307-330 (2016)

Chapter 3. Photobiocatalysis

Rio Yamanaka and Kaoru Nakamura

In Future Directions in Biocatalysis, Ed. T Matsuda, p 69-81 (2017)

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2004年4月～現在	アメリカ化学会会員
2008年6月～現在	有機合成化学協会会員
2009年2月	有機合成化学協会 研究企画賞（住友化学）受賞
2015年1月～現在	日本農芸化学会会員
2018年12月～現在	姫路市自然保護審議会委員

Ⅴ 学内における主な活動

2007年4月～2010年3月	全学自己点検評価委員会委員
2007年4月～2010年3月	全学FD委員会委員
2008年6月	トライアルウィーク（植物を利用した化学実習・カメレオンボール） 広嶺中学
2008年12月～2010年3月	全学リメディアル委員会委員
2008年12月	出前講義（右と左の化学） 兵庫県立生野高校
2010年4月～2014年3月	薬学部CBT委員
2010年4月～2018年3月	生命倫理委員会委員
2011年10月～	企画委員
2012年4月～2016年3月	セクシュアル・ハラスメント人権委員会委員
2014年4月～2015年3月	卒試委員
2017年4月～現在	共通機器管理委員
2017年4月～現在	入試出題委員（化学）
2017年7月	オープンキャンパス体験実習（植物を利用した化学実習・カメレオンボール）

所属	薬学部 医療薬学科	職 名	准教授	氏名	木下 淳	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	--------	-----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
1. 実務実習事前学習の指導	2010 年 4 月～現在	「実務実習事前特別講義」、「薬剤管理指導学」、「処方解析学」、「模擬薬局実習」を担当。「模擬薬局実習」では、導入講義のほか、調剤、監査、無菌操作、リスクマネジメント、処方解析、病態に応じた薬物治療、放射性医薬品の取り扱い、NST 演習などを担当している。
2. 薬学部 6 年次「処方解析統合演習」でがん化学療法を系統的に学ぶ演習	2012 年 4 月～現在	「処方解析統合演習（1 単位、担当 90 分 12 コマ）」で、がん化学療法の位置づけ、代表的なレジメンと施行上の注意点などを系統的に学ぶ演習を実施。
3. 薬学部 6 年次「薬物副作用論」に被害被害者の声を聴く授業を導入	2012 年 4 月～現在	「薬物副作用論（2 単位、担当 90 分 15 コマ）」のなかで全国薬害被害者団体連絡協議会のご協力により、担当科目である「薬物副作用論」の講師として薬害被害者の方を招聘し、薬害被害者の声を聞く授業を実施している。
4. 薬学部 4 年次「薬学総合演習Ⅱ」および「模擬薬局実習」にてジグソー法を用いた演習を導入	2016 年 4 月～現在	「薬学総合演習Ⅱ（1 単位、担当 90 分 3-6 コマ）」および「模擬薬局実習」において、物理薬剤、薬物動態、臨床薬学の統合型演習として、ジグソー法を用いた演習を実施。本授業に関して、第 2 回日本薬学教育学会で発表済み。
5. 薬学部 4 年次「薬学応用演習Ⅲ」で情報リテラシーに関する演習を担当	2016 年 4 月～現在	「薬学応用演習Ⅲ（1 単位、担当 90 分 2 コマ）」インターネットリサーチをする際に注意する点を説明したのち、臨床上の問題点を解決するために、インターネットを活用して適切な情報を収集し、得られた情報を批判的に吟味する方法に関する演習を実施。
6. 薬学部 1 年次「実感する化学」で学習成果基盤型教育（OBE）を意識したカリキュラムの立案と実施	2017 年 4 月～現在	化学リメディアル教育の主たる科目である「実感する化学（2 単位、担当 90 分 23 コマ）」を基礎系教員とともに担当し、OBE に沿ったカリキュラムを立案した。また、基礎系と臨床系の教員が協働しながら授業を進める方略とし、授業の約半数を演習とし、SGD を主体としたアクティブラーニングを積極的に導入した。本授業に関しては、第 67 回日本薬学会近畿支部大会で発表済み。
7. 薬学部 4 年次「処方解析学」でチーム基盤型学習（TBL）を導入	2017 年 4 月～現在	「処方解析学（1 単位、担当 90 分 8 コマ）」のなかで講義した内容に関する知識の確認と定着を目的として TBL を実施している。
8. 平成 25 年改訂薬学教育モデルコアカリキュラムに対応した臨床準備教育の評価計画および方略の作成と実施	2018 年 4 月～現在	平成 25 年改訂薬学教育モデルコアカリキュラムに対応した臨床準備教育の評価計画および方略を作成し、実施している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
1. 医療薬学第 5 版（廣川書店）	2009 年 3 月	調剤、医薬品管理、製剤等の薬剤業務とともに、薬物療法に薬剤師

2. 姫路獨協大学実務実習事前学習実習書	2010 年 4 月	として貢献するために必要となる知識、技能、態度についてコンパクトに解説した医療薬学の教科書である。(担当執筆部分) 第 9 章 服薬指導 p. 249-307
3. 医薬品情報学—基礎から臨床へ—	2012 年 5 月	姫路獨協大学における実務実習事前学習に使用する実習書を作成した。
4. 図解 医薬品情報学 第 3 版	2014 年 1 月	本書は、薬学生が医薬品情報の重要性を理解し必要な知識を得て、臨床の場でどのように応用するかに重点を置いた書籍である。(担当執筆部分) II 応用編 6 薬物治療の個別化に関する情報 p. 191-211
5. 医療薬学第 6 版	2014 年 3 月	本書は、医薬品情報に関わる基礎的な要素を身につけるため、様々な角度から医薬品情報を分かりやすく解説。薬学生や医薬関連従事者のテキストである。(担当執筆部分) 1 章 4 患者の遺伝子情報と医薬品情報 p. 172-179
		調剤、医薬品管理、製剤等の薬剤業務とともに、薬物療法に薬剤師として貢献するために必要となる知識、技能、態度についてコンパクトに解説した医療薬学の教科書である。第 5 版発行時との法改正や新制度、新医薬品に対応したものである。(担当執筆部分) 第 9 章服薬指導 p. 253-311
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
1. 認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ(薬学教育者ワークショップ) in 近畿におけるタスクフォース	2008 年 11 月～現在	薬剤師のためのワークショップ in 近畿(厚生労働省による認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ)のタスクフォースを務めている。第 22 回以降、11 回のワークショップにタスクフォースとして参加。
2. 指導薬剤師のためのアドバンスワークショップにおけるタスクフォース	2012 年 8 月	指導薬剤師のためのアドバンスワークショップのタスクフォースを務めている。第 1 回以降、8 回のワークショップにタスクフォースとして参加。
3. 平成 25 年度兵庫県高等学校教育研究会科学部会研究発表大会及び講演会 招待講演	2013 年 12 月	「薬学教育モデル・コアカリキュラムを通じて考える参加型授業～薬学生および高校生への導入事例を中心に～」というテーマで、高校生、大学生を対象とした取り組みを紹介した。
4 その他教育活動上特記すべき事項		
1. 独立行政法人科学技術振興機構 地域科学技術理解増進活動推進事業 「ねずみ・犬・人の境界線はどこ？～遺伝子を調べてみよう～」	2008 年 8 月 4 日	科学技術独立行政法人科学技術振興機構 地域科学技術理解増進活動推進事業 に採択された「ねずみ・犬・人の境界線はどこ？～遺伝子を調べてみよう～」を高校生に対して実施した。参加した高校生が、講義および実習を通じて、遺伝子のレベルから動物間の種の違いを観察し、現代社会における遺伝子工学の技術進歩と生物の多様性について学ぶことを目的とし、終了後のアンケートでも参加者から高い評価が得られた。
2. 独立行政法人日本学術振興会 ひらめきときめきサイエンス ようこそ大学の研究室へ KAKENHI 「GFP の「スゴさ」を体験～緑に光るクラゲのタンパク質を使って実験！」を高校生対象として実施した。	2011 年 8 月～2015 年 8 月	独立行政法人日本学術振興会ひらめきときめきサイエンス ようこそ大学の研究室へ KAKENHI に採択された「GFP の「スゴさ」を体験～緑に光るクラゲのタンパク質を使って実験！」を高校生対象として実施した。2011 年度より 5 回開催。

のタンパク質を使って実験！」実施代表者		
---------------------	--	--

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	著者・共著者	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ 記入)	該当頁数	備 考
【著書】						
1. 医療薬学第5版	共著	2009年3月	廣川書店	乾賢一、奥村勝彦 編、木下淳他著	251-307	
2. 医薬品情報学—基礎から臨床へ—	共著	2012年4月	廣川書店	岡野善郎、京谷庄 二郎編集、木下 淳他著	191-211	
3. みてわかる薬学 図解 医薬品情報学 改訂3版	共著	2014年1月	南山堂	折井孝夫編、木下 淳他著	172-179	
4. 医療薬学 第6版	共著	2014年3月	廣川書店	堀了平、乾賢一、 奥村勝彦監修、木 下淳他著	253-311	
【論文】						
1. 医薬品・医療用具等安全性情報における「重要な副作用等に関する情報」の解析	共著	2006年5月	医薬品情報学 第8巻第1号	◎駒田富佐夫、浅 川美恵子、小澤万 里子、木下淳、齋 藤侑也	20-24	
2. Regulation of exogenous gene expression by superoxide	共著	2006年11月	Pharm. Res. Vol. 23, No. 11	◎A. Kinoshita, D. Kobayashi, Y. Saitoh, N. Tanabe, K. Uchino, K. Nishiguchi, K. Okumura, F. Komada	2536-2541	
3. 「医薬情報担当者(MR)に関するアンケート調査」報告Ⅱ—MRとの面談について—	共著	2007年8月	医薬品情報学 第9巻第2号	◎駒田富佐夫、 木下淳、平林敏 彦、小久保光昭	137-149	
4. 「医薬情報担当者(MR)に関するアンケート調査」報告Ⅲ—好ましいMRについて—	共著	2007年11月	医薬品情報学 第9巻第3号	◎駒田富佐夫、 木下淳、平林敏 彦、小久保光昭	190-197	
5. 「医薬情報担当者(MR)に関するアンケート調査」報告Ⅳ—医薬品情報の提供について—	共著	2008年5月	医薬品情報学 第10巻第1号	◎駒田富佐夫、 木下淳、平林敏 彦、小久保光昭	29-39	
6. 薬剤師の病棟常駐による医療の質的向上への貢献	共著	2008年5月	医療薬学 第34巻第5号	◎郡妙恵、内海 麻希子、木下淳、 篠原徹、並木路	426-432	

				広，篠塚隆一， 大谷道輝，山村 喜一，伊藤敬， 内野克喜		
7. 駒田富佐夫，木下淳，平林敏彦，小久保光昭. 「医薬情報担当者（MR）に関するアンケート調査」報告Ⅴ－女性MRおよびMR認定証の提示について－	共著	2008年9月	医薬品情報学 第10巻 第2号	◎駒田富佐夫， 木下淳，平林敏彦，小久保光昭	153-161	
8. Regulation of CMV promoter driven exogenous gene expression with doxorubicin in genetically modified cells	共著	2008年12月	J. Pharm. Pharmacol. Vol. 60, No. 12	◎A. Kinoshita, D. Kobayashi, Y. Hibino, T. Isago, K. Uchino, K. Yagi, M. Hirai, Y. Saitoh, F. Komada	1659-1665	
9. Effects of anticancer agents and scavengers for CMV promoter driven exogenous gene expression in genetically modified cells	共著	2009年4月	J. Pharm. Pharmacol. Vol. 61, No. 4	◎A. Kinoshita, D. Kobayashi, Y. Saitoh, F. Komada	527-531	
10. 姫路獨協大学薬学部における早期体験学習前後の学生アンケート調査	共著	2009年3月	医薬品情報学 第10巻 第4号	◎清原義史、大西憲明、角山圭一、木下淳、中村隆典、宮本和英、矢上達郎、通山由美、駒田富佐夫、奥村勝彦	273-279	
11. 禁煙治療における患者背景と治療成績との関連性に関する調査研究	共著	2010年10月	医薬品情報学 第11巻 第3号	◎堀江弘子、中村隆典、黒木茂高、小野尚文、江口尚久、木下淳、本多義昭、駒田富佐夫	180-188	
12. 三次元微細構造担体を用いた高密度細胞培養	共著	2010年7月	エレクトロニクス実装学会誌 第13巻 第4号	◎木下淳、大向智也、駒田富佐夫、内海裕一	200-203	

13. 5 マイクロ構造体を用いた高密度3次元細胞培養法の提案	共著	2010 年 10 月	電気学会論文誌 C Vol. 130-C	◎大向智也、木下淳、駒田富佐夫、内海裕一	1789-1794	
14. Effects of anti-malarial drugs on the electrocardiographic QT interval modelled in the isolated perfused guinea pig heart system	共著	2010 年 11 月	Malaria J. Vo.9	◎A. Kinoshita, H. Yamada, H. Kotaki and M. Kimura	318	
15. ニコチン依存症のスクリーニングテスト (TDS スコア値) は、禁煙の行動ステージ (禁煙への意気込み) に影響を受ける	共著	2010 年 3 月	日本未病システム学会雑誌 第16 卷	◎堀江弘子、岡田倫明、江口有一郎、水田敏彦、岩本英里、古賀さやか、田代貴也、富永智香子、黒木茂高、小野尚文、江口尚久、中村隆典、木下淳、本多義昭、藤本一眞、岩切龍一、小野俊三、駒田富佐夫	374-376	
16. 肝炎ウイルス検査を希望しない人の生活習慣の特徴とは？—特定健診の標準的質問票からの予測	共著	2012 年 2 月	日本未病システム学会雑誌 第18 卷	◎堀江弘子、江口有一郎、水田敏彦、桑代卓也、岩本英里、古賀さやか、田代貴也、富永智香子、黒木茂高、小野尚文、江口尚久、中村隆典、木下淳、本多義昭、天野学、駒田富佐夫、藤本一眞	98-101	
17. 医薬品情報学掲載論文からみた医薬品情報学に関する研究動向の解析	共著	2012 年 5 月	医薬品情報学 第14 卷 第1 号	◎駒田富佐夫、中山優子、木下淳	26-34	
18. 肝炎ウイルス検査受診率向上には医療者による個別の意義の説明が有効である	共著	2012 年 10 月	肝臓 第53 卷第10 号	◎堀江弘子、江口有一郎、中村隆典、水田敏彦、桑代卓也、岩本	591-601	

19. 「副作用が疑われる症例報告に関する情報」による間質性肺疾患、肝機能異常、肝障害、アナフィラキシー反応、好中球数減少および好中球減少症の解析 20. 「副作用が疑われる症例報告に関する情報」による有害事象の転帰、発現時期、被疑薬の解析	共著 共著	2013 年 3 月 2013 年 11 月	医薬品相互作用研究第 37 巻第 1 号 医薬品相互作用研究第 37 巻第 2 号	英里，古賀さやか，田代貴也，富永智香子，黒木茂高，小野尚文，木下淳，本多義昭，駒田富佐夫，尾崎岩太，安西慶三，藤本一眞，江口尚久 ◎駒田富佐夫、木下淳 ◎駒田富佐夫、木下淳	17-26 7-15	
【その他】 (特許) 1. マイクロ空間構造体を用いた高密度三次元細胞培養法、特開 2011-172533 (競争的研究資金等) 1. (財) 新産業創造研究機構 兵庫県産学官ビジネスインキュベーター事業 「微細構造工学を応用した人工臓器の開発に関する研究」 参加者 2. 文部科学省 科学研究費補助金 若手研究 B 「導入遺伝子の発現制御による抗癌剤の副作用軽減に関する研究」 研究代表者 3. 平成 20 年度兵庫県 COE プログラム推進事業「マイクロ空間を用いた超高密度細胞培養リアクタの研究開発」 プロジェクトメンバー 4. 平成 20 年度独立行政法人科学技術振興機構 地域科学技術理解増進活動推進事業 「ねずみ・犬・人の境界線はどこ？～遺伝子を調べてみよう～」 5. 姫路獨協大学特別研究助成 「CMV プロモーター駆動性遺伝子の発現制御過程における転写制御因子の機能解析」 研究	共同 共同 単独 共同 共同 共同	2007 年 2008 年～2010 年 2008 年～2009 年 2008 年 2011 年		発明者 駒田富佐夫、内海裕一、木下淳、大向智也、米澤健、本多祐二		

代表者						
6. 姫路市産学協同研究助成「血液分析用簡易型多波長解析技術の確立」 分担研究者	共同	2011 年				
7. 日本学術振興会 ひらめきときめきサイエンスようこそ大学の研究室へ KAKENHI 「GFP の「スゴさ」を体験～緑に光るクラゲのたんぱく質を使って実験！～」 実施代表者	共同	2011 年～2015 年				
8. (公財) ひょうご科学技術協会 技術高度化研究開発支援助成事業「簡易型糖尿病診断用装置の開発」 分担研究者	共同	2012 年				
9. 日本学術振興会科学研究費 (基盤研究 C)「エピジェネティック解析情報に基づいた新規抗癌剤耐性克服法の確立」 分担研究者	共同	2014 年～2016 年				
10. 姫路獨協大学特別研究助成 「外国人観光客に対する「初期医療体制整備」構築に向けて」 分担研究者	共同	2016 年～2018 年				
11. 姫路市大学発まちづくり研究助成事業「外国人観光客と日本人医療従事者を双方向に接続するコミュニケーションツールの研究開発」 研究代表者	共同	2016 年				
12. 日本学術振興会科学研究費 (挑戦的研究 (萌芽))「外国人旅行者の薬局・ドラッグストアにおける医療トリアージサポートツールの開発」 研究代表者	共同	2016 年～				
(解説) 1. 添付文書だけではわからない薬の情報 No. 14 「オメプラール®」	単著	2006 年 10 月	薬局 第 59 巻第 1 号		127-134	
(招待講演) 1. 分子生物学から見たナノテクノロジーへの期待—遺伝子発現の on/off を利用した遺伝子治療の最適化 (エレクトロニクス実装学会第 1 回ナノバイオデバイス実装技術研究会、神戸)		2007 年 10 月				
2. 導入遺伝子の発現制御による遺伝子治療の最適化 (電気学会第 1 回量子ビームによるナノバイオエレクトロニクス技術調査専門委員会、神戸)		2008 年 8 月				
3. 平成 25 年度兵庫県高等学校教育研究会科学部会研究発		2013 年				

表大会及び講演会						
----------	--	--	--	--	--	--

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2000年2月	日本薬学会 会員（現在に至る）
2001年3月	日本医療薬学会 会員（現在に至る）
2001年4月	日本病院薬剤師会 会員（現在に至る）
2007年4月	日本医薬品情報学会 会員（現在に至る）
2009年4月	兵庫県病院薬剤師会西播支部 編集委員（現在に至る）
2011年4月	日本私立薬科大学協会 薬剤師国家試験問題検討委員会実務部会 委員（現在に至る）
2012年4月	薬学教育協議会 ヒューマニティ・コミュニケーション教科担当教員会議（2014年3月まで）
2014年4月	薬学教育協議会 実務実習教科担当教員会議（現在に至る）
2014年4月	日本薬学会近畿支部 「一日在宅体験プログラム」 ワーキンググループメンバー（現在に至る）
2014年5月	日本薬剤師会 会員（現在に至る）
2015年4月	薬学教育協議会医薬品情報学教科担当教員会議（現在に至る）
2015年4月	電気学会 量子ビームを用いた高次ナノ階層構造創成とバイオメディカル応用技術調査専門委員会委員（2017年3月まで）
2015年4月	兵庫県立明石北高等学校に係るスーパーサイエンスハイスクール運営指導委員会運営指導委員（現在に至る）
2015年4月	兵庫県立星陵高等学校、科学技術振興機構「中高生の科学研究実践活動推進プログラム」科学研究実践活動の指導（現在に至る）
2016年7月	日本学術振興会 ひらめき☆ときめきサイエンス推進賞 受賞
2016年12月	日本薬学教育学会 会員 機関会員連絡員（現在に至る）
2018年2月	薬学教育協議会 病院・薬局実務実習近畿地区調整機構 臨床準備教育の評価策定に関する協議会 タスクフォース
2018年2月	兵庫県薬剤師会 「訪問薬剤管理指導のための研修及び実施薬局の周知」担当会議オブザーバー

Ⅴ 学内における主な活動

2007年4月～現在	薬学部 OSCE 実施委員 2015年より同委員会委員長（現在に至る）
2007年8月	ひらめきときめきサイエンスようこそ大学の研究室へ KAKENHI「細胞のコミュニケーションと遺伝子宅配便」 実施分担者
2008年8月	平成 20 年度独立行政法人科学技術振興機構 地域科学技術理解増進活動推進事業「ねずみ・犬・人の境界線はどこ？～遺伝子を調べてみよう～」 実施分担者

2011 年～2015 年	日本学術振興会 ひらめきときめきサイエンスようこそ大学の研究室へ KAKENHI 「GFP の「スゴさ」を体験～緑に光るクラゲのたんぱく質を使って実験！～」実施代 表者
2016 年 4 月	薬学部 指導薬剤師養成のためのワークショップ委員（現在まで）
2017 年 4 月	学生委員（現在に至る）
2017 年 4 月	奨学生選考委員（現在に至る）
2017 年 4 月	学友会特別代表（現在に至る）
2018 年 4 月	薬学部広報委員（現在に至る）
2017 年 9 月	薬学部 FD 委員（現在に至る）

所属	薬学部 医療薬学科	職名	講師	氏名	酒井伸也	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
1. 学生へのわかりやすい講義（身体の科学および分子生物学の授業について）	2013 年 4 月～現在	各講義は指定教科書に沿って行うが、全てを網羅するのではなくテーマごとに要点を絞って講義内容が学生に理解しやすいように授業を行っている。講義はパワーポイント資料を用いて実施し、内容の理解と記憶の定着のため、各単元のまとめプリント（穴埋め式のワークノート）を作成し配布している。講義内容に沿った演習を取り入れて、学生の関心・理解度を高めるように工夫している。
2. 小テスト・課題レポートによる学生の講義内容の理解度把握	2013 年 4 月～現在	講義済みの内容については、復習テストとして各単元の講義内容についての小テストを行っている。また、重要な概念や術語については課題レポートにより知識の定着を促すようにした。このように学生の学力評価を適宜おこなう事により、学習効率の向上を図るとともに学生の理解度を把握し迅速に講義内容・方法にフィードバック出来るように工夫している。
3. 「学生による授業評価」の活用	2013 年 4 月～現在	毎学期の後半に行われる授業評価アンケートの結果に基づいて授業が適切に行われているかどうかの判断を行い、全学生が授業を理解し学習効果を向上させるべく、次学期以降の講義内容・方法の改善に役立てている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
1. 身体の科学および分子生物学の授業の補助教材作成（ワークノート、小テスト）	2013 年 4 月～現在	講義内容の理解と記憶の定着のため、各講義では授業のまとめプリント（穴埋め式のワークノート）を作成し配布している。また、講義済みの内容の復習として小テストを適宜行っている。
2. 分子生物学実習書	2013 年 4 月～現在	実験内容の立案、計画および予備実験による条件検討を行うとともに、実習書や配布資料などの教材を作成し配付している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特筆すべき事項なし		

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数	備考
論文						
VEGF-C/Flt-4 axis in tumor cells contributes to the progression of oral squamous cell carcinoma via upregulating VEGF-C itself and contactin-1 in an autocrine manner.	共著	2018	Am J Cancer Res.	Shigetomi S, Imanishi Y, Shibata K, Sakai N, Sakamoto K, Fujii R, Habu N, Otsuka K, Sato Y, Watanabe Y, Shimoda M, Kameyama K, Ozawa H, Tomita T, Ogawa K.	8:2046-63.	
Lipopolysaccharide-induced inflammation or unilateral ureteral obstruction yielded multiple types of glycosylated Lipocalin 2.	共著	2016	J Inflamm (Lond).	Fujiwara Y, Tsuchiya H, Sakai N, Shibata K, Fujimura A, Koshimizu TA.	3:7.	

Identification of protein arginine N-methyltransferase 5 (PRMT5) as a novel interacting protein with the tumor suppressor protein RASSF1A.	共著	2015	Biochem Biophys Res Commun.	Sakai N, Saito Y, Fujiwara Y, Shiraki T, Imanishi Y, Koshimizu TA, Shibata K.	467:778-84.	
Subcellular localization and internalization of the vasopressin V1B receptor.	共著	2015	Eur J Pharmacol.	Kashiwazaki A, Fujiwara Y, Tsuchiya H, Sakai N, Shibata K, Koshimizu TA.	765:291-9.	
Pharmacological lineage analysis revealed the binding affinity of broad-spectrum substance P antagonists to receptors for gonadotropin-releasing peptide.	共著	2015	Eur J Pharmacol.	Arai K, Kashiwazaki A, Fujiwara Y, Tsuchiya H, Sakai N, Shibata K, Koshimizu TA.	749: 98-106.	
Restoration of E-cadherin expression by selective Cox-2 inhibition and the clinical relevance of the epithelial-to-mesenchymal transition in head and neck squamous cell carcinoma.	共著	2014,	J Exp Clin Cancer Res.	Fujii R, Imanishi Y, Shibata K, Sakai N, Sakamoto K, Shigetomi S, Habu N, Otsuka K, Sato Y, Watanabe Y, Ozawa H, Tomita T, Kameyama K, Fujii M, Ogawa K.	33:e40.	

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2011 年 11 月～現在	米国生化学分子生物学会会員
2012 年 10 月～現在	日本分子生物学会会員
2012 年 11 月～現在	日本薬理学会会員

Ⅴ 学内における主な活動

2013 年 4 月～2017 年 3 月	入試問題作成教科委員（化学）
2014 年 4 月～2016 年 3 月	生命倫理委員会委員
2014 年 4 月～2017 年 3 月	駅前サテライト運営委員会委員
2014 年 4 月～2017 年 3 月	動物実験施設管理運営委員
2014 年 4 月～現在	バトミントン部部长

所属	薬 学 部 医療薬学科	職名	講師	氏名	田畑 裕幸	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	----------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
①口頭試問による生化学領域の学力向上への工夫	2014年9月～現在	生化学の基礎的な問題から成る「生化学Ⅱ復習レポート」を2年次学生に提示し、学生が作成したレポートについて、学生自身が本当に理解できているか、口頭試問により個別に確認した。問題の解答は敢えて示さずに参考書で学生自身に調べさせた。不合格者には学習期間を与え、再度口頭試問を行った。教員による口頭試問までに学生同士で班分けを行い、練習会を開催するように促し、互いに基礎学力の向上および確認を行う機会とした。
②小テスト実施による生物系領域の学力向上への工夫	2014年9月～現在	生化学Ⅱ（2014年9月～）では毎回の講義で、身体の科学Ⅰ（2017年4月）では4～5コマ毎に小テストを実施した。小テストの実施により、学生の自主学習への取り組みを促した。また、小テストの結果は、講義内容への理解度を把握するために活用した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
①生化学Ⅱ講義資料の作成	2014年9月	生化学Ⅱの講義で使用するパワーポイント資料を作成した。教科書の理解が困難な学生が自主学習に取り組めるように、イラストやブランク（穴埋め）および暗記用の表を盛り込んだ。
②生化学Ⅱ演習問題の作成	2014年9月	生化学Ⅱの講義に関連する合計48問の演習問題を作成し、各回の講義に対応する演習問題を分割して学生に配布した。
③身体の科学Ⅰ講義資料の作成	2017年4月	身体の科学Ⅰの講義で使用するパワーポイント資料を作成した。教科書の理解が困難な学生が自主学習に取り組めるように、イラストやブランク（穴埋め）および暗記用の表を盛り込んだ。
④身体の科学Ⅰ演習問題の作成	2017年4月	身体の科学Ⅰの講義に関連する合計60問の演習問題を作成し、各回の講義に対応する演習問題を分割して学生に配布した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
【著書】						
【論文】 KIF20A, highly expressed in immature hematopoietic cells, supports the growth of HL60 cell line.	共著	2018年11月	International Journal of Hematology Vol. 108 (6) pp. 607-614 doi:10.1007/s12185-018-2527-y	森田寛之, 松岡亮仁, 木田潤一郎, 田畑裕幸, 通山薫, 通山由美		
【その他】 [学会発表] マウス低分子量GTPase Rab7の初期胚発生における機能解析	共同	2013年10月	第63回日本薬学会近畿支部総会・大会 (同志社女子大学)	◎川村暢幸, 森田梨紗, 殿村真優, 田畑裕幸, 和田洋, 和田(孫)戈虹		
プロトンポンプV-ATPase G2アイソフォーム遺伝子欠損マウスの作製とその表現型	共同	2013年10月	第63回日本薬学会近畿支部総会・大会 (同志社女子大学)	◎信貴美里, 寺井唯, 竹内美智, 川村暢幸, 田畑裕幸, 和田洋, 和田(孫)戈虹		
Kinesin family member 20A (KIF20A)の多核化と細胞分裂への関与	共同	2015年12月	第88回日本生化学会大会 (神戸国際会議場)	◎森田寛之, 福井彩乃, 小山可奈子, 有馬太陽, 田畑裕幸, 通山由美		
Kinesin family member 20A (KIF20A)のHL60における細胞機能の検討	共同	2016年9月	第89回日本生化学会大会 (仙台国際センター)	◎森田寛之, 有馬太陽, 佐々木彪曜, 松本隆太郎, 田畑裕幸, 通山由美		
白血球細胞株, HL60におけるKIF20A (Kinesin family member 20A)の機能の解析	共同	2016年10月	第66回日本薬学会近畿支部総会・大会 (大阪薬科大学)	◎有馬太陽, 森田寛之, 松本隆太郎, 田畑裕幸, 通山由美		
SMN (Survival motor neuron protein)のヒト神経芽線維腫細胞における機能の解析	共同	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会 (兵庫医療大学)	◎千崎 智暁, 森田寛之, 森田寛之, 田畑裕幸, 西尾久英, 通山由美		
好中球のNeutrophil Extracellular Traps (NETs)形成機構に関わる新規シグナル分子の解析	共同	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会 (兵庫医療大学)	◎千杉谷朋美, 森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美		

チロシンキナーゼ Syk による ファゴソームの酸性化と殺 菌能の調節	共 同	2017 年 12 月	第 90 回日本生化学会大会（神戸 ポートアイランド）	◎田畑裕幸， 森田寛之，通 山由美		
食細胞（好中球様・マクロフ ァージ様細胞）における Protein S100-A8, Protein S100-A9 の機能解析：好中球 様・マクロファージ様に分化 したヒト白血病細胞株 HL60 による検討	共 同	2018 年 9 月	第 91 回日本生化学会大会（京都 国際会議場）	◎田畑裕幸， 森田寛之，通 山由美		
食作用依存性の MP0 活性化に おけるチロシンキナーゼ Syk の機能解析 —好中球様に分 化 したヒト白血病細胞株 HL60 による検討—	共 同	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部総 会・大会（姫路獨協大学）	◎岸伸彦，森 田寛之，田畑 裕幸，通山由 美		
好 中 球 の Neutrophil Extracellular Traps (NETs) 形 成 に お け る ProteinS100-A8 の機能解析	共 同	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部総 会・大会（姫路獨協大学）	◎西川達也， 森田寛之，田 畑裕幸，通山 由美		
ファゴソーム形成プロセス におけるチロシンキナーゼ Syk の機能解析 —マクロフ ァージ様に分化したヒト白 血病細胞株 HL60 による検 討—	共 同	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部総 会・大会（姫路獨協大学）	◎大野華子， 森田寛之，田 畑裕幸，通山 由美		
早期臨床体験における医療 施設見学と学生がイメージ する薬剤師像変化の可視化 へ試み	共 同	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部総 会・大会（姫路獨協大学）	◎河野奨，田 畑裕幸，炬口 真理子，白木 孝		
感染防御に重要なファゴソ ームの成熟機構 — チロシンキナーゼ Syk か らのアプローチ —	共 同	2018 年 12 月	第 21 回西播・姫路医療セミナー （姫路商工会議所）	◎田畑裕幸		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2000 年 5 月～現在	日本生化学会
2003 年 10 月～現在	日本薬理学会
2005 年 5 月～現在	日本薬学会
2008 年 5 月～現在	日本細胞生物学会

V 学内における主な活動

2015 年 4 月～2016 年 3 月	国試対策卒試委員会委員
2016 年 4 月～2017 年 3 月	国試対策委員会委員
2016 年 4 月～2018 年 3 月	オープンキャンパス委員
2015 年 4 月～現在	組換え DNA 実験安全管理委員会委員
2016 年 4 月～現在	薬剤師国家試験問題検討委員会委員
2016 年 4 月～現在	入試対策委員会委員
2016 年 4 月～現在	早期体験実習委員会委員
2017 年 4 月～現在	学習支援センター運営委員
2017 年 4 月～現在	薬学教育推進委員会委員
2018 年 4 月～現在	国際交流センター委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	講師	氏名	河野 奨	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
① 医療薬学統合演習（PBL） プレゼンテーションの工夫および授業評価の活用	2015年4月～2017年 8月	薬学部4年次生を対象とした演習で、学生自身が与えられた課題についてプレゼンテーションを行うので、プロダクトの質がことなるため、プレゼンテーション終了後、該当課題のまとめと振り返りを行った。
② 新薬論 パワーポイントスライドの作成 および授業評価の活用	2015年4月～2017年 8月	薬学部6年次生を対象とした講義で、これまでの復習と近年承認された医薬品の紹介をおこない、既存医薬品と比較し新規医薬品有効性や安全性などの解説を行った。
③ 早期体験実習 実習施設の調整および授業評価 の活用	2015年4月～2015年 7月	薬学部1年次生でも見学型から参加型の実習ができるように施設の調整および授業評価を実施した。
④ 卒業研究	2015年5月～現在	薬学部5、6年次生を対象として、機能性ペプチドの合成とその有用性の研究を行った。
⑤ 薬理学 パワーポイントスライドの作成 および授業評価の活用	2015年9月～2017年 3月	医療保健学部臨床工学科、こども保健学科の学生を対象として行った。薬学を専門としない学生に対し薬理学を身近に感じてもらえるようなスライド作成を行った。
⑥ 模擬薬局実習	2015年9月～2018年 3月	薬学部4年次生を対象とした実習で、軟膏剤の調剤において、道具の使い方や調剤上の注意すべき点について実演を交えて、実習を行った。 フィジカルアセスメントに関しても、モデルを用いてバイタルサインを測定して薬物治療の効果、副作用測定の実習をおこなった。
⑦ 健康社会科学 パワーポイントスライドの作成 および授業評価の活用	2015年9月～2016年 3月	薬学部2年次生を対象とした講義で、スライドを用い、現在社会的に注目を受けている、健康に関する問題をこれまで復習と今後の専門科目の橋渡しになるように、薬剤師の視点で解説した。
⑧ 早期体験実習 前年度の授業評価アンケートの 活用によるグループワークの導 入	2016年4月～2016年 7月	薬学部1年次生を対象として、ワールドカフェを取り入れることにより、自分が体験・見学した内容プラス自分以外が体験・見学した内容を共有できるようになった。
⑨ 調剤学 パワーポイントスライドの作成 および授業評価の活用	2016年4月～現在	薬学部4年次生を対象とした科目、内服薬の調剤で必要となる知識や注意点、調剤過誤などの事例を交えながら講義を行った。配布資料は一部を穴埋めして、スライドの内容をメモできるようにした。簡単な計算も必要となるので、その都度、薬剤師国家試験問題を利用して考え方や計算の仕方を解説した。 希望者を対象に、処方せんの読み方の基本的な事項について解説を行った。
⑩ 処方解析学 パワーポイントスライドの作成	2016年9月～現在	薬学部4年次生を対象とした科目、高血圧、心疾患、糖尿病、感染症の処方例を用いて、処方者の意図や患者背景と処方内容の整合性

および授業評価の活用		について理解できるように、該当疾患の薬物治療の復習をスライド用いて解説の後、実際の処方例を課題として与えてどのように考えるか学生同士が議論して課題解決能力の向上に努めた。
⑪ 健康社会科学 前年度の授業評価アンケートの活用と危険ドラッグをテーマとしたロールプレイの導入	2016 年 9 月～現在	薬学部 2 年次生を対象とした講義で、危険ドラッグに代表される薬物乱用について、その対応策を薬物の使用を誘う側、誘われる側に分かれて、ロールプレイを行いどのような断り方が効果的かまた、その方法が実行可能かを討議した。 知人から薬物の使用を打ち明けられた時の対応についてもロールプレイを行いその結果について議論した。
⑫ 早期体験実習 前年度の授業評価アンケートの活用による調剤体験の導入およびワークショップ型への転換	2017 年 4 月～現在	薬学部 1 年次生を対象として、初回のオリエンテーションから、薬剤師の社会的役割を学生どうして議論し、その議論した内容と実際の薬剤師の社会的な役割の違いなどを薬局や病院に行って体験・見学を行い実感できるようにした。 学内の模擬薬局で計量調剤の体験をすることで、実際の薬局や病院において調剤業務以外の部分で薬剤師がどのように活躍しているのか体験・見学できるようになった。また調剤体験を取り入れたことで副次的な効果として、これまでの科目の関連性を理解したり、学生同士で協働して課題に取り組むようになった。
⑬ 薬学総合演習 II	2017 年 7 月	薬学部 6 年次生を対象として、ポリファーマシーについて、なぜ不必要な薬剤を減らす必要があるかを講義したのち、模擬症例を用いて上手に減薬する方法を検討した。
⑭ 薬理学 前年度の授業評価アンケートの活用によるグループワークの導入	2017 年 9 月～2018 年 3 月	医療保健学部臨床工学科、こども保健学科の学生を対象として行った。薬学を専門としない学生に対し薬理学を身近に感じてもらえるようなスライド作成のみならず、イス取りゲームを応用して、刺激薬や競合型阻害、非競合型阻害の演習を行い、用量反応曲線の作成とそれぞれの反応の特徴を一緒に考察した。 薬の名称と作用点の関連性を理解しやすくするために、全体の 2/3 を学生自身が薬の作用地図を作るようにし、学生が正しく図を作れるように支援した。
⑮ 医療薬学統合演習 (PBL) 前年度の授業評価アンケートの活用によるグループワークの導入	2018 年 4 月～現在	薬学部 4 年次生を対象とした演習で、今まで学んだことを復習できるように、KJ 法を用いて課題症例を検討する際に必要となる知識の整理を行い、その後課題症例の薬物治療について学生同士が議論しその結果をまとめてプロダクト作成を行い、そのプロダクトについて発表し討論できるように支援した。
⑯ 模擬薬局実習	2018 年 9 月～現在	薬学部 4 年次生を対象とした実習で、入院から退院までの流れや必要な医療従事者を理解してもらうためクリニカルパスを作成した。実務実習で必要な患者との初回面談や服薬指導などのコミュニケーションをシミュレートするために必要な症例を作成し、学生が初回面談や服薬指導の記録を学生が主体的に残せるように支援した。 実務実習で必要となるチーム医療への参画をシミュレートできる課題を作成し、病院、在宅の退院時協働カンファレンスを行えるように支援した。 薬物療法を実践できるように必要な症例を作成し、TDM を応用したり、これまでの知識の整理を支援した。
2 作成した教科書、教材、参考書		

① 講義資料	2015 年 4 月～現在	新薬論、調剤学、早期体験実習、薬理学、処方解析学、健康社会科学について、要点を整理したスライド、プリントを作成した。
② 調剤学演習問題	2016 年 4 月～現在	計量調剤を行うに当たり、必要となる秤取量の計算と必要となる容器の選択の問題など実際に調剤する際に必要となる計算問題を作成した。
③ 処方解析学演習問題	2016 年 9 月～現在	高血圧、心疾患、糖尿病、感染症の模擬症例や処方例を作成し、授業で使用した。
④ 模擬薬局実習症例集	2016 年 9 月～現在	フィジカルアセスメントの模擬症例を作成し、バイタルサインと薬物治療の効果の関連性が理解できるように配慮した。
⑤ 早期体験実習模擬処方せん	2017 年 4 月～現在	調剤体験で用いる（主に計量調剤）、模擬処方せんを作成し、処方せんの読み方、計算方法などの実習を行った。
⑥ 臨床準備教育における概略評価 （例示）＜近畿地区版＞	2018 年 2 月	薬学教育評議会 病院・薬局実務実習近畿地区調整機構 臨床準備教育の評価策定に関する協議会にて概略評価票（ルーブリック）の作成に参画。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
① 薬局実務実習、病院実務実習における報告書の添削指導、プレゼンテーション資料の確認	2015 年 1 月～現在	実務実習発表会に向けた、報告書の添削およびプレゼンテーション資料の確認を行った。
② 認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ in 近畿でのタスクフォース	2015 年 9 月～現在	第 80、83、90、93 回のワークショップでタスクフォースを務めた。
③ 認定実務実習指導薬剤師養成のための ADWS in 姫路 タスクフォース	2017 年 6 月	平成 29、30 年度 認定実務実習指導薬剤師養成のためのアドバンストワークショップ（平成 29 年度のみ大阪大学薬学研究科課題解決型高度医療人材養成プログラム）でタスクフォースを務めた。

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
【著書】 特筆すべき事項なし						
【論文】 ① ORL1 and opioid receptor preferences of nociceptin and dynorphin A analogues with Dmp substituted for N-terminal aromatic residues.	共著	2006 年	Bioorganic & medicinal chemistry 14(7)	Sasaki Y., © Kawano S., Kohara H., Watanabe H., Ambo A.,	2433-2437	
② Synthesis and receptor binding properties of chimeric peptides containing a μ -opioid receptor ligand and	共著	2006 年	Bioorganic & Medicinal Chemistry Letters 16(18)	©Kawano S., Ambo A., Sasaki Y.,	4839-4841	

nociceptin/orphanin FQ receptor ligand Ac-RYYRIK-amide.						
③ Receptor binding properties and antinociceptive effects of chimeric peptides consisting of a micro-opioid receptor agonist and an ORL1 receptor antagonist.	共著	2007 年	Biological & Pharmaceutical Bulletin 30(7)	©Kawano S., Ito R., Nishiyama M., Kubo M., Matsushima T., Minamisawa M., Ambo A., Sasaki Y.,	1260-1264	
④ Opioid receptor-like 1 (ORL1) receptor binding and the biological properties of Ac-Arg-Tyr-Tyr-Arg-Ile-A rg-NH ₂ and its analogs.	共著	2007 年	Journal of Peptide Science 13(10)	Ambo A., Kohara H., © Kawano S., Sasaki Y.,	672-678	
⑤ Role of estrogen receptors and aromatase on brain protein synthesis rates in ovariectomized female rats fed genistein.	共著	2008 年	Nutritional Neuroscience 11(4)	Lyou S., © Kawano S., Yamada T., Okuyama S., Terashima T., Hayase K., Yokogoshi H.,	155-160	
⑥ Theanine, gamma-glutamylethylamide , a unique amino acid in tea leaves, modulates neurotran.	共著	2009 年	Amino Acid 36(1)	Yamada T., Terashima T., ©Kawano S., Furuno R., Okubo T., Juneja L.R., Yokogoshi H.,	21-27	
⑦ Structural basis for the design of novel Schiff base metal chelate inhibitors of trypsin.	共著	2010 年	Bioorganic & medicinal chemistry 18(6)	Iyaguchi D., ©Kawano S., Takada K., Toyota E.,	2076-2080	
⑧ Identification of a novel carbohydrate-mimicking octapeptide from chemical peptide library and characterization as selectin inhibitor.	共著	2011 年	Biological & Pharmaceutical Bulletin 34(6)	©Kawano S., Iyaguchi D., Sasaki Y., Sekizaki H., Toyota E.,	883-889	
⑨ Expression, Purification, and Refolding of Active Recombinant Human E-selectin Lectin and EGF Domains in <i>Eschericia coli</i>	共著	2013 年	The Protein Journal 32(5)	©Kawano S., Iyaguchi D., Okada C., Sasaki Y., Toyota E.,	386-391	
【その他】 【プロシーディングス】 ① FRET を活用した、B/F 分離 の不要な受容体結合実験に 用いる蛍光性ペプチドリガ ンドの有用性	共著	2017 年	日本電気学会、マグネテ ィックス、光・量子デバ イス、フィジカルセン サ、マイクロマシン・セ ンサシステム、バイオ・ マイクロシステム合同 研究会	©河野 奨、 安保 明博、 杉野 千尋、 福武 眞子、 白木 孝	9-12	

【競争的研究資金など】 ① 姫路獨協大学特別研究助成 「F E R Tを利用したハイ スループットオピオイド受 容体結合実験系の開発」	共同	2015 年 4 月～ 2017 年 3 月		◎河野 奨、 安保 明博		
【学会発表】 ① ワンステップ ORL-1 受容体 結合実験確立のためのペプ チド性FRETプローブの開発 他国際学会 2 件、国内学会 10 件	共著	2015 年 3 月	日本薬学会第 136 年会 (横浜)	杉野 千尋、 ◎河野 奨、 安保 明博、 白木 孝、中 井 裕士		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2005 年 11 月～現在	日本薬学会会員
2007 年 9 月～現在	日本ペプチド学会会員
2009 年 11 月	3rd Asian Pacific International Peptide Symposium 2009 Poster Prize Award 受賞
2015 年 4 月～現在	日本薬剤師会会員
2015 年 4 月～現在	日本病院薬剤師会会員
2015 年 10 月～現在	認定実務実習指導薬剤師養成のための WS タスクフォース（第 80、83、90、93 回）
2017 年 6 月～現在	認定実務実習指導薬剤師養成のための ADWS in 姫路 タスクフォース（平成 29、30 年度）

Ⅴ 学内における主な活動

2014 年 10 月～現在	実務実習事務局
2015 年 4 月～現在	OSCE 実施委員
2015 年 4 月～2018 年 3 月	早期体験実習委員
2015 年 4 月～2016 年 3 月	薬学教育評価機構 自己点検・評価 中項目 5 項目担当責任者
2016 年 4 月～現在	薬学教育推進委員
2017 年 8 月	教員免許更新講習会

所属	薬学部 医療薬学科	職名	助教	氏名	高橋 稔	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
① 模擬薬局実習	2011 年 9 月～ 2013 年 9 月～ 2014 年 9 月～ 2015 年 9 月～ 2018 年 9 月～	年度ごとに担当領域を受け持ち、担当領域の一般的な進め方としては、まず口頭による説明とデモンストレーションを行い、学生に課題を与えて実技指導に当たる。各ポイントとなる部分には教員によるチェックを設けることにより、誤った操作を覚えないように配慮している。 2011 年度および 2012 年度は計量調剤（散剤）のセッションを担当した。 2013 年度は無菌調剤のセッションを担当した。 2014 年度は計数調剤・調剤薬監査および計量調剤（水剤・軟膏剤）のセッションを担当した。 2015 年度以降については、特殊製剤（吸入デバイスなど）、および計量調剤（水剤・軟膏剤）のセッションを担当している。調剤実習においては、実際には混合しない軟膏剤も、混合させてみることににより、なぜ混合しないのか実体験を踏まえて考察を促すなどの臨床応用に踏み込んだ内容の実習を行っている。また、リスクマネジメントについてはワークショップ形式で行い、KJ 法による問題点の抽出から問題解決に向けたアクションプランの作成までを行った。さらに、院内製剤実習においては、顆粒剤の造粒から湿式法による錠剤の作成を実際に行い、簡易懸濁法の基本的な考え方を学習する機会を設けた。 2018 年度以降については、改訂モデル・コアカリキュラムに沿った実務実習のため、模擬薬局実習の内容が大幅に変更となった。そのため、①医療倫理、②疑義照会、③医薬品の供給と管理、④感染予防、⑤計数調剤、⑥調剤薬監査、⑦院内製剤・薬局製剤、⑧リスクマネジメントの担当を行なった。内容についても、グループ・ディスカッションにより、実際の医療現場で起こりうるシチュエーションや問題点について議論出来る環境を用意することにより、模擬的な環境下での学修という点を意識した内容となっている。
② 臨床試験管理学	2012 年 9 月～現在	講義の流れを、前回講義内容の小テストをはじめに行い、講義に使用するスライドの内容を学生に配布した後に講義を開始するといったスタイルをとった。これにより小テストを利用することで、前回講義の復習をした上で講義に臨んでもらう体制とした。また、小テストは国家試験レベルに準じた内容に設定を行い、講義の内容を反映した問題を重点的に配問することで学生に勉強の成果が感じられるように配慮を行い、採点を行った後に書く学生へフィードバックを行った。 学生の自学自習の方法として、担当範囲の国家試験の過去問をまとめた冊子を作成して、受講生全員に配布を行った。 2017 年より新たな試みとして、講義内時間において「後発医薬品が安い理由を患者から質問された場合に、どのように説明するか」をテーマとした簡易ロールプレイの導入を行った。

③ 薬剤系統合演習	2012 年 4 月～現在	薬学部の薬剤系統合演習は 4 年生を対象に行った。薬物動態学、物理薬剤学、製剤学で得られた知識を、基礎から臨床までに応用して総合的に学習することが目標である。担当の課題については、調査からプレゼンテーションまですべて自己の責任において行うことにより、学生の自主性の養成につながっていると考えられる。 2013 年度までは、課題となる薬物ごとに一定の小問をこちらから提供する形式で行っていたが、2014 年度以降はある薬品について ADME や相互作用、臨床応用も含めて調査した結果をまとめる形式としている。 また 2018 年度よりチーム基盤型学習を取り入れ、一定の課題に対してグループで議論して、問題解決に導くことが出来るような学習方法を実践している。
④ 生化学	2014 年 1 月～現在	2014 年度より公立八鹿看護専門学校の非常勤講師として、「生化学」を担当している。次学年において栄養学の基礎となる生化学の内容を意識して講義を実践している。薬学部とは異なり、化学構造に重点を置くのではなく、実際の病態や検査値、業務全体の即戦力となるような点を強調して、具体例を挙げながら講義を行っている。
⑤ 薬剤学実習	2014 年 4 月～現在	本実習は、薬学部 4 年生を対象に行った。次年度に病院実務実習を控えている学生に、座学ではイメージのしにくい機器を実際に手に取り、日本薬局方に収載されている試験法の操作・測定を行うことが本実習の大きな特徴である。 実習の前半の主要テーマは、粉体について触れる機会として安息角測定法やふるい分け法、直打法による錠剤の製造などの実験を行っている。 実習後半は、崩壊試験法、溶出試験法など座学のみではわかりにくい試験法について実際に体験してもらう内容となっている。 また本実習の大きな特徴として、データの取り扱いについても学習することが出来るように配慮しており、平均をはじめとして、標準偏差や標準誤差について実際のデータを用いて理解できるような実習内容となっている。
⑥ 薬剤学Ⅰ（物理薬剤学）	2016 年 4 月～現在	本講義は、薬学部 3 年生を対象に行った。高学年の模擬試験の結果からも苦手意識がある学生が多かったため、後期の医療薬剤学や、次年度の調剤学等が抵抗なく受け入れられるように、溶液、分散系、レオロジーなどのテーマについての具体例を講義に多く取り入れるように配慮した。 また、毎講義冒頭には前回講義内容を中心とした小テストを実施することで前回内容を思いだしたうえで講義を受けるといった講義間のつながりを意識できるように配慮した。
⑦ 薬剤学Ⅱ	2016 年 4 月～現在	本講義は薬学部 3 年生を対象に行っており、オムニバス形式で実施している。最初の 5 コマを中村隆典教授、後の 10 コマを小職が担当している。担当部分の内容は、日本薬局方の製剤試験法の内容が大部分であり、さらに品質管理という点からも医薬品の安定性に関わる要因についても講義で触れた。 内容について特記すべき事項として、4 年次前期に履修する薬物動態学の担当教員と相談することにより、反応速度論については基礎的な部分から丁寧に行うように配慮した。配付資料についても、単に答えを配布することに終始せず、研究室前のホワイトボードを利用して詳細な解答・解説も用意することにより、この

		分野が苦手な学生にも配慮を行った。 また 2018 年度よりあらたに、教科書と平行して使用する配布資料の冊子の利用を開始している。
⑧ 調剤学	2016 年 4 月～ 2017 年 8 月	本科目は担当教員でオムニバス形式により実施した。自分の担当は注射剤をはじめとする外用剤全般について、主に講義形式により実施した。講義のみならず、ダブルバッグ製剤の取り扱いや注射剤や吸入剤などの実物に触れ、実際に吸入してみるといった、単なる講義に終始しないような授業作りを行った。 2016 年度の開始時より担当教員と相談を行い、学生が前向きに学習できるようなテーマによる補講を実施した。出席用件等には含めず、興味がある学生が自ら進んで参加できるような体制作りを行った。テーマの具体的な内容としては、輸液に関する栄養管理の基礎的な内容や、輸液を安全に取り扱う上での考え方を設定した。 上記の内容に対する学生からの反応はおおむね好評であり、大部分に学生が前向きに参加している様子であった。また、学生による授業評価アンケートからも、この補講について学生から高い評価を得ている。
⑨ 実感する化学	2016 年 6 月 2017 年 4 月～7 月 2018 年 4 月～7 月	2016 年度において、1 年次生のモチベーション向上を目的として、担当教員と協力してワールドカフェを実施した。実施した際に回収したアンケートの結果、勉強の仕方やモチベーションの向上に一定の効果が見られたものとする。またこれまでの学習方法について改めて見つめ直す契機になった。 2017 年度においては、グループ・ディスカッションや簡易的な実験を行うことにより、薬学部 6 年間の基礎となる化学の考え方や pH をはじめとする物質の酸性度の考え方、そして医薬品を扱う上での濃度の考え方について 3 人の担当教員で行った。目的としては、学生のモチベーションを向上させるためのグループ・ワークに重点を置き、グループ・ワークにおいて作成したプロダクトや観察されたパフォーマンスについてルーブリック評価を行った。 2018 年度においては、前年度の内容を振り返り、新たにチーム基盤型学習 (TBL) と問題基盤型学習 (PBL) を各担当教員のテーマで行った。スクラッチシートを利用して、学生に楽しみながら能動的に学ぶことへの意識付けを行なった。評価についてもピア評価を取り入れ、率先して講義や演習に取り組むことが出来るような学習環境の提供を行なった。
⑩ 薬学応用演習Ⅱ,Ⅲ	2016 年～現在	●アクティブ・ラーニング (ジグソー法) の実施 本科目は、薬学部 4 年生を対象に行ったオムニバス科目であり、担当部分である薬剤・実務領域では、アクティブ・ラーニングの手法の一つであるジグソー法を利用して、物理薬学的見地、薬物動態学的見地および臨床薬学的見地において特定の薬物に注目して、グループ・ディスカッションならびにプロダクトの作成、ディスカッションの結果のプレゼンテーションを行った。担当部分は 3 コマ連続の一日完結の内容で実施した。 ●プロダクト作成によるフィードバックへの利用

		プロドラッグや放出制御製剤について、薬品の実物を見ることによりプロドラッグ化や放出制御に加工されている目的の調査を行った。調査結果はポスターとして、担当教員によるフィードバックを行い一定期間学内に掲示を行った。
⑪ 基礎数理	2017 年 4 月	2017 年度においては、全内容の一部にて、処方箋の見方について講義を行った。目的としては、数学の基本的な考え方を理解することにより、対象学年の1年次生が将来薬剤師になった際に取り扱う処方箋の取り扱うことが出来るということを理解してもらうためである。さらに、早期より将来的な目標に触れる機会を設けることにより、数学という苦手意識を感じやすい科目に対するモチベーションの向上も目標としている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
① 薬物動態学学生実習用実習書	2011 年 9 月	1-コンパートメントモデルの解析、アルコール脱水素酵素の標的とした遺伝子多型解析、並びに治療的薬物濃度モニタリング（TDM）などのテーマについて触れることにより、薬物動態学の基礎から臨床応用、さらには一塩基多型（SNP）まで多くのテーマを扱うことにより学生の興味を促すような実習書になるように努めた。
②薬物代謝学小テスト	2011 年 9 月	ADME の基本をそれぞれ 4 分野に分けて講義終了時に知識として消化出来ているかの確認が可能となるような資料作成に努めた。また各分野講義終了時には、確認テストが行われるためその資料の作成も行った。形式は国家試験対策を見越して、また多人数の迅速な対応を考慮してマークシート形式とした。
③臨床試験管理学講義用資料	2012 年 9 月～現在	臨床試験に関する基本的知識に始まり、医薬品の開発の一連の流れをスクリーニング、非臨床試験、臨床試験、市販後調査等のテーマ別にすることで、今後の授業項目の学習の際にも有用であるような資料作成に努めた。 内容については、学生による授業評価アンケートなどの結果を基にして毎年更新を行っている。
④臨床試験管理学小テスト	2012 年 9 月～現在	講義開始時に行う小テストは、前回の講義内容を確認するとともに、講義の予習も含む内容で小テストの配問を行った。それにより、学生が臨床試験の流れを意識した学習や、小テストで生じた疑問を講義時に解消して印象付けることが出来るように努めた。 内容については、学生による授業評価アンケートなどの結果を基にして毎年更新を行っている。
⑤薬剤系統合演習（PBL）資料	2014 年～現在	2014 年度以降について、薬剤領域に限定する内容ではなく他領域横断的な知識があることが望ましい医薬品について領域担当者内で厳選する作業を行い、資料にその内容を反映させた。 課題薬物については、毎年見直しを行い、内容の更新を行っている。
⑥生化学講義資料	2014 年 1 月～現在	講義で用いる補助資料は、代謝経路を全て羅列するような記載は避け、要点のみを簡略に記載するような資料の作成を行った。また、化学構造に由来する内容については必要最低限の内容として難しい科目である認識を過度に学生に持たせないように意識して資料の作成を行った。 内容については、定期試験などの結果を鑑みて適宜更新を行っている。

⑦模擬薬局実習	2015 年 9 月～現在	2015 年度以降の調剤実習の処方箋ならびに災害時医療を取り扱う上でのお薬手帳の見本の作成を行った。調剤実習の処方箋においては、後発医薬品が適切に取り扱えるか、軟膏剤の配合変化に考慮できているか、粒子径の異なる粉薬の混合の考え方が理解できているかなどをふんだんに盛り込んだ内容の処方箋を作成した。お薬手帳の見本については、災害時医療のトリアージについて学ぶために、代換案が議論できるような内容になるように資料の処方内容の作成を行った。 また、院内製剤実習においては、顆粒剤の造粒から湿式法による錠剤の要点をまとめた資料の作成を行った。 2018 年度以降については、改訂モデル・コアカリキュラムに沿った実務実習のため、模擬薬局実習の内容が大幅に変更となった。そのため新たに、医療倫理に基づいた行動について考えるための課題資料や、疑義照会の模擬的環境下で行なうための資料、そして院内製剤・薬局製剤に関する資料の作成を行なった。資料の作成の際には、講義による知識レベルの確認に偏るのではなく、実際の薬局製剤を作成してみてその性状から患者に説明する文書を作成するといったように、実践的な内容を模擬的環境下で行なうことを補助する内容を意識して作成した。また、最終的に学生が資料を参考にして、プロダクトを作成することが出来るような内容としている。
⑧薬剤学 I（物理薬剤学）講義資料	2016 年 4 月～現在	講義資料とは別に、自己学習用の資料ならびに小テストの作成を行った。また、レオロジーの学習には要点をまとめた資料の作成を行った。 内容については、学生による授業評価アンケートなどの結果を基にして毎年更新を行っている。
⑨第十七改正日本薬局方関連資料	2016 年 4 月～現在	日本薬局方の改訂に伴い、変更前に使用していた講義用資料に必要な修正を適宜行っている。また、高学年の学生に対しては改訂があった部分については変更のポイントをまとめた資料を作成して随時配布を行った。
⑩調剤学講義資料	2016 年 4 月～ 2017 年 8 月	講義資料とは別に、注射剤や点眼剤に関わる計算問題を中心とした資料の作成ならびに配布を行った。作成の際に気をつけた点としては、自己学習がスムーズに行えるように解答・解説については詳細な記述を心がけて作成を行った。 内容については、学生による授業評価アンケートなどの結果を基にして随時更新を行っている。
⑪アクティブ・ラーニング（ジグソー法）用資料	2016 年～現在	グループ・ディスカッションによる効果が顕著に表れるように、演習の前後にはプレテストおよびポストテストを行っている。この作成においてはディスカッションが問題なく進めば、理解が進むような設問を配置した。 また参考資料についても、情報を与えすぎないよう内容に配慮して、学生間において情報の共有や教え合いが出来るように気をつけて資料の作成を行った。 内容については、学生による授業評価アンケートなどの結果を基にして随時更新を行っている。
⑫実感する化学講義資料	2017 年 4 月～ 2018 年 7 月	2017 年度においては、酸塩基反応について主に担当した。内容は可能な限り平易な内容として図や絵を用いることでイメージを強調できる内容とした。分量についても多くなりすぎることがないように、資料の枚数を少なくするように配慮を行った。

		2018 年度においても同様のテーマで行なったが、TBL の課題資料はスクラッチシートとして、その内容に沿った新規課題の作成を行なった。 内容については、学生による授業評価アンケートなどの結果を基にして随時更新を行っている。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
第 26 回 日本医療薬学会年会	2016 年 9 月	臨床薬剤師による講義と薬剤師に求められる基本的資質との関連性（木下淳、畑中由香子、河野奨、白木孝、高橋稔、高良恒史、中村隆典、中村任、駒田富佐夫、通山由美）
第 2 回 日本薬学教育学会大会	2017 年 9 月	TBL・ジグソー法による薬剤・臨床系統合型演習の構築とその評価（木下淳、高橋稔、高良恒史）
第 67 回 日本薬学会近畿支部総会・大会	2017 年 10 月	薬剤学・臨床薬学的視点を重視した化学リメディアル教育の導入（高橋稔、木下淳、村重諒）
4 その他教育活動上特記すべき事項		
「第 60 回認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ in 近畿」への参加	2012 年 4 月	「第 60 回認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ in 近畿」へ受講者として参加を行った。病院薬剤師、薬局薬剤師と薬学教育についてスモール・グループ・ディスカッションを行い司会進行や口頭発表を行った。ディスカッションの討議の結果については、模造紙に内容をまとめ、全体発表に役立てるとともに、参加者全体で閲覧を行い、他職種間の質疑応答にも用いられた。質疑応答にも参加することで、臨床現場における実務実習に關しての討議も行った。
「認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ in 近畿」へのタスクフォースとして参加	2013 年 7 月～現在	第 67, 69, 73, 78, 84, 87, 93 回の「認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ in 近畿」および「2018 年度【臨時】認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ in 近畿」へタスクフォースとして参加を行った。それぞれのワークショップにおいて、コンセンサス・ゲーム、KJ 法、学習目標、学習方略を作成するといったセッションの担当を行った。また参加者のスモール・グループ・ディスカッションのファシリテーターとして議論への参加を行った。
「認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ in 近畿-タスクフォーススキルアップ研修会」への参加	2014 年 12 月～現在	2014, 2015, 2017 年度の「タスクフォーススキルアップ研修会」へ参加者として参加を行った。病院薬剤師、薬局薬剤師と薬学教育についてスモール・グループ・ディスカッションを行った後に口頭発表等を行った。ディスカッションの討議の結果については、プロダクトを作成して、全体発表に役立てるとともに、参加者全体で閲覧を行い、他職種間の質疑応答にも用いられた。
「認定実務実習指導薬剤師養成のためのアドバンストワークショップ」への参加	2017 年 6 月 2018 年 10 月 2018 年 11 月	「認定実務実習指導薬剤師養成のためのアドバンストワークショップ」へタスクフォースとして参加を行った。学習成果基盤型の学習目標・評価・方略の考え方およびカリキュラム・プランニングについて、参加者の学修のサポートを行い、スモール・グループ・ディスカッションのファシリテーターとして議論への参加を行った。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著・単著	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】 特筆すべき事項なし						
【論文】 Treatment schedule-dependent effect of 5-fluorouracil and platinum derivatives in colorectal cancer cells.	共著	2012 年 2 月	<i>Eur. J. Pharm. Sci.</i> Vol. 45, No. 3,	Takara K, Fujita M, Minegaki T, Yamamoto K, <u>Takahashi M</u> , Yokoyama T, Okumura K	272-281	
Effects of α -adrenoceptor antagonists on ABCG2/BCRP-mediated resistance and transport.	共著	2012 年 2 月	<i>PLoS One</i> , Vol. 6, No. 2,	Takara K, Yamamoto K, Matsubara M, Minegaki T, <u>Takahashi M</u> , Yokoyama T, Okumura K	e30697.	
Differential effects of calcium antagonists on ABCG2/BCRP-mediated drug resistance and transport in SN-38-resistant HeLa cells.	共著	2012 年 3 月	<i>Mol. Med. Report.</i> Vol. 5, No. 3,	Takara K, Matsubara M, Yamamoto K, Minegaki T, Takegami S, <u>Takahashi M</u> , Yokoyama T, Okumura K	603-609	
Effect of dexamethasone on extracellular secretion of cystatin C in cancer cell lines.	共著	2013 年 1 月	<i>Biomedical Reports</i> . Vol. 1	Yamawaki C, <u>Takahashi M</u> , Takara K, Kume M, Hirai M, Yasui H, Nakamura T	115-118	
Perioperative change in plasma platinum concentration in patients receiving cisplatin-based chemotherapy.	共著	2013 年 6 月	<i>TDM 研究</i> Vol. 30, No. 4,	Kume M, Yasui H, <u>Takahashi M</u> , Yamawaki C, Higashiguchi K, Kobayashi Y, Kuroda D, Hirano T, Hirai M, Nakamura T	142-148	
【その他】 ヒト腎癌由来 Caki-2 細胞株 に対するエベロリムス長期曝 露の影響	共著	2012 年 1 月	第 33 回 日本病院薬 剤師会近畿学術大会	中山 優子、 <u>高橋 稔</u> 、 中村 任、 奥村 勝彦、 高良 恒史		
ヒト由来癌細胞株の DNA メチ ル化と抗癌感受性の関連性。	共著	2012 年 3 月	第 132 回 日本薬学会 年会	<u>高橋 稔</u> 、 高良 恒史、 中山 優子、 奥村 勝彦、		
エベロリムスで長期曝露した ヒト腎癌由来 Caki-2 の細胞 特性。第 132 回 日本薬学会年会	共著	2012 年 3 月	第 132 回 日本薬学会 年会	中山 優子、 高良 恒史、 <u>高橋 稔</u> 、 奥村 勝彦、		

培養細胞におけるシスタチン C 分泌に及ぼすデキサメタゾンの影響	共著	2012 年 5 月	第 27 回 日本薬剤学会	山脇 知佳、 高橋 稔、 高良 恒史、 久米 学、 平井 みどり、 安井 裕之、 中村 任、		
Effect of dexamethasone on extracellular secretion of Cystatin C in cancer cell lines.	共著	2012 年 11 月	第 6 回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム、	山脇 知佳、 高橋 稔、 高良 恒史、 久米 学、 安井 裕之、 中村 任、		
ヒト腎癌由来細胞を用いた VHL 非依存的な低酸素応答関連因子の探索	共著	2013 年 3 月	第 133 回 日本薬学会年会	高橋 稔、 山脇 知佳、 山本 泰弘、 高馬 宏美、 矢上 達郎、 中村 任、		
低酸素下ヒト腎癌由来細胞における VHL 遺伝子非依存的な RNA 結合タンパク質の発現誘導	共著	2014 年 3 月	第 134 回 日本薬学会年会	高橋 稔、 山脇 知佳、 山本 泰弘、 高馬 宏美、 矢上 達郎、 中村 任、		
腎癌由来 786-0 細胞における hnRNP A2/B1 発現の低酸素応答性	共著	2015 年 3 月	第 135 回 日本薬学会年会	丸地 章太 高橋 稔、 山脇 知佳、 山本 泰弘、 高馬 宏美、 矢上 達郎、 中村 任、		
食道癌がん化学療法施行時の血漿中 Fe 濃度の一過性上昇	共著	2016 年 3 月	第 136 回 日本薬学会年会	中村 任 高橋 稔 新潟里歩 久米 学 山下和彦 平井みどり 安井裕之		
ヒト腎癌由来培養細胞における hnRNP A2/B1 発現の低酸素応答性に対する VHL-HIF 経路の関与	共著	2016 年 3 月	第 136 回 日本薬学会年会	猪澤 翠 高橋 稔、 山脇 知佳、 山本 泰弘、 高馬 宏美、 矢上 達郎、 中村 任、		
日本製医薬品に関する外国人旅行者の意識調査とコミュニケーションツールの試作	共著	2017 年 11 月	第 26 回 日本医療薬学会年会	木下 淳 高橋 稔 苫田彩佳 山田純也 松尾実菜 中村 任 佐野智行 奥田 寛		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

IV 学会等および社会における主な活動

2011 年 2 月～現在	日本薬学会
2013 年 12 月	第 12 回西播・姫路医療セミナー 「在宅医療における薬剤師業務について」
2014 年 5 月～現在	兵庫県薬剤師会

V 学内における主な活動

2012 年～現在	OSCE 実施委員会
2012 年～現在	指導薬剤師養成のためのワークショップ委員会
2013 年～2017 年	国試対策委員会
2017 年～2018 年	薬学教育推進委員会

所属	薬学部 医療薬学科	職名	助教	氏名	村重 諒	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦)年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
① 講義・実習内容の質的向上への工夫	2012年4月～現在	・講義では構造的に明快に大きく記載したプレゼン資料を作成し、板書でも同様に記述することを心がけている。 ・講義中の口頭での説明では、重要な内容を何度も繰り返し説明することを心がけている。 ・実習では実験装置の概要や操作手順をわかりやすく図示することで、学生の理解度の向上と円滑な実習進行に寄与した。
② 講義内容の理解度向上への工夫	2012年4月～現在	・時間の制約上、講義中の説明が不十分であったり、追加すべき点について完結に整理した補助プリントを作成し、配布した。
③ 学生による授業評価の活用	2012年4月～現在	・本学が実施している授業評価アンケート閲覧と続く自己点検評価を通じて、学生のニーズと講義での問題点を把握し、次年度へのフィードバックを行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
特筆すべき事項なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特筆すべき事項なし		

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・編者	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
【著書】 特筆すべき事項なし						
【論文】 ① Asymmetric and efficient synthesis of homophenylalanine derivatives via Friedel-Crafts reaction with trifluoromethanesulfonic acid	共著	2008年9月	Tetrahedron Letters, 49(46), 2008	Y. Hayashi, M. Hashimoto	6566-6568	
② Effective synthesis of optically active trifluoromethyldiaziriny Homophenylalanine and Aroylalanine derivatives with the Friedel-Crafts reaction in triflic acid.	共著	2009年6月	Bioscience, Biotechnology and Biochemistry, 73(6), 2009	Y. Hayashi, Y. Hatanaka, M. Hashimoto	1377-1380	

③ Comparisons of <i>O</i> -acylation and Friedel-Crafts acylation of phenols and acyl chlorides and Fries-rearrangement of phenyl esters in trifluoromethanesulfonic acid: Effective synthesis of optically active homotyrosines	共著	2011年1月	Tetrahedron, 67(3), 2011	Y. Hayashi, S. Ohmori, A. Torii, Y. Aizu, Y. Muto, Y. Murai, Y. Oda, M. Hashimoto	641-649	
④ Genotoxicity-suppressing effect of aqueous extract of <i>Connarus ruber</i> cortex on cigarette smoke-induced micronuclei in mouse peripheral erythrocytes	共著	2015年9月	<i>Genes and Environment</i>	T. Nakamura, Y. Ishida, K. Ainai, S. Nakamura, S. Shirata, K. Murayama, S. Kurimoto, K. Saigo, S. Tsuda, Y. F. Sasaki	37:17	
⑤ Versatile synthesis of 3,4-dihydroisoquinolin-1(2 <i>H</i>)-one derivatives via intra-molecular Friedel-Crafts reaction with trifluoromethanesulfonic acid	共著	2015年2月	<i>Tetrahedron Lett.</i>	Y. Ohtsuka, K. Sagisawa, M. Shiraishi	3410-3412	
⑥ Detection of in vitro genotoxicity of pro-mutagens using the comet assay under human and rat liver S9 fractions	共著	2018年7月	<i>MOJ Toxicol.</i>	S. Kawaguchi, T. Nakamura, S. Tsuda, <u>R. Murashige</u> , Y. F. Sasaki	255-261	
【その他】 特筆すべき事項なし						

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2008年4月～現在	公益社団法人日本化学会
2009年1月～現在	公益社団法人日本薬学会
2011年4月～現在	社団法人有機合成化学協会

Ⅴ 学内における主な活動

2011年12月～2013年10月	第25期、26期 学友会特別会員代表
-------------------	--------------------

2012 年 4 月～2017 年 3 月	毒物及〇汚染物管理委員会委員
2017 年 4 月～現在	危険物管理委員
2018 年 12 月～現在	学友会運営委員